

# 妖世界の半人半妖

片倉政実

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は半人半妖になったのか……

ある理由から一度死んでしまった一人の高校生。そんな彼を待っていたのは、妖怪達が住む世界と自分が生き返った代償に半人半妖になってしまったという事実だった。

これはそんな彼と妖怪達の織り成す日常と非日常の物語。

タグは投稿途中に増減する予定です。

# 目次

## 番外章

番外第1回 キャラクター設定 その

1 | 1

番外第2回 キャラクター設定 その

2 | 7

番外第3回 世界・施設等設定

11

## 本編

第1話 妖怪達が住まう街 | 15

第2話 妖怪街を巡る狐と鼬 | 47

第3話 雨がもたらした狐と蛇の出会い | 80

第4話 疑われし蛇と謎を追い始める

## 狐と鼬

103

第5話 謎を追う狐と第二の惨劇

119

第6話 事件の終結と哀しみの結末

161

第7話 穏やかな日常と新たな決意

194

第8話 天狗の願いと難題に挑む狐

212

第9話 なよ竹の難題と自然の脅威

226

第10話 火鼠の里と異種族間の絆

第11話 世界を繋ぐ扉と新たな仲間

290

第12話 自身との向き合いと式神の

術書 321

第13話 妖狐の決意と繋がり合う想

い 339

## 番外章

## 番外第1回 キャラクター設定 その1

## 【主人公】

名前：稻荷龍己いなりりゆうき……妖狐時は鈴蘭

性別：男

年齢：17

種族：人間（元）

趣味：読書、旅、笛の演奏、散歩

好きな物：狐雨福屋の面々や友人達との会話、本、菓子、雨、妖などの超常的な存在など

嫌いな物：悪人、曇り空など

元人間の少年で現在は半人半妖として『狐雨福屋』で居候として生活（世間的には住み込みの小僧見習いとしている）をしている。

容姿は黒髪のアートヘアに黒目と一般的なものだが、顔立ちは爽やかな二枚目のため、人間時代から女性受けが良い。体格は少し細身だが、普段から筋力トレーニング

などをしているため、腕力はそれなりに強い。

性格は明るく、基本的に分け隔てなく接するが、他人の事を省みない者などには冷たい性格に変わる。

普段は青色の着流しと妖力を備えた勾玉を首に掛けているが、接客をする際には紫の着流しに着替え、それに加えて白の前掛けを身に付ける。

趣味は読書と旅をする事などで、読書用の本は書物屋の『虫本堂』や貸本屋の『本角堂』にて調達している。最近の愛読書は『へっぽこ同心シリーズ』や『妖怪道中記シリーズ』。旅に関してはまとまった休みが出来た際に行っており、旅に行った時には常に土産物を忘れずに購入してくる。

人間時代の自分についての記憶はある事情により失われているが、妖怪についてやその他の雑学などは覚えているため、その知識を日常生活で活かしている。

一人称は俺（普段）または私（鈴蘭時）で、相手によって使い分ける。二人称は相手の名前または名前にさん付けで、これも相手によって使い分けている。

### 人間時代の龍己

三人家族の長男で、両親は共働きなため、家では一人で過ごすことが多い。

部活動は民族学研究部で、入った理由は昔から妖怪が好きだからと同じ話が出来る友人を見つげるため。

勉強は出来る方で好きな教科は文系教科全般、苦手な教科は理系教科全般（文系教科に比べて出来が悪いだけで、普段から理系教科も高得点を出している）。運動神経は悪くはないが、スタミナに少し難がある。

### 妖狐時の龍己

金色の狐耳と尻尾が生えていて、普段尻尾は曲線を描いているが、驚いた時や警戒している時などは真っ直ぐになる。

半人半妖になったことで聴覚と嗅覚が強くなる、妖術が使えるようになった（現在は習得していない）など、様々な変化が生じている。

### 【狐雨福屋の人々】

名前：龍三郎りゅうざぶろう

性別：男

年齢（人間換算）：34

種族：妖狐

職業：呉服屋兼仕立屋（店主）

趣味：読書、川柳、散歩、観劇

好きな物：狐雨福屋の面々や友人達との会話、本、風流な物、菓子など

嫌いな物：悪人、狐雨福屋の面々や友人達が傷つく事など

呉服問屋兼仕立屋の『狐雨福屋』の主で、娘の碧葉と居候の龍己、そして住み込みの手代の羅紗と共に暮らしている。

狐雨福屋の手代である羅紗が人間時代の龍己を殺してしまったため、反魂の秘術により蘇らせたが、その副作用で龍己を半人半妖にしてしまった。その責任を感じ、龍己を居候として狐雨福屋に住まわせている。

容姿は黒髪の鬘で眼は黒目（妖術を使う際には金色）。優しそうな顔立ちの二枚目で、若い頃は役者と間違われることもあったという。体格は龍己同様に細身だが、腕力はそれなりに強い。

普段から穏やかな性格だが、良くない行いをした者はしつかりと叱る上に怒る。しかし、激怒したところは奉公人はおろか、古くからの友人でも見た事が無い。

普段は紫の羽織に白の前掛けをしているが、私用の際には紺色の着流しになる。

龍己同様に読書が趣味なため、時々龍己から本を借りていることがある。愛読書は『妖怪道中記シリーズ』や『深夜怪談シリーズ』で、『妖怪道中記シリーズ』をもう一つの趣味の川柳の題材にすることもある。

一人称は私で、二人称は相手の名前に君付けまたは名前にさん付け。

名前：碧葉<sup>あおば</sup>

性別：女

年齢（人間換算）：15

種族：妖狐

趣味：散歩、買い物、観劇

好きな物：狐雨福屋の面々や友人達との会話（特に龍己）、龍己、着物など

嫌いな物：悪人、曇り空、乱暴なものなど

狐雨福屋の主である龍三郎の一人娘で、人間時代の龍己が初めて出会った妖でもある。

容姿は黒のストレートのロングヘアで緑色の眼をしている。とても綺麗な顔立ちをしており、よく恋文を貰っているがすべて袖にしている。

性格は穏やかで、父親の龍三郎同様普段は怒りを見せないが、ある場合に限り他人が止めることが出来ない程の怒りを見せる。

普段から緑色の着物を着用しており、緑色の着物だけを複数所有している（他の色の着物も所有しているが、それらは祭りの際などに着用している）。

趣味は散歩と他人との会話などで、散歩の際には自分が新しく発見した物を書き留めておく『初めて帳』を所持している。他人との会話は話題さえあればいくらでも話していられる程。

一人称は私で、二人称は相手の名前または名前にさん付け。

## 番外第2回 キャラクター設定 その2

【妖街・不忍の仲間達】

名前：風之助

性別：男

年齢（人間換算）：17

種族：鎌鼬

職業：瓦版屋（主に売り子や記事のネタ探しの担当）

趣味：旅、食べ歩き

好きな物：相棒の草吉や友人達との会話、日なたぼっこ、晴れ、美味しい物など

嫌いな物：悪人、曇り空、無風状態など

妖街・不忍に住む妖の一匹で、相方である妖狐の草吉と共に瓦版屋として働いている

鎌鼬の青年。

龍己が不忍に住み始めた翌日の早朝に鈴蘭状態の龍己と出会い、その後には不忍の探索に出ようとしていた龍己に付き合い、様々な場所を巡った。

そして、火事騒ぎの一件の後、龍己自身から半人半妖である事を打ち明けられ、龍己にとって初めての妖の友人となった。

普段からとても明るく、江戸っ子のような話し方を用いて様々な妖達ともすぐに仲良くなれる程のコミュ力を有している。

龍己が店の手伝いをしている時以外はよく龍己の側にいるためか、龍己が何かしらの事件に巻き込まれ、そしてそれを解決した後は龍己の事を省いた状態でその事件の事を瓦版の記事にしている。

名前：草吉そうきち

性別：男

年齢（人間換算）：17

種族：妖狐

職業：瓦版屋（主に記事の作成だが風之助がいない時のみ記事のネタ探しを担当）

趣味：読書、写経、笛の演奏

好きな物：風之助や友人達との会話、昼寝、甘味など

嫌いな物：悪人、勝手なモノなど

妖街・不忍に住む妖の一匹で、相方である鎌鼬の風之助と共に瓦版屋として働いている妖狐の青年。

風之助と同じく、龍己とは龍己が不忍に住み始めた翌日に出会った。

相方の風之助とは反対に非常に無口であり、瓦版屋として働いている際は常に編み笠を目深に被る事で顔を隠しているが、風之助や龍己などの友人に対しては少しだけでも話そうとする意思を見せている。

普段は風之助が探してきた記事のネタを用いて瓦版を作成しているが、風之助が龍己のところに行ったり遠方に出掛けたりしている際は、自ら記事のネタを探しにしている。

### 【妖街・深水の仲間達】

名前：七之助

性別：男

年齢（人間換算）：18

種族：化け蛇

職業：小間物問屋（店主）

趣味：読書、天体観測、散歩

好きな物：七之屋の面々や友人達との会話、甘味、本、雨など

嫌いな物：悪人、川や湖などの大きな水辺（嫌いというよりはトラウマ）など

妖街・深水に住む妖の一匹で、小間物問屋七之屋の店主を務めている化け蛇の青年。

龍己が深水の街を訪れた際に偶然出会い、とある理由から持っていた傘を貸した事や趣味の話がきっかけで龍己と仲良くなった。

見た目が黒髪で鬘を結った色白の二枚目顔であり、人当たりなども非常に良い事から女性人気が高く、よく恋文をもらっている。

水に関連した妖達が住む街住みであり、且つ自身が化け蛇であるにも関わらず、小さい頃に溺れかけた事がきっかけで川や湖などの大きな水辺には一切近寄ることすら出来ない。

## 番外第3回 世界・施設等設定

### 【妖世界】

龍己達が現在住んでいる世界。

人間達が住む世界の裏側に位置し、その名の通り様々な妖達が住んでおり、その生活スタイルなどは江戸時代を彷彿とさせるものに思えるが、それは妖達が自ら望んで行っているものである。

人間達の世界と同様に様々な国や島が存在する上、その国を治めている王のような妖も存在しており、その妖達が同盟関係を築いている事で、各国間の争い事などは起きずに済んでいる。

この世界に住む妖達は、大部分がこの世界の生まれであるが、その先祖や一部の妖達は人間世界に住んでいたモノが移り住んできたもので、中には人間を嫌っていたり憎んでいたりするモノも存在する。

この世界のあらゆる場所に人間世界へ繋がる『次元の穴』があるが、妖力などの『力』を有しているモノやその素質があるモノのみがその存在を視認できるため、基本的には妖世界側から使用するモノの方が多い。

この世界にはある特異性が存在しており、本来であれば年月を経た上で修行を積む必要がある妖狐などの妖もこの世界では生まれた直後からその妖としての力を持つなど妖世界で生まれた妖には人間世界に生まれた妖とは異なる特徴が見られる。

### 【妖街・不忍】

龍己達が住んでいる街。

様々な妖達が住んでおり、大きな事件などが起きる事が殆ど無いとても平和な街。

龍己が世話になっている呉服問屋兼仕立屋『狐雨福屋』を始めとした様々な店が建ち並び賑やかな場所であり、祭の季節には更に賑やかになり、そのためだけに遠方から訪れる妖もいるほど。

### 【妖街・深水】

七之助などが住んでいる街。

名前の通り、水に関連した妖達が多く住んでいる上、川などの水辺も他の街に比べて多く存在する。

不忍に比べると少々静かな街ではあるが、七之助が店主を務める小間物問屋『七之屋』などの人気もあり、活気に溢れている街の一つであると言える。

【不忍に存在する店舗】

【狐雨福屋】

龍己が世話になつている呉服問屋兼仕立屋。

古くから商いを行っている、いわゆる老舗であり、店主である龍三郎を始めとした様々な妖が働いている。

龍三郎や龍己、そして羅紗は母屋や離れなどに住んでいるが、番頭などを始めとした他の奉公人達は、併設されている長屋に住んでいたり、それぞれの家から通つていたりとそのスタイルは様々であり、他の商家とは異なつた方法を取っている。

【虫本堂】

不忍にて商いを行っている貸本屋兼書物屋で、龍己や龍三郎が暇を見ては訪れている店。

名前の由来は、本の虫という言葉からであり、店主が読書家が増えて欲しいという願いを以て営んでいる。

### 【越野庵】

不忍にて商いを行っている蕎麦屋で、不忍に住む妖怪達にとつての憩いの場ともなっている。

店主曰く、オススメのメニューは全てだが、売り上げ的に見れば盛りが一番の売れ筋で、風之助などのような小さな妖のためのメニューなども存在する。

### 【深水に存在する店舗】

#### 【七之屋】

深水にて商いを行っている小間物問屋。

化け蛇である七之助が店主を務めており、扱っている品物の煌びやかさなどはさることながら、七之助の容貌も人気の一因となっており、常に大盛況となっている。

## 本編

## 第1話 妖怪達が住まう街

春の暖かな陽射しを浴びて、桃色に輝く桜の花弁はなびらが舞い踊る中、俺は綺麗な緑色の着物を着た少女と共に桜並木を歩いていた。

……うん、やっぱり桜って綺麗だな。

頭上で静かに咲き誇る桜の花を見ながら、そんな事を思っていると、隣を歩く少女が申し訳なさそうに声を掛けてきた。

「あの……本当にありがとうございます。あまりこの辺りの事を知らなかったので、助かりました」

「あはは、さつきも言いましたけど、これくらい別に良いですよ。いつも帰りにはその近くを通ってますし、今回は俺も稲荷神社に用事があったわけですから」

隣を歩く少女にニツと笑いながら言うと、少女は優しく微笑みながら静かに頷いた。周囲では変わらず桜の花が咲き乱れ、風によつて桜の花弁がまるで舞踏会をしているかのように舞い踊り、俺達が進んでいる道へとひらひらと舞い落ちる。

……さて、何故俺がこんなことになっているかを話すとしよう。

それは数分前の事だった。

「今日も学校ダルかったな……」

高校からの帰り道、俺は空を見上げながらそう一人ごちた。勉強は文系教科以外はあまり好きじゃないから、今日みたいに理系教科が多い日は辛く感じる。別に理系教科が苦手とかでは無いんだが、文系教科の方が興味を強く惹かれるから、個人的には文系教科が多い日の方が良かったりする。

「こんな時こそ何か出ないかな。妖怪とか幽霊とか」

そう、俺が文系教科、特に国語が好きなの理由がこれだ。昔から妖怪とか幽霊とかそういった超自然的なモノ達が好きで、そういったモノ達の出てくる本を読み漁っていたら、いつの間にか国語が得意になったのだ。もちろん、携帯があればネットからそういったことについての文献を拾ってこれるんだが、俺は現代の高校生にしては珍しく携帯を持っていないため、基本的に学校の図書室や地域の図書館でその手の本を読むしか無いのだ。

……あ、そうだ。

「……この近くの稲荷神社にでも行ってみるかな？ 同じ部活の奴等が何かを視たとか

言つてたし。うん、ついでに学業成就のお参りもしようかな。」

そう決めた後、俺は近所の稲荷神社の方へと足を向けた。さて、この話の通り、俺の住んでいる地域には稲荷神社が一社存在する。その神社は地元の人もよく御参りしていて、夏休みとかになると子供達の遊び場にもなつていたりするため、地域の人達にとつては、ちよつとした憩いの場みたいになつている。ところが、その神社で最近妖怪や幽霊を視たという人が出たらしく、更にその人数はどんどん増えた事で、お年寄りの中ではお稲荷さんが悪人達を懲らしめるために魑魅魍魎を呼び寄せているという話にもなつているようだ。

でもなあ……。

「お稲荷さんが勧善懲悪で魑魅魍魎を呼び寄せているとか聞いた事無いけどなあ……むしろ自分でやりそうだし」

本来は農業の神様らしいが、崇り神としての側面もあるとか聞いた事があるから、その真偽は分からないながらもついついそう考えてしまう。

そんな事を考えながら、稲荷神社へ向けて歩いて歩いていた時、ふと視界に小さな桃色の物が入ってきた。

……これって、桜の花弁か？

「そっか……この辺の桜、もう咲いてるのか……」

俺は道の途中にある桜並木を見ながら、ふとそんな感想を漏らした。この桜並木は昔からあるらしく、この時期なんかは花見客でよく賑わったりするんだけど、時間的な事もあつてかまだそういう人達は見掛けない。

「花見とか何時からやつてないかな……たぶん、もう2年くらいやつてない気がするな……」

でもそれは仕方の無いことだ。俺も学校や部活動があるし、両親も共働きなので、一人で夕飯を食うとかは今となっては日常茶飯事だからだ。

「どうせだし、部活の仲間でも誘つてみようかな?」

そんな事を考えながら、再び歩き始めようとしたその時だった。

「……………ん? 誰だろう、この辺じゃ見掛けない顔だけど……………」

道の先の方に綺麗な緑色の着物を着た長い黒髪の少女が立っているのが見えた。その少女は、とても綺麗な顔付きをしており、背丈や雰囲気などから同い年くらいだと感じた。そして、手に紫色の風呂敷包みを抱えながら、何かを探しているように周りを見回していた。

うーん……………どうやら困ってるみたいだし、何か手伝えないか訊いてみるか。

俺はその少女の事が気になったため、とりあえず話し掛けてみることにした。

「あの……………すいません。何かお困りですか?」

「……………え？ えっと、貴方は？」

「あ、俺はこの辺りに住んでいる者です。貴女が何か困っているように見えたので、何か助けになれないかなと思つて」

「あ……………そうだったんですね。」

……………実はこの近くにある稲荷神社に用事があるんですが、お恥ずかしながら迷つてしまつて……………」

「あ、良ければそこまで案内しましょうか？ 俺もちょうど稲荷神社に行く所だったので」

「え、でも……………よろしいんですか？」

「ええ、困っている人を見てみぬ振りは出来ませんから。」

さて、それじゃあ、行きましようか」

「は……………」

少女の返事にコクンと頷いてから、俺は少女と共に稲荷神社へ向けて歩き始めた。

——ということがあつたため、俺は現在稲荷神社に向けて、少女と他愛ない話をしながら一緒に歩いている。

ん、そういえば……。

「そういえば……稲荷神社に用事があると言っていましたけど、何の用事なんですか？」  
「えっと……実は、これからある人と会うことになっていて、その人との待ち合わせ場所がその稲荷神社なんです」

「なるほど……ん？ 因みにその人はこの辺りに住んでいる人なんですか？」

「あ……はい。そのように聞いています」

「それだったら……その人に迎えに来てもらうことも出来たんじゃ……？」

「実は……今日は他の用事で遅くなるとのことだったので、早めに行って待つてようと思っただんです」

「あ、なるほど」

こんなに綺麗な人なんだし、その待ち合わせの相手も彼氏とかなのかな？

そんな事をボンヤリと考えつつ少女と話している内に、俺達は目的の稲荷神社に到着した。

「あ、着きましたよ。ここが稲荷神社です」

「ここがそうなのですね……あの、本当にありがとうございました」

「いえいえ、それじゃ俺も用事を済ませようかな」

俺は神社の境内へと進み、参道を歩いて拝殿の前に立った。

「えーと、確か御参りの方法は……まずお賽銭を入れて、次に鈴を鳴らしてから、二礼二拍一礼だったよな。それで願ひ事は二拍と一礼の間にするだったよな」

俺はお賽銭を入れた後、拜殿の鈴を鳴らし、二礼二拍をした後に、願ひ事を念じた。

『何でも良いので、何か楽しいことが起きますように』

その後、しっかりと一礼をして、俺は参道を通つて鳥居まで戻つてきた。そして、さつきの少女に一言言つてから帰るべく、少女へと話しかけた。

「それじゃ、俺はこれで」

「はい。この度は本当にありがとうございます」

「いえいえ、それじゃあ——」

そして帰ろうとしたその時、胸に何かがぶつかったような感触があった。

「……………え？ 今、胸の辺りに何かぶつかつて——」

見てみると、そこには一本の矢が刺さつていた。矢は心臓の位置をしっかりと捉えていたため、そこからは血が勢い良くドクドクと染み出し、制服を徐々に血で赤く染め上げていった。

「くっ……………！ な、何なんだよ、これっ……………！」

俺はその鈍い痛みに耐えつつ声を上げたが、流血の影響から体がふらつき、不意にその場に片膝を付いた。そして、その衝撃で持つていたカバンが道へと転がっていった。

「だ、大丈夫ですか!？」

そんな俺の姿を見てか、少女が大きな声を上げながら駆け寄ってきた。

「はあ……はあ……! に、逃げてください……!……ここは今、危ないです……から」

「でも!」

「はあ……はあ……! ……俺は大丈夫ですから、貴女は早く逃げ……」

そこまで言った時、俺の体は更にグラツと揺れ、そのまま地面へと倒れ混んだ。そして、それと同時にだんだん意識が遠のいていった。

はは……まさか人生がこんな形で終わるなんて……。でも、こんな形で終わるなんてのも中々経験出来ないし、それはそれでありなのかな……?」

そんな事を考えた後、俺の意識は完全に途切れた。

「大丈夫ですか!？ しっかりしてください!!」

私は必死になってその人の体を揺さぶりながら声を掛けた。けれど、その人から答えは一切返ってこず、その体が徐々に冷えていくのを感じた。

「そ、そんな……」

目に涙を浮かべながら呟いたその時――。

「フン、お嬢さんに取り入ろうとは……まったく、人間風情が話し掛けて良い御方ではないというのに……」

神社の方からいつも聞いている声が聞こえ、そちらへ顔を向けると、そこには弓と矢筒を背負った声の主——羅紗らしゃの姿があった。

「…… 羅紗、これは貴方の仕業だったのね……？」

「ええ。お嬢さんにその人間風情が気安く話し掛けていたものですから。」

それに人間なぞ大したこと無い連中ばかりで——」

冷たい眼で言う羅紗の言葉に被せるようにしながら、私は怒りを必死に抑えつつ羅紗に指示を出した。

「羅紗。急いでこの方をお店へと連れて行って下さい。お父様なら何か方法を知っているかもしれませんが」

「お嬢さん……？ その人間は既に事切れて——」

「羅紗、もう一度だけ言います。急いでこの方をお店へと連れて行って下さい」  
「………畏まりました」

羅紗はしぶしぶ答えた後、人間の方を少し乱暴に背負うと、神社の拜殿の方へと歩いていった。私も羅紗の後に続いて急いで歩き出した。

この方を、絶対に助けなければ……！

私は羅紗に背負われている人間の方を見ながら強く決心しつつ、羅紗と一緒にお父様の元へと向かった。

「ん……」

俺は小さく声を上げながら静かに目を覚ました。そして、ゆつくりと体を起こしてみると、そこはまったく見たことのない場所だった。

「……あれ、ここはどこなんだ……？」

俺は周りを見渡しながら小さな声で呟いた。

周りには障子や木で出来た棚、少し大きめの箆笥や文机などがあり、どうやら俺はその真ん中辺りに敷かれた布団で寝ていたようで、よく見てみると小綺麗な青色の着流しを着ていた。

「でも、何で俺は寝てたんだっけ？ ……あれ、そもそも俺は……誰なんだ？」

分からない……これってまさか、記憶喪失って奴か……？」

俺が自問自答していると、障子の方から誰かの足音がした。そして、その足音が部屋の前で止まると、障子がスツと開かれ、それと同時にとても安心したような声が聞こえた。

「……ああ、良かった……意識が戻られたんですね……！」

そこには綺麗な顔付きの緑色の着物を着た長い黒髪の少女の姿があり、少女の顔には先程の声と同じような安心の色が浮かんでいた。それだけなら俺もそこで終わらせるが、その少女の頭には何故か狐のような耳が、そして腰の辺りには尻尾のような物が見えていた。

「えっと……その耳は……？」

「あ……えっと、これはその……」

……どうやら耳については、何か理由があるみたいだし、ここは訊かないでおくか。少女の困っている様子からそう判断した後、俺は少女にニコツと笑いながら声を掛けた。

「あ、言えないことならこれ以上は聞きませんから、安心してください」

「あ……ありがとうございます。……ふふ、やっぱり貴方はお優しいですね」

……へ、やっぱり……？」

「あの……やっぱりっていうのは……？」

「え……それはさっきのことです——」

その瞬間、少女の表情には驚きの色が浮かんだ。

「……もしかして、何も覚えてらっしゃらないのですか？」

「す、すいません……貴女の事どころか、自分の事すら分からなくて……」

「そ、そんな……」

その少女は、口を手で押さえながら消え入りそうな声で言った。

もしかして知り合いだったのかな……だとしたら、申し訳無いことをしたな……。

少女を見ながらそんな事を思っていると、障子が再び開き、少女同様に狐のような耳と尻尾が付けた深い青色の着流しを着た少年が部屋に入ってきた。

「お嬢さん、旦那様がお呼びで……ってお嬢さん!? お加減でも悪いのですか!?!」

少年がとても心配そうな表情を浮かべながら声を掛けると、少女はハツとした表情を浮かべた。そして、すぐにキリツとした表情に変わると、少年に対して真剣な声で返事をした。

「いえ……大丈夫ですよ、羅沙。ただ今参りますと、お父様にそう伝えてもらえますか?」

「承知しました」

そう返事をしながら少年は恭しく頷いた後、部屋から静かに出てから障子をゆつくりと閉めた。

「えっと、さっきの方は……?」

「このお店の手代で、名は羅沙と申します」

「手代……という事は、ここはお店だったんですね」

「はい、私の父が営んでいる呉服問屋兼仕立屋です」

「呉服問屋……」

呉服屋か……通りでこの人もさっきの人も綺麗な着物を着ているわけだ。心の中で静かに納得していると、少女は優しく微笑みながら声を掛けてきた。

「あの……申し訳ありませんが、私と一緒にお父様のお部屋まで来て頂けますか？」

「えつと……何故ですか？」

「貴方の意識が戻って、起き上がれるようならば、少しお話ししたいとのことだったので……」

「なるほど……分かりました。それでは、案内をお願いしますね」

「はい」

少女の返事にコクンと頷いてから俺は部屋を一緒に出て、少女の案内に従って中を歩いて行つた。

歩き続ける事数分、俺達は大きな部屋の襖の前にいた。少女は慣れた様子で襖を静かにノックすると、中に向かって静かに声を掛けた。

「お父様、あおは碧葉です」

「ああ、碧葉か。入ってきてくれ」

「失礼致します」

「失礼します」

少女——碧葉さんと一緒に部屋に入ると、そこにはどことなく碧葉さんに似た優しい顔の男性が座っていた。そして、その人には碧葉さん達と同じ様な狐の耳と尻尾が当然のように付いていた。

やっぱり耳と尻尾が付いてるな……碧葉さん達の姿から察するに、もしかしてここは妖狐が営む呉服問屋兼仕立屋なのかな？

そんな事をボンヤリと考えていると、碧葉さんが俺の事をチラツと見ながら男性に話し掛けた。

「羅沙がご迷惑をかけた人間の方もお連れしました」

「うん、ありがとうね、碧葉」

男性は碧葉さんにニコリと微笑んだ後、俺へと視線を移した。

「さて……初めまして、私はこの呉服問屋、『狐雨福屋』の主の龍三郎と申しますこの度は私共の手代が貴方にとんだご無礼を致しました事、本当に申し訳ございませんでした」

男性——龍三郎さんはそう言いながら頭を深く下げたが、俺にはやっぱり何が何だか

だった。

「えつと……そう謝られても、今の俺には何の事だかさっぱりなのですが……」

「……つまり、その時の記憶が無いという事ですか？」

「その時の記憶だけでは無く、自分の事もさっぱりで……」

俺が軽く自分の状況について話すと、龍三郎さんは難しい顔をしながら静かな声で言った。

「……恐らくそれは、シヨックによるものと思われれます」

「シヨック……ですか？」

「ええ。覚えていないかもしれないかもしれませんが、貴方は羅紗が放った矢が心臓に当たった事で、一度息を引き取っています。その時のシヨックによって、記憶の一部が消失してしまっただのだと思います」

「なるほど……あれ？　俺は死んだ筈なのに、何故生きているんですか？」

「それは……私が貴方にある秘術を用いて、蘇らせたからです」

「ある秘術……ですか？」

「ええ。ですがまずは……ここがどこかというところ事などを説明する必要がありますね」

龍三郎さんは一度言葉を切ってから、再び話し始めた。

「今、私達がいるのは 妖<sup>あやかし</sup>達が住む世界にある街の1つ——『妖怪街・不忍』です」  
「妖……ですか？」

「はい。もう薄々お気付きだとは思いますが、私もこの碧葉も、そして呼びに行かせた羅沙も妖狐です」

「やはりそうだったんですね」

「はい。この世界には私達妖狐だけでなく、人間世界で伝えられている様々な妖達が生活しています」

「人間世界で伝えられている妖怪達が……」  
「……やはりすぐには信じられないですよね」

俺の様子を見て、龍三郎さんは優しい笑みを浮かべながら静かな口調で言う。

妖達が住む世界か……何だかまだ信じられないけど、龍三郎さんの眼はとても真剣な眼だ、そんな人が嘘をつくとは思えない。

そう思った後、俺は静かに言葉を返した。

「いえ、信じますよ。貴方の眼は嘘をついてるような眼には見えませんから」

「ありがとうございます。それでは次に秘術について説明致します」

「俺を蘇らせるために使ったという秘術ですね」

「ええ。これは『反魂<sup>はんこんのひじゅつ</sup>の秘術』と呼ばれているものです。ですが……この秘術は本来、

人に用いるものではありません。人間の方、少し体——具体的には丹田の辺りに力を入れてもらえますか？」

「ええ……構いませんけど……？」

龍三郎さんの言う通り、俺は丹田の辺りに力を入れた。すると、何故だか頭と尻の辺りがむずむずし始めた。

え……何だろう……？

不思議に思いながらその箇所 hands を触れると、そこにはふさふさの毛が生えた少し固めの尖った物があつた。

「まさか、耳と尻尾が生えてる……？」

そう、その形から判断するに、その箇所には狐の耳と尻尾が生えていた。

でも、何で俺に耳と尻尾が……？

俺が不思議に思っていると、龍三郎が静かな声で話し始めた。

「それは反魂の秘術によるものです。反魂の秘術は古来から妖達に用いられたものなため、それを無理に人間へと使ってしまったことで、人間の血のおよそ半分が妖の血に変異してしまつたのだと思います」

「そんなことが……」

血の半分が妖……つまり、俺は半人半妖になつたということか。

耳と尻尾の感触を静かに確かめながらそんな事を考えていると、龍三郎が本当に申し訳なさそうな表情を浮かべながら、静かに頭を下げた。

「人間の方、本当に申し訳ありません……！本来であれば人間として生きていく筈のところを、このような事態になってしまい本当に申し訳ありませんでした……！」

「龍三郎さん……」

その龍三郎さんの姿から、本当に申し訳無いと思っている事が強く伝わってきた。

さて……俺はどうしたいんだろう。いきなり死んだと思つたら、半人半妖として生き返ったわけだけど、俺はこれからどのようなしていきたいんだろう。

そんな事を心の中で自問自答していたが、何度考えてみても浮かんできた答えは一つだった。

……うん、そんなのは決まってるよな。

俺は自分が導き出した答えに静かに頷いた後、龍三郎に向かってニコリと微笑みながら声を掛けた。

「龍三郎さん、顔を上げてください」

「人間の方……」

「俺はもう受け入れましたから、自分の記憶が無いことも、半人半妖になったことも全て」

そう、なつてしまったのなら、もういつそのこと受け入れてしまった方が楽だ。今更嘆いたところで人間に戻ったり、記憶が戻ったりする訳じゃない。だったらこの状況を受け入れて、楽しもうとしてしまう方が良いんだと思う。

「だから顔を上げてください、俺は龍三郎さん達を恨んだりしてませんから」

「人間の方……本当にありがとうございます」

「いえいえ。こちらこそ生き返らせて頂きありがとうございます」

俺は龍三郎さんに対して静かに頭を下げた。

生き返ったからにはこの半人半妖としての生活を精一杯していこう。それが今の俺に出来る事だから。でも、次に考えなきや無いのは……どうやってその半人半妖としての生活をして行くか、だな。人間の世界に戻ったところで、何かの拍子でボロが出てしまうことは十分にあり得る。……ふむ、それなら。

「龍三郎さん、少し一つ訊いても良いですか？」

「はい、何でしょうか？」

「この辺りに長屋みたいな物がありますか？」

「長屋……ですか。あることはありますが……」

俺の質問に龍三郎さんは少し考えながら答えた。俺の出した答え、それはこの妖怪達の世界に住むことだ。ここでなら妖側としての力が出て問題は無いどころか、この力

を何かに活かせるからだ。

後は龍三郎さんに長屋に案内してもらって、後は奉公させてもらえる場所を見つければ……。

俺がこれからの事について考えていると、龍三郎さんが話し掛けてきた。

「人間の方。私の提案を聞いて頂けますか？」

「提案……ですか？」

「はい、貴方にはこの度、本当に迷惑をお掛けしました。そのお詫びとしてなのですが、この狐雨福屋の離れ——貴方が眠っていた部屋を貴方の住む場所としてご提供したいと思うのですが、いかがですか？」

「え……それはとてもありがたいですけど、本当によろしいんですか？」

「ええ、離れは現在誰も使ってはいませんから。それに貴方のような方に使っていただけるなら、私たちとしても問題はありません」

「……分かりました。ただ……それだけだとやはり申し訳ないので、ここで働かせて頂けませんか？ 呉服屋としての知識は無いですが、雑用くらいならこなせると思いますが」

「……分かりました。それでは内では客人兼住人、そして世間には住み込みの小僧見習いという体で通すことにしましょう。人間の方、これからよろしくお願い致します」

「よろしくお願い致します」

「こちらこそよろしくお願い致します。龍三郎さん、碧葉さん」

俺達は握手をしながら、挨拶をしあつた。

これからどんなことになるかは分からないけど、それすらも楽しんで過ごしていこう。

そんな事を考えていたその時、俺はある事に気付いた。

あ、そういえば……。

「龍三郎さん、一つ訊いても良いですか？」

「はい、何でしょうか？」

「俺が死んだ場所に、何か名前の手がかりになる物などは残ってなかったのですか？」

そう、今は青色の着流しを着ているが、前の俺はたぶん着流しではない別の服を着ていたはずだ。それに、流石に何も持たずに出掛けたりはしないと思うから、何か持ち物さえあれば、手がかりくらいは見つかるかもしれないしな。

しかし、龍三郎さんは静かに頭を振りながら申し訳なさそうに答えた。

「……申し訳ありません。貴方をここに運んだ後に、その場所を羅沙に見てきてもらったのですが、人間の方々が既に大勢いて、貴方や着ていらした衣服以外は何も持ち帰ることは出来なかつたとのことですよ」

「そう、ですか……」

残念だな……前の俺についての物があつたら、一応手元に置いておきたかつただけど……まあ、無いならしょうがないよな。

俺がそんな事を考えていると、龍三郎さんは真剣な表情を浮かべながら声を掛けてきた。

「人間の方。ある場所へ貴方をご案内したいので、これから私に付いてきてもらつても良いですか?」

「あ、はい。もちろんです」

「ありがとうございます。では碧葉、少しだけこの方と外に出てくるよ」

「分かりました。行つてらっしゃいませ、お父様、人間の方」

「はい、行つてきます」

碧葉さんに微笑みながら挨拶をした後、俺は龍三郎さんと一緒に部屋から出た。

「さて、今から行く所の説明をしますね」

「あ、はい」

そして、店の中を歩きながら龍三郎さんがその場所の説明をしてくれた。

「その場所は昔から『映うつしの泉いずみ』と呼ばれています」

「映しの泉ですか……?」

「はい。その泉に自身の姿を映すと、その者の中にある力が何らかの形として見る事が出来ると言われています」

「そうなんですネ」

「ええ。私も以前映したところ、金色の狐の姿を見ましたよ」

妖狐らしいといえづらいですけどね、と笑いながら言う龍三郎さんに対して、俺も微笑みながら静かに頷いた。そして店の出入り口の辺りまで来た時に、碧葉さんと呼ばれて来た妖狐の少年―羅沙さんが反対側から歩いてきた。

「おや、ちょうど良いところに。羅沙、ちよつと良いかい？」

「はい、旦那様」

龍三郎さんに呼ばれて、羅沙さんが近寄ってくると、龍三郎さんは静かな声で羅沙さんに再び話し掛けた。

「今からこちらの方と一緒に、映しの泉まで行ってくるから、それまでの留守番とお客様のお相手は頼んだよ」

「かしこまりました、旦那様。行ってらっしゃいませ」

羅沙さんはピシツとした様子で答えると、そのまま店の奥の方へと歩いていった。そして、それを見送った後、龍三郎さんはニコリと笑いながら声を掛けてきた。

「それでは私達も行きましょうか」

「はい」

龍三郎さんの言葉に頷きながら答えた後、俺達は店の木戸を通り街の中へと出た。すると、妖達が住む世界というだけあって、街の至る所で妖が生活をしており、もうすぐ夕方という時間にも関わらず、街の中は活気に満ちていた。

「妖達が住む世界っていうだけあって、色々な妖怪がいますね。それに……物凄く賑わっていますね」

「ええ、この不忍はその名前の通り、忍ぶ——静まり返る事が無い程に賑やかな街ですし、この名前はそれだけ賑やかな街になって欲しいと願って付けられたと聞いています。それに、ここには古今東西の妖達が集まっていますしね」

「そうみたいです。今見えてるだけでも……ろくろ首に河童、もくもくれん 目目連かしゃに火車かしゃもいますね」

「おや、よくご存じですね」

「はい。たぶん、前の俺はこういった妖達が好きだったんだと思います」

「ふふ、そうかもしれないですね」

俺達はそんな話を話しながら、妖達が生活をする街——『妖怪街・不忍』の中をひたすら歩いていった。

歩き始めてから十数分後、俺達の目の前に少し大きな泉が現れた。

「着きましたよ。ここが映しの泉です」

「……なんというか、凄い綺麗な場所ですね……」

映しの泉はどうやら街の外れにあるらしく、周りが木々などの自然で囲まれていた。そして、件の泉の水はとても澄んでおり、その水面にはとても綺麗に周りの景色が映りこんでいた。

「ここは遙か昔、強大な力を持った妖が造ったと云われているのです」

「何のためにですか?」

「そうですね……詳しくは伝えられていないのですが、昔は妖達の中での争いが絶えなかったと聞いています。恐らくそういった妖達の心を落ちつかせることが出来る場所が必要だったから、そして自分自身の姿と妖力の姿を見て、自分の事を見つめ直して欲しいと思ったからなのだと、私は思っています」

「なるほど……」

龍三郎さんの解説を聞きながら、俺は映しの泉の綺麗さに心を奪われていた。

……龍三郎さんがここに連れてきてくれたのは、もしかしたら俺に気分を変えて欲しいからなのかな。

そう思いながら、俺は泉へと足を進めた。

「ここに自分の姿を映せば良いんですよね？」

「はっ」

龍三郎さんの返事にコクンと頷いてから俺は泉の水に近づき、自分の姿を泉の水に映した。

すると、泉の水に突然波紋が広がり、広がっていく波紋の中に何かの姿が見え始めた。これは……。

「青龍……かな。後ろには花が咲いてるけど、これは確か鈴蘭だっけ……？」

とても大きな青龍の後ろに揺れる鈴蘭……どういう意味を持っているんだろう？

そう思っている内に、波紋の中の青龍と鈴蘭は消え、泉の水は再び景色と俺の姿だけを映し出した。そして、俺が泉から龍三郎さんの元へ戻ると、龍三郎さんは静かに首を傾げながら声を掛けてきた。

「どうでしたか？」

「青龍と鈴蘭の花の二つが映りました」

「青龍と鈴蘭ですか……私の知る限り、二つの物が一度に映るのは初めてですね」

龍三郎さんは不思議そうにしているが、俺には何となく理解が出来た。青龍と鈴蘭の二つはたぶん人間としての俺と妖怪としての俺を表しているんだろう。根拠は無いけ

ど何となくそんな気がした。

……あ、そうだ。

「龍三郎さん」

「はい、何ですか？」

「あの青龍と鈴蘭を使つて、自分に名前を付けようと思うのですが、どうでしょうか？」

「はい、とても良いと思いますよ。それでどのような名前にするのですか？」

「そうですね……まず人間としての名前ですが、狐の耳と尻尾のイメーヅからいなり稲荷、そしてさっきの青龍からりゆうき龍己、更にそれらを合わせて いなりりゆうき稲荷龍己としようと思います。次に

妖怪としての姿ですが、これはさっきの鈴蘭をそのまま使つて、鈴蘭と名付けようと思  
います」

「稲荷龍己と鈴蘭ですね。……うん、私はとても良いと思いますよ、龍己さん」

「ありがとうございます、龍三郎さん。あ……それと、別に俺の事はさん付けじゃなくても良いですよ。さん付けされるのは何だかこそばゆいので……」

「ふふ、分かりました。それでは改めて……これからよろしくお願いしますね、稲荷龍己  
君」

「はい、こちらこそよろしく願います」

サワサワという風によつて揺れる木々の音を聴きながら、俺と龍三郎さんは静かに笑

い合った。

青龍の季節は春、そして鈴蘭の花言葉は再び幸せが訪れる。春は出会いの季節なんていわれているし、これからこの世界で、俺は色々な妖怪達と出会うだろう。でもそんな妖怪達と共に幸せな生活をしていけるように精いっぱい頑張っていこう。

これからの人生の事を思いながら、俺は静かにそう誓った。

「ふう……今日は色々あったからか本当に疲れたなあ……」

その日の夜、俺はこれから自分の部屋になる離れに布団を敷きながら今日一日の出来事を想起していた。

「……全く覚えてはいないけど、人間時代に矢が心臓に当たった事で一度死んで、この世界にあるこの不忍へと運ばれて、反魂の秘術で半人半妖として生き返った。そして、映しの泉で自分の人間としての俺と妖怪としての俺の二つの姿を見て、そこから新しい名前を付けた、か……。何度思い出してみてもやっぱり物語の中の話みたいだよな……」

自分の身に起きた事ではあるのだが、この出来事がどこか現実味のない話のように思え、俺はその事に思わずクスリと笑っていた。そして、布団を敷き終えた後、ふとこの

『狐雨福屋』へ帰つてきた後の事を思い出した。

「……それにしても、俺もよく自分を殺した相手の事を簡単に許せたもんだよな。その上、ついさつきまで一緒に夕飯まで食べてたわけだし」

龍三郎さんと一緒に映しの泉からこの『狐雨福屋』へ帰つてきた頃、周囲の店は既に店仕舞いを始めており、この『狐雨福屋』もまた同じように店仕舞いを始めていた。そして、店の中へと入った時、ちょうど店先へ出て来ようとしていた羅紗さんが丁寧に迎えてくれた。すると、龍三郎さんは途端に真剣な表情を浮かべ、自分達と一緒に部屋へ来るように言い、羅紗さんはそれに対して同じく真剣な表情を浮かべながら答えた。そして、龍三郎さん達と一緒に部屋へ行つた後、俺は二人から自分が死んだ時の状況などを改めて教えてもらい、羅紗さんからの謝罪を受けた。どうやら俺が眠っている間に羅紗さんは今回の件について龍三郎さんからしつかりと事情を聞かれ、その上でお叱りを受けていたらしく、羅紗さんの処遇については被害者である俺に一任するとの事だった。つまり、羅紗さんを生かすも殺すも俺次第という事になったのだが、俺は結果として羅紗さんの事をお咎め無しにする事にした。確かに羅紗さんがあの時に勘違いをしなければ、俺は今でも人間として生きていた。けれど、羅紗さんはあくまでも碧葉さんを守るという使命を守ろうとしてそういう行動を取つたわけであり、ただの人間だった頃の俺にもそう思わせてしまうような非があつたかもしれないため、俺は羅紗さんの事

を許す事にしたのだった。他人からすれば、俺の判断は非常に甘いのもかもしれないが、何となく人間だった頃の俺も同じような判断をするような気がしたため、俺はそう決めた事を龍三郎さん達に告げた。

見ず知らずの人——いや、妖に普通に話し掛けた上に一切警戒すること無く道案内までしててみたいだからな。この様子だと人間だった頃の俺は、結構なお人好しだったんだろうな……。

以前の俺に対してそんな印象を抱いている内に羅紗さんの件については終わり、その後は向こう側では行方不明という事になっている俺の事について話し合ったが、中々良い案は出なかったため、それに関しては良い案を思いついた時にもう一度話し合う事に決まった。そして、龍三郎さん達と夕食を食べた後に風呂へと入り、そのままこの離れへと戻ってきて今に至るのだった。

「まあ、自分の選択に一切後悔なんてしてないし、これから羅紗さんともすっかり仲良くなっていければ良いな」

そんな事を独り言ちながら布団を敷き終えた瞬間、疲れや安心からか思わず大きな欠伸をしていた。

「……さて、明日からも頑張るために眠りたいところだけど、せつかくだから日記でも付け始めるかな。あ、でも日記帳が無いか……」

独り言ちながらふと文机に目を向けたその時、文机の上に一冊の本のような物と四角い物が置かれているのが見え、俺は不思議に思いながら文机に近付き、本のような物を静かに持ち上げた。すると、それは新品の日記帳であり、その傍に置かれていたのは同じく新品の筆と硯、そして墨のセットだった。

「……まるで俺が日記を書きたいと思う事が分かつていたかのように置かれてるけど、これは使っても良いのかな……？」

夕食時に龍三郎さんから離れにある物は自由に使つて良いと言われてはいたが、この新品の日記帳達を使うのは何となく気が引けていた。

……けど、使わないのも何だか逆に申し訳ないし、ここはありがたく使わせてもらう事にするか。

龍三郎さん達に対して心の中でお礼を言った後、硯で墨を摺つて俺は今日一日の事について日記帳に書き留めた。そして、筆を紙から離して硯へ置いた瞬間、もう一度大きな欠伸が漏れ、それと同時に瞼が閉じそうになつていてるのを感じた。

「やっぱり眠いな……けど、筆と硯は洗わないといけないし、とりあえず台所を借りる事にするか」

眠気でヨロヨロとしながらそのまま台所へ向かい、筆と硯に付いた墨を丁寧洗い流した後、俺はそれらを風通しの良い所へと置き、一度厠へと向かった。そして、眠る準

備をしつかりと整え、そのまま布団の中へ入った瞬間、ここまで我慢していた眠気が一気に襲い、瞼が勢い良く閉じ始めた。

「ふあ……それじゃあ眠るとするか……」

瞼が完全に閉じきった瞬間、俺の意識はスーツと遠のいていき、程なくして眠りについた。

## 第2話 妖怪街を巡る狐と鼬

「……ん」

微かに聞こえてくる鳥のようなモノの声を聞きつつ、俺は静かに目を開けた。

この明るい感じ……つまり、今は……。

「……朝か」

布団からゆっくり起き上がり、俺は部屋の中を見回した。

えっと、ここは……。

その瞬間、俺は昨日あった出来事を全て思い出した。

「あ、そうだった……俺は昨日から……ここにお世話になってるんだ……」

ここ——狐雨福屋はこの妖達が住む世界に存在する呉服屋で、俺はこの狐雨福屋で表向きは住み込みの小僧見習い、その実は客人兼住人として過ごす事にしたんだったな。

そこまで思い出した時、俺は現在の自分の記憶力に少しだけ不安を覚えた。

危ない危ない……寝起きだったせいか、一瞬自分の事を忘れそうになった。

これからはこれが普通になるんだから、少しずつでも慣れていかないとな。

「……よし、少し外でも歩いてみるか」

少し歩いてみれば目も覚めるかもしれないし、気分だつて変わるかもしれないな。自分の考えに領いた後、俺は布団の横に畳んで置いていた青い着流しに着替え、離れの縁側に置いてある草履に足を通した。

そして、店の外まで歩いていこうとしたその時、ある事を思い出し立ち止まった。「……つと、そうだった。ここは妖怪達が住む世界だから、人間の姿のままよりはこつちにしとくか」

俺はすぐに丹田の辺りに力を入れ、半人半妖としての姿になった。

……うん、やっぱりまだこの耳と尻尾は慣れないな。

「まあ……その内慣れるか」

これからはこの姿だつて俺なんだし、自然に慣れてくだろうしな。

そう思い気持ちを切り替えた後、俺は再び店の外の方へと向かった。すると、近くから穏やかな声がした。

「おや……早起きですね、龍己君」

「あ、おはようございます、龍三郎さん」

そこにいたのは、この店——狐雨福屋の主で妖狐の龍三郎さんだった。龍三郎さんはニツコリと微笑むと、ゆつくりとこちらへ歩いてきながら静かに声を掛けてきた。

「昨夜はよく眠れましたか？」

「はい。ただ……まだこの環境に慣れてないせいかな、ちよつと早く目が覚めてしまつて……」

「それで目覚ましと気分転換を兼ねて、少しだけ外を歩いてみようかなと思つたんです」

「なるほど。それでしたら、少し待つてみてください。そろそろアレが鳴る頃ですから」

「アレ、ですか？」

アレ、つて何だろう……？

首を傾げながら龍三郎さんに訊いた瞬間、近くから大きな鐘の音が聴こえてきた。

「これは……鐘の音？」

「はい。これは時の鐘といつて、一刻毎いっせきごとに鐘を鳴らす事で、我々に時間を教えてくれているのです。

そして、今は……ちよつと明け六ツです」

「そうなんです」

それで……ちよつと待つた方が良いのは、これのためなんですか？」

「それもありませんが、後はです……」

龍三郎さんが何かを言いかけた時、通りの方から様々な声が聞こえ始めた。

ん……何だか通りの方が騒さわがしくなつてきたな。

俺がその声に耳を澄ませていると、龍三郎さんはクスクスと笑いながら話し掛けた。

「ふふ、どうやら街の人達も起き出してきたようですね。

さて龍己君、我々も早速通りへ出てみましょうか」

「あ、はい」

返事をした後、俺は龍三郎さんと一緒に、木戸を通つて通りの方へと出てみた。

するとそこには、昨日見た時よりも多い妖達の姿があつた。

「これは、スゴい数ですね……」

「ふふ、この街——『妖街・不忍』あやかしがいには様々な妖達が住んでいますから。しのばず

それに、お祭りの際には更に色々な妖達が各地から参加しに來ますから、もつと賑わ

いますよ」

「そうなんですね……」

何だかだいぶスケールの大きい話だけど、一度見てみたいなお祭りの光景、そして各地から集まったさまざまな妖怪達の姿を。

不忍の住人達を見ながらそんな事を考えていると、近くからとても元気な声が聞こえてきた。

「読売っ、読売だよー！ 河童の青悟親分しようちが向こうの蟒蛇屋うわばみやで大食いならぬ酒の大

呑みに挑戦だ！

そして、その結果が気になるってえ奴は、この読売を読んでおくれーっ!!」

声の方にいたのは、首から何枚もの板のような物に乗せた大きめの板を掛けた編み傘を被った人の形をした妖、そしてその妖の肩に二本足で乗りながら声を張り上げている小さな鼬のような妖——鎌鼬の二匹だった。

もしかして、あれは……

「あれって……瓦版屋ですか？」

「ええ、その通りです。」

彼らは毎日、この時間とお昼と夕方になると、あのような形で読売を売っているんですよ」

「そうなんですな」

それにしても瓦版屋か……この街の様子からも何となく分かるけど、この世界って人間世界の江戸時代を思わせるような世界だよなあ……

そんな事を感じつつ龍三郎さんと話している間にも、瓦版屋のコンビはどんどん読売を売り上げていった。

そして、その様子を見ると、龍三郎さんが穏やかに微笑みながら俺に話し掛けてきた。

「さて、それでは私達も行きましょうか」

「はー」

コクンと頷きながら答えた後、俺達は瓦版屋コンビへと近付いた。

すると、瓦版屋コンビの鎌鼬の方が俺達の姿に気付き、顔をぱあつと輝かせながら龍三郎さんに声を掛けた。

「おはようさんです、龍三郎の旦那！」

本日もおてんとさんの機嫌が良いみてえで、読売もそこらの鳥公達みてえにどんどん飛ぶように売れてますよー！」

「ふふ、それは良かったです。」

いつも楽しみにさせて頂いてるので、自分の事のように嬉しいですよー」

「へへっ、不忍でも名高え狐雨福屋の主、龍三郎の旦那にそう言ってもらえて、俺達も嬉しいですよー！」

鎌鼬は、心の底から嬉しそうな表情を浮かべた後、俺の存在に気付くと、目を丸くしながら興味深そうに声を上げた。

「……おや？ そちらさんは、お初にお目にかかりやすねえ……？」

「ええ、そうだと思います。」

彼は狐雨福屋の新しい小僧見習いでして、名前は鈴蘭といいます」

「ほうほう、鈴蘭ったあ中々綺麗な名前ですねい。」

「もしや、どこかのお家の出とかなんですかい？」

「ふふ、まあ、そんなところですよ。」

「……さあ、鈴蘭さん。君も彼らに自己紹介をしてください」

龍三郎さんが俺の方を見ながら、ニコツと笑いつつそう言った。

鈴蘭……つと、鈴蘭は俺だったな。

心の中で苦笑いを浮かべた後、俺は龍三郎さんに返事をした。

「はい、旦那様。」

初めまして、鈴蘭と申します。この不忍の街には昨日来たばかりなため、まだまだ分からない事ばかりですので、色々お教え頂けたらありがたいです。

これからどうぞよろしくお願いいたします」

「これはこれもどうもご丁寧に。」

俺は かざのすけ 風之助、見ての通り鎌鼬かまうずでさあ。

そいでこつちが そうきち 草吉そうきちと言いやして、今はこの網傘で隠れてやすが、中身は旦那方と

同じ妖狐まじでさあ」

風之助さんがそう言葉を締め括ると、風之助さん達は共にペコリと頭を下げた。

鎌鼬の風之助さんに妖狐の草吉さんか……ん、そういえば……

「もしかして、草吉さんは無口な方なのですか？」

「いやあ、実はそうでしたね。」

こいつあ必要な事やちよつと気乗りした時以外は、あまり喋ろうとしねえタチなもんで、逆に口から生まれたなんてえ言われてる俺が組んで、こうして読売を売ってるって訳なんです」

「なるほど……」

風之助さんの説明を聞き、俺は静かに納得した。

瓦版屋は元々二人組だったって聞いたことあるから、あまり違和感は覚ええないし、寡黙かもくと話し上手のコンビなんてスゴくピッタリだよな。

俺がそんな事を考えていると、龍三郎さんが思い出したように声を上げつつ、財布を懐から取り出した。

「……つと、忘れるところでした。」

風之助さん、私にも読売を頂けますか？ 代金はこちらですのぞ」

「勿論でさあ！ それじゃ代金を頂いて……つと、それでこちらが今朝の読売です、龍三郎の旦那！」

「ありがとうございます、風之助さん。」

それではそろそろ戻りましょうか、鈴蘭君」

「はい、旦那様」

風之助さんと草吉さんに別れを告げた後、俺と龍三郎さんは店の方へと歩き始めた。

そして、少し歩いたところで、俺は小さく息をついた。

「……ふう、やつぱり畏まった言い方にはまだ慣れないですね」

「ふふ、そうかもしれませぬ」

「はい。」

でも、狐雨福屋にお世話になっていっているわけですから、今回のような時のために慣れておかないとですね」

「そうですね、苦勞をお掛けしますが、よろしくお願い致します」

「わかりました」

そんな話を話しながら俺達が店まで戻ってくると、店の台所の方からとても美味しそうな匂いが漂ってきた。

う……朝の空きつ腹にこんな良い匂いを嗅がされると、腹の虫が煩くなりそうだな

……

「おや、この匂いは……ほう、今日の朝御飯には焼き魚があるみたいですね」

そう一人ごちた後、龍三郎さんは俺の方を振り向いてから、優しく微笑みつつ声を掛けてきた。

「今日からの事について話し合おうと思いましたが、まずは朝御飯にしましょうか。」

何をするにも腹ごしらえは必要ですからね」

「確かにそうですね。」

実は……この匂いを嗅いだ時に、ちよつと腹の虫が鳴きそうだったんです……」

「ふふ、そうかなと思いましたよ。」

「さあ、朝御飯を食べに行きましようか、龍己君」

「はいー！」

大きな声で返事をした後、俺は龍三郎さんと一緒に店の中へと入っていった。

龍三郎さん達と一緒に朝食を済ませた後、俺と龍三郎さんはそのまま龍三郎さんの部屋に行き、今日からの行動についての話し合いを始めた。

「さて、今日からの事についてなのですが、龍己君にはまずこの街の事について知ってもらおうと思っています」

「この街について……ですか？」

「ええ。私達の仕事を手伝って頂く前に、この街がどういう街なのかなどを知ってもらう必要があると思いますね。」

この街には様々な方がいらつしやいますし、この狐雨福屋にも様々なお客様がいらつ

しやいます。

そのお客様の対応の際に初めて会うのと一度どこかでお会いした状態で会うのではだいぶ違いがありますからね」

「確かに……妖には色々な種類がいますからね。」

さっきの瓦版屋コンビだけではなく、中には驚くような見た目の妖だっていますし」  
「その通りです。」

ですので、今日からしばらくの間は、この街について知る事と不忍などの街の方々の事を知る事が龍己君の仕事になります」

「この街について知る事、そして不忍などの街の妖達の事を知るのが仕事……」

俺は静かに龍三郎さんの言葉を繰り返した。

これがこの世界での俺の初仕事か……！

さてさて、どんな風はこの仕事をこなしていこうかな……！

これからの事についてワクワクしながら、自分の中でどの様にこの街などについて知っていけば良いのかなど、俺は頭の中であれこれと考えを巡らせた。

すると、俺のそんな様子を見て、龍三郎さんは微笑みながら静かに話し掛けてきた。

「ふふ、あまり深く考えなくても大丈夫ですよ。」

龍己君が一番やり易いと思つた方法でこの街について知っていけば大丈夫ですよ」

「俺がやりやすいと思つた方法……か」

龍三郎さんのその言葉を聞き、ワクワクすると同時に入ってしまった肩の力が抜けた気がした。

……それもそうだ。たしかにこれは仕事の一環だけど、この世界の住人達は、言ってしまうばこれから過ごす上での大切な仲間なんだし、少しは気楽に構えてみるのも良いかもしれない。

「龍三郎さん……ありがとうございます」

「ふふ、どういたしまして」

俺達がそうやって笑いあつていた時、部屋の襖をコンコンとノックする音がした。

そして、戸がスーッと開くと、そこには手代の羅紗さんがいた。

「失礼いたします、旦那様」

「おや、羅紗。どうかしたのかい？」

「仕立屋の方へお客様がいらつしやいまして、旦那様とお話したいとの事でしたので、お呼びに参りました」

「分かったよ、ありがとう。」

今から行くから、お茶などの準備をお願いできるかい？」

「承知致しました。それでは失礼いたします」

羅紗さんは静かに答えながら恭しく礼をした後、襖を静かに閉めた。

そして、それを見届けると、龍三郎さんはニコリと笑いながら話し掛けてきた。

「それでは、龍己君。この街について色々な物を楽しみながら見てきて下さいね」

「わかりました。では、早速――」

そう言つて俺が静かに立ち上がろうとしたその時、

「あ、それと……こちらを受け取つて下さい」

そう言いながら龍三郎さんは戸棚へと近付くと、何かを取り出した。

見てみると、それは綺麗な青色をした四角い財布であり、それには紐の付いた五円玉のような物が付いていた。

「これは……財布ですか？」

「はい。街を見て回る時にはお金が必要になることもありますから。」

中には一応、5匁と40匁が入っていますが、これはお支払するお給金とは別ですの  
で、安心して下さいね」

「えつと……それはありがたいですけど、本当に良いんですか？」

「はい。貴方は覚えていませんが、碧葉がお世話になりましたから。」

それに何も無しに街を見て回つてもらうのも申し訳無いですからね」

「龍三郎さん……本当にありがとうございます」

「いえいえ。それでは行きましょうか、龍己君」

「はいー!」

元気良く返事をした後、俺と龍三郎さんは一緒に部屋を出た。

そして、龍三郎さんは接客のために仕立屋の方に行き、俺は呉服屋の裏口の方へと歩き始めた。

「……さてと、どうやって見て回ろうかな?」

呉服屋の裏口から外に出た後、どうやって見て回るかを決めていなかった事を思いだし、俺はそう独りごちた。

「今日からしばらくの間は……って言われたから、ゆっくりでも良いとは思っただけど、早めに色々見ておいて地図みたいなのを作ってから、もう一回見て回るのも捨てがたい……」

さてさて、本当にどうしたもんかな……?」

腕を組みながら考えていたその時、

「……おや? もしや、そこにいるのは鈴蘭の旦那ですかい?」

「……ええ?」

近くからそんな声が聞こえたため、声が聞こえた呉服屋の屋根の方へ視線を向けた。すると、そこには屋根の上から俺の事を見ている風之助さんの姿があった。

屋根の上にいるなんて……流石は鎌鼬だな。

そんな事を思いつつ、俺は風之助さんに声を掛けた。

「風之助さん、そんなところで何をしているんですか？」

「もちろん、読売の記事になりそうなモノを探しているんでさあ。読売の記事ってのは、新鮮さが命ですからね」

風之助さんは答えながら屋根から飛び立つと、そのまま俺の肩に着地した。

「鈴蘭の旦那こそ、こんなところでどうしたんです？」

「私は今度からここで働くことになってるので、今日はこの街を見て回ろうと思ひ、今から街の中を色々と巡ろうとしていた所なんです」

「なるほどねえ……そういう事なら、俺と一緒に行きやすかい？」

俺は記事になりそうなモノを探するために色々な場所を巡りやすから、少なからずこの街には中々詳しいはずだ。

「それは助かりますけど、良いんですか？」

「もちろん。それに鈴蘭の旦那とも話をしてみたいと思つてたやしたから、俺としても好都合ってね」

「分かりました、それではよろしくお願いします」

「こちらこそ。それじゃあ行きましょうか」

「はい」

静かに返事をした後、俺は風之助さんを肩に乗せたまま、住人達で賑わう不忍の街の中へと歩いて行つた。

歩き始めてから数分後、俺達は一軒の店の前に立っていた。

店の看板には、筆で書かれた店名の他に、本の絵が描かれていた。

「まずここが書物屋の『虫本堂』ちゅうほんどうでさあー！」

「虫本堂……もしかして、この名前は本の虫から採っているんですか？」

「その通りで。」

「この主が大の本好きで、自分の他にも本の虫を増やしたいと思って、この名前にしたとか」

「なるほど……」

風之助さんの解説に対して、俺は静かに答えたものの、実はかなりうずうずしていた。本って聞いた瞬間にこうなるって事は、たぶん前の俺は本を読むのが好きだったんだ

ろうな……

そんな事を思いつつ、虫本堂の看板を眺めていた時、風之助さんが苦笑いを浮かべながら声を掛けてきた。

「そんなに気になるってえなら、ちつと寄ってみますかい？」

「は、はい！ 是非！」

こうして俺と風之助さんは、書物屋の虫本堂の中へと入っていった。

虫本堂を出た後、再び街中を歩き始めた俺の手を見ながら風之助さんが小さく苦笑いを浮かべた。

「鈴蘭の旦那……ずいぶん買いやしたね……」

「あはは……本を見てたらついつい増えちゃって……」

苦笑いを浮かべながら答える俺の手には、本が詰まった風呂敷包みが二つ握られていた。

でも後悔はしていない、その分これから読むのが楽しみだからな。

手の中の風呂敷包みの中にある戦利品とも言える本達を見ながら、俺が再び静かにワクワクしていると、風之助さんが何かを思い出したような表情を浮かべながら声を掛け

てきた。

「そういや……虫本堂の店主とも仲良くなってやしたね」

「はい。これからもここにはお世話になりそうです」

俺達がそんな事を話しながら歩いてみると、辺りに時の鐘の音が鳴り響き、それを聞いた風之助さんが体を伸ばしながら声を掛けてきた。

「おや、もう昼九ツのようですねえ。」

「そんじゃあ、そろそろ何か食べに行きやしようか」

「そうですね……えつと、この辺りにはどの様なお店がありますか？」

「この辺りつてえと……不忍の中では一番と言われている蕎麦屋がありやすよ」

「それでは、そこに行ってみましょうか。」

「……ただ、混んでないと良いんですけど……」

俺が少し不安そうに言うと、風之助さんはクスリと笑いながら答えた。

「たぶん大丈夫だと思いやすけどね。」

「さてと……それじゃあ行きやしようか」

「はい」

俺は風之助さんの案内に従い、不忍で一番の蕎麦屋へと向かって歩き始めた。

歩き始めてから十数分後、俺達は美味しそうな出汁の匂いなどが漂ってくる店の前に立っていた。

「着きやしたよ。ここが件の蕎麦屋、『越野庵』こしのあんでさあー！」

「越野庵……こしあん？」

店名を少しだけ略しながら言うと、風之助さんは小さく苦笑いを浮かべた。

「あー……やっぱりこの名前だとそう言いたくなりやすよねえ。」

因みにこの名前のせいか、ここが蕎麦屋って知らねえお人達からは、名前だけで菓子司みてえに思われることが多いらしいんでさあ」

「あ、そうなんですね……」

「まあ、そんな事はさておいて……早速入りやしようか、鈴蘭の旦那」

「あ、はい」

返事をした後、俺は風之助さんと一緒に越野庵の暖簾をくぐった。

すると、店内はかなりの人数のお客さんで賑わっており、お客さん達は楽しそうに話をしながら蕎麦に舌鼓を打っていた。

そして、その様子をボンヤリと見ていると、厨房にいた店主らしき妖が俺達の方へと顔を向けた。

「へい、いらつしやい！」

「……つて風之助じゃねえか。おめえ、仕事は良いのかい？」

「へっ、昼休憩つてやつだよ、昼休憩！」

それに、今日は俺だけじゃなく新しいお客を連れてきたんだぜ？」

風之助さんの言葉に続けて、俺は店主に挨拶をした。

「初めまして、鈴蘭と申します」

「ほう、鈴蘭つたあ中々綺麗な名前じゃねえか。

もしや、どこかのお家の出かい？」

「……旦那、朝の俺と同じ事を言ってるぜ？」

「へっ、そうかい！」

まあ、こんなに礼儀のなつた奴あ、この辺じゃあまり見かけねえから、そう思つちまつ

てもしょうがねえだろ？」

「へへっ、違いねえや。さてと、空いてる席は……」

そう言いながら風之助さんは周囲を見回した。

そして、空いている席を見つけると、俺の顔を見ながら席がある方を指差した。

「おつ、あつたあつた。鈴蘭の旦那、こつちでさあ！」

「あ、はい」

風之助さんが見つつけてくれた席に座り、風呂敷包みを膝の上へと置くと、店主が二人分の水を置きながら声を掛けてきた。

「さあて、おめえらは何にするんだ？」

「そうですね……何かおすすめはありますか？」

「おすすめつつたら全部だ、全部！」

……まあ、そんなかでも一番頼まれるのはやつぱりだな」

「それじゃあ盛りでお願いします」

「俺は盛りの極少だ、旦那」

「あいよ。ちよつとだけ待つとくれ！」

店主は大きく返事をした後、厨房へと戻っていった。

そして、それから数分後、盛りと盛りの極少が俺達の机に置かれた。

「盛りと盛りの極少、お待ちどう！」

「ありがとうございます。」

それにしても……盛りの極少なんてあるんですね」

俺がそう言うと、風之助さんがそれに答えてくれた。

「あー……それは俺みたいなやつ専用でさあ。」

俺とかは普通の小ですら多いってんで、この特別な盛りが出来たんでさあ」

「なるほど……」

風之助さんの答えを聞き、俺はこの不忍の住人達の仲間意識の高さみたいな物を感じた。

ふふ、色々考えられてるんだな……でもこれは、やっぱりこの街に住む仲間を思つての気遣いみたいなものなんだろう。

……まだ、この街に来て2日目だけど、何だかこの街に住める事が幸せな事な気がするな……

そんな小さな幸福感を噛み締めていると、風之助さんがニツと笑いながら声を掛けてきた。

「さて、鈴蘭の旦那。いただきやしようか」

「そうですね。それでは——」

『いただきます』

声を揃えて言った後、俺と風之助さんは一緒に蕎麦を食べ始めた。

「さて、今日は色々巡りやしたねえ……」

夕暮れ頃、俺の肩の上で風之助さんが体を伸ばしながらのんびりとした様子で話し掛

けてきた。

腹ごしらえを済ませた後にも、俺達は様々な場所を巡っていたため、周りはいよいよ薄暗くなってきた。

「そうですね。」

「……そういえば記事になるモノは見つかりましたか？」

俺が風之助さんにそう訊くと、風之助さんは楽しそうに笑いながら答えた。

「ああ、それなら草吉の奴がやってくれてるんで、問題はありやせんよ。」

まあ、新しい街の仲間と話して楽しめた分、実は俺的にも大収穫なんですか？」

「ふふ、それなら良かったで——」

その時、俺は何かの臭いを感じ取った。

「……あれ？ 何か臭いませんか？」

「こいつあ……間違いないええ、火事の臭いでさあ！」

こうしちやいらねえや、早く火事の場合へと行かねえと！」

急いで飛び立とうする風之助さんの声を聞きつつ、俺は軽くストレッチをした。

そして準備が出来た後、臭いがする方を見ながら、風之助さんに声を掛けた。

「……風之助さん、少しだけ捕まってもらって良いですか？」

「……え？ 鈴蘭の旦那、いってえ何を——」

「なあに、少し揺れるだけですから！」

俺は風之助さんの言葉に被せながら言った後、火事の臭いがする場所へ向かって走りだした。

「……………こみたいですね」

「こいつあ、思ってたよりも燃えてやすねえ……………！」

着いた所にあつたのは一棟の納屋だった。

納屋を燃やしている火の勢いはかなり強く、近寄ることすら難しいものだった。

「これは火消しを待つしか——」

その時、俺の耳に何かが届いてきた。

「……………風之助さん、何か聞こえませんか？」

「え？俺には何にも……………」

風之助さんは不思議そうに答えたが、俺の耳には変わらず何かが届いて続いていた。

「……………いや、やつぱり聞こえる」

くっ……………もつとだ！もつと聴力を高めて……………！

必死になりながらその何かを聞き取った瞬間、その何かの正体がハッキリと分かつ

た。

「これは……声だ！　もしかしたらこの中に誰かが……！」

「な、何だつて!?　そいつあ大変だ！　早く何とかしねえと！」

焦る風之助さんの声を聞きつつ、俺は頭の中で考えを巡らせた。

何か……良い方法は……！

その時、俺の中にある考えが浮かんだ。

……だいぶ分の悪い掛けになるけど、今はこれしかない……！

俺は覚悟を決めた後、風之助さんに声を掛けた。

「風之助さん、この近くに川はありますか？」

「へ？　川ならすぐのところにありますか……？」

「ありがとうございます」

俺はお礼を言った後、火から少し遠いところに荷物を置き、懐からもう一枚の風呂敷を取り出した。

その様子を見て、風之助さんが不思議そうに訊いてきた。

「いったい何を……？」

「……前に何かで読んだ事があるんです。

水を被つてたり水を含んだ布で顔とかを覆っておくと、火事現場に飛び込んでも少し

は持つ、と」

……といつても実際にはやったこと無いから、どのくらい持つかは分からない。もしかしたら俺まで死ぬかもしれないな……

最悪の事態を想定しながら準備を進めていると、風之助さんが大きな声を上げた。

「そ、そんなの無茶でさあ！　いくらそんな方法があつても気休めにしか——」

「それでも。誰かが死にそうになっているのを、ただ指を咥えて見てるなんて出来ませんから」

「鈴蘭の旦那……」

風之助さんが心配そうな顔をしていたが、俺は静かに微笑みながら風之助さんに話しかけた。

「大丈夫ですよ。絶対に戻ってきますから」

心配そうな風之助さんの視線を感じつつ、俺は納屋の近くに転がっていた桶を拾い、川へと急いで走った。

そして、桶に水を汲み、持っていた風呂敷にも水を含ませた後、俺は火事現場に戻ってきた。

すると、さつきまでいかなかった筈の野次馬達が燃え盛る納屋を見ながら騒ぎ立てていた。

……まあ、流石に気付くよな、こんなに火も強いわけだし。

「さて……まずは水を被つて、その次に水を含ませた風呂敷で口を覆つてと……よし、これで良いな」

これで準備は出来た。後はどうなるか……やってみなくちや分からないな。

俺は燃え盛る納屋を見詰めながら、再び覚悟を決めた。

「よし、行こう！」

そして、燃え盛る納屋の中へと勢い良く飛び込んだ。

「……（臭いとかはしないな。でもあまり広くは無いから、早く見つけられれば何とかなりそうだ）」

炎の熱と視界を遮ってくる煙に耐えながら中を探っていた時、前方に苦しそうな表情を浮かべながら倒れている少年の姿を見つけた。

「……（いた！）」

俺はすぐに少年へと近付き、少年の様子を窺った。

「……（息は……まだありそうだ。早く外へ連れ出さないと……）」

そして、倒れている少年を抱き上げた後、俺は納屋の入り口へ向けて走った。

「……あー！ 来た、鈴蘭の旦那だ！」

外に出た瞬間に、風之助さんの大きな声が聞こえた。

そして、周りの野次馬からの拍手の音を聞きつつ、俺は少年を静かに地面へと下ろした。

……何とかなったんだな、俺の力、でも……

そう思った瞬間、俺の意識は徐々に途切れ始め、体がグラリと揺れたかと思うと、俺の意識は完全に失われた。

「調子はどうです？ 鈴蘭の旦那」

「お陰さまで。明日辺りにはまた出歩けそうです」

あの日から3日後の今日、俺は読んでいた本を閉じた後、目の前に座っている風之助さんに微笑みながら答えた。

さつきまで心配そうな顔をしていたけど、今の言葉を聞いて少しだけ顔が明るくなったみたいだ。因みに読んでいた本はあの時買った物の内の一冊だ。

あ、そうだ……

「そういえば読みましたよ、あの時の火事の読売。実際にあの火事を見ていない人にも

伝わるような書き方でしたので、私はとても良いと思いましたよ」

「へへっ、そいつあ良かった。あの時の事をどうにか伝えたいと思つて必死だったもんで」

「ふふ、それに加えて私の事が一切書いてなかったのも助かりました」

俺が微笑みながら言うと、風之助さんは少しだけ不満そうに答えた。

「……本当はしっかりと書きたかつたんですがね。」

ただ……鈴蘭の旦那は、そういう事を書かれるのは苦手かなと思いやしてね」

「まあ、そうですね。あんな事をやっておいてアレですけど、目立つのは好きじゃないかもしれないです」

それに……俺はただ、あの少年を助けたいと思つただけだったしな。だから、そういう事で目立つても全然嬉しくない。

あ、そういうえば……あの少年はどうなったのかな？

少年のその後が気になり、俺はその事について訊いてみる事にした。

「風之助さん、あの少年は大丈夫でしたか？」

「ええ、勿論でさあ。俺の聞いたところでは火傷もだいぶ引いたみたいで、もうすつかり元気らしいですぜ？」

「それは良かった……」

少年の無事を知り、俺が心の底から安堵していると、風之助さんが何かを思い出したように声を上げた。

「あ、それとなんですがね？」

あの火事はどうやら、あの子供が明かりをつけようとしたところ、誤って他の物に火が付いたことで起きたものだとか」

「なるほど……」

……やっぱりそういう事だったのか。火付けにとしては被害者の数が少ない気がしたから、何となくそうかなとは思ってたけど。

俺がそんな事を考えていると、風之助さんが思い出したように訊いてきた。

「そういえば……あの後、狐雨福屋の旦那には何か言われたりはしやしたか？」

「……ええ、一人の命を助けられたのは凄いいけど、これからはあまりこういうことはしないで欲しいと言われました」

「あー……龍三郎の旦那は、自分とこの奉公人を家族みてえに思ってたやすからねえ……」

「そうですね。それに……あの時の龍三郎さんとお嬢さんの心配そうな顔を見た時、心の底から申し訳なくなりましたからね……」

だから、これからはこういう事は出来る限り慎みますよ」

……まあ、それだけじゃなく、折角取り戻した命をむやみやたらに投げ出すのは、生

き返らせてくれた龍三郎さん達に申し訳ないしな。

今もトクントクンと鼓動を打っている心臓の辺りに手を当てながらそんな事を考えていると、風之助さんが少し不思議そうに声を掛けてきた。

「……鈴蘭の旦那。一つだけ訊いても良いですかい？」

「はい、何ですか？」

「鈴蘭の旦那の耳と尻尾が無いのは、何故なんですか？」

「……ああ、その事ですわね」

俺は穏やかに微笑みながら風之助さんの言葉に答えた。

そう、俺は今、鈴蘭としての姿ではなく、稲荷龍己としての姿で風之助さんと会っているのだ。

そして、俺は真剣な表情を浮かべた後、静かに言葉が続けた。

「実は、私は……いや、やっぱり畏まった言い方じゃない方が良いかな？」

「んー……そこは、鈴蘭の旦那にお任せしやすよ」

「ん、分かった。さて風之助さん、実は……俺は妖は妖でも具体的には半人半妖なんだ」

「半人半妖……ですかい？ そいつあ一体何なんです？」

俺は再び微笑んだ後、風之助さんに半人半妖について、そしてなぜそうなったのかを

話した。

話を終えると、風之助さんは興味深そうな様子を見せた。

「……なあるほどねえ、つまり……それが旦那の本当の姿ってわけだ」

「その通り。」

「……といっても、鈴蘭としての姿も今となつては本当の姿ではあるんだけどな」

「まあ、半人半妖ですからねえ。」

「……にしても、どうして俺にそれを話してくれたんで？」

「んー……風之助さんには話しても問題無いかなと思つて。」

それに……友達に隠し事はあまりしたくないからさ」

俺がニツと笑いながら言うと、風之助さんは驚いた顔をした後に、大きな声で笑い始

めた。

「あつはつは！ まさか、旦那にそう言つてもらえるとはねえ！」

「あの日、風之助さんが心配してくれたのは本当に嬉しかったし、一緒に街中を回つた時は本当に楽しかったから、風之助さんとは末永く仲良くやつていけそうだと心の底から思つたしな」

「へへつ、そいつあ俺もでさあ！」

あ、それと……さん付けはしなくて良いですぜ？

そう呼ばれつと何かむず痒くてしょうがねえもんで」

「うん、分かったよ。それじゃあ改めて——」

俺はそう言いながら風之助に手を差し出した。

「これからよろしくな、風之助」

「(こちら)そよろしく頼みやすぜ? 龍己の旦那」

風之助の小さな手と握手を交わしながら、俺は風之助に対して笑いかけた。

この新しい友人とのこれからは一日一日大事にしていこう。

まだ春の陽気が残り、桜の花びらがひらひらと舞い散る中で、俺はそう心に誓った。

## 第3話 雨がもたらした狐と蛇の出会い

「うーん……これは弱ったなあ……」

ある日の午後、不忍から少し離れた街、深水ふかみの街で偶然立ち寄った店の軒下で雨宿り  
をしながら、俺はポツリと独り言ちた。

「折角外出許可が出たから、少し遠くに出掛けてみたらその途中で雨に降られるって、ど  
んな嫌がらせなんだよ……。まあでも、今のところ服とか含めて濡れてるものが無い事  
だけが唯一の救いかな？」

降り続ける雨を見ながら苦笑いを浮かべた後、両手に持った風呂敷包みを見た。この  
風呂敷包みの中には本や半紙などといった濡れてはいけない物達が入っているため、俺  
は風呂敷包みが濡れないように細心の注意を払っていた。

「さて、これからどうしようかな……」  
降り続けている雨の方に再び視線を向けながら、俺はこれからについて考えてみるこ  
とにした。

「傘は持っていないから、この雨の中を行くわけにもいかない。……かといってこのまま  
雨宿りをし続けてたら、店に帰るのが遅くなって、また龍三郎さん達に心配をかけてし

まう……」

「そこまで言った瞬間、俺の脳裏に火事のあった日の龍三郎さん達の顔が想起された。……うん、それだけは絶対に避けよう。けれどこの二つがダメとなると、本当にどうしようも無いな……。」

「はあ……本当にどうしたら良いんだろ……」

ため息をつきつつ、すっかり途方に暮れていたその時だった。

「あの、何かお困りですか？」

「え？」

声の方を見ると、そこには傘をさした一人の色白の男性がいた。

「えっと、貴方は？」

「ああ、申し遅れました。私はこの近くにあります小物問屋『七之屋』の主でして、名前を七之助しちのすけと申します」

「七之助さんですね。私の名前は鈴蘭、ここから少し行つたところの不忍にある呉服問屋『狐雨福屋』の小僧見習いです」

「『狐雨福屋』さんというところ……ああ、龍三郎さんのお店ですね」

「はい、そうですけど……ご存知なんですか？」

「ええ、それはもちろん。『狐雨福屋』さんはこの世界に住む妖なら一度は名前を聞いた

「ことがあるほど有名なお店ですから」

「なるほど……」

つまり『狐雨福屋』はいわゆる老舗の有名店だったのか。

やれやれ……俺もまだまだ勉強不足だったみたいだな……

俺が心からそう思っていると、七之助さんが何かを思い出したように声を上げた。

「……つと、申し訳ありません。話がそれてしまいましたね。」

本題に戻りますが、何かお困りでしたか？」

「あ、はい。お恥ずかしい話なんですけど、こんな雨になるとは思ってたもので、傘を持つて来てなかったんです。それに雨も止む様子が無いので、どうしたものかと思っていたところに……」

「私が通り掛かった、ということですね。」

そういう事でしたら、こちらを使ってください」

七之助さんはニコリと笑いながら、持っていたもう一本の傘を差し出してくれたが、俺は少し申し訳なさを感じつつ、七之助さんに話し掛けた。

「それはとてもありがたいんですが……本当によろしいんですか？」

「はい。実は、元々この傘を使う相手がいたのですが、その相手にちよつと断られてしまいましたね。それならば貴方のように必要としている方に使って頂いた方が良いでしょう。」

から」

俺の問いかけに、七之助さんは優しく微笑みながら静かな声で返してきた。

まあ……そういう事ならありがたく使わせてもらおうかな？

七之助さんの厚意に甘える事にし、俺は静かに微笑んだ。

「分かりました。それではお借りしますね」

「ええ、どうぞ」

七之助さんから傘を受けとった後、俺は早速傘を開き、今までいた軒下から雨の中へと進み出た。

すると、雨は次々と傘の表面にぶつかると同時に、不規則なリズムで打楽器のような音を奏で始めた。

うん、何かこの音を聴いてると落ち着く気がするな……

俺がその音に聴き入っていると、

「鈴蘭さんは雨がお好きなんですね」

七之助さんがクスリと笑いながら声を掛けてきた。

「そう……ですね。この傘に雨粒が当たっている音を聴くと、何だか落ち着ける気がするんです」

雨音のリズムを聴きつつ穏やかな気持ちで答えると、七之助さんは再びクスリと笑い

ながら静かな声で答えた。

「その気持ちは私にも分かるような気がします。」

もちろん、雨粒が何かの曲を奏でているわけでは無いのですが、この不規則な拍子を聴いていると、何故か何かの曲を聴いてるような気持ちになるんですよ」

「はっ」

七之助さんの言葉に静かに返事をした後、俺達はしばらくそのまま雨の音を聴き続けていた。

「七之助さんも本がお好きなんですね」

「ええ。本は様々な事を教えてくれますからね」

雨の音を存分に堪能した後、俺は七之助さんと雨の中を歩いていた。

歩きながら七之助さんと様々な話をしていた時、お互いに読書が趣味であることが判明したため、そのまま本の話に花を咲かせていた。

「そうですね。それに物語などを読んでみると、知らず知らずの内に話の中に引き込まれていって、時間が経つのを忘れてしまうこともしばしばあって……」

「確かにそれはありますね。」

鈴蘭さんは最近どの様な本を読んだのですか？」

「そうですね……最近はかわるのおおかみ香大神という方が書かれている『へっぽこ同心』や七しちてんやきどう天夜鬼童さんの『妖怪道中記』を読んでいます」

この二種類の作品、『へっぽこ同心シリーズ』も『妖怪道中記シリーズ』はあの火事の日に出会った本で、その話の面白さに引き込まれて今日も何冊かこのシリーズの本を購入してきていた。

「ふふ、確かにその二冊は読んでいると楽しいですからね」

「そうですね。因みに七之助さんはどうですか？」

「私は……」

そんな話をしながらひたすら歩いていると、いつの間にか俺達は『狐雨福屋』の前まで辿り着いていた。

……あれ、もう着いちゃったのか……

「いつの間にかお店に着いちゃいましたね」

「そうですね。話をしながら歩いていると、時間があつという間に過ぎてしまいますからね」

「確かにそうですね」

俺は静かに返事をした後、傘を閉しながら店の軒下へと入った。

そして、七之助さんの方へ再び向いた後、ペコリと頭を下げながらお礼を言った。

「今日はありがとうございました。傘は乾かしてからお返ししますね」

「分かりました。それでは私はこれで」

「はい、お気をつけて」

「ありがとうございます、それでは……」

そして、七之助さんは再び雨の中を歩いて行った。

『七之屋』の七之助さん、か……

「親切な人……いや妖もいるもんだな。」

……つと、そろそろ中に入らないとな」

俺はそう一人ごちてから『狐雨福屋』の扉を開け、中へと入った。

すると、玄関にはこの『狐雨福屋』の主で、妖狐の龍三郎さんの姿があった。

そして、俺の姿を見ると、龍三郎さんは少し安心した様子で声を掛けてきた。

「お帰りなさい、龍己君。雨には濡れませんでしたか?」

「ただいま戻りました、龍三郎さん。実は、出先で親切な方に傘をお借りしたんです」

俺が件の傘を見せながら言うと、龍三郎さんは目を細めながら静かな声で返事をし

た。

「ふふ、そうでしたか。その方には後ほどお礼に行かなくてはなりませんね」

「はい。なので、早速明日にでも行つてこようと思つています」

「ふふ、それが良いかもしれませぬね。」

さて、そろそろ夜御飯も出来る頃ですので、中へと行きましようか。そちらの傘も乾かさないとはいけませんしね」

「そうですね」

俺は頷きながら返事をした後、龍三郎さんと一緒に店の奥へと入つていった。

翌日の朝、俺は龍三郎さんと一緒に店の玄関にいた。

……うん、傘はあるし財布もあるから大丈夫だな。

軽く忘れ物が無いかを確認した後、俺は龍三郎さんに声を掛けた。

「それでは行つてきます」

「はい、気を付けて行つてきてくださいね」

「分かりました」

俺は龍三郎さんに頷きながら返事をした後、お店の扉を開けてそのまま外へと出た。

「さて、まずはお礼の菓子折りを買いに行かないと——」

俺が近くにある菓子司に向かおうとしたその時、頭上から不思議そうな声が聞こえて

きた。

「……おや？ 龍己の旦那じゃないですか、これからどこかへお出掛けですかい？」

「……ん？」

ゆつくりとその声の方を見てみると、そこにはこの世界で初めて出来た友人——鎌鼬の風之助の姿があつた。

「おつ、風之助か。さつきぶりだな」

「へへつ、確かにそうですね。龍己の旦那が家の読売を買いに来てくれたのが、今朝の明け六つですから」

小さく笑いながら風之助は俺の肩に乗ると、首を小さく傾げながら言葉を続けた。

「それで？ さつきも訊きやしたけど、これからどこかへお出掛けなんですかい？」

「ああ。ちよつと 深水の方に用事があつてな」

「ほう、深水ですかい？」

深水つて言いやあ……河童や濡れ女みてえな水に関する妖が多いとこだ。

……それで深水のどなたさんに用事なんです？」

『七之屋』の主、七之助さんだよ。昨日ちよつと傘を借りたから、傘を返しに行くのとそれのお礼を渡しに行くんだ」

俺が小さく笑いながら言うと、風之助は興味深そうに声を上げた。

「ほうほう！ 『七之屋』といえば、若い女達に人気の店だ。それにその主、七之助も役者みてえに顔が整っているってんで、それ目当てに来る客も多いんでさあ」

「あー……確かに七之助さんは役者みたいな感じだったな。顔だけじゃなく物腰とかも柔らかい感じだったし、女性人気が高いっていうのも納得だな」

「へへっ、そうでしょう？」

「それにあの人は生まれが中々特殊って噂があるんでさあ」

「へー、そうなのか」

「生まれが中々特殊か……それはちよつと気になるけど、機会があつたら訊いてみる事にするか。」

「俺がそんな事を考えていると、風之助が何かを思い付いたような表情で再び話し掛けてきた。」

「そうだ……！ 龍己の旦那、俺もそれに着いてって良いですかい？」

「んー……別に構わないけど、何でだ？」

「実を言うと、俺はあんまり深水の方には行ったことが無いもんで、街の様子なんかを色々と見てみてえんですよ。」

「それに龍己の旦那と一緒になら、いつもなら拾えないようなネタが拾える気がしやすし」

「あはは……その期待に添えるかは、まったく分かんないけどな」

「へへっ、それは行ってみなくちゃわかんねえですよ。」

それじゃ、早速行きやしようぜ、龍己の旦那！」

「うん。」

……と、言いたい所だけど、まずはお礼の品を買いに行かないとな」

「おつ、そんならスゴく良い店を知ってやすぜ？」

「そうなのか？」

「ええ。口に入れたら、目ん玉が飛び出ちまいそうになる程、旨え菓子を作ってる菓子がこの近くにありやすから、今回はそこに行ってみるのはどうです？」

「……そうだな、そこまでオススメするんだったら、かなり興味あるしな。」

それじゃあ、案内は頼んだぜ？」

「へいー！」

風之助の元気の良い返事を聞いた後、俺は風之助と一緒に件の菓子司へ向けて歩き始めた。

「……よし、とりあえず深水に到着だな」

お礼の品を買った後、俺達は小半時程をかけて深水に到着した。

深水の街には、風之助が言っていたように水に関連した妖達を始めとした様々な妖が住んでいるようで、少し歩きながら周囲を見回しただけでもそれなりの種類の妖の姿を見る事が出来た。

「昨日は気付かなかったけど、ここも不忍みたいにだいぶ賑わってるな」

「確かにそうですねえ……まあ、暗く湿っぽいよりは明るく活気に溢れてる方が、ぜつてえ楽しくて良い気がしやすけどね」

「ははっ、確かにそうだな。」

「……さてと、それじゃあ早速『七之屋』を探すとするか」

「へー。」

そして、俺達は深水の街の様子を眺めたり、他愛ない話をしたりしながら深水の街の中を歩き始めた。

そうやって歩き続ける事数分、俺達はある一軒の店に辿り着いた。

俺がその店の看板に目を向けると、看板にはとても綺麗な字で『七之屋』と書かれていた。

「よし、何とか着いたな。ただ……思ってたよりもお客さんの数が多いみたいだけど」  
「ですね。客の中には男もいやすけど、大部分はやっぱり女みてえですね」

『七之屋』に来ているお客さんの様子を見て、俺達はそんな感想を漏らした。

『狐雨福屋』にも当然色んなお客さんが来るけど、ここにも色んな妖が来てるんだな。

俺は店の様子を見ながらぼんやりと思つたものの、今日の目的をすぐに思い出し、風之助に話し掛けた。

「とりあえず、まずは七之助さんに会いに行こう。このまま立つても時間がもつたいないしや」

「おっと、それもそうだ。それじゃあ、行くとしやししようか」

「ん、了解」

そして俺達は店へと近付いた。すると、

「あつ、いらつしやいませー！」

店先にいた店員の1人が、とても明るい笑顔で挨拶をしながら俺達に近付いてきた。

見た目は俺と何ら変わらない様に見えるけど、この人も何かの妖なんだろうな。

そんな事を思いながら俺はその妖に話し掛けた。

「すいません、このお店の主の七之助さんにお会いしたいのですが、よろしいですか？」

「あ、はい。お約束などはされていきますか？」

「いえ、お約束はしていませんですけど、実は昨日傘をお借りしていました、それのお礼をお渡ししようと思つて参りました」

「そうでしたか、かしこまりました。それでは少々お待ちください」  
「はい」

店員はニコリと笑うと、そのまま店の中へと入っていった。そして、それを見届けると、俺は少しだけ肩の力を抜いた。

「ふう……やっぱり丁寧語は慣れないな……」

「そうですかい？俺にはそうは見えやせんでしたけどねえ」

「うーん……そうだとすれば、たぶん前の俺は何かしらで使い慣れてたんだろな」  
「そうかもしれないやせんね」

俺達がそんな事を話していると、さっきの店員が戻ってきた。

「お待たせ致しました。どうぞ、こちらへ」

「あ、はい。失礼いたします」

「失礼致しやす」

俺達は店員の案内に従い、店の中へと入っていった。

店の中を歩く事数分、俺達は少し大きな部屋の前に着いた。

「こちらが旦那様のお部屋です」

店員は静かに微笑みながら言った後、襖に向かって声を掛けた。

「旦那様、お客様をお連れ致しました」

「ありがとうございます、蒔絵さん。どうぞ、入ってもらってください」

「かしこまりました」

店員——蒔絵さんは襖を開けた後、自分は横へスツと移動し、俺達が通る道を作ってくれた。

「どうぞ、お通りください」

「ありがとうございます」

「それでは、失礼致します」

「失礼致しやす」

お礼を言いながら俺達が部屋の中に入ると、そこには昨日見たばかりの七之助さんの姿があった。

七之助さんは俺達の姿を見ると、ペコリという音が聴こえそうな程、綺麗なお辞儀してから静かな声で言った。

「こんにちは、鈴蘭さん。それとそちらは……」

七之助さんが風之助を見て、不思議そうな顔をしていたので、俺は風之助の紹介をすることにした。

「こんにちは、七之助さん。こちらは私の友人で、瓦版屋の風之助さんです。

こちらに何う途中で偶然会ひまして、こちらに何うと話しましたら、一緒に来てみたいということだったので連れてきたのですけど、御迷惑でしたか?」

俺が少し不安そうに訊くと、七之助さんは穏やかに微笑みながら答えた。

「いえ、大丈夫ですよ。新しい方にお会いできるのはとても良いことですから、むしろ嬉しい限りですよ」

「それなら良かったです。あ、それと……」

俺は持つてきた傘と菓子折を前へと置いた。

「こちらは昨日お借りした傘とそのお礼の菓子折りです。どうぞお納めください」

「ありがとうございます、後程お店の皆さんと一緒に頂きますね。蒔まきえ絵さん、来てもらっても良いですか?」

七之助さんは俺からその2つを受け取ると、傘を足下に置いてから蒔絵さんの名前を呼んだ。

すると、襖を開けて蒔絵さんが中へと入ってきた。

「お呼びですか? 旦那様」

「こちらのお菓子を頂いたので、日の当たらない涼しい場所に運んでもらえますか?」  
「承知致しました」

「それとお茶のご用意もお願いしますね」

「かしこまりました」

蒔絵さんは静かに微笑みながら返事をする、菓子折りを丁寧持ち上げた。

そして、部屋から出ると襖を静かに閉め、それを見届けると、七之助さんが俺達に蒔絵さんについて話してくれた。

「蒔絵さんは、少し前から働いてもらっている方なのですが、とても明るく受け答えも丁寧なので、お客様からの評判もとても良い方なんですよ」

「そうなんです」

「ええ。私としてはここに来てもらって本当に良かったと思っっていますよ」

静かな声で言う七之助さんのその顔はとても明るく、心の底からそう思っていることが他人から見ても伝わるほどだった。

すると、それを見た風之助がこんな事を訊き始めた。

「因みに……七之助さんとしては、あの蒔絵さんの事をどう思っているんです？」

「どう、というのは……？」

「女性としてどう思っているかですよ。そこんどこどうなんです？」

風之助……初めて会った人にそれを訊くのかよ……

心の中でため息を着いた後、俺は風之助に静かに苦言を呈した。

「風之助さん……初めて会った方にそれを訊くのはどうなんです？」

「うーむ……確かにそうかもしれないやせんね……不躰な事を訊いて申し訳ありやせん、七之助さん」

風之助がペコリと頭を下げながら謝ると、七之助さんはクスクスと笑いながら答えた。

「別に構いませんよ。私もこう見えてそういった色恋沙汰には興味はありますから」

「そうなのですか？」

「ええ。それにもっと砕けたような話し方でも大丈夫ですよ？ その方がお互いに話しやすいでしょうから」

「確かに……そうかもしれないね」

「ふふ、それでしよう？」

それに鈴蘭さんも少々話しづらそうにしてみましたしね」

「……やっぱり分かりますか？」

「ええ。ですので堅苦しい事無しで大丈夫ですよ」

「……分かりました。それではそうしますね」

「それじゃ俺もそうさせて頂きやす。俺もあんまり堅苦しいのは好きじゃねえもんで」

「ええ、どうぞどうぞ」

七之助さんの一言で話しやすくなった俺達は様々な事を話し合った。

七之助さんは化け蛇でありながら、とある事がきっかけで川などが苦手になったことや七之助さんには幼馴染みがいて、昨日傘を届けようとしたのはその幼馴染みだったことなど、多くは七之助さん関連だったものの、俺達はまるで昔からの友達同士で話しているかのような雰囲気ですつと話をしていった。

「……おつと、そろそろ日暮れの時刻みたいですね」

ふと、七之助さんが外の様子を見ながら静かに言った。

七之助さんの言葉通り、外では他の店の行灯に次々と灯りが灯っていた。

もう、こんな時間か……俺達はどれだけの時間話してたんだろう……？

その事を不思議に思っていると、七之助さんがニコツと笑いながら声を掛けてきた。

「少し名残惜しいですが、今日のところはお開きと致しましょうか」

「ですね。でも話している間、とても楽しかったです」

「俺も同じですよ。時間を忘れるったあ、まさにこの事かと思いやしたよ」

「ふふ、私も同じです」

そんな事を話しつつ、俺達は静かに笑い合った。

どうやらこの何時間の間に、俺達はかなり仲良くなれたみたいだった。

……さて、そろそろ帰らないと龍三郎さん達に心配されそうだな。

「……それじゃあ、私達はそろそろ失礼致します」

「分かりました。それではお店の入り口まで案内しますね」

「え、良いんですか？」

「ええ。お店の皆はまだまだ忙しいでしょうから」

「分かりました、それではお願いします」

「はい。それではこちらの方へどうぞ」

七之助さんの案内に従って『七之屋』の中を歩き、俺達はお店の入り口まで辿り着いた。

そして、入り口の扉を開けて外へ出ると、

「今日は本当にありがとうございました、とても楽しかったです」

七之助さんがお辞儀をしながら俺達に静かな声で言った。

その言葉を聞いた後、俺達も静かに微笑みながら返事をした。

「こちらこそありがとうございました。色々な事を話せてとても楽しかったです」

「俺も同じですよ。何だかまだまだ話し足りない気持ちでいっぱいですしねえ」

「ふふ、私も同じ気持ちですよ。」

また機会がありましたら、いつでもおいでください」

「はい、そうさせてもらいますね」

「また色んな話をしましょうや、七之助の旦那」

「ええ。その時までにはまた色々な話題を仕入れておきますね」

「はい、楽しみにしています。それでは……」

そして、俺達は七之助さんに見送られながら、来た道に戻っていった。

「今日は本当に楽しかったな」

「そうですねえ、龍己の旦那」

不忍へ向かう道の途中、俺達は今日の事を話しながら歩いていった。

「……何だか七之助さんに、俺が半人半妖なのを黙ってるのが申し訳なくなるな」

「まあ……それはちよいと特殊な事ですからねえ。」

何かしらの機会があつたら、その時に話す事にすりやあ良いんじゃないんですかい

「？」

「ん……それもそうだな。」

いつかしっかりと話せば良いだけだもんな」

「そうですよ。それに——」

風之助はそこで言葉を切ると、俺の顔を見ながら言葉を続けた。

「人間だろうが半人半妖だろうが、龍己の旦那は龍己の旦那だと俺は思っておりやすよ？」

「風之助……」

風之助のその言葉に、俺は少しだけ勇気付けられたような気がした。

「そう……だよな。半人半妖だろうと何だろうと俺は俺だ。それさえ忘れなければ大丈夫だ」

「へへっ、その意気ですよ、龍己の旦那！」

「……ありがとな、風之助」

「別に構いやせんよ、龍己の旦那。」

俺は俺の思ったことを言っただけですから」

「それでもだよ。」

「……よっし、これからも半人半妖としてこの世界で頑張るぞ！」

「お——」

俺はこの1日を通じて少しだけ成長出来た気がした。元人間としても、現半人半妖としても。

そしてそんな俺達を鼓舞するように、強い風が俺達の後ろから吹きわたった。

龍己達が不忍へ向けて帰っていた頃、『七之屋』の近所にある川に掛かる橋に、二つの影が現れた。

そして、ドボンツという音を立てて、その川の中へ何か投げ込まれた。

橋の上にいる人の形をした何者かは、荒く息をしながら川の中を見つめていたが、程なくしてとても嬉しそうな声を上げた。

『ハアツ、ハアツ……ははっ、これで良い……い……これで計画は完璧だ……い……』

そう独り言ちると、その人の形をした何者かは満足そうにその場を立ち去った。

そしてその人物が立ち去った後、先程投げ込まれた物がゆっくりと浮かんできた。

「ん？ あれはいったい……？」

そこに深水中に住む妖の一体が偶然通りがかり、その浮かんできた物の正体を見ようと橋から除き込んだ。

そしてその妖はその何かの正体に気付くと――

「うっ……うわあぁー!!!」

深水の街中に響き渡る程の大ききで叫び声を上げた。

## 第4話 疑われし蛇と謎を追い始める狐と鼬

「……………ん、朝か……………」

深水の街へ行った翌日、住んでいる離れの布団から起き上がり、すっかり明るくなつた外の様子を見て俺は眩くように言つた。

そして、まだ眠気の残つた頭でそのまま今日の予定について考え始めた。

「ん……………今日はどうしようかな……………いつも通り不忍の街を巡るべきか、それか昨日みたいに深水の街にでも行つてみるべきか……………」

あれこれと考えていた時、明け六つを告げる大きな鐘の音が街中に鳴り響いた。

そして、それと同時に不忍に住む妖達の声が辺りから聞こえ始めた。

「明け六つか……………それならまずは風之助のところに読売を買いに行くかな。そして朝食を取つてから今日の予定について決めていくことにしよう」

俺は布団から起き上がり、布団を綺麗に畳んで押し入れにしまった後、布団の脇に畳んであるいつもの青い着流しに着替えた。

そして、縁側に置いてある草履に足を通し、体に力を加えて自分の姿が半人半妖としての姿に変わったのを確認してから、店の外へと向かつた。

通りへ出てみると、そこにはいつものように店の準備や朝食の準備に勤しむ不忍の妖達の姿があった。

ここに来た最初の朝こそこの光景には驚いたけど、二週間も経った今となつては、すっかり見慣れた光景になつたな……

街の様子を見ながら、そんな事をしみじみと考えていた。すると、

「おはようさんです！ 龍己の旦那！」

後ろから元気の良い声が聞こえたため振り向いてみると、そこには瓦版屋コンビの鎌鼬の風之助とその相方の妖狐の草吉さんが立っていた。

「おはよう、風之助、草吉さん」

「へへっ、おはようさんです、龍己の旦那！」

「……おはよう、龍己」

俺の挨拶に風之助はさつき同様元気の良い声で、そして草吉さんは小さくともハッキリとした声で挨拶を返してくれた。

風之助達は読売、つまりは新聞を売っている瓦版屋なのだが、草吉さんには少々無口

なところがあるため、風之助が主に客引きを担当し、草吉さんが販売を担当するという形を取っている。

それにしても、いつもならこの明け六つには商売を始めているはずなんだが……

「今日は商売を始めるのが遅いみたいだけど、何かあったのか？」

俺は風之助達の様子に首を傾げた。

草吉さんはいつも首から掛けている板を脇に挟み、もう片方の手には読売を入れているであろう緑色の風呂敷包みを持っており、どう見てもまだ商売をしているような様子では無かった。

ここに来てからまだ二週間くらいではあるけど、こんなパターンは初めてだな……  
すると、

「あ……それなんですけどね……」

風之助は少しだけ困ったような顔で言いながら周りをキョロキョロと見回した。そして誰もまだ自分達に気付いていないことを確認すると、とても小さな声で俺に耳打ちをしてきた。

「実は……今朝の読売は龍己の旦那に先に読んでもらいたい内容でして……それで龍己の旦那が出て来るのを待ってたんで……」

「俺に先に読んでもらいたい内容……？」

「ええ……それで、その読売というのがこれでしてね……」

風之助が小さな声で言うとうと、草吉さんが瓦版を一部手に取り、そのまま俺へと手渡し  
てくれた。

俺に先に読んでもらいたい内容……一体何が書いてあるんだ……？

不思議に思いながら瓦版に目を通すと、そこにはとても信じられない内容が書いてい  
た。

「……風之助、これって……」

「……ええ、偽りなんざ一つもねえ、本当の事できあ……」

そこに書かれていたのは、昨夜深水の街で事件が起きたこと、そしてその容疑者とし  
て七之助さんの名前が上がっているという記事だった。

朝食を取った後、俺は風之助と一緒に離れて今朝の読売の内容について話をしてい  
た。

「風之助、今朝の読売の内容は本当の事なんだよな？」

「ええ、もちろんで。」

俺も最初その情報を手に入れたときや、本当に目玉が飛び出るかと思うくれえびつく

りしやしたよ……」

「そうだよな……まさかあの七之助さんが下手人として疑われてるなんてな……」

まだ七之助さんとは知り合ったばかりだけど、犯罪に手を染めるような人には一切見えなかつたもんな……

まあ、そういう人に限つて裏では……なんて事もなくはないけど……

「とりあえず、昨夜の深水の事件の事を纏めてみるか。俺達に謎が解けるとは思わないけど、もしかしたら何か分かるかもしれないからさ」

「合点承知でさあ、龍己の旦那！」

俺は部屋に備えつけられている文机の上から何枚かの紙と愛用の硯と筆を取つた。そして墨を丁寧につけた後、昨夜の深水の事件の内容についてスラスラと纏めていった。

「まず、事件発生時刻は昨夜の宵五つ（午後八時）、場所は七之屋の近くの川だったよな？」

「へい、それで殺されてたのは七之助の旦那と同じ化け蛇の女で、名は董と言います。この女、深水生まれの深水育ちつてんで、つまりは生粋の深水つ子つて事になりやす」

「なるほどな……」

「それと七之助の旦那とは幼子の頃からの知り合いだったみてえで、他にももう一人仲

の良かった男のダチがいるみてえなんです」

「つまり、七之助さんと今回の被害者の董さん、そしてその男は幼なじみだったわけか……」

幼なじみか……今となつては知る事は出来ないけど、俺にもいたりしたのかな……

俺は風之助の話す情報を次々と紙に書き出していった。すると、風之助がふとこんな事を言い出した。

「そーいや龍己の旦那は、昨日家に帰つた後は何をしてやした？」

「ん、昨日か？」

あの後は……龍三郎さんやお嬢様と一緒に夕飯を食べたり、寝る前に少し本を読んだり、後は日記も付けてたな」

「へえー、龍己の旦那、日記も付けてるんですね」

「ああ、この世界に来た日からな。自分の昔の事はもう分からないけど、今からの自分の事くらいは何かを書いておきたかつたからさ」

「なるほどねえ……」

「でも、何でそんな事を？」

「あ、いや……昨日の夜、深水の事件の話を聞く前に、ちよいとこの辺に立ち寄つたら、龍己の旦那みてえな雰囲気のお狐さんが歩いていたもんで、つきり龍己の旦那が夜の

散歩と洒落込んでるもんだと思っただんで」

「へえ……そうだったのか」

まあ、不忍には俺や龍三郎さん達以外にも妖狐が住んでるから何とも言えないけどなそんな事を考えつつ、俺は紙に書いた情報を見返した。

えつと……昨夜の宵五つに七之屋の近くの川で死体が上がって……

その時、俺はある違和感を覚えた。

川……容疑者の中にいるのは、七之助さん……

おかしい……これっておかしくないか？

「なあ、風之助。たしか七之助さんって、昔の出来事のせいで川とかに近づけなくなったんだったよな？」

「そうですねえ……たしか、昔に川で溺れかけた事が切っ掛けで、川みてえな大きな水場には近づけなくなっただって……」

その時、風之助が不思議そうな表情を浮かべた。

「妙だな……七之助の旦那は川とかにやあ近付けねえ、なのに仏さんが上がったのは七之屋の近くの川……」

つまり……七之助の旦那には、この殺しは出来ねえことになるんじゃないか……！」

風之助はとても嬉しそうな様子で言ったが、俺は静かにそれを訂正した。

「いや、まだ七之助さんを容疑者からは外せないよ」

「え……そりやあいつてえどういう事で？」

「たしかに『七之助さん』は川には近付けない。けど、もし協力している奴がいたとしたら、七之助さんが殺して協力者が死体を川に捨てることでもこの事件は一応成立するからな」

「あ………そういやそうかあ………」

シヨボンと肩を落とす風之助に俺は静かに笑いながら声を掛けた。

「けれど、この情報はかなり重要だ。もし七之助さんに協力者がいるという証拠がなければ………」

「そうか………！ そうなれば、七之助の旦那の疑いが晴れるって事です………」

「そういう事だ。」

……まあ、そういう情報くらいならすでに調べられてそうだけだな」

「たしかにそうかもしれないやせんね。けど、この情報で七之助の旦那の事を助けられるってんなら、俺は旦那の事を助けたいと思ってやす」

「つまり………同心の人達とは別に、俺達でこの事件を追うって事か？」

「へい、その通りでさあ！」

「なるほどな………」

たしかに俺も七之助さんを助けたい。けれど、同心の人達を差し置いて素人の俺達が勝手に捜査しても良いもんかな……？

「風之助、たしかに俺も七之助さんを助けたいと思ってるよ。でも、素人の俺達が勝手に調べても良いのかな？」

「うーん……それはですねぇ……」

風之助は少し考えた後、何かを思い付いたように手をポンツと叩いた。

「そうだ……！俺は読売屋、それなら読売の記事のために動いてるって事にすれば良いと思いやす！」

それで旦那はそれの手伝いつて事にして……」

「まあ……それなら自然だとは思うけど……」

俺は一応、ここの奉公人なんだけどな……」。

俺が少し答えあぐねていると、廊下の方から誰かがこちらの方へ歩いてくる音がした。

誰だろう……お嬢様は今お出かけになってるし、羅紗さんと龍三郎さんは商売中のはずだし……」。

俺は近付いてくる足音を聞きながら、足音の主についてあれこれ考えを巡らせた。そして足音がすぐ近くで聞こえたと思ったその時、襖の陰からこの狐雨福屋の主、龍三郎

さんがゆつくりと現れ、ニコニコと笑いながら俺に声を掛けてきた。

「龍己君、ちよつと失礼しま……おや、風之助さんがいらつしやつてましたか」

「へい、こんにちはです、龍三郎の旦那」

「はい、こんにちは、風之助さん」

風之助に穏やかな様子で挨拶を返しながら部屋に入ってきた龍三郎さんに、俺は少し気になったことを訊いた。

「龍三郎さん、お店の方は大丈夫なんですか？」

「ええ。今の時間であれば、羅紗達に任せても大丈夫ですから」

「なるほど。ところで、俺に何か用事でもありましたか？」

「用事というほどの事ではありませんが、何冊か龍己君の本をお貸し願えないかなと思  
いまし……おや、これは……？」

俺の隣に座ると、龍三郎さんは俺達が纏めていた深水の事件についての資料をまじま  
じと見始めた。

「これは昨夜の深水の事件の情報です。七之屋の七之助さんが下手人として疑われてる  
ので、謎が解けないまでも、何か手がかりでも無いかなと思つて少し纏めていたんです」

「ほう……そうでしたか。それで何か進展はありましたか？」

「はい。」

と言つても、七之助さんは昔の出来事が原因で、大きな水場には近付けないという情報から、もし七之助さんが下手人ならば、協力者がいなくてはならないというところまでは分かつたくらいですけどね」

「なるほどなるほど。それでもやはり少しは進展があつたわけですね」

「はい。それで風之助が七之助さんを助けるために、本職の読売屋の記事のために動いてるように見せ掛けて、俺と一緒にこの事件を解決したいと言つてて……」

「ほうほう。それで龍己君の役どころは？」

「風之助の手伝いをしているただの妖狐、といったところですよ」

「なるほどなるほど」

龍三郎さんは少し楽しげに言つた後、微笑みを浮かべながら俺に話し掛けてきた。

「それで、龍己君はどうしたいのですか？」

「俺は……」

俺は自分の中にある迷いを龍三郎さんに包み隠さず話すことにした。

「俺自身、七之助さんの事を助けたいと思つています。けれど、俺達がやろうとしている事は、同心の人達の真似事みたいなものです。それに俺は世間にはここの奉公人として通しているのに、そういう事に関わる事で、狐雨福屋がお上に睨まれたりしないかが少し心配なんです」

「なるほど、そういう事ですか……」

龍三郎さんは少し考えた後、いつものように穏やかな笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「龍己君、まずお店の方は心配いりませんよ。お上にも昔から親交のある方がいらつしやいますから、その方々なら分かつて下さると思います。それに……」

龍三郎さんは楽しみに笑いながら言葉を続けた。

「狐雨福屋の歴代の主達もそういった事件には少しだけ首を突っ込んでいたと聞いてますから。もちろん、私の父も不忍や他の街で何かしらの事件が起きる度に、その事件についての自分の考えを店の者やお客様に話すような人でしたしね」

「そう……なんですか？」

「ええ。普段は真面目そうなのですが、本当は結構喧嘩見物とかも好きな人だったもので、その度に私の手を引いて見に行つてたような人でしたよ」

「へえ……つて事は、龍三郎の旦那もそういう事が好きだったりするんですかい？」  
「いえいえ。私は今と変わらず、喧嘩見物よりも本を読む方が好きな方でしたので」

風之助に返事をした後、龍三郎さんは再び俺に話し掛けてきた。

「なので、お店の評判などについては心配ありませんよ。たとえ知られたとしても、それをその方々との話題に使つてしまえば良いのですしね」

「龍三郎さん……」

「それに、私としては龍己君がやりたい事をやって欲しいですから」

「俺がやりたい事を……」

「はい。たしかに世間的に見るならば、龍己君はこの狐雨福屋の奉公人です。ですが私としては、龍己君にはこの不忍の一町人、そしてこの世界の一住人として様々な人達と出会い、様々な事を知っていつて欲しいのです。それに、それは自身が奉公人だから、なんていう事に囚われていたら出来ないことですしね」

龍三郎さんはいつものようにぼかぼかとした太陽のように穏やかな笑みを浮かべた。

俺がやりたい事を……俺のやりたい事、それは……！

俺は心の中で自分がやりたい事を再確認した後、龍三郎さんに言葉を返した。

「そう……ですね。俺はこの狐雨福屋の奉公人であると同時に、この不忍の一町人でありこの世界の一住人、そして七之助さんの一友人です。だから俺は、友人として七之助さんの事を助けたい。そしてもし七之助さんが下手人だった時は、友人として罪を償ってくれるように話をしたい」

そうだ……最初から分かってたことだ。

俺がやりたい事、それは……友人である七之助さんの事を助けたい。そしてたとえどんな結末になろうとも、この事件の真相が知りたい。

俺がやりたい事を頭の中で反芻させていると、龍三郎さんは優しい笑みを浮かべながら俺に話し掛けてきた。

「ふふ……ようやくいつもの龍己君に戻りましたね」

「はい、おかげさまで。龍三郎さん、ありがとうございます」

「いえいえ。私は私の思ったことを述べただけですから。」

さて……そろそろ店の方に戻りましょうか。そうしないと、流石に羅紗から苦言を呈されてしまいそうですから」

「分かりました。それでは、俺も早速出掛けてきますね」

「はい、分かりました。気をつけて行ってきて下さいね、龍己君、風之助さん」

「はい」

「へいー」

そして龍三郎さんは俺達の返事に頷くと、静かに離れを後にした。

さて……そうと決まれば、早速準備を始めるか

俺は少し前に買っていた巾着を取るために文机へと近付いた。

すると、人間だった時に来ていたらしい制服のポケットの中に何か光る物が見えた。

ん……何だろう？

俺はそれが気になり、ポケットの中に手を入れ、中にある硬いものを取りだしてみた。

するとそれは、上の方に長い麻紐を通した綺麗な青色をした小さな水晶の勾玉だった。

これは……勾玉か。でも何でこんなものが……？

俺が不思議に思っていると、いつの間にか肩に乗っていた風之助が珍しそうに勾玉を見始めた。

「へえー、こいつあ勾玉ですかい？ それも大層な妖力を備えた一品みてえだ」

「妖力か……言われてみれば、たしかに何か強い力を感じるような……」

「それにかなり大切にされてたのか、曇りが一つもねえくれえにピカピカに磨かれてやすね……」

「本当だ……」

人間だった時の俺にとって、この勾玉は本当に大事な物だったみたいだな……」

勾玉は俺の言葉に返事をするように陽の光を反射してキラリと光った。

水晶……たしか四月の誕生石で幸運を引き寄せる効果とかがある上に、青色は鎮静の効果があるんだっけな。

青か……そういえば俺の名前、龍己の由来にしたのも、映しの泉に映った青龍だったな……

そして四月といえば、青龍が司る季節である春……。

どうやら俺はそういうのによつぽど『縁』があるみたいだな

俺はその数々の偶然にクスツと笑った後、勾玉を首に掛けた。

こうすれば、この勾玉がお守りみたいになつてくれそうだしな。

そして文机の上の巾着に財布とメモをするための紙や愛用の筆などを入れ、それを懐へとしまった。

「よし……それじゃあ行くこうぜ、風之助」

「へいー」

風之助の返事を聞いた後、俺達は七之助さんのため、そして事件の真相を知るために、狐雨福屋を後にした。

## 第5話 謎を追う狐と第二の惨劇

狐雨福屋を出た後、俺達は不忍の菓子司で手土産を購入し、そのまま深水へ向けて出発した。そしてその道中の事、肩に乗っている風之助が俺の顔を見ながら明るい調子で話し掛けてきた。

「それにしても、龍三郎の旦那が俺らの考えに賛成してくれたのは驚きやしたねえ」

「そうだな。それに歴代の狐雨福屋の主がこういった事に自分から関わっていたり、お上の方に親密な関係の人がいたりするのも驚いたな」

「確かにそうですねえ……。ただ、狐雨福屋は不忍の街が出来た辺りからあるつてえ話  
は聞いたことはありやすから、もしかしたらその辺りの関係かもしれやせんねえ」

「そうかもな」

そんな会話を交わしたり、道行く他の妖達と会釈を交わしたりしながら、俺達は深水に向けて歩き続けた。

そして、出発してから小半時が過ぎた頃、俺達は深水の街へと辿り着いた。

「よし……到着だな」

「へい。にしても……やっぱりこっちに来るのにはちつと時間が掛かりやすねえ」

「たしかにそうだな」

掛かったのはたった小半時とはいえ、それだけの時間を歩き続けてきた事で、足に少々怠さを覚えていた。

この様子を見るに、人間だった時の俺はあまり体力が無かったみたいだな。

……うん、これもせつかくの機会だし、少しでも体力を付けるために何かした方が良いかもされないな。

そんな事を考えた後、俺は肩に乗っている風之助に声を掛けた。

「さて、それじゃあそろそろ行くか」

「へい！ 龍己の旦那！」

そして俺達は深水の街の中へと入っていくと、深水の街中を歩いている町人の数が昨日よりも少し多いような気がした。

「……昨日の事件のせいかな、歩いてる町人の数が多いみたいだな」

「……へい。何せ、ここ最近の深水は小競り合いすら滅多に起きねえ程平和な街でしたからねえ……。おおよそ、七之助の旦那や他の下手人候補達を一目見ようと近くの街の連中も来てるんだと思いやすよ？」

「他の下手人候補……。あ……。そういえば、他の下手人候補についてまだ聞いてなかったな」

「おっと、そういやそうでしたねえ……」

「そんなじゃあ、七之屋に向かいながら他の下手人候補について話をさせて頂きやすね」

「ああ、頼む」

風之助は俺の言葉にコクンと頷いた後、他の下手人候補達についての説明を始めた。

「まず、七之助の旦那と今回殺された董の幼なじみである、巳介みすけです。コイツは、この深水にある小間物問屋『蛇じゃのめノ目屋』の若旦那として、昨夜七之屋の近くの飲み屋で酒を飲んでたようで、その後酔っ払って歩いている所を近隣の町人に目撃されてやす」

「……なるほどな」

「……ただですねえ、この巳助って奴あ七之助の旦那の商売敵ではありやすけど、七之助の旦那と特に仲が悪いつてえことも無いみてえで、時々七之屋を訪れては七之助の旦那に新しい小間物の案なんかを相談してるつてえ話でさあ。そして殺された董とも何の諍いさかいも無いらしいんですよねえ……」

「つまり……。今回の殺しに巳助さんが関わってる可能性は低いって事か？」

「んー……。まあ、俺が聞いた限りではそう考えてる奴あ多いみたいなんですよねえ。ただ……」

「ただ……？」

俺が首を傾げながら訊くと、風之助は少し声を低くしながら言葉を続けた。

「……この殺し、巳助が関わってる可能性が高えって、俺の瓦版屋としての勤が叫んでる気がするんでさあ」

「……なるほど、瓦版屋としての勤か……」

「ええ。ただ、まったく根拠とかはねえんですがね」

「そつか。まあでも……勘っていうのは、中々馬鹿には出来ない時もあるし、巳助さんが関わってる可能性っていうのも考えておいた方が良さだろうな」

……もしかしたら、誰も気付いていない動機みたいなものもあるかもしれないし、とりあえずあり得る可能性は全部追っておいた方が良いな。

風之助の話からそう考えた後、俺は次の下手人候補者を訊くべく、風之助に話し掛けた。

「それで、次の下手人候補者はどんな奴なんだ？」

「へい、それがですね……次に話す奴がこの殺しの下手人の最有力候補なんて言われてる奴なんです」

「下手人の最有力候補か……」

「へい、その通りで。それでソイツの名前が川吉かわきち、この深水に住む河童の野郎なんです

が、こいつが中々の悪者でしてねえ……。何度もお縄について奉行のお裁きを受けているにも関わらず、少し日を置いたらまた悪行を働くななんていうとんでもねえ輩なんでさあ……」

「なるほどな……」

「あ、それと……昨夜も七之屋近くを川吉がうろうろしてるところを見られてやして、その町人が言うには、

『何かを探してようだった』

らしいんで」

「何かを探してようだった……?」

「ええ。因みに七之助の旦那や董とは何の関係もありやせんけど、腕っ節が強いのが自慢らしくて、日頃っからその辺の町人に喧嘩をふっかけたり、道行く女で自分の好みの女がいた時にやあ連れがいても無理やり引っ張ってこうとしたりと、深水では札付きの悪として町人達から煙たがられてるような野郎なんでさあ」

「ふむ……それだけ聞くと、確かにその川吉が最有力候補みたいだよな」

「その通りで。性格も粗暴な上、日頃の行いも頗る悪い。おまけに他の街にいるゴロつきとも一緒にいる時があるとかくれば、疑われてもおかしくない奴と言えやすねえ」

「まあな……」

風之助の言葉に返事をしながら俺はその川吉という容疑者の事について考えを巡らせた。

ふむ……話だけ聞くと、川吉が下手人でも何らおかしくない。おかしくはないんだけど、どうにも引つかかるんだよな……。いかにも怪しい奴が下手人かもしれないっていうこの状況が……。それならむしろ――

「一番怪しくない奴が一番怪しい、か……」

ふとそんな事を呟いていると、風之助がキョトンとした様子で話し掛けてきた。

「龍己の旦那、何か言いやしたかい？」

「あ、いや……川吉が下手人である可能性は高いけど、川吉が下手人であるという状況がどうにも引つかかるなと思ってな」

「引つかかる……と言いやすと？」

「下手人候補の中で一番怪しい奴が下手人なのは別におかしいことじゃない。ただ、ここまで怪しい要素が揃った奴が下手人って言われると、何だか逆に違う気がしてくるんだよな」

「つまり……龍己の旦那の考えとしては、川吉が下手人では無いかもしれないという事ですすかい？」

「いや、たぶん川吉はこの件に関わってはいる。ただ、その裏に真の下手人がいる気がする」

る。それだけだよ」

「真の下手人……なるほど、もしソイツがいるなら、ソイツが川吉に殺しかその手伝いを頼んでいた可能性があるって事ですな？」

「ああ。ただ、その考えが正しいとすると、七之助さんが真の下手人である可能性だって浮上してくる。こう言いたくはないけど、誰が何を考えてるかなんて当人にしか分からないからな」

「う……たしかにそうですね。けど、俺自身は七之助の旦那が下手人じゃねえと思つてやすし、思つてえですけどね……」

「俺だつてそうだよ、風之助。だけど、この人は違つて思い過ぎると、真実を見ようとする気持ちを曇らせてしまう。だから、七之助さんには悪いけど、心のどこかには七之助さんが下手人である可能性も置いておく必要はあるんだよ」

だからこそ、七之助さんに会つてしっかりと話を聞いて、その話も参考にしながらこの件について考えないと……。

そう強く思いながら歩いていたその時、少し先の方にある民家の中から誰かが出て来るのが見えた。そして、歩きながらその様子を観察していると、出て来たのは縞模様の着流しの上に黒い上等そうな羽織を着た妖と揃いの青い着流しを着た妖達であるのが分かった。

あの羽織は……たしか紋付羽織もんつきはおりだっけ？それにあの羽織り方は……。

紋付羽織の妖に注目しながら静かに様子を観察し続けていると、紋付羽織の妖は後に続いて出て来た家主らしき妖に深々と一礼をし、着流しの妖達と頷きあつた後、俺達がいる方へと静かに歩いてきた。そして俺達の横を通り過ぎる際、紋付羽織の妖はチラリと俺達の事を見たものの、何か話し掛けてくる事はなく、そのまま通り過ぎていった。……ふう、別に何かしたわけじゃないけど、こういう職業の人が通り過ぎるつていうのを意識するだけでもかなり緊張するな……。

そんな事を考えながらその妖達の事をジッと見ていると、同じように妖達の事を見ていた風之助が興味深そうな様子で声を上げた。

「ほう……ありやあ、この深水の街の同心の流兵衛親分じゃねえか。あのお人がこの件に関わつてるとなると、少々厄介かもしれねえなあ……」

「風之助、あの水虎すいこを知つてるのか？」

「ええ。あの方は流兵衛親分、この深水の同心の一人でさあ」

「同心……やっぱりか。でも、厄介かもしれないってどういう事なんだ？」

「それがですねえ……流兵衛親分は深水の同心の中でも腕利きの同心でして、親分が関わった事件は全てが二日三日で片がつくなんて言われてるんで」

「……なるほどな。つまり、俺達で解決しようと思うなら、今日明日中じゃないといけな

「いつて事だな」

「まあ、噂通りにいけばそうなりやすねえ。だから、ここはさきつと七之屋に行つて、七之助の旦那に話を聞いてもらった方が良いかもしれないやせんね」

「そうだな。……よし、それじゃあ急ごう、風之助」

「へいー」

風之助の返事を聞いた後、俺は七之屋へ向かう道を急ぎ始めた。

走る事数分、俺達は七之屋へと辿り着いた。そして、七之屋の様子を少し遠巻きに眺めると、件の事件の影響か七之屋を訪れている妖の数が昨日よりも明らかに増えていた。

「あー………やっぱりか………」

「あはは………これがただの商いのためとかなら良いんでしようが、恐らくこの中の半数ほどは七之助の旦那から話を聞きてえつて奴らでしようしねえ……。七之屋からすりゃあ、正直商売どころじゃねえかもしれないやせんねえ」

「そうかもな………仕方ない、ここはひとまず出直して——」

そう言つて俺達が七之屋から離れようとしたその時、近くから小さな声が聞こえた。

「あ、あの……………」

「……………え？」

声を上げながらそちらに顔を向けると、そこには――

「たしか、蒔絵さん……………でしたよね？」

「はい、その通りです……………」

七之屋の店員である化け蛇の蒔絵さんが真剣な表情を浮かべながら立っていた。すると、風之助が首を小さく傾げながら蒔絵さんに話し掛けた。

「蒔絵さん、俺らに何か用ですかい？」

「は、はい……………！ 鈴蘭さんと風之助さんは、旦那様にお会いになりたいんですよ？」

「はい、今回の事件の件で少しお話を聞きたかったの。あ、もちろん七之助さんが下の人だとは思ってませんし、友人として七之助さんの事が心配でしたので、話を聞くのはそのついでです」

「……………分かりました。それでは、私に着いてきて頂けますか？」

「それは構いやせんけど……………どこへ行くってんですかい？」

「裏口です。今、正面にはお客様と他の奉公人の皆さんがいらつしやいますが、裏口ならば何か用事が無い限り、基本的に誰も来ませんから、旦那様のお部屋にそのまま行く事が出来ます。もちろん、お二人がよろしければですが……………」

その蒔絵さんの言葉に俺と風之助は一度顔を見合わせた後、同時にコクンと頷いてから返事をした。

「はい、お願いします、蒔絵さん」

「畏まりました。それでは、こちらにどうぞ」

そして、俺達は蒔絵さんの案内に従って裏口から七之屋の中へと入り、中を行き来する奉公人の人達に会釈をしながら七之助さんの部屋へ向かって歩いた。

ん、そういえば……。

「蒔絵さん、一つ訊いても良いですか？」

「……はい、何でしょうか？」

「こう訊くのもアレですが、七之屋の奉公人の皆さんは、今回の事件をどのように思っているのですか？」

すると、蒔絵さんは少し言いにくそうな様子で静かに口を開いた。

「……瓦版屋さんである風之助さんを前に言うのもアレですが、奉公人の皆さんは今朝の瓦版の内容に憤りを覚えています」

「まあ……そうでしょうねえ。深水で人気のある小間物問屋である七之屋の店主が事件に関わってるかもしれないねえとあれば、町人達はそれが真実かどうかこそぞって知りたがりやす。だから、瓦版屋からすれば今回の件は瓦版を多く売る良い機会って事になりやす

からね」

「……その通りです。なので、今朝から小間物をお求めにいらつしやつたお客様の他に深水の瓦版屋さんや同心の方々、そして今回の事件の事を知るために七之屋を訪れた野次馬など、様々な方がこの七之屋にいらつしやつています。そのため、本来の商いにも支障が出ている他、番頭さんや手代さんも今朝からずつと厳しい表情を浮かべていて、いつもであれば捨て置くような些末事にも声を荒げている状況なのです……」

そう言い終えると、蒔絵さんはとても哀しそうな表情を浮かべながら静かに俯いた。そしてその目は悲しみの涙で潤んでおり、蒔絵さんが今の七之屋の状況にとっても心を痛めている事がはつきりと分かった。

……この蒔絵さんの様子とさつきの話から察するに、蒔絵さんを始めとした七之屋の奉公人達は七之助さんの事を下手人だとは思っていない。これはやつぱり、七之助さんが日頃から奉公人の人達としつかり心を通じ合わせている証であり、七之助さんが日頃から嘘とか誤魔化しをしない正直な生き方をしているからなんだろうな……。

蒔絵さんの姿を見ながらそんな事を考えていたその時、蒔絵さんが七之助さんの部屋の前でピタリと足を止め、ゆっくりと俺達の方へ体を向けた。

「鈴蘭さん、風之助さん。少々お待ち下さいね」

ニコリと笑いながらそう言うと、蒔絵さんは部屋の襖の方へと体を向け、襖を二回ほ

ど軽くノックした。

「旦那様、お客様をお連れしました」

「ありがとうございます、蒔絵さん。どうぞ入ってもらって下さい」

「畏まりました」

中から聞こえてきた七之助さんの声に答えた後、蒔絵さんは襖をゆつくりと開けた。そして、スツと横へと動き、俺達を通るための道を作ってくれた。

「鈴蘭さん、風之助さん。どうぞお通りください」

「ありがとうございます、蒔絵さん」

「蒔絵さん、ありがとうございます」

蒔絵さんにお礼を言いながら会釈をした後、俺達は部屋の中へと入った。するとそこには、昨日と変わらない優しい笑みを浮かべながら座布団に座っている七之助さんの姿があった。七之助さんへ向かってゆつくりと近付きながら顔色や様子を窺ったが、ここにも変わった様子は見受けられなかった上、笑顔もとても穏やかな物だったため、俺はホツと胸をなで下ろした。

……良かった。七之助さんの元気が無かったらどうしようと思ってたけど、とりあえず一安心だな。

そう思いながら手土産を座布団の横へ置いた後、俺は風之助を肩に乗せたまま座布団

に座り、ニコリと笑いながら七之助さんに話し掛けた。

「こんにちは、七之助さん。今朝の瓦版の件もあったので、心配になって本日も風之助さんと一緒に来てみたのですが、どうやら杞憂だったみたいですね」

「ふふ、お二人ともありがとうございます。これも全て蒔絵さんを始めとした奉公人の皆さんののおかげです」

「へへっ、違えねえや。さつき店先で見やしたけど、他の奉公人達がお客の相手をする傍ら、野次馬達の相手もしてやしたからねえ」

「はい。なので、お二人に来て頂けたのは本当に嬉しいです。こう言ってしまうては奉公人の皆さんに怒られてしまいますが、どなたかと例の事件の事についてお話をしたいと思っていたところでしたから」

七之助さんがクスリと笑いながら言うのと、風之助はふうと息をついてからそれに答え  
た。

「……まあ、その通りだと思いやすよ？ 奉公人達からすれば、自分達の旦那様の幼なじみが亡くなった上、その幼なじみを殺した下手人の候補として名前が上がってるから、どうか世間の目から隠してやりたいと思ってるのに、それについて話したいなんて言われちまつたら、自分達がいくら頑張っても意味がねえ事になっちまいますからねえ」  
「ふふっ、そうですね。なので、この事は蒔絵さん以外の奉公人の皆さんには内緒という

事でお願ひしますね？」

「はい、もちろんです」

「俺も了解しやした」

七之助さんの言葉に頷きながら答えた後、俺は小さく息をついてから傍らに置いていた手土産を手に持ち、それを七之助さんの目の前へと静かに置いた。

「七之助さん、どうぞお納め下さい。不忍にある菓子司のお菓子ですが、よろしければ皆さんで召し上がって下さい」

「ふふ、ありがとうございます、鈴蘭さん」

七之助さんは穏やかな笑みを浮かべながら手土産——菓子折を受け取ると、襖の向こうへと静かに声を掛けた。

「蒔絵さん、まだそこにいらつしやいますか？」

「はい、旦那様」

そう言つてから蒔絵さんが襖を開けると、七之助さんはニコリと笑いながら再び蒔絵さんに話し掛けた。

「蒔絵さん。本日も鈴蘭さんからお菓子を頂いたので、こちらを日の当たらない涼しい所へ置いておいてもらえますか？」

「はい、旦那様」

「そして、その後にお茶の用意の方もお願いしますね？」

「畏まりました」

蒔絵さんは丁寧に一礼をしながら答えると、ゆっくりと部屋の中へと入り、七之助さんのところまで来ると、静かに菓子折を持ち上げた。そして、恭しく一礼をすると、そのまま部屋の外へと歩いていき、部屋を出てからもう一度一礼をした後に静かに襖を閉めた。

さて……そろそろ話を始めるか。

そう思った後、深く息をついてから俺は七之助さんに話し掛けた。

「七之助さん、昨夜は何をしていましたか？」

「昨夜ですか……鈴蘭さん達がお帰りになった後は、奉公人の皆さんにお店の事をお任せして少しだけ外に出ていましたよ」

「そうなんですか。因みにどちらへ行かれたんですか？」

すると、七之助さんはニコリと笑いながらそれに答えた。

「今回の事件で亡くなった私の幼なじみ、董の家です」

「……え？」

「……はい？」

そのまさかの答えに俺達が呆然としていると、七之助さんはクスクスと笑いながら話

し掛けてきた。

「やはり驚きますよね。董殺しで疑われている私が、その前日に董の家に行っていたわけですから」

「ま、まあ……そうですね。えつと……因みに董さんのお家を訪ねたのは何故ですか？」  
「それなのですが……昨日お二人とお話をしていた時、鈴蘭さんと出会った日に董に傘を届けに行った事は話しましたよね？」

「あ、はい」

「そういや、たしかに言つてやしたねえ……。それで、傘を届けに行ったは良いが、それを断られちゃまった。そして、その帰りに偶然雨宿りをしていた鈴蘭の旦那と出会ったんですしたよね？」

「ええ、そうです。それで、届けに行った理由なのですが……」

「はい」

「二昨日、雨が降り出した頃に番頭である化け蛇の翡翠ひすいさんから休憩がてら雨の中の散歩でもしてきたらどうか、と言ってもらえたので、その言葉に甘える事にして私は傘を差して雨の中へと出て行きました。そして、散歩を始めようとしたその時、ちょうど雨の様子を見ていた董の御両親を見かけたので、ご挨拶をしようと思つて話し掛けに行つたのです」

「あ、という事は……七之屋の近くに董さんの家があるわけですね」

「はい、その通りです。因みにもう一人の幼なじみの巳介の家や巳介がお父さんから継いだ蛇の目屋も近くにあるので、昔から集まる時にはこの七之屋か蛇の目屋にまずは集まるようにしていました」

七之助さんはとても懐かしそうな様子でクスリと笑った後、再び口を開いた。

「そして、御両親に挨拶をするために話し掛けると、お父さんの方が心配そうな顔で挨拶を返してくれました。私はその心配そうな顔が気になったので、どうかしたのかと訊いてみると、どうやら董が誰かに会いに出かけたは良いが、雨が降ってきたので少々心配になってきた、とのことでした」

「……いくら水に関する妖の化け蛇とはいえ、雨の中を傘も差さずに歩いてたら流石に風邪を引いてしまいますからね」

「ええ。私も話を聞いてそう思ったので、董に傘を持っていく事にしたのです。そして、御両親から董が行ったと思われる場所を聞き、そこへと行ったのですが、雨の中で出会った董は何故か傘を差していたのです」

「傘を持たずに出掛けたはずなのに、七之助の旦那が見つけた時には傘を差していた、か……」

「はい。私もその点が少し気になったので、それについて訊いてみようと思い、董に近付

きました。すると、董は私の顔を見るやいなやムツとした表情を浮かべると、

『……お店の奉公人達に私の悪口を言ってるって本当?』

と、言ってきたのです」

「お店の奉公人達に悪口を……七之助さんは当然そんな事は言つてませんよね?」

「ええ、もちろんです。最近はおかげさまでお客様も大勢いらっしやっていますので、たまに小間物の話をしに来る巳介は別として、董とは会う機会があまりありませんが、董は大切な幼なじみだと今でも思っていますから」

「そうですね……でも、だとしたらどうして董さんはそんな事を……?」

「それについて訊いてみたのですが、どうにも最近仲良くなった妖からそういう噂を聞いたらしく、傘もその人が貸してくれたとのことでした」

「仲良くなった妖……因みにその妖の種族は分かりますか?」

「えつと……たしか——」

俺の質問に七之助さんが答えてくれようとしたその時、部屋の襖が開く音が聞こえた。そして、そちらの方に顔を向けると、そこにはほかほかと湯気を立てる湯飲み茶碗が三つ載ったお盆を傍らに置いた蒔絵さんが座っていた。蒔絵さんは俺達の視線に気付くと、座ったまま深々と一礼をしてから、少し不安そうな表情を浮かべながら口を開いた。

「……旦那様、お客様がいらっしゃってますが、お通してもよろしいですか？」  
「お客様……ですか？」

「はい。蛇の目屋の店主、巳介様です」

それを聞くと、七之助さんは安心した様子で頷きながら返事をした。

「ああ、お客様というのは巳介でしたか」

「はい、何でも旦那様とお話がしたいとの事なのですが、いかがなさいますか？」

「そうですね……」

七之助さんは顎に手を当てながら少し俯いた後、俺達の方へと顔を向けた。

「鈴蘭さん、風之助さん。巳介もこの話に参加させてもよろしいですか？」

「あ、はい。もちろん大丈夫です」

「俺達としては、色々話を聞けた方が正直助かりやすからねえ。それに情報は多い方が考えの広がりも大きくなりやすしね」

「分かりました。それではそのままこちらへお通しして下さい、蒔絵さん」

「は、はい……畏まりました」

蒔絵さんは、不安そうな表情を崩さずに答えると、部屋の中に入り緑茶が入った茶碗を俺達の目の前に静かに置いたり巳介さんが座る座布団の準備をしたりと、傍目から見れば落ち着いた様子で行動をしていた。しかし、ふと目に入った蒔絵さんの目には、微

かに涙が浮かんでおり、何かに怯えているような雰囲気醸し出していた。

……蒔絵さん、もしかして何かあったのか？

そんな疑問を頭に浮かべている内に蒔絵さんは作業を終えると、チラリと不安そうな視線を七之助さんへ向けてから静かに部屋の外へと出て行った。そして、襖がパタンと閉まると、風之助が腕を組みながらうーんと唸りながら口を開いた。

「……蒔絵さん、何やら不安そうな表情を浮かべていやしたねえ……」

「……そう、ですね……」

「それに部屋を出る前に七之助さんの方をチラリと見ていたのも気になりますね……」

「……ええ」

先程の蒔絵さんの様子について俺達が考えを巡らせていた時、

「……あの様子、まさかあの事が関わっているのか……う？」

七之助さんの口からポロリとそんな言葉が漏れた。

あの事……？

「七之助さん、あの事というのは？」

「……あ、口に出していましたが……」

七之助さんは少しだけ話しづらそうな様子を見せた後、ふうと息をついてから言葉を

続けた。

「実は、蒔絵さんにはちよつとした力がありますから、もしかしたらその事に関係しているのかなと思つたのです」

「ちよつとした力……ですかい？」

「ええ。ですが——」

七之助さんはとても哀しそうな表情を浮かべると、俺と風之助の目をしつかりと見つめながら言葉を続けた。

「この事は、蒔絵さん自身が話そうとするまで訊かないで下さい。お願いします、鈴蘭さん、風之助さん」

「七之助さん……」

「七之助の旦那……」

その七之助さんの表情からは、いつものような波紋一つない湖面を思わせる穏やかな雰囲気とは違つた鋭い雰囲気——刀身に曇り一つ無い鋭い切れ味の日本刀を思わせるような雰囲気を感じた。

……それだけ、蒔絵さんの力について触れられたくないって事、か……。まあ、訊くつもりはそもそも無かつたけど、ここは七之助さんの気持ちに汲む事にするか。

そう思つた後、俺は風之助の方へと顔を向けた。すると、風之助も俺の事をジツと見ていたため、俺達は静かに頷いてから再び七之助さんの方へと顔を向けてから、微笑み

ながら話し掛けた。

「……安心して下さい、七之助さん。私達にはその事について触れる気は一切ありませんから」

「鈴蘭の旦那の言う通りでさあ、七之助の旦那。気にならねえと言えば嘘になっちゃうが、人が嫌がる事を無理やり訊くなんてのは、瓦版屋として失格だ。だからこの事については、蒔絵さんが話してくれる日が来るまで忘れる事にしやすよ」

「鈴蘭さん……風之助さん……」

七之助さんは、少し驚いた様子で俺達の顔を見回した後、安心したように息をついてから静かに口を開いた。

「本当にありがとうございます」

「いえいえ、礼には及びませんよ、七之助さん。私達は私達が正しいと思つた事をしたままですし、風之助さんの言う通り、人が嫌がる事を無理やり訊くのは瓦版屋としてだけではなく、友人としても失格ですからね」

「へへっ、違えねえや。俺達は、七之助の旦那とはもちろん、蒔絵さんやこの七之屋の奉公人達ともこれからも仲良くやっていきよと思つてやすからねえ」

「ええ。それに、七之助さんと蒔絵さんとは知り合つてからまだ日は浅いですし、奉公人の皆さんとはゆつくりと話をした事すらありません。ですが、皆さんの目や雰囲気、そ

して働いてる時の様子から、皆さんがこの七之屋で働く事について何も不満を持っていない上、お互いがお互いの事を思いやれているという事がハッキリと分かりますからね」

「全くもつてその通りで。まあ、それも全部七之助の旦那の人徳……いや、妖徳ようとくつてえやつなのかもしれやせんね」

「ふふ、そうですね」

風之助の言葉に小さく笑いながら答えた後、俺は話がだいぶ脱線している事に気がき、申し訳なさを覚えながら七之助さんに話し掛けた。

「す、すいません……話をだいぶ脱線させてしまつて……」

「ふふつ、構いませんよ。お二人のお気持ちはとても嬉しかったですし、奉公人の皆さんの事を褒めて頂けたのは、店の主として誇らしい事ですからね」

「……そうかも知れせんね」

七之助さんの言葉を聞き、俺は静かに微笑みながら狐雨福屋の主である龍三郎の顔を見ると頭の中に思い浮かべた。

……龍三郎さんは俺の事を客人として狐雨福屋に住まわせてくれてるし、今もこうしてこの世界の事を知るといふ名目で色々と出歩かせてくれている。けどそれは、あくまでもあの事情があるからであつて、本当なら俺も狐雨福屋の小僧として働くべきなん

だ。だから――

「……いつか絶対、龍三郎さんが俺の事を誇らしいと思えるようにならないといけ  
ない……」

拳をギュツと握りながらそう強く決意を固めていると、襖をトントンと叩く音が聞  
えてきた。そして、七之助さんは襖の方へ視線を向けると、襖の向こうにいるであらう  
蒔絵さんへと声を掛けた。

「はい、どうぞ」

「旦那様、巳介様をお連れしました」

「ありがとうございます、蒔絵さん。それでは入ってもらって下さい」

「畏まりました」

蒔絵さんの返事が聞こえた後、襖が静かにスツツと開いていった。そして、襖が開き  
きつた後に蒔絵さんと一緒に一人の妖が部屋へと入ってくると、七之助さんの顔を見て  
ニカツと笑った。

「今回はお互いに変な事になってしまったな、七之助」

「……ああ、そうだな、巳介」

妖――巳介さんの言葉に七之助さんが小さく笑いながら答えていると、巳介さんはそ  
れに頷いてから俺達の方へと顔を向け、怪しそうに俺達の事を見ながら話し掛けてき

た。

「……他の客っていうのは、どうやらアンタらみたいだな。この辺じゃ見ない顔だが、アンタらは一体誰なんだ？」

「私の名前は鈴蘭、不忍にある狐雨福屋の奉公人です」

「そして、俺の名前は風之助。不忍で瓦版屋をやつてる鎌鼬でさあ」

俺達が自己紹介をすると、巳介さんは少しだけ警戒を解いた様子で声を上げた。

「へえ……あの狐雨福屋の奉公人に不忍の瓦版屋ねえ。つまり、今回の件は不忍にも伝わるほど大きな話になつてゐるって事か」

「まあ……深水つて言いやあ、川吉の件を除けば小さい事件すら中々起きねえ事で有名な街ですからねえ。そんなところで殺しなんて起きちまつたら、話が大きくなつちまうのも無理はねえと思いやすぜ？」

「あははっ、それもそうか！」

風之助の言葉に巳介さんは大きな笑い声を上げながら答えた。

……何というか、スゴく明るい人だな……。

そんな事を思いながら俺は巳介さんの姿を観察した。巳介さんは、龍三郎さんや七之助さんと同じく鬚を結つたキリツとした顔付きの明るい好青年で、着ている着流しは暗い青を基調とした上等そうな物であり、風之助の言葉への反応もあつてかかなり話しや

すそんな雰囲気を醸し出していた。

七之助さんもそうだけど、やつぱり誰かを殺すような人には見えない。ただ……そういう人に限って何かを隠してる事も多いしな……。

巳介さんの様子を観察しながらそんな事を考えていると、巳介さんが何かを思い出したように両手をポツツと叩いた。

「……そういえば、俺の自己紹介を忘れてたな。もう七之助から聞いてるとは思うが、俺はこの七之屋と同じ小間物屋を営んでいる巳介って言うんだ。よろしくな、お二人さん」

「はい、よろしくお願ひします。巳介さん」

「よろしく頼みやす、巳介の旦那」

「おう！」

そして、俺は風之助と一緒に巳介さんと握手を交わしながら考えを巡らせた。

……とりあえず、巳介さんからも今回の件についてとか昨日の夜の行動について話を聞いてみよう。話の内容から何か気付くこともあるかもしれないしな。

そう思った後、俺は風之助と一緒に巳介さんから昨夜のことについて話を聞き始めた。

「……うーん、これは本当に参ったなあ……」

「そうですねえ……」

昼頃、行きつけの蕎麦屋そばや——越野庵の店内で俺と風之助は同時にため息をついた。俺達の目の前には、昆布と鰹節の出汁の香りを漂わせながら静かに湯気を上げている蕎麦があり、いつもであればすぐに食べ始めるのだが、今日はどうにも手は伸びなかつた。というのも、思っていたよりも事件の捜査の進みが悪く、ここからどうしたのか全く見当がつかなかつたからだ。

はあ……本当にどうしようかな……。

少し暗い気持ちでそう思いながら俺はここに来るまでの事を思い返した。巳介さんに自己紹介をした後、俺達は七之助さんから聴きそびれていた分を含めて七之助さん達から再び話を聞いた。そして話を聞き終えた後、七之助さん達の商いの事を考えてとりあえず七之屋を辞し、一度不忍へと戻った。すると、ちょうど昼頃だったため、ひとまず話を纏めながら昼食を取る事にし、越野庵へとやってきた

……七之助さんは、昨夜に被害者の董に一日の件について話を聞くために会いに行つたものの、董が出掛けていたため結局会えずじまいだった。そして、巳介さんは風之助の調べた情報の通り、七之屋の近くの店で酒を飲んだ後、酔っ払つたまま家へと

帰ってるし、七之助さんの話に出て来た葦と仲の良い妖については全く知らないと言っていた。

「……こうなると、川吉が下手人の可能性が一番高いけど、それを裏付ける証拠が無い上、まだ七之助さんがこの件に関わっていないと言える証拠も無いなあ……」

「そうなんですよねえ……。それが見つからねえとなると、最悪七之助の旦那が川吉の共犯としてしよつ引かれかねえし……」

「ああ……そうだな……」

俺達がもう一度同時にため息をついていると、越野庵の店主——妖狐の霧助きりすけさんが呆れた様子で話し掛けてきた。

「おいおい……今日はいやに辛気くせえなあ、おめえら。そんなしけたツラしてねえで、外のお天道様みてえに明るく行った方が良いんじゃないやねえのかい？」

「そうしたいのはやまやまなんですけど、今抱えてる問題の進みが芳しく無いんです……」  
「問題、ねえ……風之助と一緒におめえが悩んでるところをみるに、深水で起きたっていう例の事件でも追ってんのかい？」

「……その通りです。つい最近知り合った方が下手人の候補になっちゃってますので、どうにかしてその疑いを晴らしたいんですが、疑いを晴らすのに十分な証拠や証言がどうにも集まらないんです……」

「はあー……なるほどなあ……」

俺の話を聞くと、霧助さんはその無駄な筋肉が付いていない腕を組みながらうんうんと頷いた。霧助さんは短い金色の頭髮に少しだけ鋭い目付きをしている二枚目顔であり、背丈の高いスラツとした体を包むのは薄い青色の着物に白い前掛け、そして頭には板前が被るような少し年季の入った白い帽子が乗っている気つぶの良い物言いがカツコいい妖狐だ。そして風之助が勧める通り、作ってくれる蕎麦はどれも絶品であり、修行をしていた店では一番の新参者だったにも関わらず、飲み込みの良さや話の上手さもあつて、兄弟子達より先に暖簾分けを許された程、内外からの人気や信頼度が高かつたのだという。

……それでいて、それを鼻に掛ける事も無いし、客の悩み話も親身になつて聞いてくれるとくれば、店だつて人気になるよな……。それに年も俺より少し上なだけだから、女性客もそこそこ多いみたいだし。

そんな事をボンヤリと考えながら霧助さんの様子を眺めていると、  
「……この分だと、そろそろアイツから話が来そうだな」

霧助さんの口からそんな言葉が漏れた。

アイツ……？

「霧助さん、アイツというのは……？」

「ん……？ ああ……声に出ちまっただか。知り合いにこういう話が好きな奴がいてな、こんなに話が広がっちゃまってるってんなら、ソイツからも話を振られそうだと思うな」

「なるほど……因みにそのお知り合いは、この不忍に住んでいる方なのですか？」

「ああ。だが、仕事で忙しい事が多いもんで、最近はあまり会ってねえけどな」

「そう、ですか……」

それは残念だな……もし会えるなら、今回の事件について意見を聞きたかったんだけど……。

霧助さんの答えに俺が残念な気持ちを抱いていると、霧助さんは大きな笑い声を上げながら話し掛けてきた。

「はっはっはっ！ そう落ち込むな、鈴蘭！ アイツの事だ、興味が湧いたらすぐにでも事件に首を突っ込もうとするだろうから、その時は教えてやるよ！」

「霧助さん……ありがとうございます」

「へへっ、良いって事よ！」

俺の言葉にニカツと笑いながら答えた後、霧助さんは両手を二回ほど打ち合わせながら言葉を続けた。

「さあさあ、それじゃあさっさと蕎麦を食っちゃまってくれ。早くしねえと蕎麦も延びち

まうし、調べ物の元気も出ねえからな」

「ふふ、それもそうですね」

「へへっ、違えねえや。それじゃあ——」

「いただきます」

そして俺達は、午後から再び頑張るべく目の前にある蕎麦を食べ始めた。

暮六ツ（午後5時半）頃、俺達は件の事件についての調べ物に一区切りをつけ、綺麗な夕焼け空の下、道行く妖達を眺めながら帰路についていた。

「結局、求めてるような成果は得られなかったな……」

「そうですね……けど、焦ったところで見つかる物も見つからねえと思いやすし、とりあえず今日の所はこんなもんだと考えるしか無いと思いやすよ?」

「……そうだな」

風之助の言葉に返事を返しながら俺は夕焼け空を見上げ、そのままボーツと眺めた。

……正直、まだ七之助さんの疑いを晴らすには至っていないし、俺達でどうにか出来るのはおそらく明日がラストだ。だから、明日中にどうにかちゃんとした証拠を見つけ、それを番屋にでも伝えられるように頑張ろう。……でも、もし七之助さんが下人、

または共犯だったその時は――

「……しっかりと話をした上で、自首を勧めないとな……」

そう思いながら視線を道の方へと戻したその時、狐雨福屋の店先で手代の羅紗さんが静かに立っているのが見えた。

……羅紗さん、一体何をしてるんだ……？

そんな疑問を抱きつつ、俺は風之助と一緒に羅紗さんへと近付いた。

「羅紗さん、ただいま戻りました」

「……龍己、それと瓦版屋の風之助か」

羅紗さんは俺達の姿を静かに上から見ていった後、冷たい声で言葉で続けた。

「旦那様よりお前が出掛けていた理由は聞いています。友である深水の小間物屋が殺しの下手人として疑われているのを晴らそうとしている、とな」

「はい、その通りです」

「……そうか。ならば、早々に旦那様のお部屋に行け。本来、お前のような半人半妖の事など取るに足らないが、旦那様はお前の身の心配をしておられる上、調べの進捗状況も気になさっているからな」

「分かりました。ところで……羅紗さんは店先で何をしてらっしゃったんですか？」

そう訊くと、羅紗さんは冷たい視線を向けながらもその質問に答えてくれた。

「……外の風に当たろうと思ひ、外に出て来た。それだけだ」

「……分かりました、ありがとうございます」

羅紗さんにお礼を言つた後、俺は肩に乗っている風之助の方へと顔を向けた。

「それじゃあ、風之助。また明日頑張ろうな」

「へい！ 明日こそ何か掴めるように頑張つていきやしよう！」

「ああー！」

俺が大きく頷きながら答えると、風之助は俺の肩から静かに飛び上がり、そのまま狐雨福屋の屋根へとふわりと着地した。そして、俺の方へ顔を向けると、ニカツと笑いながら声を掛けてきた。

「それじゃあ、また明日です、龍己の旦那ー！」

「ああ、また明日な」

俺が再び頷きながら答えると、風之助は再びふわりと風に乗り、そのまま不忍の街の中を飛んでいった。

さて……それじゃあ俺は、龍三郎さんに今日の事について話をしに行かないとな。

そう思いながら木戸の方から入ろうとしたその時、

「……龍己」

突然、羅紗さんからそう声を掛けられ、俺は羅紗さんの方へと顔を戻した。

「羅紗さん、どうかしましたか？」

「……お前ならばどうに分かつている事だと思うが、一つだけ言っておく事がある」

「言っておく事……ですか？」

「……ああ」

羅紗さんは小さく頷きながら答えた後、俺の目をしっかりと見つめながら静かに口を開いた。

「お前が誰を信じようとお前の勝手だ。だが、心の内では何を考えているのか分からないのは、人間だけではなく妖も同じだ。目に見える物だけを信じていては、本当に見るべき物を見失うことになる」

「目に見える物だけを信じていては、本当に見るべき物を見失う……」

「ああ。そして、この言葉をお前がどう受け取るかはお前次第だ。ではな……」

そして、羅紗さんはクルリと店の入り口の方へ体を向けると、そのまま店の中へと入っていった。

「……心の内では何を考えているのか分からないのは、人間だけじゃなく妖も同じ……か」

……この言葉、やっぱりかなり重要な気がするな……。

「……明日、風之助とこの事についてももう一度話してみよう。もしかしたら、何か気づけ

てない事があるかもしれないし……」

そう独り言ちながらコクンと頷いた後、俺は龍三郎さんに報告をしに行くべく、木戸を通つて俺が住んでいる離れの方へと歩いていった。

その日の夜五ツ（午後7時半）頃、件の事件が起きた深水の街のとある場所にて、一人の妖が苛立ちを感じていた。

「……ちつ、あの野郎、いつまでこの俺様を待たせようつてんだ……!?!」

その妖——河童の川吉は、待ち合わせ相手が中々現れないことに苛立ち、今にも暴れ出しそうな雰囲気醸し出していた。そしてそれから数分後、川吉の目の前に一人の妖が現れると、川吉はわざとらしい大きなため息をつき、そのままその妖へと声を掛けた。

「よお、遅かったじゃねえか。店の主様がそんな事じゃあ、店の奉公人達も困っちゃうぜ？」

「……そうかもしれないな。さて……例の話の前に一つだけ訊きたい事がある」

「訊きたい事、ねえ……」

川吉が心底面倒くさそうな様子を見せる中、その妖はそれには構わず再び口を開いた。

「お前にとつてアイツは……董は、どういう存在だった？」

「董……ああ、お前が俺様に殺させた化け蛇の女か」

「そうだ。下心があつたとはいえ、お前は董とはそこそこ仲良くしていたはずだろう？」  
「んー……まあ、そうだなあ。確かにあの女とはそこそこ『仲良く』はしてたなあ……」

川吉は仲良くという部分を強調しながら答えた後、とても嫌らしい笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「だがなあ……あんな女程度ならその辺にごまんといえるし、その辺の遊廓に行きやあれ以上の女なんてのも軽く金で買えちまう。だつてのにあの女ときたら、俺がちよつと容姿を褒めちぎつたら、顔を真っ赤にしやがるし、あの言葉だつてコロツと信じちまうんだから、本当に愉快だったなあ……！」

川吉がその時の出来事を思い出しながらニヤニヤと笑い出す中、妖はその様子を冷たい視線を向けながら静かに見つめていた。それは端から見れば、川吉の様子から何かを見定めようとしているようにも見えたが、妖の心中はとても穏やかと言える物では無かつたため、今にも川吉に殴り掛かりたい気持ちがあつたふつと沸き立っていた。

しかし、そんな事をしては己の目的を達するどころか返り討ちに遭いかねないため、妖は拳を静かに強く握る事でその気持ちを抑え込んでいた。そしてその事にまったく気付く様子のない川吉は、何かを思い出したような表情を浮かべると、水掻きの付いた

手を妖へと差し出しながらねっとりとした声で妖へと話し掛けた。

「さあーて、そろそろ約束の金を貰おうか？ お前から金を貰う代わりにあの女を殺すつてえ約束だったからなあ」

「……殺し方があまりにも杜撰だったが、まあ良いだろう。約束は約束だったからなあ」  
妖は低い声で答えながら懐へ手を伸ばすと、小さな巾着袋を静かに取り出し、軽く二・三度程上下に振った。

すると、その動きに合わせて巾着袋の中からジャラジャラという音が鳴り、それを聴いた川吉がニヤリと笑いながらまるで催促をするように差し出していた手を軽く揺らした。

妖はその様子には目もくれずに巾着袋の口を静かに緩めると、川吉の手の上で巾着袋を逆さにした。そして、巾着袋から落ちていった小銭達は、川吉の手の上で音を鳴らしながら跳ね上がると、何枚かを残して全てが地面へと散らばった。その様子に川吉は忌々しげに舌打ちをすると、妖は申し訳なきような表情を浮かべながら口を開いた。

「すまない、少しポーツとしてしまったようだ」

「……つたく、気をつけろつての……」

妖の言葉に答えた後、川吉は鼻を鳴らしてから地面に落ちた小銭を拾うべく、その場にしゃがみ込んだ。すると、川吉の頭の上にある河童の皿が月の光でピカリと光り、そ

れを見た妖は小銭を拾い続ける川吉をよそに再び懐へ手を伸ばした。そして、懐から取り出した物——拳程の大きさの石を両手で掴むと、それを勢い良く振り上げ——

「……………っ！」

渾身の力を込めて川吉の皿へと石を振り下ろした。

「ぐうつ……………!!？」

その瞬間、川吉は強い衝撃に襲われ、地面へと強く叩きつけられる形でその場に倒れ込んだ。そして、すぐに立ち上がるべく、手足に力を込めようとしたが、何故か力がまったく入らなかったため、土に何本もの線を描くだけとなった。

「ぐ……………くそっ、何で……………！」

川吉が悔しそうに声を上げる中、妖は冷たい声で答えながら川吉を静かに見下ろした。

「……………今、石をお前の頭の皿に叩きつけた。それによって、皿は完全に割れないまでもそこそこ大きなヒビが入り、お前は力を入れたくとも入れられない状況に陥ったわけだ」  
「さ、皿にヒビ……………だど?!? ふざけるな! こんな事をしてタダで済むと——」

「黙れ」

川吉の怒りの声に被せるように妖は言葉を発すると、もう一度石を両手で持ちながら静かに振り上げた。そして、そのまま勢い良く川吉の皿へ目がけて石を振り下ろした。

「あがつ?!」

その衝撃で川吉の顔は地面へと叩きつけられた上、頭の皿のヒビが更に大きく広がる  
と、妖はとても暗い笑みを浮かべた。

「本当は一発で済ませるつもりだったが、お前のさっきの発言がイラツときてしまった  
もんでな……」

「さっきの……はつげ、ん……?」

「ああ。まあ……今更お前に説明する必要も無いけどな。何故なら……」

そう言いながら妖が着ていた着流しを脱ぐと、その下からまた別の着流しが現れた。  
そして、妖は苦しみの表情を浮かべる川吉の腹を強く蹴り上げると、

「ぐふっ……」

川吉はぐぐもった声を上げながら仰向けに転がった。それを見ると、妖は脱いだ着流  
しを川吉へと被せ、三度懐へ手を入れた。そして――

「……お前には予定通り、ここで死んで貰うからな」

懐から取り出した小刀の切っ先を川吉へと向けると、小刀の刀身は月の光を浴びて、  
妖しくキラリと輝いた。

「死んで貰う……だど?!」 冗談じゃねえ、お前みてえな奴に殺されてたま――」

「もう一度言う、黙れ」

再び川吉の言葉に被せるように妖は言葉を発すると、足を着流しの舌の川吉の体へと強く乗せ、そのまま静かに体重を載せていった。

「ぐっ……あぐあっ……！」

「ははっ……もう一枚着流しを着てくるのは少々苦勞したが、やはりこの方法ならば無駄な返り血を浴びずに済みそうだな……」

妖は楽しそうな声で独り言ちた後、川吉の心臓があると思われる箇所を狙いを付けながら静かに息を整えた。そして――

「ではな、川吉。お前の死後も少し世話になるぞ」

妖は川吉へ言葉を掛けながら両手で握っていた小刀をそのまま川吉へと振り下ろした。

それから半時が過ぎた頃、酩酊状態の妖が一人この場を通りかかった。

「ははっ……！ やっぱ飲んでねえとやってられんねえよなあ……！」

酔いに任せて大声を上げながら歩いていたその時、妖は自分の足が何かにぶつかったのを感じた。

「ん……？ 一体何だ……？」

酔いで体をふらつかせながら、妖は己の足元に視線を向けた。するとそこには、暗く見えづらいものの大きな何かがあり、目を凝らしてもう一度見てみると、それは上等そうな着流しで覆われた何かである事が分かった。

「はあ……これはアレだな、俺みたいに酔っ払ってる奴が寝ちまつてるんだな」

自分の言葉に納得するようにうんうんと頷いた後、妖はその『何か』を静かに揺さぶり始めた。

「おーい、こんな所で寝てると風邪引くぞー?」

そう言いながら揺さぶり続けていると、徐々に覆っていた着流しがズレていった。そして、パサツという音を立てて着流しが地面に落ちたその時、

「……ひっ!? うわあぁー!!?」

妖は着流しに覆われていた物——川吉の死体を目にし、街中に響き渡るほど大きな悲鳴を上げた。

## 第6話 事件の終結と哀しみの結末

「ふあ……ん、もう朝か……」

いつものように縁側から射し込んでくる朝日で目を覚まし、少し眠気が残る中、ゆつくりと体を起こした。そして体に入力して半人半妖モードに姿を変えた後、どうにか頭をスツキリとさせながら今日の流れについて考え始めた。

「さて……今日はどうしようかな。昨日のようにひたすら調査に走っても良いけど、そろそろ少しずつ情報も纏めていきたいところだしな……」

昨日、事件の容疑者である化け蛇の七之助さんと巳介さんから聞いた話、そして瓦版屋の鎌鼬——風之助かぜのすけからもらった情報は、一応簡単には纏めてあるものの、未だ犯人を特定できるような情報は無い。しかし、深水ふかみのやり手同心達が動いている以上、俺達が調査を出来るのは、恐らく今日が最後だ。だからこそ、今日の内にどうか真相に辿り着けるような決定的な証拠を挙げる必要がある。

うーん……本当にどうしたもんかな……。

軽く腕を組みながら何となく住んでいる離れの中を見回していたその時、文机の上に何かが置かれているのが見えた。

「あれ……俺、寝る前に文机の上は片付けたよな……う？」

知らぬ内に起きていた部屋の異変に、少しだけ疑問を抱いたが、それよりも置かれている物に興味を抱いたため、俺は警戒しながらいつも使っている文机へと近づき、置かれている物を観察した。置かれていたのは、形が歪な黄色の水晶——シトリンと細かい字で書かれた何枚もの紙であり、シトリンの方はよく見てみると表面には細かい傷が付いていた。

「シトリン……確か石言葉は、『友情』とか『初恋』とかだったよな。そして、このシトリンの歪み方と傷の付き方、どうにも気になるな……」

俺の水晶の勾玉とこのシトリンを見比べてみると、水晶の勾玉はとても丁寧な手入れをされていたからか、曇りや傷が一つも無かった。しかし、シトリンの方は小物や御守りに加工する前の形と言うよりは、ただの欠片のように見え、傷も自然に付いた物では無く、誰かがわざと付けた物のように見えた。

パワーストーンは、別に傷が付いても意味とか効果は変わらないと言うけど、置いていった人物はもしかしてこの形と傷で何かを伝えようとしたのか……？

「友情と初恋に傷が付く……つまり、このシトリンは誰かを表していて、その誰かの初恋は終わり、友情にもヒビが入っている、という事になるのかな……？ まあ、それは後にして——次はこの紙束だな」

シトリンを文机に置いた後、今度は紙束を手に取り、両手で持ちながらそのまま目を通した。すると、書かれていた内容に俺は思わず声を上げてしまった。

「……………これ、本当にどうやって調べたんだ……………」

そこに書かれていたのは、七之助が営む小間物問屋『七之屋』と巳介さんが営む小間物問屋『蛇ノ目屋』の最近の評判や収支についての情報、そして奉公人達からの不平不満やそれぞれの主人に対しての意見などだった。『七之屋』については、特に悪い事は書かれていない上、収支にも妙な点は無かった。しかし、『蛇ノ目屋』の方はというと、最近あまり小間物の売れ行きが良くない事や巳介さんが仕事中や夜中に一人でどこかへ出掛けていて困っているといった事などが書かれており、収支表にも妙な支出があるようだった。

「……………この紙束に書かれてる内容は、絶対に普通じゃ調べられないはずだよな。少なくとも、両店の奥に入る事が出来て、店の帳簿を覗き見る事が出来る人物って事になるけど、たとえばどちらかの店の関係者だとしてもそれはムリだ。残るのは、操作の一環で調べられる同心達って事になるけど、一介の奉公人である俺にこの情報を漏らす理由なんて無い。それに、このシトリンもそう簡単に手に入れられる物でも無いと思うし……………」

深水の街の事件を追っている中で見つけた新たな謎、それについて腕を組んで小さく唸り声を上げながら考え始めたその時、明け六ツを告げる鐘の音が不忍の街中に響き渡

り、俺の思考はそこで一度中断された。

「……とりあえず、これは風之助にも見せてみよう。俺だけじゃ分からない事でも、アイツも一緒なら何か分かるかもしれないな」

そう独り言ちながらシトリンの欠片と紙束を懐へしまった後、そのまま縁側へと向かい、愛用の草履に足を通した。そして木戸をくぐって街中へ出た後、風之助とその相手である妖狐の草吉さんの姿を探すために辺りを軽く見回した。すると、いつもの場所で二人が商いの準備をしているのを見つけたため、俺はそのまま二人へと近づき声を掛けた。

「おはよう、風之助、草吉さん」

「……ん？ おつ、龍己の旦那！ おはようござえやすー！」

「おはよう、龍己」

「うん、おはよう」

二人の挨拶に微笑みながら挨拶を返していると、風之助が突然周囲を見回し始め、誰も自分達に気付いていないのを確認すると、安心した様子を見せた。

「ん……どうした？」

「あ、いや……実はですねえ、今朝の瓦版もちよいと龍己の旦那に先に読んでもらいてえ内容なもんで。けれど、他の奴らが俺らに気付こうもんなら、すぐにわらわらと寄って

きちまうからちよいと他の奴らの様子を見てたんでさあ」

「今朝のもつて事は……まさか、あの事件に何か進展があったのか？」

「んー……進展というよりは、更に謎が増えたつてとこですかねえ……。まあ、とりあえず読んでみてくだせえ、龍己の旦那」

「あ、うん」

そしていつものように代金を払い、瓦版を受け取った後、件の記事へ目を向けたその時、思わず「……え!？」と言つてしまった。そこに書かれていた内容、それは深水の街で新たな死体が見つかったという物だった。

「……さて、これはまた困った事になったな」

「そうですねえ……」

朝食を食べ終えた後、俺は離れに風之助を呼んで今朝の瓦版の内容についての話をしていた。

化け蛇の董すみれ殺しがあつたのが一昨日の事、そして新たな死体——河童の川吉が殺されているのが見つかったのが昨夜、か……。ここまで連続して殺しが行われたとなると、同心達の捜査も更に厳しくなりそうだし、今日はあまり深水での調査は出来そうにない

な……。

諦め気味に今日の事について軽く考えた後、とりあえず今回の件についておさらいをするべく、件の瓦版を手に取りながら風之助に声を掛けた。

「風之助、ひとまず今回の殺しについておさらいをしてみよう」

「へい！ えーと、まずは殺しが起きた時間と場所なんですが——宵五ツ頃、深水の街の外れにある平野で起きた物で、殺されたのは董殺しの下手人候補だった河童の川吉。そして死体の状況は、心の臓を一突きにされた上、頭の皿を粉々に砕かれ、上物の着流しを上から被せられた形だったみてえですね。因みに、第一発見者は深所に住む妖で、董や川吉とも会った事は無いらしく、発見時は酔っ払っていたそうです」

「河童の皿が粉々か……最初の事件と違って、だいぶ恨みが籠もった犯行だよな。加えて、現場が平野だという辺り、川吉が確実に不利になるようにしているし」

「んー……確かにそうですね。つまり、今回の殺しは、董殺しの下手人が川吉に対してだいぶ恨みを持っていた事による仲間割れと見ても間違いは無さそうですかねえ……」

「いや、まだそうとは限らないかな。川吉が前々から多くの恨みを買っている事を考えると、その内の誰かが偶然やらかした犯行だった場合もあり得るからな。ただ、今回の殺しがそういうのでは無く、董殺しの下手人と犯人が同じだった場合、今回の殺しの犯行現場が水場じゃないところを見るに、真の下手人が元々川吉を始末しようとしていた

と考えられそうだな」

「へ……ソイツはどういう事で？」

「さつきも言ったように、河童にとつて水が無い場所というのは、やっぱりだいぶ不利になる。本来河童は、頭の皿が傷付いて力が出なくても水の中にさえ入れればまだ何とかなるはず。しかし、今回は近くに水が無い場所を選ぶ事でそれすらさせないようになっている。それに、水場じゃないという事は、水場が苦手な七之助さんでも犯行が可能なように見せている事にもなるんだよ。もつとも、本当に七之助さんが下手人の可能性もまだあるけどさ」

「うーむ……そうなると、董殺しと川吉殺しに関連性を見出さねえ限り、謎は解けねえことになりやすねえ……」

「関連性、か……」

風之助の言葉を繰り返していたその時、懐からカサツという音が聞こえ、俺は今朝見つけた物達の事を不意に思い出した。

……そういえば、まだこれらを風之助に見せてなかったし、今の内に見せておくか。

そう思いながら件のシトリンの欠片と紙束を懐から取り出すと、風之助はとて不思議そうな表情を浮かべた。

「龍己の旦那、そいつあいつてえ何なんです？」

「これは、今朝見つけた物なんだけど、起きたらその文机の上に置いてあったんだよ」  
「ほー……置いてあったってえ事は、龍己の旦那が寝ている間に置いていった奴がい  
るって事になりやすよねえ」

「そうだな。そして、このシトリン——黄水晶もかなり気になるけど、一番見てもらいた  
いのがかつちの紙束なんだ」

「ふむ……それじゃあ、ちよいと見せてもらいやすね」

「ああ」

そして、風之助の目の前に紙を一枚ずつ置き、風之助が興味深そうに読み始めたその  
時、風之助は突然目を大きく見開き、とても真剣な様子で次々と読み進めていった。そ  
れから数分後、最後の紙を読み終えた後、風之助は勢い良く顔を上げると、目をキラキ  
ラとさせながら興奮気味に話し始めた。

「龍己の旦那……！ こいつあ、本当に貴重な情報ですよ……！」

「だよな。誰がこんな情報を集めたのかは分からないけど、これがあればこの事件は解  
決へ大きく近づくはずだ」

「まったくでさあ……！ にしても……本当に誰がこんな情報を龍己の旦那に渡したん  
でしょうね？ 誰にも気付かれずにここまで情報を集められるなんて、普通は出来や  
せんしねえ……」

「本当にな。そして、このシトリンにもまだ謎がある。細かい傷が付いた友情や初恋の意味を持つ石の欠片、これはたぶん誰かの事を表してると思うんだけど、それが誰なのか分からないんだよな」

「ふむ……なるほど。友情と初恋、それに該当する人物となると、だいぶ限られてきやすね。それに、この紙束が一緒にあつた事も何か意味がありそうですし……」

「そうだな……」

もし、風之助の言う通りだとすると、シトリンは紙束の内容に関連した人物の事を表してる事になるけど、そんな人なんていたか……？

そんな事を考えながら小さく唸り声を上げつつ天井を見上げていたその時、ある一人の人物が頭の中に浮かんできた。

……そうだ、この人ならこの証拠達に該当するかもしれない。もつとも、まだこれは推測に過ぎないけど、調べてみる価値はあるはずだ……！

「風之助、川吉って誰かと常につるんてるような奴だったっけ？」

「へ……？ いや、基本的には川吉だけで行動してるみたいですけど。ただ、深水のどこかに自分だけのアジトを作ってるってえ話は聞いた事ありやすけど……」

「アジト……そこに今までの犯行で奪った物を隠してる可能性は高いよな？」

「そうですねえ……金品を換金するにも川吉だけで行くわけにはいきやせんし、アジト

の中にまだ残してある可能性はあるかと」

「……そっか」

……そうなる、ほぼ確定だろうな。これでたぶんこの事件は解決出来るけど、とても哀しい結末が待っているのは確実だな……。

そんな予感を覚えた後、自分の考えを風之助へと話すと、風之助はとても驚いたようだった。しかし、そう考えた理由を話すと、とても納得した様子を見せたため、俺は風之助にある頼み事をした。風之助はそれを快く引き受けてくれたが、風之助の顔にも少々哀しそうな色が浮かんでいた。そしてそれから数分後、頼み事の準備が完了し、風之助がその依頼をこなすために縁側から飛び立つのを見送っていた時、これから待っているであろう哀しみの結末の事が頭を過ぎり、事件が解決するとは思えない程、気持ちはとても暗かった。

それから一週間後のよく晴れた日、俺は離れに座りながら風之助と一緒に『ある人物』の事を待っていた。あの日、俺は風之助にある二つの場所にとある手紙を置いてきてくれるように頼んだのだが、それがきっかけとなって事件は無事に解決し、深水の街には少しずついつもの日常が戻ってきているらしい。そして、俺は風之助に頼み事をした

際、自分の名前を出さないようにしていたのだが、その人物はどうやら俺がやった事だと勘づいたらしく、ちょうど深水で記事のネタを探していた風之助を見つけると、俺から事件の事について話を聞きたいから、そのための時間を作つてほしいと頼んできたのだという。

……まあ、よく考えてみれば俺がこの件に関わっているのは知つてるわけだし、こう考えるのは自然だったかもしれないな。

そんな事を考えていた時、廊下の方から小さな足音が聞こえ、それを待ちながら静かに背筋を伸ばした。それから程なくして、足音の主は廊下の方から離れへと姿を現し、今の俺の姿を見ると、とても驚いた様子で「……ほう？」と声を上げたが、すぐにいつものような優しい笑みを浮かべると同じように優しい声で話し掛けてきた。

「……お久しぶりです、鈴蘭さん」

「はい、お久しぶりです、『七之助さん』」

その人物——七之助さんは、微笑んだまま頷くと、目の前に敷かれた座布団の横に座り、手に持っていた荷物をスツと俺の目の前に置いた。

「先日は本当にありがとうございます、そのお礼になるかは分かりませんが、こちらをお納め下さい」

「はい、ありがとうございます」

俺はそれを受け取った後、風之助と七之助さんに断つてから3人分の緑茶を用意するために七之助さんから受け取った物——菓子折を持って一度席を立った。そしてお盆に載せた3人分の緑茶を持って戻ってきた後、俺は七之助さんから順番に配っていき、それが終わってから座っていた座布団へと再び座った。

「七之助さん、お店の調子はどうですか？」

「はい、おかげさまでお店は忙しくさせてもらっています。もつとも、蒔まきえ絵さんや翡翠ひすいさんからは、適度に休むように言われ続けているんですけどね」

「ふふ……そうですか、それなら良かったです」

「ええ。ですが……巳介が下手人だったのは、今でも信じられないです……」

七之助さんがとても沈んだ様子で言う中、俺と風之助も少し暗い気持ちで顔を見合わせた。七之助さんからすれば、幼なじみの内の1人が起こした事件でもう1人の幼馴染みを含めた2人の死人を出してしまった事は、やはり心に来る物があるのだろう。

……幼馴染み、か。前の俺にも幼馴染みとか親戚がいたとしたら、やつぱりかなり心配されてるのかな……。

七之助さんの顔を見ながらかつての自分について考えていた時、七之助さんは緑茶を一口だけ静かに飲み、気持ちをすっかり切り替えた様子で再び口を開いた。

「さて……それでは本題に入りましょうか。鈴蘭さん、今回の事件を解決に導いたのは

貴方ですよね？」

「……そう、ですね。ですが、正確には風之助さんや他に手伝つてくれた方の力があつてのことですけどね。それに……私は、ただこうなのは無いかという考えを立て、それを書いた手紙を深水の同心や下手人——巳介さんへ出しただけです」

七之助さんの目をまつすぐに見つめながら答えると、七之助さんはしばらく俺の目を見つめ返した後、緊張が解けた様子で静かに息をついた。

「……やはり、そうでしたか。瓦版では謎の手紙によつて事件は急転直下で解決したと書かれていましたが、そんな手紙を書きそうなのは、貴方くらいですからね」

「その通りです。ただ……私は事件の下手人が七之助さんでは無い事を証明したかっただけな上、目立つ事があまり好きではないので、手紙はわざと筆跡を崩した上で書かせてもらいましたけどね。」

「そういや、そうでしたねえ……いつもの旦那の字とは全く違うように見えやしたから、目の前で書いているのを見ていても、すぐには信じられやせんでしたよ？」

「ふふ、そうでしょうね。風之助さん、あの時はありがとうございました」

「へへっ、礼にはおよびやせんよ、りゆ——鈴蘭の旦那！」

風之助はうつかり龍己の方を呼びそうになつた事で小さく苦笑いを浮かべていたが、七之助さんはそれには気付いていない様子でクスリと笑つた。

「ふふ……風之助さんでしたら、そういった作業には向いていますからね。しかし、どうして今回の事件を解く事が出来たのですか？」

「そうですね……それにはまず、これの事を説明しないとイケないですね」

そして傍らに置いておいたシトリンの欠片と『七之屋』と『蛇ノ目屋』についての情報を書かれた紙束を目の前へと置くと、七之助さんはとても不思議そうな様子でそれらを見始めた。

「鈴蘭さん、これは……？」

「黄水晶の欠片と『七之屋』並びに『蛇ノ目屋』の帳簿の書き写しと評判や奉公人の皆さんからの意見が書かれた物です。あの日——件の手紙を出した日の朝に、私の文机の上にな置かれていた物です」

「……そうですね。しかし、これらは一体どなたが？」

「それは分かりません……起きた時には既に置いてありましたし、それとなく『狐雨福屋』の皆さんには訊いてみたのですが、誰も知らないとの事でした」

「なるほど……つまり、これらのおかげで鈴蘭さんは事件を解く事が出来たという事ですか？」

「はい。七之助さん、事件のためとは言え、お店の帳簿を見てしまった事、本当に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げながら謝罪をすると、頭の上から七之助さんがクスクス笑う声が聞こえてきた。

「別に謝る必要はありませんよ、鈴蘭さん。貴方がこれを残しておいたのは、私に見せる必要があると思つたからですよね？」

「はい。自分が望んで手に入れたわけでは無いとは言え、コレを処分する前にやはり手に入れた事だけは話さないといけないと思つたので……」

「ふふつ、そうだと思ひました。初めてお会いした時から、貴方は恐らく嘘や隠し事が苦手な方だと思つていましたしね。そしてそれは、私に見せた後にすぐ処分するつもりだつたんですよね？」

「……はい」

「それならば問題はありませんよ。それに、見られて困る事は何も書いてはいませんから。だから、もう頭を上げて下さい、鈴蘭さん」

その言葉で俺がゆっくりと頭を上げると、七之助さんはニコニコと笑いながら俺の事を見ており、その笑顔に安心感を覚えた事で、俺も七之助さんに微笑み返す事が出来た。

「七之助さん、本当にありがとうございます」

「いえいえ。それで、これらの力を借りたというのは……？」

「あ、はい。えつと、まず……この事件を解く上で大事だったのは、目に見えない物を読

み解く事だったんです」

「目に見えない物……」

「はい。具体的に言うなら、関係性や思いと言ったところでしようね。この三人が友人関係であるように、七之助さんと巳介さん、そして第一の被害者だった董さんは幼馴染みという関係性があり、他人から見れば何の変哲もない仲の良い三人組だったと思います。しかし、巳介さんと董さんからすれば、それは少し違っていたんです」

「違っていた、とは……？」

「七之助さんからすれば、さつき言ったようなただの仲の良い幼馴染み同士として捉えていましたが、董さんは恐らく七之助さんに対して恋心のような物を抱いていたのだと思います。そしてそれについて、自分の両親にもそれとなく話はしていた。だから、七之助さんが董さんに傘を届けに行こうとした時、董さんの御両親はとても安心したと思います。しかし、この時には既に真の下手人——巳介さんの策が進められていたんです」

「……………」

「董さんが七之助さんを恋い慕っていたように、巳介さんも董さんに恋心のような物を抱いていた。しかし、董さんは七之助さんしか目に無く、七之助さんはそれに気付いている様子は無かった。それに加えて、同じく父親から継いだ店は『七之屋』の人氣に押

され、あまり上手く行っていないかった。その2つの事から、いつしか巳介さんの中には、七之助さんへの憎しみや妬み、そして一向に振り向かない董さんへの愛憎のような感情が生まれ、それに突き動かされる形で今回の事件を思い立ったのだと思います」

「……それを示すのが、その水晶と紙束なんですね？」

「はい。水晶などには石言葉という花言葉のような物があり、黄水晶——シトリンには、『友情』や『初恋』という石言葉があります。しかし、このシトリンには細かい傷が付いており、形も少し歪んでいます。この事から、これを置いていつてくれた方は、巳介さんの中にある歪んでしまった想いに気付き、帳簿の写しなどと一緒に置いておいてくれたのだと思います。」

そして、その歪んだ想いによって、巳介さんはある人物に協力——いや、一方的に利用しようと考えました。それが、第二の被害者であり董さん殺しの実行犯でもある川吉です。川吉は深水では有名な悪人であり、今までに奪った物をしまっているアジトがあるという噂があります。巳介さんは、それを知っていたため、川吉を利用して董さんと七之助さんをどうにかした後、川吉も始末した上で、アジトの金品も奪おうと考えた。一番厄介な商売敵がいなくなれば、自分の店が繁盛する上、奪った金品を怪しまれないように少しずつ売っていけば、自分達の生活は安泰ですから」

「……なるほど」

「そして川吉にそれなりの報酬を提示し、連日酒を奢ったり説得を繰り返したりする事でどうか協力を取り付けた後、巳介さんはまず董さんの方からどうかしようと考えました。川吉は相手がいる女性にも手を出そうとする事から、遊廓などにはよく行っていたと思いますので、それなりの口説き文句などは言う事が出来たはずです。そして時間を掛けて董さんと川吉の仲を深めさせた後、川吉を通して董さんに七之助さんに関しての悪い噂——今回の場合はお店の奉公人に董さんに対しての愚痴などを言っていたと吹き込み、董さんが抱く七之助さんへの感情を悪い物へと変えた。董さんからしてみれば、それなりに七之助さんに好意は示しているはずなのに、まったくそれに気付く様子も無い上、『七之屋』には七之助さん目当ての女性客も多いため、少なからず悪印象は持っていたと思うので、この策を進めるのは苦勞しなかつたでしょう。そして、七之助さんに関しての悪い噂を吹き込んだ日、その日がちようど七之助さんが董さんに傘を届けようとしていた日であり、私と最初に出会った日だつたんです」

「……確かに、そう考えれば董の態度にも納得がいきますね」

『蛇ノ目屋』の奉公人からの意見の中に、巳介さんが仕事中や夜中に一人でどこかに出掛けていく事があつて困つていふという物があつたので、巳介さんは時々抜け出しては自分の策の進み具合を確認したり、川吉との打ち合わせをしていたのだと思います。そしてあの日も恐らくそうで、七之助さんに対しての董さんの態度を見て、そろそろ機は

熟したと思い、次の手へと移りました」

「次の手……ですか？」

「巳介さんは、七之助さんの事は殺してしまうか川吉殺しの罪を被せるつもりだったと思います。董さんの事はまだ愛していたため、川吉との手を切らせて七之助さんと川吉の両名を始末した後、何も知らないフリをして董さんに近付こうと思っていた。そうすれば、自分は望んだ物を全て手に入れられますからね。しかし、ここで想定していなかった事が起き、少しずつ計画の歯車が狂っていきます。想定していなかった事、それは川吉が董さんに計画を話してしまった事です。そしてそれを知らない巳介さんは、計画の成功を疑わずに董さんへと近付きます。しかし、董さんから知らないはずの計画について詰問され、計画の詰めめめを感じながら董さんから拒絶をされた事で、巳介さんはこれ以上計画が破綻する事への恐れと再び湧き上がってきた董さんへの愛憎が重なり、董さんを殺害する事を決意します」

「……では、何故董は私にこの事を話さなかったのですか？ 次の日は、鈴蘭さん達と話していましたが、別に巳介がやっていたように蒔絵さん達に一言声を掛けてくれれば、普通に入ってくる事が出来たはずですよ」

「……これはあくまでも推測に過ぎませんが、董さんは罪悪感から七之助さんと話をする事を躊躇ってしまったのだと思います。片思いではあったものの、恋い慕っていた相

手に対して酷い事を言ってしまったという不安などから、董さんは七之助さんと話をする事を躊躇い、気持ちの整理が付くのを待とうとした。しかし、その時に巳介さんから依頼を受けていた川吉に捕まり、董さんは『七之屋』が閉まって七之助さんが出歩いていてもおかしくない時間までどこかに閉じ込められた。そして川吉によって殺害され、橋の上から川の中へと死体を放り込まれた事で、第一の事件は終了したかのように思われた。ところが、川吉が投げ込んだ場所が、川という大きな水場だった事で、更なる計画の狂いが生じました」

「……私が橋の上からでも川や湖に近付く事すら出来ない事、それを川吉が知らなかったからですよね？」

「はい。しかし、その時に巳介さんは『七之屋』の近くの飲み屋で目撃されていた上、董さんを失う事への思いなどもあって、その日は川吉に死体の情報について確認する事を怠ってしまった。そのため、死体があつてはならない場所にある事を翌日の瓦版で初めて知り、巳介さんは非常に焦ったと思います。一応、七之助さんを容疑者にする事は出来たものの、七之助さんの水場恐怖症については調べれば分かってしまう事ですからね。」

七之助さん、貴方はその事をお客さん達にはもちろん、蒔絵さん達にも話していません。そうですね？」

「……はい。あの時は鈴蘭さん達に話しましたが、この事は特に話す事でも無いと思っていたので、知っているのは今ではお二人と巳介だけです」

「……分かりました。そしてその翌日、川吉に話をしに行つた巳介さんを待つていたのは、川吉からの脅迫だった。恐らく、川吉は巳介さんを良いカモだと感じ、董さんに話したように他の人にもこの事をバラそうとし、そうされたくなければ元の金額よりも多くの報酬を口止め料として払うように言つてきた。しかし、巳介さんにとっては、川吉は既に邪魔者の一人でしか無かつたため、今度こそ七之助さんに捜査の目を完全に向けさせるために川吉には話していなかつた計画の実行を決意した。そして、巳介さんは川吉の要求に乗るフリをして、その場はひとまず話を終わりにし、今度は七之助さんと『七之屋』の様子を見るために、同じく容疑者として疑われている幼馴染みとして『七之屋』へとやつて来た」

「そんな中、ちやうど訪ねてきていた鈴蘭さん達とはちあつたわけですね」

「ですね。そして最初は私達の事を警戒していましたが、あれは私達が深水では見ない顔だつただけでは無く、町人に変装した岡っ引きを警戒していたからだと思えます。しかし、私達がそういった物では無いと知り、巳介さんは警戒を解いた。その後、私達が帰つた後に巳介さんもこれ以上店を空けるわけにもいかないため、『蛇ノ目屋』へと帰つた。しかしこれは、川吉を殺害するための準備をするためでもあつたわけです。巳介さ

んは川吉が河童だった事や七之助さんに罪を擦り付けるために、待ち合わせ場所を水場が近くに無い平地に定めていた。この事から、巳介さんには川吉を確実に仕留める気があった事や川吉への強い憎しみがあつた事が窺えますし、短刀で刺殺していたのもそういった事からだと思います。そして短刀で仕留める上で一番気をつけるべきは、刺した際に飛んできてしまう返り血。それを防ぐためと犯行中の目撃証言に自分の名前が挙がる事を防ぐために、巳介さんは着流しをわざと重ね着した。そしてその後、待ち合わせ場所に来た川吉を殺し、自分は何食わぬ顔で『蛇ノ目屋』へと帰つてきた。その心の中は、とても穏やかとは言えなかつたと思いますが、これで自分の計画はバツチリだという確証はあつたのだと思います。しかし、その翌日に自分の計画や同じ物を親分さんに送つてある旨の手紙が匿名で届き、巳介さんは遂にこれ以上の犯行を諦め、自ら自首をした。

七之助さん、これが一連の事件についての詳細と私の考えです」

俺が話を終えると、七之助さんは哀しみと悔しさが入り交じつたような表情で俯き、涙交じりの絞り出すような声で話し掛けてきた。

「……鈴蘭さん、私はどうするべきだったのでしょうか……？ どうすれば、このような事態を招かなかつたのでしょうか……？」

「七之助さん、たぶんその答えは出ないと思います。昨夜、手代の羅紗らしゃさんが仰つていた

んです。

『お前が誰を信じようとお前の勝手だ。だが、心の内では何を考えているのか分からないのは、人間だけではなく妖も同じだ。目に見える物だけを信じていては、本当に見るべき物を見失うことになる』と……。この事件は、様々な人が見えている物だけを信じ、見えない物を見失っていた事で起きてしまった物です。だから、たとえその時は防ぐ事が出来ても、全員が気付き理解してないとまた同じ事が起きてしまう。そういう事件だったんです」

「ですが……！」

「七之助さん、貴方も本当は分かっているんですよ。今論じるべきは、どうすれば良かったかではなく、これからどうするべきかだと。哀しい事ではありますけど、起きてしまった事件や問題はもう取り返しが付かない。だから、残された私達は同じ事がもう起きないようにするしかない。それが残された者の責務であり、亡くなった人達への手向けなんです」

「責務であり、手向け……！」

震える声でその言葉を繰り返すと、七之助さんは静かに顔を上げた。それに対して俺と風之助は、静かに微笑みながら同時に手を差し伸べた。

「巳介さんの罪についての裁きはまだ決まっていますが、罪は重いいため死罪の可能性

も無くはありません。ですが、もし巳介さんが戻ってこられたその時、巳介さんの本当の裁きを下せて、同じ事が起きないように出来るのは七之助さんだけです」

「俺らじゃあ頼りねえかもしれないやせんが、精一杯七之助の旦那の手助けはするつもりですぜ？」

「だから、一緒に頑張らしましょう、七之助さん」

「俺達がついてやすぜ！ 七之助の旦那！」

「鈴蘭さん……風之助さん……」

七之助さんは涙で目を軽く腫らしながら俺達の手を見つめた後、その手を静かに取り、ニコリと微笑んだ。

「お二人ともありがとうございます。そして、これからもよろしくお願いします」

「ええ、こちらこそよろしくお願いします」

「お互いにこれから仲良くやっていきやしよう！」

「はい！」

そして俺達は、穏やかな日差しが射し込む中で固く握手を交わり、再び顔を見合わせながら外の明るさに負けない程の明るい笑顔を浮かべ合った。

さて……そろそろあの話をする時かな。

握手を交わし終わった後、俺は居住まいを正してから静かに口を開いた。

「七之助さん、この離れに入ってきた時、何かに気付いたような顔をなさっていましたよね？」

「ええ、いつも目立つように付いている鈴蘭さんの耳が無かったので、それには少し驚きました……鈴蘭さん、何かあったのですか？」

「……実はその事で一つだけ、お話ししなくてはならない事があるんです」

「……なるほど。それで、そのお話とは？」

「それは——」

そこで一度言葉を切った後、俺はこれから話す事への緊張で速くなる鼓動と気持ちを落ち着けるためにゆっくりと深呼吸をした。そして落ち着いた事を確認してから、妖狐の鈴蘭ではなく、半人半妖の稲荷龍己として言葉が続けた。

「私——いや、俺が妖狐では無く、半人半妖だという事です」

「半人半妖……一般的に妖と人間の血が半分ずつの存在を指す言葉、ですよね？」

「はい、今まで名乗ってきた鈴蘭も俺の名前の一つですが、それはあくまでも妖狐として振る舞う時の名前で、俺にはもう一つ『稲荷龍己』という人間としての名前があります。その2つがあつて、初めて俺は半人半妖なんです」

「なるほど……しかし、どうして半人半妖に？」

「それが——」

俺は半人半妖になった経緯——人間時に訪れた死や施された『反魂の秘術』、そして『狐雨福屋』においての俺の立ち位置などについて話した。そして話し終えると、七之助さんはとても興味深そうな様子で、「ふむ……」と一言だけ口にし、軽く腕を組みながら納得顔で小さく頷いた。

「なるほど……これで鈴蘭さん——いや、龍己さんが奉公人でありながらこの離れで生活している理由が分かりました。『狐雨福屋』さんは、一奉公人にもまるで実の家族のように接するという話は聞いた事がありました。ここまでの待遇を受けられるのは、よほどの事情が無いとあり得ませんからね」

「元々、俺はどこかの奉公先や長屋を紹介してもらえれば十分だったんですが、旦那様——龍三郎さんの好意を無碍にする事がどうにも出来なかつたですし、申し出自体はともありがたかつたので、こうして住まわせて頂く事にしました。ですが、いつかは名実共にこの『狐雨福屋』の奉公人の一人として働かせて頂くつもりです。それが俺に出来る唯一の恩返しですから」

「ふふ……なるほど。龍己さんは、本当に律儀な方なんですな」

「全くですぜ……それに、この前だつて燃えさかる火の中の子供を助けるために、せつかく助かつた命まで賭して、その子供を助け出しやしたしね」

「あ、たぶんその記事は読んだ覚えがあります。龍己さんはあの件にも関わっていたの

ですわね」

「へい、それで火傷の治療のために一週間ほど出掛けられずに、この離れで本を読んだり俺と話したりして過ごしてやしたよ。ただ——」

風之助はそこで一度言葉を切った後、視線だけ俺へと向けつつ、ニヤツとした笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「そんな旦那だからこそ、俺はこうして一緒にいてえと思えるし、今回みてえな時には助けたいと思える。旦那とダチになつてからの毎日は、スゴく楽しく刺激的な事ばかりで、飽きる暇すらねえくれえですからね」

「……俺も同じ気持ちだよ。いつもありがとうな、風之助」

「へへっ、こちらこそ！」

風之助の言葉に微笑みながら頷いていると、七之助さんはクスリと笑いながら俺達に話し掛けてきた。

「お二人とも、本当に仲がよろしいのですわね」

「ええ、この世界に来て初めての友達ですし、なんだかんだほぼ毎日一緒にいますから」  
「へへ、確かにそうだ。俺の仕事が忙しい時は別としても、初めて会った日以降の朝には必ず会ってやすし、その後も朝飯の後には記事のネタ探しを手伝ってもらっていやすからね」

「そうだな」

ひよんな事から訪れたこの妖世界、そして不忍だが、今の俺にとつてはとても住みやすい場所であり、そして龍三郎さんやお嬢様、風之助や七之助さんといったとても大切な存在に囲まれ、俺はとても幸せな毎日を過ごす事が出来ている。住み始めてからまだ日は浅いものの、この妖世界は既に第二の故郷のような物になっていた。

たぶん、これからも今回みたいな事に巻き込まれる気はするけど、皆の平和な毎日のためにも、皆と協力して精一杯頑張っていく事にするか。

そんな事を考えながら小さく笑みを浮かべていた時、七之助さんが「……そうだ」と何かを思い出した様子で小さく独り言ちると、ニコリと微笑みながら話し掛けてきた。

「お二人とも、少しよろしいですか？」

「あ、はい。何でしょうか？」

「今回の件や龍己さんの秘密を教えて頂いたお礼に、お二人にお話ししたい事が2つあります」

「お礼つて……そんな大層な事はしてませんよ？」

「ふふ、私にとつてはかなり大切な事でしたし、本人達が話して欲しいと言うので」

「本人達……？」

「はい、それが……私と蒔絵さんの二人です。昨夜、蒔絵さん本人からお二人に話して欲

しい事があると言われまして、その内容があまりにも意外だったので、その理由を聞いてみたのです。すると、お二人なら他言はしれないと思つた上、お二人には知つておいて欲しいからとの事だったので、こうして私が話したい事と一緒に話しようと思つたんです」

「なるほど……分かりました。どんな内容かは分かりませんが、他言はしないと約束します」

「もちろん、俺もでさあ」

「ありがとうございます。それでは、話を始めますね」

ニコリと微笑みながら言つた後、七之助さんは小首を傾げながら話を始めた。

「お二人は、私が少々特殊な生まれだという噂を聞いた事はありますか？」

「そういえば……風之助からそんな話を聞いた事がありますね」

「そういや、そうでしたねえ。ただ……どう特殊なのかは、全く分からなかつたんですがね」

「ふふ、そうでしょうね。この事は、私も『七之屋』を継ぐ事になつた時に教えてもらいましたから。そしてその生まれなのですが、まず私の一族は神様の使いとされる白蛇様の加護を受けている一族なのだそうです」

「白蛇の加護……もしかして、七之助さんの肌が純白なのって……」

「はい、そうだとされています。もちろん、一族の人は全員が純白の肌です。そして、私が生まれる前夜、母の夢の中にその白蛇様が出てきたようなのですが、その時に神託のような物を受けたらしいのです」

「神託……」

「はい。『そなたの子は、様々な者から好かれる反面、それと同じだけの強さの恨みも受ける事となる。しかし、青龍をその身に宿す者がその助けとなり、白蛇と青龍はお互いに支え合うだろう』」

まだ少しだけ続きはありますが、これが白蛇様の予言の一部なのだそうです」

「青龍を身に宿す者……あれ、青龍つてもしかして……」

「はい、私はそれは龍己さんの事だと思っています。実際、今回の事件で助けて頂きましたし、支えて頂きましたからね」

「七之助さん……」

「ふふ、予言にあったからではありませんが、これからは私も白蛇様の加護と共に龍己さんの助けになれるように頑張っていけますね」

「……はい、ありがとうございます、七之助さん」

「どういたしました。そしてもう一つ、蒔絵さんの話なのですが、実は蒔絵さんにはある力が備わっているのです」

「力、ですか……」

「ええ。その力というのが、『邪な欲望や心を視認でき、周囲の存在に訪れる危機を予知できる』という物でして、あの日——巳介が訪ねてきた日に少し暗かったのは、その力で巳介から邪なものが見えたからだだったようです」

「なるほど……という事は、蒔絵さんもそういつた力を持つ一族の生まれなんですか？」  
「そうだとは思いますが……実は、私もよく分かっていないのです」

「わかつていないって……蒔絵さんが奉公に来た時に話は聞かなかったんですかい？」  
「実は……蒔絵さんは、奉公に来たわけではなく、私が『七之屋』を継いだその日にお店の近くで倒れていた方だったんです」

「倒れていた……？」

「ええ、体も傷だらけで着物もボロボロな上、とても衰弱していたので、とりあえず翡翠さん達にも手伝って貰いながら手当などを施したのです。そしてそれらも落ち着いたところで話を聞いてみたのですが、記憶を全て失っていたようでして、唯一分かったのが先程の力の存在だけだったのです」

「記憶喪失……俺も自分の過去に関する記憶が無いから、他人事とは思えないですね……」

「……そして、蒔絵さんについてどうしたものか悩んでいた時、先代——父さんが蒔絵さ

んに奉公人として働いてもらうのはどうかと言ってくれたのです。蒔絵さんは、偶然にも私と同じ色白で、普段から笑顔や仕草がとても可愛らしい方ですので、先代からすれば表の方でお客様の相手をするには合っていると思つたのだと思います。そして私も同意見だったので、蒔絵さんには翌日から奉公人の一人として働いて頂く上、『七之屋』の近所にある長屋に住んでもらう事にしました。因みに、蒔絵という名前なのですが、蒔絵の小物入れを持っていた事から私が付けた名前です」

「なるほど、七之助さんと蒔絵さんにはそんな事情があつたんですね……」

「龍己の旦那の話も中々だと思いやしたけど、七之助の旦那達も中々の物だつたんですね……」

「そうかもしれない。ですが、私は今の生活がとても好きですし、毎日が幸せだと感じています。蒔絵さんも同じように考えてくれていると、とても嬉しいですけどね」

頭を小さく掻きながら少し不安げに言う七之助さんに対し、俺は微笑みながらそれに答えた。

「大丈夫ですよ、七之助さん。まだ数回しか会っていませんけど、蒔絵さんの笑顔は本当の笑顔だと思いますから」

「へへっ、確かにそうだ。あんなに良い笑顔を浮かべられるのは、七之助の旦那を始めとした『七之屋』の面々との毎日が楽しいから以外に無いと思いやすぞ?」

「……お二人とも、ありがとうございます。こんな私達ですが、これからもよろしくお願  
いしますね」

「はい、こちらこそよろしくお願いますね、

七之助さん」

「こちらこそよろしく頼みやすぜ、七之助の旦那！」

そして再び固く握手を交わした瞬間、風之助と七之助さんから優しさや信頼といった  
物の波動みたいな物が伝わってきたような気がした。

これからも色々大変な事はあるかもしれないけど、皆となら絶対に乗り越えられる。  
根拠は無いけど、何だかそんな気がする。だから、これからも皆と一緒に精一杯頑張っ  
ていこう。

爽やかな春風が吹き抜け、穏やかな陽の光が射し込む中、俺は風之助達の笑顔を見な  
がらそう心から誓った。

## 第7話 穏やかな日常と新たな決意

深水の事件から一週間が過ぎた頃、いつものようにお世話になっている『狐雨福屋』の面々——主の龍三郎さんやお嬢様の碧葉さん達と一緒に朝食を食べていた時、不意に龍三郎さんが「……そうだ」と言っただかと思うと、とても穏やかな笑みを浮かべながら話し掛けてきた。

「龍己君、本日はどなたかとのお約束がありますか？」

「いえ、今のところは特に無いですね。風之助は午前中に草吉さんと一緒に記事のネタを探すために遠出すると言っていましたし、七之助さんもまだまだ『七之屋』の方が忙しいと昨日言っていたので、今日もこの不忍の街の探索をしようかと思っていました」

「そうでしたか。では、よろしければ午前中だけ私の用事に付き合って頂けませんか？」

「あ、はい。それはもちろん大丈夫ですけど、俺で本当に大丈夫ですか？」

「ええ、むしろ龍己君と一緒にの方が一番の用事なので、心配はいりませんよ」

「……分かりました。それなら喜んでお供させて頂きます。因みに、その用事に何か必要な物などはありますか？」

「いえ、特に遠出をするわけでも無いので、これといって必要な物はありませんよ」

「分かりました」

「はい、それではよろしく願います」

龍三郎さんの笑顔に対して俺も笑顔で頷いて応えた後、俺達は再び朝食を食べ始めたが、先程の龍三郎さんの言葉がどうにも気になっていた。

俺と一緒にのが一番の用事、か……。この妖世界に来てから、まだ約1ヶ月の俺に務まる用事なんて全く想像がつかないけど、せつかく龍三郎さんが誘ってくれた事だし、どんな用事でも精一杯こなさないと。

心の中で静かに決意を固めた後、その用事に向けて元気と気力を付けるためにしっかりと朝食を食べ進めていった。

「……よし、これで一応準備は出来たかな」

約1時間後、住まわせてもらっている離れの中でそう独り言ちた後、持っている荷物について軽く確認をした。

「えーと……財布に筆と墨と和紙、それと水晶の勾玉もいつも通り首に掛けてるし、こんなもんで良いよな」

龍三郎さんは特に必要な物は無いと言っていたけど、やっぱりいつも持ち歩いている

物くらいは必要な気がするし、たぶんこれで良いはずだ。ただ——。

「どこに行くのか全く見当が付かないよな……遠出をするわけじゃないとは言っていたから、不忍の中とか深水の街とかだとは思うけど、何かの買い出しなら俺よりも羅紗さん達の方がベストだし……」

一応、俺の世間体は『狐雨福屋』の一奉公人だが、今の俺の仕事はこの不忍の街などを巡ってこの妖世界や様々な妖達に慣れる事なので、主の龍三郎さんと一緒に仕事に関する物を買に行くには、流石にまだ力不足な気がする。けど、龍三郎さんは俺と一緒にのが一番だと言っていたし……。

用事の内容についてあれこれと考えてみたが、やはりどんな内容なのかが全く分からず、俺は一人溜息をついた。

「はあ……ダメだ、やつぱり全く見当が付かない。となれば、ここはもう素直に付いて行って、任された事を全力でこなすしかない。ここでお世話になっている以上、俺も『狐雨福屋』の一員なわけだし、どんな内容でも精一杯頑張ってみよう」

軽く水晶の勾玉を握りながらそう独り言ちていた時、廊下の方から誰かが歩いてくる足音が聞こえたため、俺はその足音の主が近付いてくるまで静かに待った。すると、廊下の方から顔を出したのは、意外な事にお嬢様の碧葉さんであり、その表情には少しの不安と緊張の色が浮かんでいた。

「あれ……お嬢様、どうかされましたか？」

「あ、はい……実は今朝お話しされていた用事に私も一緒にする事になったので、よろしければ貴方と一緒にお父様のお部屋まで準備が出来た事を伝えに行きたいなと思いまして……」

「なるほど、そうでしたか。分かりました、こちらの準備はもう出来ているので、これから一緒に参りましょうか」

「は、はい……」

すると、碧葉さんの表情からさっきまでの不安と緊張は一瞬にして無くなり、その代わりに嬉しさと楽しさといった感情が浮かんだとても良い笑顔へと変わった。俺はその様子に安心感を覚えた後、さっきの言葉の通りに碧葉さんと一緒に龍三郎さんの部屋へと向かった。

碧葉さんと一緒に準備が出来た事を龍三郎さんに伝えた後、俺達は揃って店先の方へと向かった。すると、店先では番頭である天狐てんこの伊織いおりさんと手代の羅紗さんが待つており、龍三郎さんは二人へ向かってニコリと笑いかけると、穏やかな様子で二人へと話し掛けた。

「それでは、留守の間は頼んだよ、二人とも」

「畏まりました、旦那様。お気を付けて行ってきて下さいませ」

龍三郎さんの言葉に伊織さん達が恭しく頭を下げながら答えた後、龍三郎さんはそれに満足げに頷くと、俺と碧葉さんの顔を見ながら微笑みかけた。

「それでは、出発しましょうか」

「はい」

揃って返事をした後、俺達は『狐雨福屋』を出発し、活気溢れる不忍の街の中を歩き始めた。すると、道行く妖達が次々と龍三郎さんに挨拶の言葉を掛け始め、龍三郎さんもそれに対して丁寧な返事をしていった。そしてその様子を見て、俺は思わずクスリと笑っていた。

龍三郎さんは、本当にいつでも丁寧な人——いや、妖なんだな。だから、『狐雨福屋』もあんなに繁盛してるんだろうし、俺も『狐雨福屋』で働くにあたってこういうところは見習っていく必要はありそうだな。

龍三郎さんの様子を見続けながらそんな事を考えていた時、隣を歩いていた碧葉さんが優しい表情で話し掛けてきた。

「龍三郎さん」

「あ、はい。お嬢様、どうかされましたか？」

「龍己さんは、龍己さんらしいやり方で良いと思いますよ。」

「……………え？」

「ふふ……………今、お父様のやり方を見習わないといけない、と考えていらつしやいましたよね？」

「は、はい。これでも一応、『狐雨福屋』の一奉公人ですので……………いつかは『狐雨福屋』での仕事をする上で、龍三郎さん——旦那様のように振る舞えるのが一番だと思ひまして」

「確かにお父様は、いつでもお客様には丁寧ですし、羅紗や他の奉公人の皆さんにもしっかりと接しています。ですが、それはあくまでもお父様らしいやり方なのだと思ひ思うのです」

「旦那様らしいやり方……………ですか？」

「はい。恐らく龍己さんも分かつてらつしやると思ひますけど、誰にでもその人にあつたやり方という物があります。なので、お父様のやり方はあくまでも参考までに留め、龍己さんはそこから龍己さんらしい方法を見つけるのが一番だと私は思ひます」

「俺らしいやり方を見つけていく、か……………」

「ええ。羅紗に射貫かれてしまつた時や火事の中から子供を助け出した時は、とても心配になりましたけど、それでも私は……………今の龍己さんのどなたにでも精一杯になれると

「ころやとても優しいところが好きですから」

「お嬢様……」

優しい表情で言った碧葉さんの言葉は、俺の胸にスーッと染み通っていき、それと同時に心の奥底が静かに暖かくなっていくような気がした。

俺らしいやり方、か……。確かに誰かのやり方を真似ようとしても、それが合わなかったら意味は無いし、最悪の場合更に迷う事にもなりかねない。それなら、自分に合うやり方を模索して、それをひたすら貫くのも手かもしれないな。

碧葉さんの言葉からそう感じた後、静かに微笑みかけながらお礼を言った。

「ありがとうございます、お嬢様」

「いえ、龍己さんのお役に立てたのなら、私はそれだけで嬉しいです。後、それと……」

「はい、何かございましたか？」

「私の事をこれからは碧葉と呼んで頂けると、とても嬉しいです」

「え……でも、よろしいんですか？ 一応、俺は『狐雨福屋』の奉公人なのですが……」  
「はい。お父様の事をお店の中では、名前ですんでいらつしやるのを見ていて、私もそうして欲しいと思っていましたので、お店の中や私と一緒にの時だけでも名前ですんで頂けたらと思ったのですが……やはりダメでしょうか？」

「いえ、そんな事は……ただ、本当によろしいんですか？」

「はい、もちろんです。そして、その時は話し方も少し崩して頂いて大丈夫ですよ」  
「……分かりました。それでは、これからお店の中などでは、『碧葉さん』と呼ばせてもらいますね」

「ふふ……はい、よろしく願います」

碧葉さんはとても嬉しそうな様子で言うと、懐から小さな帳面を一冊取り出し、さらさらつと何かを書き付け始めた。

「碧葉さん、それは……？」

「これは私が小さい頃から付け続けている『初めて帳』で、毎日の中で何か初めての事があった時、日付と場所とあった出来事を書き留めておく事になっているんです」

「あ、なるほど……それで、今も初めての事を書いていたという事ですか？」

「はい。初めて龍己さんから名前と呼んで頂いたので、今はそれを書いていたのです」

「ふふつ、そうでしたか。今日、他にも色々な『初めて』が見つかると思いますね」

「はいー」

俺の言葉に碧葉さんは満面の笑みで返事をする、「『初めて帳』を楽しそうにしまい始めた。

初めての事を書き込む帳面か……俺は日記を毎日書いているけど、そういう風な物が見つかったら書き留めておくのも結構良いのかもしれないな。

楽しいな碧葉さんの様子を見ながらそんな事を考えていた時、龍三郎さんの方からクスリと笑う声が聞こえてきた。

「やはり龍己君は、碧葉からとても好かれてるようですね」

「というところ……?」

「碧葉のその『初めて帳』の事を知っているのは、実は龍己君以外では私と羅紗しかいないんです」

「そうなんですか?」

「ええ、それに、碧葉が自分から名前と呼んで欲しいと言うのも私が知る限りではこれが初めてです。つまり、龍己君はそれだけ碧葉から好かれているという事ですね」

「なるほど……」

「碧葉は友達も多い子なのですが、あまり自分から話し掛けていく方では無く、いつも誰かの案に乗ったり人の話を聞いたりする方が多いので、私としてはそこだけが少し心配でした。ですが——」

龍三郎さんはとても優しい視線を碧葉さんへ向けると、心から嬉しそうな笑みを浮かべた。

「今のうちに、自分から意見を言ったり名前と呼んで欲しいと言ったりする相手が出来た事はとても嬉しく思っています。」

龍己君、これからも碧葉と仲良くしてあげて下さいね？」

「はい、もちろんです」

龍三郎さんの言葉に対して力強く頷きながら答えると、龍三郎さんはとても嬉しそうに頷いた。

俺自身も碧葉さんと話すのは楽しいし、風之助や七之助さんと一緒にいる時とは別の安心感があって、とても心地良いと思っている。だから、この関係性はこれからも大事にしていきたいといけないな。

心からそう感じながら強く決意を固めた後、俺は龍三郎さん達と一緒に他愛ない話をしながら不忍の街を歩き続けた。

出発してから小半時が過ぎた頃後、俺達は不忍の外れにある墓地のような場所へと着いた。そこには、様々な形の墓石がずらっと並び、墓参りに来たと思われる妖の姿もちらほらと見えていた。

「ここって……墓地、ですよね？」

「ええ、そうです。さて……それでは早速準備をしましょうか」

その言葉に俺と碧葉さんは頷いた後、龍三郎さんと一緒に墓参りの準備を始め、それ

を終えた後に一基の墓石の前へとやって来た。墓石自体はとても一般的な角柱状の物だったが、表面には傷や汚れが一つも無い上にとてもよく磨かれていた事から、ここに眠っている妖が龍三郎さん達にとつてとても大切な存在だった事がハッキリと見て取れた。

……もしかして、ここに眠っているのって……。

「龍三郎さん、こちらに眠っているのは……」

「ええ。お察しの通り、私の妻——菖蒲あやめです」

「……やはり、そうでしたか」

実は、菖蒲さんが亡くなっている事自体は、俺が火傷の治療で外出禁止になっていた時に龍三郎さんから聞いており、その時に菖蒲さんがどんな人だったのかも龍三郎さんが話してくれていた。菖蒲さんとは、龍三郎さんがまだ俺と同じくらいの歳の時にお客様の一人として出会ったようで、お互いに一目惚れだったのだという。その後、交際も順調に進んでいき、そのまま無事に結婚。そしてその内に龍三郎さんが『狐雨福屋』を継いだり碧葉さんも産まれたりと、とても幸せな毎日を送っていた。しかし、碧葉さんが5歳になった頃、菖蒲さんは重い病に罹り、龍三郎さん達の必死な看病の末、哀しい事に帰らぬ人となった。龍三郎さんは当然哀しんだのだが、闘病中だった頃の菖蒲さんが掛けてくれた言葉があったおかげで、それからすぐに仕事へと復帰し、元々人気が高

かった『狐雨福屋』を更に繁盛させていったのだという。

……やっぱり、言葉や思いの力って偉大だな。

龍三郎さんから聞いた話を思い出しながらそう感じた後、龍三郎さん達と協力して墓やその周りの掃除などを行い、それをしっかりと終えてから俺達は悼む気持ちを込めながら菖蒲さんのお墓へ手を合わせた。

……菖蒲さん、俺はまだまだ力不足ですが、これから龍三郎さん達や『狐雨福屋』の皆さん、そしてこの不忍や深水で出来た友達を支えていけるように精一杯頑張つていきます。

そう心の中で静かに念じながら手を合わせた後、俺達はそのまま帰る準備を整えると、龍三郎は少し哀しそうな笑みを浮かべながら俺達に声を掛けてきた。

「さて……それではそろそろ戻りましょうか」

「はっ」

そしてそのまま墓地を後にしようとしたその時――。

『頑張つてね、不思議な半人半妖さん』

そんな声が聞こえた気がし、俺が静かに菖蒲さんのお墓の方へ向くと、龍三郎さん達も不思議そうな表情を浮かべながら菖蒲さんのお墓をジッと見つめていた。

「今……声が聞こえましたよね？」

「……はい、あれは間違いなく菖蒲の声でした」

「……もしかしてお母様は、私達の事をずっと見守ってくれていたのかもしれないですね……」

「……そう、ですね。菖蒲は……自分の事よりも他の方の事をいつも心配していましたから、亡くなった後も私達の事をずっと見守ってくれていたのかもしれない」

そう静かに言う龍三郎さんとそれに静かに頷く碧葉さんの目にはうつすらと涙が浮かんでおり、その表情には哀しみと喜びが入り交じっていた。

頑張って、か……応援をしてもらった以上、頑張らないわけにはいかないよな。この命に掛けても、龍三郎さん達や風之助達のためにこれからも自分らしく頑張っていく。

龍三郎さん達の顔を見ながら決意を改めて固めていた時、龍三郎さんは涙を懐紙で拭ってからニコリと笑いかけてきた。

「それでは、今度こそ帰りましょうか」

「はい」

「はいー」

龍三郎さんの言葉に俺達が声を揃えて答えた後、俺達は先程の菖蒲さんの言葉をしっかりと胸に抱きながら墓地を後にした。

数分後、不忍の街の中を歩いていたら時、不意にある事が気になり、その事について龍三郎さんに訊いた。

「龍三郎さん、一つ訊いても良いですか？」

「はい、何でしょう？」

「俺に施してくれた『反魂の秘術』ですけど、どうして菖蒲さんに使わなかったんですか？」

「……ああ、その事ですか。実は、私も最初は最後の手段として考えていたのですが、その事を知った菖蒲に弱々しい笑みを浮かべながらこう言われたんです。

『それは、いつか本当に必要な時が来るはずだから、その時に本当に必要な人に使ってあげて』と……。恐らくですが、菖蒲はその時に何かしらの予感を覚えていたのだと思います。だから、あんな事を私に言った。私はそう考えています」

「……つまり、俺は菖蒲さんにも救われた事になりますね」

「ふふ、そうかもしれません。ですが、私はこの選択を後悔していませんし、菖蒲の事を誇りに思っています。菖蒲がああ言ってくれた事で、私達は同じだけの優しさを持ったとても大切な存在に会えたのですから」

「龍三郎さん……」

「龍己君、今回君にお墓参りに付き合ってもらったのは、菖蒲に君を紹介したかったからなんです。あの時の言葉のおかげで、菖蒲と同じだけの優しさを持ったとても素晴らしい人物——実の家族と同じように想える人と出会えた、とね」

龍三郎さんがとても優しい表情で俺を見ながらそう言葉を締め括った瞬間、俺の心が奥底の方から春の陽気のようにポカポカしてくるのを感じた。

実の家族と同じように想える、か……。そう言ってもらえるのは、何だかスゴく嬉しいな。

龍三郎さんの言葉から伝わってくる暖かさや親愛の気持ちを噛みしめていたその時、後ろの方からとても元気の良い声が聞こえてきた。

「……おーい！ 旦那方ー！」

「え……？」

揃って振り返ると、とても嬉しそうな笑みを浮かべながら飛んでくる風之助とその後ろから静かに歩いてくる草吉さんと七之助さんの姿が見え、風之助はそのままスツと俺の肩に着地し、スクツと立ち上がりながら挨拶をしてきた。

「旦那方、こんにちはです！」

「ああ、こんにちは」

「こんにちは、風之助さん」

「こんにちははです、風之助さん」

「へい！　へへっ、こんなところで旦那方に会えるなんて、今日の俺はかなり運が良いみてえだ！」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……確か今日は遠出してたはずだよな？」

「へい、その通りで。だが、思ったよりも早めに記事のネタが見つかったもんで、帰ってくるのを予定よりも早く切り上げたんでさあ」

「なるほどな」

風之助と話をしている内に草吉さん達も追いつき、草吉さん達はペコリと頭を下げながらそれぞれ挨拶の言葉を口にした。

「……皆さん、こんにちは」

「こんにちはは、皆さん」

「こんにちはは、草吉さん、七之助さん」

「草吉さん、七之助さん、こんにちは」

「こんにちははです、草吉さん、七之助さん」

そして挨拶を終えた後、今度は七之助さんの方へ顔を向けた。

「七之助さん、お店の方は大丈夫なんですか？」

「はい。私はもう少し頑張ろうとじていたのですが、蒔絵さん達からまた少し休むように言われてしまいましたね。それで時間を確認したところもう少しでお昼頃だったので、龍己さん達と一緒にお昼ご飯を頂くと思うて不忍へ向かって歩いていた時にちょうど風之助さん達とお会いしたんです」

「なるほど。だから、一緒にいたんですね」

「はい、その通りです」

七之助さんがクスリと笑いながら答えた後、龍三郎さんはニコリと笑いながらコクンと頷いた後、俺達の事を見回しながら声を掛けてきた。

「それなら、これからこの全員で少し早いお昼休みにしましょうか。もし、皆さんさえ良ければですが……」

「へへ、俺はもちろん大丈夫ですぜ！ さっきまで色々飛び回っていた分、正直腹も空いちまっていやしたから」

「……風之助と同じく大丈夫です。これから記事を書くには、休息と食事が必要でしたから」

「私ももちろん大丈夫です」

「俺も大丈夫です、龍三郎さん」

「お父様、私ももちろん大丈夫です」

「分かりました。それでは早速参りましょうか」

龍三郎さんの言葉に揃って頷いた後、俺達は不忍の街の中を話をしながら歩き始め、皆の楽しそうなその様子に、俺は満ち足りたような気分になった。

俺にはこんなにも色々な友達や仲間、そして実の家族同然の人達がいる。そんな皆のためにも、この暖かくてキラキラと輝く絆は、これからも大事にしていこう。

春の気候のように穏やかでも暖かな思いをしつかりと胸に秘め、俺は皆と一緒に楽しく話をしながら街の中を歩いていった。

## 第8話 天狗の願いと難題に挑む狐

この世界——妖世界にある妖怪街・不忍に住み始めてから1ヶ月が過ぎた頃のある日の朝、俺はお世話になつてゐる呉服問屋件仕立屋である『狐雨福屋』の主人、龍三郎さんの手伝いとして荷物持ちをしていた。

……うん、今日も不忍は平和だな。

声を張り上げながら商いに励む商売人や楽しそうに話をしながらすれ違う妖達の姿を見ながらそんな事を考えていた時、隣を歩いている龍三郎さんが申し訳なさそうに小さな声で話し掛けてきた。

「龍三郎君、私の用事を手伝つて頂き本当にありがとうございます。荷物、重くは無いですか?」

「あ、いえ……これくらいへっちゃらです。それに、俺もいつかは『狐雨福屋』でしつかりと働くつもりなので、これはその予行練習みたいな物だと思つていますし、いつも龍三郎さんを始めとした『狐雨福屋』の皆さんにはお世話になつていますから。もし、他にも何か手伝える事があれば、遠慮無く言つて下さい」

「……分かりました。ですが、無理だけはしないで下さいね？」  
 「はい、もちろんです」

龍三郎さんに笑みを返し、視線を再び前方に移したその時、向こう側からとある妖が歩いてくるのが見え、その意外さから俺は思わず「え……？」という声を上げてしまった。そして、その妖は俺達の姿——正確に言うなら龍三郎さんの姿に気付くと、小さな溜息をつきながらゆっくりと近付いてきた。

「……まさか店で留主と言われ、適当に捜そうとした矢先に会おうとはな……」

「おや……お久しぶりです、涼風丸さん。すずかぜまるこうしてお目にかかるのは久しぶりでしょうか？」

「おおよそ、2か月ぶりだ。ここ最近、娘の事で中々山を下りられずにいたからな」

妖——大天狗の涼風丸さんは、龍三郎さんからの問い掛けに答えた後、隣に立つている俺に冷たい視線を向けた。そしてその視線から、俺に対しての嫌悪や憎しみのような物が感じていた時、涼風丸さんは視線を逸らすこと無く再び龍三郎さんに話し掛けた。

「龍三郎、この妖狐もどきはお前の新しい召使いか何かか？ 姿こそ妖狐その物だが、此奴からはあの忌まわしき人間の気配を感じるぞ？」

「召使いではありませんよ、涼風丸さん。彼は元人間の半人半妖で、現在はこうしてお手伝いをしてもらいながら『狐雨福屋』の離れに住んで頂いている方なのです」

「ふん……龍三郎、お前は本当に酔狂な奴だ。何か事情があるのだろうか、半人半妖などという人間と妖のあいのこを住まわせたところで、大した得にもならんだろう」

「私は彼の事を損得勘定で計るつもりはありませんが、先日の深水の一件を解決したのは彼なので、一概にはそう言いきれないと思いますよ?」

「さて……それはどうだろうな。妖の中には、人間を憎む者もいるのは、お前も当然知っているはずだ。となれば、此奴がいる事でいらぬ厄事に巻き込まれる可能性も無くない。その時、お前は自身の娘や店の者を守りつつ、此奴の事も守れるというのか?」

涼風丸さんがどこか挑戦的な目で問い掛けると、龍三郎さんは迷う事なくコクリと頷いた。

「私自身少々武術や妖術には心得がありますし、貴方を含めとても頼りになる方を知っていますから、問題はありませんよ」

「……我がいざという時には此奴のために何かをすると考えているならば、その甘い考えは捨てた方が良いでしょう。我が人間に味方する気になる事などあり得ぬからな」

「そうですか。ですが、もうじき涼風丸さんにも彼の事が分かる時が来ると思えますよ? 貴方が先程『狐雨福屋』を訪れた理由が、私の考え通りだとすれば、そのため彼の力を借りる必要は出てくると思いますし、それでなくとも彼の力を貴方が認める日は、絶対に来ると確信していますから」

龍三郎さんがいつも通りの和やかな笑顔を浮かべながら言うと、涼風丸さんはその龍三郎さんの様子を少し訝しげに見ながら静かに口を開いた。

「……相変わらず考えが読めぬ奴だ。まあ良い、もし本当にその時が訪れたならば、此奴の味方をしてやると約束してやろう。もつとも、その時が来るとは限らん上、此奴が解決できる可能性など万に一つも無いがな」

「その時はそれでも問題ありませんよ。私は好き嫌いを強制する気は毛頭ありませんので」

「ふん……そうか。では、昼頃にもう一度店の方に出向くでしょう」

「畏まりました。涼風丸さんが訪ねていらつしやるのを心よりお待ちしておりますね」

「……ああ」

そして、涼風丸さんはもう一度俺に対して睨み付けるように視線を向けた後、横の方をすり抜けながらそのまま俺達が来た方へと歩き去って行った。

人間に憎しみを持つ妖……か。どんな過去があつたのかは分からないけど、やっぱりそういう妖もいるんだな……。

涼風丸さんが消えていった先を見ながらどこか寂しさを覚えていると、龍三郎さんがまた申し訳なさそうに話し掛けてきた。

「すいません、龍己君。彼——涼風丸さんは、私の古い友人なのですが、過去に人間との

間に何かあったようで、あのよう人間に対して強い憎しみを抱いているのです」

「俺は大丈夫ですよ、龍三郎さん。人間に憎しみを抱く妖がいるのは、元々分かつている事ですし、その覚悟は元からしていましたから。まあ……寂しさが無いと言えば、嘘になりますけど、そういった妖がいるのは仕方がない事ですから」

「……ふふ、貴方は本当に強いですね。ですが、風之助さんや七之助さんにでも良いので、時には弱さを見せておく事も必要ですよ。心を強さでガチガチに固めてしまうと、いざという時にとっても辛い思いをする事にもなりますから」

「分かりました。その言葉、肝に銘じておきます」

ニコツと笑いながら答えると、龍三郎さんも安心した様子で笑みを返してくれた。そして、再び『狐雨福屋』がある方へ体を向けた後、俺達は最近読んだ本の事などについて話をしながら『狐雨福屋』に向けて歩き始めた。

「ふーむ……人間に憎しみを抱いている大天狗の御仁ですかい……。旦那の話聞く限り、憎しみの根はだいぶ深いところにあるにありそうな感じがしやすねえ」

「うーん……やっぱりそうだよな……」

昼頃、俺は鎌鼬の風之助と一緒に行きつけの蕎麦屋——『越野庵』で昼食を取りつつ

涼風丸さんと出会った時の話を風之助にした。そして、話を終えると風之助はその小さな腕を組みながら難しい顔でそんな感想を述べ、俺も似たような難しい顔で小さく唸った。涼風丸さんがあそこまで人間に憎しみを抱いている以上、無理に仲良くなる気は無いが、『狐雨福屋』の奉公人としては少しでも話が出来る程度にはどうか歩み寄りたいたとは思っていた。

けど、あの様子だとそれもだいたい難しいそうだし、涼風丸さんからどんな事があつたのかを聞くわけにもいかない。つまり、今のところは軽い手詰まりと言つても差し支えない事になっている。

「無理、と言つて諦めるのは簡単だけど、俺としては諦めたくは無い。諦めてしまったら、そこで何もかも終わっちゃうからな」

「そうですね……俺的にも旦那には諦めて欲しくありませんし、諦めずに手を伸ばす事で得られる物の大切さは分かってるつもりですからねえ。けど、ここまで難しい問題となると、解決にはかなりの努力を要しやすよ?」

「それでも構わないよ。俺の努力で何とかなる可能性があるなら、俺はその可能性に賭けてみたいし、『狐雨福屋』の奉公人である以上はこの件を知らんぷりは出来ないからな」

「……へへっ、やっぱり旦那ならそう言いやすよね。そういう事なら、俺も全力で手伝わ

せてもらいやすぜ？　こうして首を突っ込んだからには、最後まで見届けたいですからね」

「うん、ありがとうな、風之助。この恩は何か面白そうな記事のネタを見つける事で報いる事にするよ」

「へへっ……それならとびつきりの奴を期待してやすぜ？」

「ああ、任せとけ」

楽しげな笑みを浮かべる風之助に対してニツと笑いながら答えた後、俺は気持ちが悪くかさで満ちてくるのを感じながら、今度は腹を満たすために目の前の蕎麦に再び手を付け始めた。

「さて……この件はどこからアプローチしていこうかな」

『狐雨福屋』の離れに戻った後、部屋の文机に向かいながら涼風丸さんとの件について軽く紙に纏め、それを見ながら今回の問題の解決法の方向性について考え始めた。自分でも分かっている通り、涼風丸さんの件は簡単に解決できるわけでは無いため、それなりの努力と覚悟を要する上、最悪の場合も想定しておく必要がある。しかし、風之助が手伝ってくれると言ってくれた手前、途中で諦めたり今よりも悪い状況に陥るわけにも

いかなかったため、俺の気持ちは先日の深水の一件と同じくらい張り詰めていた。

あの時のように、どこぞの誰かが解決のための一手を打ってくれるならこの問題は容易く解決できるだろうけど、今回に関してはその解決方法では本当の解決にはならない。俺自身がしっかりと涼風丸さんと向き合った上での解決、それを達成してこそこの件を本当に解決したと言えるからだ。

「それにしても……涼風丸さんが店を訪ねた理由が、龍三郎さんが考えている事と同じならば、俺の力を借りる必要が出てくるって、龍三郎さんが言い切れた理由は何なんだろうな……。俺はまだ反物や仕立てについての知識や技術は無いし、それを手伝った事は無いから、たぶんそういう事では無いと思うんだけど……」

龍三郎さんの口から出てきた言葉の意味という新たな謎について別の紙に書き出そうとしたその時、廊下の方から誰かの足音が聞こえ、俺は筆を硯へと置いた。そして、廊下の方へ顔を向けたその時、足音の主——龍三郎さんの姿が見え、それについて少し驚きながら龍三郎さんに声を掛けた。

「龍三郎さん、どうかされたんですか？ 確か、今は涼風丸さんとお話をされていたはずでは……」

「ええ、その通りなのですが、やはり龍己君の力を借りる必要が出てきたので、こうして呼びに来ました」

「……分かりました。俺で良ければ、喜んで力になります」

「ありがとうございます。それでは、早速参りましょうか」

「はっ」

そして、龍三郎さんの言葉に少しだけ疑問を抱きつつも俺は龍三郎さんの後に続いて龍三郎さんの部屋へ向かって歩き始めた。

龍三郎さんの部屋に着いた後、龍三郎さんと一緒に部屋の中へ入ると、そこには颯め面で座布団に座る涼風丸さんの姿があり、俺が入ってきた事に気付くと、涼風丸さんの表情が表す不快感が更に強くなった。しかし、それには気付かないフリをしながら涼風丸さんに軽く会釈をした後、龍三郎さんの後に座布団に座ると、涼風丸さんは俺の事を軽く睨みながら龍三郎さんに話し掛けた。

「さて……そろそろ此奴の力が必要だと感じた理由を話してもらうぞ、龍三郎」

「はい、もちろんです。ですがまずは……事の成り行きを彼に話させて頂きますね」

「……勝手にするが良い」

涼風丸さんが軽くそっぽを向いた後、龍三郎さんは俺が来るまでにしていた話の内容を話し始めた。

「実はですね、この度涼風丸さんの娘さんが、ご結婚なされるようでして、涼風丸さんはその娘さんに結婚祝いとして着物を贈りたいと考えてらっしゃるようなのです」

「結婚、ですか……それはおめでたい話ですね」

「ええ。それで、そのお着物は私達で仕立てる事にはしたのですが、涼風丸さんとしては『ある要素』を備えた物が良いと考え、それについても相談するために午前中にお見えになったそうなのです」

「ある要素……？」

「はい、そしてその要素が——」

次の瞬間、龍三郎さんの口から出てきた言葉に、俺は驚きの声を上げる事となった。

「決して燃える事が無いという物なのです」

「……え？」

決して燃える事が無い着物……あれ、何だかどこかで聞いた事があるよな、それって……。

それについてどこで聞いたのかを思い出そうとしていた時、涼風丸さんはその俺の様子からやはり俺には無理そうだと判断したのか、難しい顔で龍三郎さんに話し掛けた。

「龍三郎、今からでも遅くはない。早々に他の奉公人に話を聞いた方が——」

「涼風丸さん、まだ龍己君自身から無理だという言葉は出ていませんから、もう少し待つ

て頂けませんか?」

「……何故だ、龍三郎。何故、この半人半妖をそこまで信じられるのだ?」

「龍己君には、私達妖以外にも神様や異国の怪物などについての知識があります。燃えない着物の手掛かりについて私達だけでは予想が付かない以上、少しでも思いつく可能性がある龍己君の力を借りるのは、当然の事だと思いませんか?」

「しかしだな……自分で言い出した事とは言え、燃えぬ着物を織るための材などこの世に存在するはずが——」

その時、俺はどこでそれを聞いたのかを思い出し、涼風丸さんの言葉を遮る形で声を上げた。

「……いえ、無くはないかもしれません」

「……何だと?」

「この世界にいるかはまだ分かりませんが、燃えない毛を持った鼠——火鼠かそという存在について聞いた事があります。もし、火鼠がどこかにいるならば、火鼠の毛を使った着物——『決して燃えない着物』を織る事は可能です。火鼠自体が元々大きく、その毛も絹のように細いながらも20寸はあるとの事なので、それなりの数を揃えれば、涼風丸さんの希望には添えると思います」

「燃えぬ毛を持つ鼠……確かにそれならば我が求める着物に相応しい材と言えるが、ど

ここにいるか分からぬ以上、結局どうにもならぬだろう」  
「それは……」

涼風丸さんの言葉は、まさにその通りであったため、俺は悔しさを感じながら口を噤むしか無かった。しかし、龍三郎さんは顎に軽く手を当てながら静かに何かを考えており、しばらくそのままいたかと思うと、突然「……やはり、これしかありませんね」と言い、俺の方へ顔を向けた。

「龍己君、どのような手を使っても構いませんので、その火鼠の住み処を探ってもらえませんか？」

「え……？」

「龍三郎、お前は一体何を考えているのだ……？ どこにいてもかもしれぬ鼠の住み処など、この半人半妖に分かるはずなど無いではないか」

俺達が揃って疑問の声を上げると、龍三郎さんはいつものような穏やかな表情でそれに答えた。

「ですが、まだないと決まったわけでもありませんよね？ となれば、小さな手掛かりを繋げていけば、火鼠に辿り着くかもしれませぬ」

「む……確かにそうだが……」

「それに、これは私の勝手な想像ではありますが、龍己君ならきつと火鼠に辿り着けると

思っています。龍己君には、ちよつとしたお呪いまじなの力もついていますからね」

「ちよつとしたお呪い……龍三郎さん、それって一体……う」

「すいません、それについてはその時が来るまで待つていてもらえますか？ その時には絶対にお話しますので」

「……分かりました」

少々腑に落ちないながらも龍三郎さんの言葉には信頼性があると感じたため、とりあえずその事についてはこれで終わりにする事にした。龍三郎さんは、俺が引き下がった事を確認した後、再び涼風丸さんの方へと顔を向けた。

「さて……涼風丸さん、貴方にとつては納得のいかない事だとは思いますが、一度だけ龍己君——人間を信じては頂けませんか？」

「……仕方あるまい。まだ納得がいかん事は多いが、昔馴染みからの頼みという事で、一度だけ此奴に機会を与えてやろう」

「ありがとうございます、涼風丸さん」

「……ふん」

涼風丸さんがそつぽを向くと、龍三郎さんはそれに対してクスリと笑い、そのまま俺の方へと顔を戻した。

「龍己君、君はどうですか？ 龍己君の性格上、涼風丸さんに歩み寄りたいて考えていた

と思いますか……？」

「はい、確かにそう考えていましたけど……どうして分かったんですか？」

「ふふ……先程も言ったように、龍己君の性格上何となくそうかなと思っただけですよ。それで、龍己君自身はこの件をどうしたいですか？」

「俺は……是非受けたいと思っっています。俺自身この世界に火鼠がいるかどうかは気になってますし、こうして作って頂いた機会を無駄にはしたくありませんから」

「分かりました。それでは、よろしくお願いしますね、龍己君」

「はい、任せて下さい」

龍三郎さんからの信頼の視線と涼風丸さんからの懐疑の視線を感じながら俺は力強く頷きつつ答えた。

それにしても……事件の捜査の次は、火鼠の搜索か……。しつかりと見つけれられるかはまだ分からないけど、このチャンスを逃したら、涼風丸さんに歩み寄る事はもう出来なくなるのだけは間違いない。だから、火鼠を見つげるためにもこれから全力で頑張らないとな……。

そう考えながら首に掛けている水晶の勾玉を軽く握り、勾玉から伝わってくるピンヤリとした感触を感じながら火鼠を見つけ涼風丸さんに歩み寄れるという祈願が成就するように水晶の勾玉へ静かに祈った。

## 第9話 なよ竹の難題と自然の脅威

「はあ……ダメだ、全く手掛かりが掴めない……」

天狗の涼風丸さんとの出会いから3日が過ぎた日の朝、お世話になつてゐる呉服問屋すずかぜまる兼仕立屋である『狐雨福屋』の離れの文机に向かいながら大きな溜息をついた。涼風丸さんが求めているのは、『決して燃える事が無い着物』であり、それを作るには火鼠かそと呼ばれる鼠の毛が必要な事は分かつてゐる。しかし、この世界にそもそも火鼠がいるのかすら全く見当が付いていないため、とりあえず貸本屋の『虫本堂』ちゅうほんどうなどに連日通つて何かヒントになる物を探す事から始め、他にもこの世界で出来た友達に訊いてみるなど様々な手を使った。その結果、未だにそれらしい資料や伝承には辿り着けていないため、この状況はかなり辛い物だと言えた。

「うーん……火鼠をどこかで見たつて言う話さえあれば、それを元にそこへ出向いて探せるんだけど、それすら無いとなるとなあ……」

元々、火鼠は別の国——具体的には中国に伝わる怪物であり、別名『火光獣』と呼ばれるものだ。そして、あの『竹取物語』でもかぐや姫が出した難題の中でその名前は出て来るのだが、結局その難題を出された貴族はそれを見つけ出す事すら出来なかつた。

尚、火鼠の毛を織つて作られた布は、『火浣布』と呼ばれる火で燃えない上にたとえ汚れても火の中に入れてしまえば、たちまち白くなるという摩訶不思議な布である。そのため、これなら涼風丸さんの依頼にも合うと思つて提案したのだが、その火鼠の住み処についての情報は全く無かつた。

「中国……か。この妖世界にそれらしい国があつてもまずそこに行くための手段が無い。加えて、火鼠の住み処には諸説あるから、それをひたすら探すとすると、その間の路銀を用意しないといけないよな……」

次々と出て来る問題を文机の上に置いた紙に書き出し、その多さに思わずもう一度大きな溜息をついていたその時、廊下の方から元気の良い声が聞こえてきた。

「こんにちはです、龍己の旦那！」

「……ん？」

その声の方へ向くと、そこにいたのは主にこの不<sup>しの</sup>忍<sup>ぼず</sup>で活動している瓦版屋コンビの片方である鎌鼬の風之助と深水<sup>ふかみ</sup>の街にある小間物問屋の主である化け蛇の七之助さんだった。そして二人揃つて離れの中へ入ると、風之助は乗っていた七之助さんの肩からスーツと飛び立ち、そのまま目の前の畳へ静かに着地した。

「へへっ、さつきぶりですね、龍己の旦那」

「ああ、そうだな。ところで、どうして七之助さんと一緒だったんだ？」

「ん、大した理由はありやせんよ？ 龍己の旦那が、例の件で悩んでるのは知ってやしたから、その進捗状況について聞きに来ようとした時に、偶然七之助の旦那と出会って、一緒に来ただけですからねえ」

「その通りです、龍己さん。因みに私は、例によってお店の皆さんから少しでも出掛けてきたらどうかと言われてしまったので、風之助さんと同様に例の件についてのどのような状況になっているかを聞きに来てみました。もしかしたら、私達でも何かお手伝い出来る事があるかもしれませんからね」

「へへっ、俺達やあ瓦版屋に深水の街で人気のお店の主たなですからね、情報を集めんのもってこいの仕事と見えやすぜ？」

「……ふふ、そうだな。風之助、七之助さん、本当にありがとう」  
「どういたしまして、龍己の旦那」

「どういたしまして。それで、現在はどのような状況なのですか？」  
「そうですね……相変わらず火鼠の住み処は分かっているのですが、とりあえず今抱えている問題と火鼠についての情報を書き出してみたいところです」

文机の上に置いた紙を取り、そのまま二人へ見せてみると、二人とも紙に書き出した内容を真剣な目で読み始め、読み終わると同時に少々難しい顔を始めた。

「うーむ……確かに中々厄介な感じはありやすねえ……」

「住み処の特定とそこへ行くための手段と路銀、それと搜索中の滞在費用が最低でも必要になりますからね。この近くで見つけられるのならまだ良いですが、距離が離れれば離れるほど、掛かってくるお金なども増え、その分辛くなってしまうすしね……」

「はい、その通りです。それに……火鼠の知識自体は、人間時代に手に入れた物が使えますけど、それでも向こうとこつちだと恐らく地理の面で違うところは多いと思うので、どこまで参考に来るか分からないですよね」

「ふうむ、火鼠の知識かあ……龍己の旦那、一度その火鼠つてえ奴について、俺達に話してみてくださいませんか？　もしかしたら、何か気付く事があるかもしれないやせんので」

「ああ、それならお安いご用だよ。けど、先に人数分のお茶を用意してくるから、ちよつと待っていてくれ」

そして、一度離れから店の方へ移動し、人数分の緑茶の準備を終えた後、俺は緑茶を載せたお盆を持って離れへと戻り、風之助達用に座布団などの準備をした。その後、風之助達が座布団に座り、目の前に用意した緑茶を置いた後に俺が知っている火鼠の知識について二人に話し始めた。

「まず、火鼠は名前に『火』の字がある通り、燃えない毛を持っている怪物で、目方はおおよそ67貫ほどの大鼠らしく、その毛の長さはおおよそ20寸程あり、絹糸よりも細いと言われている。それで、火鼠の住み処は諸説あつて、火山の炎の中にある不尽木と

いう燃え尽きない木の中に棲んでいるだとか伝説上の山岳に棲んでいるだとかとある山の春夏に燃えて秋冬に消える野火の中に棲んでいるだとか参考にする文献によつて様々だ。そして、火鼠の名前自体は人間の世界にある物語の中にも出て来る程には有名で、その火鼠で作られた皮衣を着た登場人物もいるくらいだな」

「へえ……そうになると、その火鼠つて奴がこの近くにいたら、ぜつてえ誰かは知つてそんな感じはしやすよな？ そんなに特異な住み処を持つ大鼠なんて特徴を持つてるとくれば、それに興味を持つ奴が一人くれえはいてもおかしくありやせんから」

「まあな。そして、今のところ一番の難問は、人間の世界における火鼠の住み処がある国に該当する国が、この世界にあるかどうかかなんだよな……」

「そうですね……もし、その国があるとすれば、まだそちらに行つてみる事も出来ませんが、それが無いとするとだいたい困つてしまいますからね」

「ええ、そうなんです。それに……たぶんあったとしても、この世界の地理が人間の世界と同じようであれば、そこに行くためには海を渡る必要が出てくるんです」

「海を渡る……つまり、航海に出るつてえことですかい？」

「方法の一つはそれだな。だから、その方法で行く場合はそつちに用がある船を探す事になる。そしてもう一つの方法として、空を飛んでいくという手があるけど、これを実行するためにはまず俺を乗せてくれて空が飛べる妖を探す事になるかな」

「龍己さんに乗せられて空を飛ぶ事が出来る妖……その点だけを考えるなら探してみれば見つかると思います。が、いるかどうか分からないモノを探するために飛んでくれる方となると……」

「……恐らく、いないでしょうね。かといって、俺自身が飛ぶという事は流石に出来ない。ので、船で海を渡るといのが今のところ一番現実的ですね」

「うーむ……となると、次にやるべきなのは、龍己の旦那を乗せてくれそうな船を探す事になりやすけど、これも中々難しそうですね……」

「ああ、手段が変わっただけで、いるかどうか分からないモノのためという前提は変わってないからな。誰か船を持って知る知り合いでもいれば話は別だけど、そうじゃないとなるとなあ……」

さつきも言ったように、この世界における中国またはその周辺に用事がある船に乗る事が出来るなら話は簡単だ。けど、それが客船ならそれ相応の金が必要になるし、漁船なんかだと理由が理由だけに断られてしまう可能性が高い。だから、船を所有している知り合いがいればそれに越した事は無いけど、生憎俺にはそんな知り合いはいない。

さて……本当にどうしたもんかな。

何となく天井を見上げながら火鼠探しの方法について考え始めたその時、七之助さんが「……あ、もしかしたら」と、何かを思いついたように声を上げると、それに対して

風之助は小首を傾げながら話し掛けた。

「七之助の旦那、いつてえどうしたんです？」

「実は以前、深水で漁師をなさっている方と知り合つた事がありまして、それから何度かお酒を飲みに行く機会があつたのですが、その時にそろそろ漁をする範囲を広げたいと仰つていたので、もしかしたらその方にお願ひできるかもしれません」

「おお、そりやあ助かりやすけど、そんな御仁とどこで知り合つたんです？」

「ふふ……まあ、川や海に近付けない私が漁師の方と知り合うのは不思議ですよ。

実はその漁師の方と知り合つたのも、龍己さんと知り合つた日と同じく雨の日でして、その日は風も強く海も荒れていたので漁に出られないとかでお昼からお酒を飲んでみたみたいなのです。そして、その酔いの回りが結構早かつたようで、正体無くして道の真ん中で倒れていたところに私が偶然通りすがり、どうにかお店の方まで運んだ後に私がお世話をさせて頂いたという事があつたのです」

「ふふ……七之助さんは、本当に雨の日に『縁』があるみたいですね」

「ええ、本当に。ですので、今日深水に戻つた時にでも、その方にダメ元でお願ひはしてみますね」

「はい、ありがとうございます、七之助さん」

「どういたしまして。龍己さん、因みにその火鼠がいると思われる場所の大体の位置は

分かりますか？」

「あ、はい。おおよそなんです——」

七之助さんの優しい笑みに対して微笑み返しながら人間の世界における日本と中国の位置関係について説明した後、俺は風之助達と一緒に無事に火鼠がいると思われる場所へ渡れた後の事について話し合った。

その翌日、七之助さんから件の漁師との話がついたとの連絡をもらい、俺は一度七之助さんと一緒に深水へと向かった。その後、その漁師——磯天狗いそてんぐの青八せいぱちさんに引き合わせてもらい、火鼠探しの件について包み隠さず話すと、青八さんはそんな理由で海を渡ろうとする俺の事を大層面白がり、船を出す事を喜んで引き受けてくれた。そして、その日は青八さんとその旨について簡単な話し合いを行うだけにして、七之助さん達に改めてお礼を言ってから不忍へと戻り、『狐雨福屋』の主である龍三郎さんに火鼠探しのために船に乗せてもらう事を話した。龍三郎さんは、火鼠探しの手掛かりが見つかった事をまるで自分の事のように喜んでくれたが、それと同時にやはり不安はあるようで、無茶なマネはしないようにしてくれと言われた。その時の龍三郎さんの目には、心からの心配の色が浮かんでいたので、俺はそれに対してしっかりと頷きながら答え、その後

龍三郎さんと軽い雑談をしてから離れへ戻り、翌日の出発へ向けての準備に取り掛かった。

そして翌日、龍三郎さんや風之助達に見送られながら旅装束姿で深水へと向かつて歩き出し、そのまま青八さんとその漁師仲間が待つ港へと向かうと、そこには腕を組みながらニカツと笑っている青八さんの姿があつた。

「よお、鈴蘭！ 体調はバッチリか？」

「はい、昨夜は早めに床についたので、体調に問題はありません」

「ははっ、そうかそうか！ せっかく山の天狗さんの依頼のために海へ出るつてのに、元気が無かつたらどうしようもねえからな！」

「ええ、そうですね。青八さん、今日はよろしくお願いします」

「おう、あの七之助の兄ちゃんのだち公だつてんなら、俺のだちと言つても過言じゃねえからな。そんな奴が頑張ろうつて言つてるからには、俺達も全力を尽くさせてもらおうぜ！ なあ、てめえら！」

『おう！』

青八さんの声に他の漁師達も大声で応え、そのあまりの音量に思わず耳を閉じそうになつた。ふう……半人半妖の時は、人間の時よりも五感に優れてるから、こういうのは結構効くんだよな……。でも、こうして船を出してもらえるのは本当にありがたい

し、邪魔にならないようにしながら絶対に火鼠を見つけ出さないと……!

心に強い決意を抱いた後、俺は青八さん達の手伝いをしながら船に乗り、火鼠がいると思われる場所へ向けて無事に出港した。出港後、海の上を進む船の揺れと吹いてくる潮風を感じながら眼前に広がる大海原の光景に心を奪われていると、隣から青八さんの楽しそうな声が聞こえてきた。

「ははっ! どうだ、鈴蘭。船上から眺める海つても中々良いもんだろ?」

「ええ、そうですね。普段は不忍にいますので、海を見る機会はありませんですが、こういうのもたまには良い物ですね」

「そうだろうなあ。海つてのは、もちろん機嫌が悪い時もあるが、こういう機嫌が良い時なんかは色々な物を恵んでくれるんだ」

「魚などを獲るではなく、魚などを恵んでもらうんですね」

「その通りだ。この海のどつかには、俺達とは違った存在——神様だっているからな。俺達漁師つてのは、そういうった神様に感謝しながら漁をしねえといけねえもんなんだよ。まあ、たまに俺達を試そうとしてるのか、魚が中々獲れねえ時や海が時化になる時もあるが、恐らく今日は大丈夫だろう。海から変な感じはしねえし、空もこんなに良く晴れ——」

青八さんが何の気なしに空を見上げたその時、海の様子を眺めていた船員の一人が俺

達のところへと走り寄ってきた。

「青八、これはちつとマズい事になったかもしれないねえぜ……」

「マズいつてえ……いつてえ何がマズいつてんだ？」

「向こうの方から厚い雲が近付いてきてるだろ？　ありやあ恐らく雨雲だと思うんだが、あっちの方から妙な感じがすんだよ」

「妙な感じつてえと……嵐が来るつて事か……？」

「……たぶんな」

その瞬間、青八さんの表情が陽気な海の男から一人の漁師へと変わり、船員が指した方向を真剣な眼差しで見つめ始めた。

「……これは、一旦戻った方が良さそうだな。鈴蘭、おめえには悪いが、一旦港に戻らせてもらうぜ」

「はい、分かりました」

領きながら答えると、青八さんはすぐさま船を港へ戻すように指示を出し、船はその指示に従って大きく旋回し始めた。その時、頬に一粒の雫が当たり、それが雨だと気付いた頃には件の雨雲がこちらにも広がっており、途端に大粒の雨が俺達へ向かって降り注ぎ、それと同時に強風が吹き荒れ始めた。

「くっ……青八さん！　大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……問題ねえよ！　だが、こりやあ本格的にヤベえ！　急いで港に戻るぞ！」  
「は、はい！」

大きな嵐の中、海が先程までとは違って大きくうねり、それによつて船も強く揺れ始めたため、正直バランスを取るのがやつとだった。

くつ……これは、本当にマズいな。とにかく、俺も何か手伝える事をさが——。

その時、船が更に大きく揺れると同時に、吹いてきた強風で体のバランスが崩れると、俺は背中から海中へと落ちていった。

「あぐつ……！」

「おい、鈴蘭——」

青八さんの声が聞こえ、どうにか船へ上がろうと試みたが、衣服が海水を含んだ事で重くなり、腕を上げようとするのすらキツくなっていた上、荒れ狂う波と海水による体温低下のせいで徐々に体力を奪われ始めた。

まだ……だ、せつかく助けてもらった命を……こんなところで、無駄にする……わけに、は……。

朦朧もうろうとする意識の中で、どうにか打開策を練ろうと頭を働かせたが、次第に強い眠気が襲い始め、俺の意志とは逆に目が静かに閉じていき、やがて俺の意識は暗い闇の中へと沈んでいった。

## 第10話 火鼠の里と異種族間の絆

「ん……？」

静かに聞こえてくる波の音や吹いてくる潮風、そして体中にじんわりと感じる微かな重みなどで目を覚ますと、まず視界に入ってきたのは、ゴツゴツとした岩だった。そして、ゆつくりと体を起こしながら周囲を見回すと、あの時の嵐が嘘だったかのように風いだ海や切り立った崖、そして白い砂浜や木が生い茂った森などが見え、結果としてここがさつきまでいた船の上では無いばかりか、全く知らない場所である事が分かった。

「あれ……でも、俺は確かあの荒れ狂う海に落ちたはず……なのに、どうして岩の上にいるんだ？」

たとえ、今のように運良くどこかに漂流したとしても、流れ着くとしたら砂浜のように海に面した場所のはずだ。しかし、実際に俺は海面よりも少し高さのある岩の上で目覚めており、海水に浸かった事でいつもの着流しはびしょ濡れな上に少し重くなっているが、荷物が入った風呂敷と水晶の勾玉は流されずに傍に置いてあった。つまり――。

「あの中で誰かが俺を助けてくれた上に荷物なんかも守ってくれた事になるけど、あの状態の海に飛び込んだ上に誰かを助けるなんて本当に出来るのか……？」

今回の船出を手伝ってくれたのは、海に關する妖の磯天狗の漁師達だ。つまり、海に關してはスペシャリストと言える存在ではあるものの、あの状況で海に落ちた俺を助けようとするのはあまりにも危険な行為だ。そして、もしあの中の誰かが助けてくれたとするなら、目を覚まさない妖を放置して自分だけどこかに行くとは考えづらい。

「……まあ、俺が中々目を覚まさないからとりあえず周辺の探索をしに行つたという可能性が残つてはいるけど、それだとすれば明らかにおかしい事が一つだけあるよな」

そう独り言ちながら明らかにおかしいと考えられる部分、びしょ濡れの着流しへと視線を向けた。もし、あの中の誰かが助けてくれたのなら、濡れたままの衣服をそのままにするとは考えづらい。と言うのも、こうして陸に上がったとしても、濡れた衣服を纏つたままでは、体温が低下し続ける一方である上、それ以外の変調を来す恐れもある。そして助けた相手が、同じ磯天狗や水や低温に耐性がある妖ならまだしも、俺のような妖狐をそのままにしておくとは考えづらい。つまり、助けてくれたのは、あの中の誰かではない別の存在だという可能性が高い。

「でも……そうなると本当に誰が助けてくれたんだろう……？」

首を傾げながら助けてくれた人物についてあれこれ考えていたが、次第に濡れた衣服と体の影響で寒さを感じ始めたため、一度それについて考える事を止め、別の事へと考えを変えた。

「……まずは、暖を取る方法を考えよう。一応、火打ち石や火口ほくちは濡れたり湿気ったりしないように小箱に入れてるから大丈夫だろう。だから今は、潮風にこれ以上当たらないように、ここから離れながら燃やせそうな物や物干し竿の代わりになる物を探るのが先決。となると、とりあえずは森の中で乾いた木材を探してみるしかないな。拠点作りや食糧の確保は、その後も良いしな」

当面の目標を決め終えた後、水晶の勾玉を首に掛け直し、海水を吸って重くなつた着流しと荷物と共に海岸沿いを歩き始め、そのまま森の中へと入っていった。

森の中は思っていたよりも生い茂っている木の数が多く、そのせいで視界は少し薄暗かったが、半人半妖時の視力の強化のおかげでどうにか木にぶつかつたり木の根に足を取られたりする事なく歩く事が出来ていた。

……本当は妖狐の姿の半人半妖モードじゃなく、人間の姿で歩きたいところだけど、半人半妖の方が五感も鋭い上に何かと出会った時に怪しまれる事も無いから、これも仕方ないよな。

そんな事を考えながら歩いていたその時、足に何か硬い物が当たり、俺は一度足を止めてそれが何かを確認した。すると、そこにあつたのはそこそこの太さと長さのある木

の枝であり、それを軽く曲げてみたところそれなりに撓しなる様子だったため、安心感を覚えながらホツと胸を撫で下ろした。

「うん……これで、衣服を干して乾かす事は出来そうだな。後は、火をつけるのに良さそうな細かい枝と当面の拠点になる場所を見つけられればひとまず大丈夫なだけ……」

枝を片手に持ちながら周囲をキョロキョロと見回していた時、どこからか「うう……」という弱々しい声が聞こえ、その声に警戒心を持ちながらその正体を探るために耳をすませた。すると、その声は近くから聞こえる事が分かり、とりあえずその声の主が誰かを探るために声が聞こえる方へ歩を進めた。そして、とある草むらの中から弱々しい声が上がると同時に、弱々しい妖力を感じたため、一度深呼吸をして気持ちを落ち着けてからその草むらの中を覗いた。

「……あれ、コイツは……？」

そこにいたのは、ブルブルと震える手のひらサイズの白鼠であり、白鼠は「うう……寒いよお……」と、とても小さな声を上げながら目を瞑っており、その様子から白鼠が弱っているのは間違いないかった。

寒い……か。俺も寒い事は寒いし、コイツのためにも早く燃やせる物を探した方が良  
いみたいだな。

そして、周囲を見回していた時、ちょうど幾つかの小枝が木の根元にあるのを見つけ、それを寄せ集めて他に燃え広がらないようにまずは土で小枝の周りを囲い、荷物の中から火打ち石と鋼、火口ほくちを取り出した。その後、小枝の上に火口を幾つか落とし、火打ち石と鋼をカチカチと打ち合わせて火花を火口へと落とす。そして、そこへ向かって息を吹きかけた瞬間、火口に小さな火が灯り、それと同時に火は徐々に燃え広がると、やがて中くらいの火へと変わった。

ふう……これで、火の確保も完了したし、次は――。

火から白鼠の方へ視線を移したその時、白鼠は火をジーツと見つめていたが、次第にその目はキラキラと輝きだした。

「火……火だあ!! わあいつ!!」

そして、白鼠は嬉しそうな声を上げると、勢い良く火の中へと飛び込んだ。しかし、白鼠の体は燃える事は無く、白鼠は体が赤くなると同時に、「あははっ、やつぱり火の中は落ち着くなあ……!!」と更に嬉しそうな声を上げた。

この様子……コイツはまだ子鼠なんだろうけど、やつぱり『アレ』だったみたいだな。その様子から白鼠の正体を確信していると、白鼠は火の中から俺の姿をジーツと見つめ始め、やがて不思議そうに小首を傾げた。

「えっと……貴方は……?」

「俺——あ、いや……私は鈴蘭。こことは別の場所に住む妖狐です」

「鈴蘭さん……ですね。ボクは<sup>かがり</sup>篝、ボクなんて言ってますけど、こう見えて雌の火鼠なんです」

「火鼠……やっぱりそうだったんですね、良かったあ……」

どうにか火鼠を見つけられた喜びから思わず力が抜けてしまっていると、火鼠——篝は不思議そうに小首を傾げた。

「あの……良かったというのは……？」

「あ、それはですね——」

篝に対して鈴蘭としての俺の身の上や大天狗の涼風丸さんの件、そしてさっきの嵐の件について話すと、篝は「なるほど……」とその小さな腕を組みながら呟くような声で言い、考え込むような素振りを見せた。そして、それから約数分後、篝は「たぶん……大丈夫だよ」と少し不安そうな様子で独り言ちると、俺の事を見上げながら話し掛けた。

「鈴蘭さん、お話の続きは火鼠の里でする事にしても良いですか？」

「火鼠の里……？」

「はい。この島には、ボク達火鼠だけが住んでいる里がありまして、そこに行けば鈴蘭さんが求めている物があると思うんです」

「なるほど……」

「そして、本来なら里に入るには、門番の許可が必要なんですけど、たぶんボクがついていけば大丈夫だと思うので、長に貴方の事を紹介するのも含めて里に行くのが一番だと思います」

「……分かりました。ですが、先に服などを乾かさないといけないので、その後に案内をお願い出来ますか？」

「はい、分かりました！」

篝の元気の良い返事に頷いた後、先程見つけた物干し竿代わりの枝を木と木の間に渡し、着流しを脱いで他の荷物と一緒に枝へと掛けた。

さてと……ちよつと篝には悪いけど、乾かしている間は、さつき起こした火に当たらせてもらおうとするか。

そして、篝にしつかりと断った後、冷えた体を暖めるためにパチパチという音を立てながら燃える火に当たり始めた。

龍己が火鼠が生息する島で、どうにか一息をついていたその頃、『妖怪街・不忍』の龍己が居候をしている呉服問屋兼仕立屋を営む『狐雨福屋』では、主の龍三郎が来訪者――

―小間物問屋『七之屋』の主である七之助からの話に驚きの声を上げていた。

「……龍己君が行方不明、ですか……？」

「はい。今朝、龍己さんが出発した後、大きな嵐が突然発生しまして、その嵐の影響で龍己さんは行方不明の他、乗っていた船はボロボロになり、船員達も複数名が大なり小なり怪我を負っているようです」

「そう……でしたか。どうも嵐が強い気がすると思いましたが、そんな事が起きていたのですね……。皆さんの中に亡くなった方がいなかった事は幸いでしたが、龍己君が行方不明というのは本当に心配ですね……」

「はい……運良くどこかに流れ着いているならばまだ良いのですが、件の嵐というのが本当に大きな物だったらしく、青八さん達ですら滅多に遭う事がないと仰っていたのが、とても不安です……」

「そうですね……」

龍三郎と七之助がとても暗い表情を浮かべながら静かに俯いていたその時、襖の向こうから手代である羅紗の落ち着きのある声が聞こえてきた。

「旦那様、涼風丸様と風之助様がいらっしやっていますのですが、お通ししてもよろしいですか？」

「……あ、ああ……通してくれ」

「畏まりました」

その声が聞こえた後、羅紗の物と思われる足音がゆっくりと遠ざかっていき、龍三郎はその音を聞きながら再び心配と不安に満ちた溜息と声を漏らした。

「……もし、龍己君がこの件が原因で再び亡くなるような事があったら、私は本当に立ち直れないかもしれません……。元々、羅紗が龍己君を殺めてしまった事で、龍己君と出会いましたが、今となつては本当の家族のように思っていますし、今回の件は私が龍己君に頼みさえしなければ起きる事はありませんでしたから……」

「……龍三郎さん、そのお気持ちはよく分かります。あの日、龍己さんと私が出会う事が無かつたら、私は今頃ここにはいないばかりか『七之屋』すらも無くなつていたかもしれません。なので、今回は私が龍己さんを助ける番だと思つて青八さん達を紹介したのですが、まさかこんな事になるとは……」

後悔と悲哀、龍三郎と七之助が感じているその二つによつて、室内が重苦しい雰囲気

に包まれていたその時、襖の向こうから再び羅紗の声が聞こえてきた。

「……旦那様、お客様をお連れしました」

龍三郎が暗い声で答えると、襖がゆっくりと開いていき、羅紗の隣に立つ瓦版屋の鎌鼬——風之助と涼風丸の姿が見えた瞬間、龍三郎はすぐに表情を穏やかな物へと変えな

がら風之助達へ挨拶の言葉を口にした。

「こんにちは、風之助さん、涼風丸さん」

「へい……こんにちはです、旦那方」

「……うむ」

風之助と涼風丸はそれぞれ挨拶を返すと、静かに部屋の中へと入り、それと同時に襖の陰から羅紗の声が聞こえてきた。

「……それでは、私はお茶のご用意をして参ります」

「ああ、頼んだよ、羅紗」

「はい」

そして、羅紗が襖を静かに閉めた後、龍三郎は部屋の隅に積まれている座布団を2枚手に取り、それぞれ風之助と涼風丸の目の前へ静かに置いた。

「どうぞ、おかけになって下さい」

「へい、ありがとうございます」

「礼を言うぞ、龍三郎」

礼を言いながら風之助達が座布団に座ると、龍三郎はとても辛そうな様子で静かに口を開いた。

「……お二人がいらっしやったのは、龍己君の事について、ですよね？」

「へい……その通りで。龍己の旦那が行方不明になったと聞いた時には、まさかとは思いやしたが、どうやら本当の事みてえですね……」

「我もその通りだ。今回の件は、我の依頼に依って行方不明になったものだからな。いくらいなくなったのが人間だとしても、責任を感じないわけではない」

「……………」

風之助と涼風丸が答えた後、龍三郎が暗い表情で俯きながら黙り込んでいると、涼風丸は「はあ……」と溜息をつけてから龍三郎に対して話し掛けた。

「……龍三郎、分かっているとは思いますが、落ち込み続けたところで何も変わらん。今、我らが為すべき事は、早々に彼奴——稲荷龍己を捜す事なのだからな」

「はい……それはそうなのですが、その方法がまったく浮かばなくて……」

「策、か……それならば、ここにいる全員で考えれば良からう。三人寄れば文殊の知恵とも言うが、ここにはそれよりも多い妖がいるのだからな」

「……へへっ、その通りだ。俺もここに来る前に色々調べてきやしたからね。この情報や旦那方の妖術がありやあ、どうにか龍己の旦那を捜す事が出来るかもしれやせんぜ？」

「涼風丸さん……風之助さん……」

龍三郎がゆつくりと顔を上げると、七之助はニコリと笑いながら龍三郎に声を掛け

た。

「ふふ……龍三郎さん、確かにお二人の言う通りです。このままだ悩み続けるよりも何か行動を起こす方が良いかもしれませんよ」

「行動……」

「ええ。幸いにも、ここには瓦版屋さんに妖術に長けている大天狗さん、そして同じく妖術に長けている上にこの不忍において老舗と言えるお店の主と様々な方が揃っています。ここまで様々な方がいるならば、龍己さんを探し出せる可能性はより高くなつたと思いますませんか？」

七之助が穏やかな笑みを浮かべながら龍三郎に語りかけていると、それを聞いていた涼風丸は「ほう……」と多少感心した様子を見せた。

「その口振りや名乗っていない我の事を大天狗と看破する辺り、化け蛇の若造にしては大した物だ。その気配から感じる『何か』は、伊達では無いという事だな」

「ふふ……ありがとうございます。ですが、やはりこれは龍己さんとの出会いがあつたからと言えるでしょうね。先日、深水で起きた事件の後に龍己さんと風之助さんから掛けて頂いた言葉があるからこそ、私が今為すべき事をしようという考えに至つたような物ですから」

「……ふむ、そうか……」

七之助の言葉に涼風丸が何かを考え込むような素振りを見せる中、龍三郎は自身の手を一度だけジッと見つめた後、それを固く握った。

「……皆さん、ありがとうございます。皆さんののおかげで、迷いも無くなった上に色々と考えも浮かんできました」

「……へへっ、そいつあ良かったですぜ。それで、その考えつてえのはいつてえどんなのなんです？」

「それはですね、ある妖術を使って龍己君の持ち物から龍己君の妖力の気配を探るんです」

「ふむ……確かに妖術にはそのような物もあるが、何かそれに最適な物などあるのか？」  
「ええ、ありますよ。では、それを取ってきますので、少し待っていて下さい」

そして、龍三郎が静かに立ち上がろうとしたその時、襖が突然スーツと開いていき、全員の視線が襖の向こうに集中した。すると、そこには人間時代の龍己が着ていた黒い学生服を持った羅紗の姿があり、龍三郎はそれに対してクスリと笑った。

「羅紗、わざわざ持ってきてくれてすまないね」

「いえ、旦那様がそろそろこれをご入り用だと思つて持ってきただけですので、お気になさらないで下さい」

羅紗は静かに首を振りながら答えた後、「失礼致します」と言いながら部屋の中へと入

り、龍三郎へ学生服を手渡した。

「では、私は仕事へ戻ります」

「うん、頼んだよ」

龍三郎の声に羅紗は恭しく一礼をすると、ゆっくりと部屋を出ていき、一度部屋の中にいる全員へ向かつて礼をした後、静かに襖を閉めた。そして、羅紗が去って行く足音が小さくなった頃、全員の視線が龍己の学生服へと一齐に注がれた。

「旦那、こいつぁ……龍己の旦那の部屋にあった服ですかい？」

「ええ、龍己君がこの世界に來た時に着ていた衣服で、向こうの世界では龍己君と同じ歳の男性用の衣服のようです」

「ふむ……これを持ってきたという事は、あの妖術に頼るといふ事か」

「はい、一番良いのは龍己君が身に付けている水晶の勾玉なのですが、この衣服でも問題ないかと思ひまして」

涼風丸の言葉に龍三郎が微笑みながら答えていると、風之助は話している内容が分からない様子で小首を傾げた。

「えーと……話がまったく見えねえんですけど、旦那方は何をしようってんです？」

「ふふ……それはですね、この衣服に残っている龍己君の妖力の残滓を使って龍己君の位置を探ろうとしているんです」

「妖力の残滓……？　けど、それはあくまで人間時代の龍己の旦那が着ていた物なんでしょう？」

「その通りです。ですが、羅紗が矢で空けてしまった穴を塞いだ後、一度半人半妖姿の龍己君に着心地を確認してもらった事がありますので、微かにですがその時に龍己君の妖力をこの衣服は浴びているはずですよ。なので、今回はそれを使ってみようと思います」

「なるほど……さつき勾玉の方が良いと言っていたのは、そういう事だったのですね」

「うむ。妖力を微かに浴びているこの衣服でも問題は無いが、常に身に付けている物の方がハッキリと視る事が出来るからな。」

では……そろそろ始めるとしようか、龍三郎よ」

「はい」

龍三郎はいつもの穏やかな様子とは真逆のとても真剣な顔付きで学生服を見つめると、涼風丸と共に自身の右手を学生服へと翳し、文言のような物を静かに口にしながら始めた。風之助と七之助は、言葉を一言も口にせずにその二人の様子をただ見つめ続けた。そして、龍三郎の表情が和らいだ瞬間、風之助は恐る恐る声を掛けた。

「……旦那、龍己の旦那の事は分かったんですかい……？」

「……ええ、どうやらどこかの島にいて、今は火を起こして体を暖めながら濡れた衣服を乾かしている所のようにです」

「……つまり、無事……なんですね？」

「その通りだ。しかし、どの島にいるかまでは分からなかったな……」

涼風丸が難しい表情を浮かべながら腕を組み始めた時、「……そういえば」と七之助が何かを思い出したように声を上げ、それに対して風之助が小首を傾げながら声を掛けた。

「七之助の旦那、どうかしやしたかい？」

「いえ……青八さん達から聞いた話なのですが、龍己さんが海へ落ちた後に何やら海の中から昇ってくる青い竜の姿を見たらしくて、その竜は嵐の中を物ともせずには彼方へと飛んでいったとの事です」

「青い竜……そういや、俺もそんな話を聞いた気がしやすね……。俺はその漁師達からじゃあねえんですが、嵐の様子を見に来たら西の方に飛んでいく竜みてえな物の姿が見えたつてえいう深水の町人がいた気がしやす」

「西の方角へ飛ぶ青い竜のような物……偶然かもしれぬが、今はそれを頼りにして見るしかないか……。龍三郎、お前はどう思う？」

「はい、私もその竜が何か手掛かりを握っていると思います。龍己君の名前も『映しの泉』に青龍が映った事が由来なので、現在はこれ以上の手掛かりは無いかと」

「……そうだな。では、我が早速行つてくるでしょう。今から船を出すよりは、我が空よ

り捜しに行く方が早い上に確実だろう。それに――」

「それに……?」

風之助が不思議そうに訊くと、涼風丸はとても真剣な表情を浮かべながらそれに答えた。

「元々、この件は我が持ち込んだ物だ。それならば、我が最後まで責任をもつて捜しに行くのがスジという物だからな」

「……なるほど。まあ、そういう事なら俺らは旦那方がいつ戻ってきてきても良いように準備をしておきやすよ。今は無事みてえだが、帰ってくる時には何か体に不調を来していかもしれやせんからね」

「それが良いだろうな。では……皆、早速行つてくるぞ」

「へい、旦那も気をつけて行つてきてくだせえ!」

「涼風丸さん、無理はしないで下さいね」

「龍己君が見つかるのが一番ではありませんが、涼風丸さんも無事であれば意味はありませんからね。充分に気をつけて行つてきて下さいね」

「うむ、当然だ。ではな」

涼風丸は決意に満ちた眼をしながら答えると、そのまま部屋を出ていき、龍己を捜しに行くために力強い足取りで『狐雨福屋』の入り口へ向かつて歩き始めた。

「……うん、こんなもんだな」

着流しを乾かし始めてからどれくらいか経った頃、手触りからしつかりと乾いた事を確認し、着流しを再び身に纏った。

まあ、無事に帰る事が出来た後は、しつかりと洗う必要はあるけど、今の所はこれでも良い事にしないとな。

そんな事を考えながら着流しの着心地を確認していた時、箒が小首を傾げながら火の中から話し掛けてきた。

「それにしても……鈴蘭さん——いや、龍己さんは本当に不思議な方なんですな。まさか、本当はただの妖狐じゃなかったなんて……」

「あー……うん、騙すつもりは無かったんだけど、あの時の箒に対して正直に半人半妖だって名乗るよりは、妖狐だって名乗る方が良いと思っただけ。まあ、気が抜けた瞬間にそれがバレたのは、完全に俺のミスだったけどさ」

頭をポリポリと掻きながら俺はさつき起きた出来事を想起した。体を乾かしている最中、その火の暖かさや安心感に体の力が抜け、思わず人間の姿に戻ってしまった。そして、その一部始終を見ていた箒からそれを指摘され、最初はどうにか誤魔化そうとも

思ったが、篝の不思議そうな様子からこれ以上は隠しきれないと思い、俺は自分の本当の姿などについて説明をしたのだった。

この調子だと、不忍に戻った後でも同じ事をしてしまいそうだし、そこはしつかりと気をつけるようにしないといけないな。

そう思いながら乾いていた荷物を一つだけ残して風呂敷で包み直し、それを背負い直してから火の中にいる篝へと声を掛けた。

「それじゃあそろそろ火を消そうか、篝」

「あ、はい。あ、あの……」

「ん、どうした？」

「もし龍己さんさえ良ければ、火を消した後は抱き抱えてもらっても良いですか？ 火鼠は体重がとても重い種族ではありますけど、ボクはまだ体重が軽い子鼠の中でもかなり軽い方みたいなので、龍己さんの腕や肩を痛める事にはならないと思うので……」

「ああ、それは別に良いけど……なんか理由でもあるのか？」

「はい。誰かに抱き抱えてもらう機会なんてこの先あまり無いと思いますし、龍己さんの雰囲気は何だか落ち着くので……」

「そっか、そういう事なら任せといてくれ。いつもなら肩に先客がいるから少し難しいところだけど、今日はいない分やりやすいからな」

「先客……ですか？」

「ああ、向こうの方で鎌鼬の友達がいるんだけどさ、ソイツと行動する時はいつも肩に乗せてるんだよ」

「なるほど……やっぱり海の向こうには色々な方がいるんですね」

「ははっ、そうだな。さてと、それじゃあ火を消すぞ」

「はい」

「箒が火の中から出た後、俺は残っていた荷物——水が入った水筒を手に取り、中に入っている水を上から撒くような形で火へと掛けた。そして、火が完全に消えた事を確認し、風呂敷の中に水筒をしまつて風呂敷を右肩に固定した後、俺は静かに屈み込みながら箒へと両手を伸ばした。

「それじゃあ掴むぞ？」

「……あ、はい。お願いします」

「箒の返事を聞いた後、「よいしょ……つと」と言いながら静かに体を持ち上げた。その瞬間、腕にズシリとした重みが掛かってきたが、半人半妖時の姿では腕力が人間の姿の時よりも上がっているため、大して辛さは感じなかった。そして、そのまま腕に抱き抱えると、箒は「ふう……」と少しリラックスした様子で声を漏らした。

「……ありがとうございます、龍己さん。思った通り、スゴく落ち着きます……」

「ふふ……それは良かったよ。一応、落とさないように気をつけるけど、篝も落ちないよ  
うに気をつけてくれよ?」

「はい、分かりました。それでは、そろそろ参りしましょうか」

「ああ」

返事をした後、篝の案内に従って森の中を歩き始めた。お互いの事を話しながら森の中を歩く事約十分、楽しそうに話す篝の言葉にしながらも、俺は森の中の様子が少しだけ気になっていた。森の中は果物のような物が実っている木や澄んだ水が流れる小川もあつたが、風で木の葉が揺れる音がする以外はとても静かで、俺と篝以外のモノ達の気配が全くなかった。妖に限らずともこの環境は、様々なモノ達にとつて住みやすい物であるはずなのに、住んでいると思われるモノの姿がまったく見られないのは明らかに不自然だった。

「なあ、篝」

「はい、何でしょうか?」

「ここにはお前達火鼠以外の奴つて住んでいないのか?」

「えつと……実は前までは、この森や火鼠の里がある辺りにも色々な方が住んでいたらしいんですけど、ある時からその方が次々と島から去つて行つてしまったと聞いています」

「そっか……けど、どうして島からいなくなったんだ？」

「すいません……そこまではちよつと分らないです。あ、でも……里の長老なら何か知っているかもしれません」

「火鼠の長老か……因みに、その長老ってどんな人なんだ？」

「とても長生きでとても物知りな長老ですよ。それにとても優しいので、里の皆からとても親しまれているんですよ」

「へえ……でも、俺みたいな奴がいきなり行ったら、流石に驚かれるよな」

「あ……それもそうですね。でも、里の皆は意外と好奇心旺盛なので、一旦慣れてしまえば話し掛けてきたり近寄ってきたりする気がします」

「そっか、それなら安心かな」

そんな事を話しながら歩いてきたその時、俺達はいつの間にか森を抜け、ゴツゴツとした岩場の辺りへと来ていた。すると、篝は腕の中から周囲をキョロキョロと見回し始め、ある一方に向けた瞬間にジツとそちらを見始めた。それに続いて俺もそちらへ視線を向けると、小さな火柱がいくつも上がっている場所が見え、火鼠の里が近い事を悟った。

「流石は火鼠の里、何個も火柱が上がってるな」

「あはは……まあ、龍己さんも知つての通り、ボク達火鼠は火の中に入っている時間が必

要なので、あんな風に入るための火柱や野火を幾つも準備しておかないといけないんです。もっとも、あの森みたいな場所じゃ出来ませんけどね」

「それはそうだろうな。さて……とりあえずあの火柱が上がっている先に行けば良いんだよね？」

「そうですね。それじゃあ早速行きましょうか」

「ああ」

頷きながら返事をした後、俺は火柱がある方へ向かってゆつくりと歩き始めた。火柱へ近付くにつれ、炎が勢い良く燃える音やその熱が伝わってきた事で、濡れていた時とは反対に夏のような暑さが襲い、半人半妖の俺にこの環境は少しキツかった。しかし、とても過ごしやすそうにしている篝の姿を前にそんな事はとても言えなかったため、額に浮かぶ汗をこつそり拭いながらただひたすらに歩を進めた。そして、肌伝わると熱でヒリヒリとした痛みを感じ始めた頃、ようやく火柱の横を通り抜ける事が出来、それと同時に暑さからも徐々に解放され始め、内心かなりホツとしていた。その後、更に歩を進めて行くと、ゴツゴツとした岩で出来た火鼠サイズにしてはかなり大きな門と門番らしき火鼠達の姿が見えると、篝はとても嬉しそうな様子で門番達に声を掛けた。

「おーい！ ただいまー！」

「……………え？ こ、この声は……………!？」

「か、箒様!？」

箒の声に門番達が驚きの声を上げる中、俺達がゆっくりと近付いていくと、門番達は俺の腕の中にいる箒の姿に更に驚きの声を上げた。

「箒様! ご無事でしたか!？」

「我々が目を離れた隙に里を抜け出されたと聞いて、長老様を始めとした皆様がとても心配されていましたよ!？」

「あはは、ゴメンゴメン。ボクだけで『あの子』を捜してみようと思っただけで、やっぱり寒がりなのには勝てなかったよ……」

「……そうでしたか。しかし、ご無事だったのは本当に良かったです、箒様」

「ご家族の皆様も心配されていましたが、その中でも長老様が一番心配されていたので、すぐに顔をお見せに行った方がよろしいかと思えます」

「うん、分かった。ところで、彼も通しても良いかな? 彼がいなかったら、ボクは今頃寒さで死んでしまっていたかもしれないからさ」

その箒の言葉で門番達の視線が俺に集中し、門番達はとても物珍しそうな様子で俺の姿を見始めたが、すぐに箒の方へ再び視線を向けると、頷きながら返事をした。

「もちろんです、箒様」

「箒様の命の恩人とあらば、我々も反対する理由はありませんので」

「うん、ありがとう」

ニコリと笑いながらお礼を言うのと、篝は今度は俺の方へと顔を向け、「それじゃあ行きましようか」と同じくニコリと笑いながら言った。そしてそれに対して静かに頷いた後、門番達が避けてくれた所を通って里の中へと入った瞬間、俺はそこに広がっていた光景に思わず小さな声で独り言ちてしまっていた。

「……これが火鼠の里、なのか……」

「ふふ、そうですよ」

小さく笑いながら篝が俺の独り言に答える中、俺は一步ずつ歩を進めながら目の前に広がる火鼠の里の光景に軽く驚いていた。里の中にはあちらこちらに火鼠達の家と思われる幾つもの大きな岩があり、その岩の下に空いた穴から火鼠達は出入りをしており、俺が住んでいる不忍や深水のような町にあるような木造の家などはもちろん無かった。そして、更に少し歩くと広場のような場所があり、その中心には明らかに火鼠達が作った物では無い石碑のような物があった。

「篝、これって石碑……だよな？」

「はい。遙か昔——」

「……この地を訪れた巨大な妖が当時の住民達との交流の記念として置き、その仲間が文字を彫ったと言われている物ですじゃ」

「……………え？」

篝の説明を遮った声の方へ視線を向けると、そこにはここまで見てきた住民達よりも大きい——およそ子兎と同じくらいの大きさの火鼠の姿があり、その姿に篝は大きな声を上げながら驚いた。

「お、お爺ちゃ——じゃなかった、長老！」

「……………篝、勝手に出歩いてはいけないと言ったはずじゃろ？ まったく……………好奇心旺盛なのは良い事じゃが、あまり不用意に出歩いてはいかんぞ？」

「ご、ごめんなさい。けど、ボクはどうしても捜したかったんだよ……………」

「……………『朱夏』をか？」

「うん……………だって、朱夏はボクにとつてとても大切な妹だから……………」

「……………やれやれ、その気持ちは分かるが、朱夏はこの島中を捜しても見つからなかったんじゃないぞ？ だというのに、お前だけで探したところで見つかるはずは無いじゃろ？」

「そうだけど……………でも、ボクはもう一度だけでも良いから、朱夏に会いたいんだよ……………！」

涙交じりの篝の声に、火鼠の長老は哀しそうな表情を浮かべながらただ首を横に振るだけだった。

そっか……………篝はいなくなった自分の妹を捜すために里から出ていたのか。ただ、水に

本当に弱い火鼠が島から出るには、海を誰かに捕まって飛んで渡るしかない気がするけど、篝達に黙ってそんな事をする必要なんて無いよな……。

いなくなった篝の妹の事について考えていた時、長老は篝から俺へと視線を逸らすと、丁寧に一礼をした。

「どなたか存じませんが、篝を連れてきて頂き、本当にありがとうございます」

「あ、いえ……別に大した事はしていませんし、お孫さんにはここまで案内してもらっていたので、お気になさらないで下さい。それよりも、先程からお話に出てきている朱夏さんというのは……」

「朱夏は篝の一個下の妹で、篝とはとても仲の良い子でした。ですが、数年前に突然姿を消しましてな、里の者が総出で島中を捜したのですが、まったく見つからなかったのです」

「……朱夏さんは、長老様や篝さんに黙ってどこかへ行く様な事は今までありませんか？」

「いえ……朱夏はいつも篝の後について回っているほど篝に懐いていたので、そのような事は一度もありません……」

「そうですか……では、誰か空を飛ぶ事が出来る妖などの友人はいましたか？」

「いえ、そのような者がいるという話も聞いた事はありません……」

「ふむ……」

これでだいぶ絞られたけど、他に行方不明になる可能性なんてあるのか……？

その出来事の不思議さに小首を傾げていたその時、突然箒が何かを思い出した様子で「……あ、そういえば」と小さな声を上げたかと思うと、腕の中から長老へと声を掛けた。「長老、確かボク達の生え替わりの時期に抜ける毛を集めている場所があるって聞いた事があるけど、それはどの辺りにあるの？」

「ここから少し離れた場所にあるが……それがどうかしたか？」

「えっと……実は——」

箒が今回の涼風丸さんからの依頼やここまでの経緯について話すと、長老は「なるほど……」と納得した表情で頷いた後、ちょうど近くにいた火鼠達に声を掛けた。

「お主ら、少し良いかの？」

「はい、何かご用ですか？」

「こちらにいらつしやる箒の命の恩人が、我々の燃えぬ毛を御所望のようじゃ。皆で力を合わせて持ってこられるだけ持ってきてくれるかの？」

「分かりました。よし……皆、やるぞー！」

『おー!!』

火鼠達は大声を上げると、毛を集めている場所へ向かって一斉に走っていった。

ふう……これで何とか涼風丸さんからの依頼には応えられそうだけど、後はどうやって向こうまで帰れば良いかな……？

そんな事を考えていたその時、「長老様——！」

と長老の事を呼ぶ声が聞こえ、俺達はそちらへと一齐に振り向いた。すると、さつき出会った門番達がこつちへ向かって走ってきており、その表情には焦りと不安といった感情が浮かんでいた。そして、門番達が息を切らしながら俺達の目の前で止まると、長老は不思議そうな様子で門番達に声を掛けた。

「お前達……一体どうしたのじゃ？」

「はあ……はあ……門の所に奇妙なモノが……」

「奇妙なモノ……じゃと？」

「は、はい……そちらの方よりも大きな体で背中に翼が生えていました……」

「俺よりも大きくて翼が生えている……あ、もしかしてその人は帽子を被っていたり白い服を着ていたりしていませんか？」

「そうですね……もしや、お知り合いですか？」

「……たぶん、そうだと思います。でも、どうやってここまで辿り着いたんだらう……」

涼風丸さんと思われる人物がこの島に辿り着いた方法について考えたが、すぐには思いつかなかつたため、俺は「……まあ、良いか」と独り言ちながら考える事を止めた。そ

して、再び長老の方へ視線を向けた後、俺は丁寧に一礼をしてから話し掛けた。

「申し訳ありません、長老様。少し門の方まで行つて参ります」

「ほつほつほつ、構いませんぞ。例の物は若者達に運ばせておきますので、ゆっくり行つてきて下され」

「ありがとうございます」

長老の言葉に答えた後、俺と箒は門番達の後に続いて再び門の方へ向かつて歩き始めた。そして、門の所に着いたその瞬間、門の陰から「……やれやれ」と少し呆れたような声が聞こえ、それと同時に数日前に出会った今回の依頼人——大天狗の涼風丸さんが姿を現した。

「……やはり、涼風丸さんだったんですね」

「ああ、そうだ。まったく……お前が嵐の中に消えたと聞いて、龍三郎を始めとしたお前の知り合い全員が心配をしていたのだぞ？」

「皆が……」

皆には心配を掛けた事、後でしっかりと謝らないとな……。

不忍や深水の皆の顔を思い浮かべながらそう考えていた時、涼風丸さんは俺の腕の中にいる箒や門番達の姿に「ほう……」と物珍しそうな様子で声を上げた。

「して龍己、此奴らがお前の言う火鼠というモノか？」

「はい。そして、涼風丸さんからの依頼である『燃えない着物』を仕立てるための素材もこの火鼠の里の住民達に集めてもらっている最中なので、安心して下さい」

「……それは分かった。しかし、その素材をお前はどのよう運ぶつもりなのだ？」

「……あ」

そうだ……素材が集まったところで、それを運べなかつたらまったく意味が無い。そして、それに加えて火鼠の毛を着物用の糸に仕立てるにはたぶんかなりの量があるから、その重量に耐えられるだけの輸送手段が必要になる。けど、俺が乗ってきた船は今ここには無いし……。

黙り込んでしまった俺の姿に、涼風丸さんは呆れた様子で「……詰めの甘い奴だ」と独り言ちた後、不意に海がある方へ振り返ると、突然ニヤリと笑った。

「……どうやら来たようだな」

「来たって……何がですか？」

「その着物の素材やお前を運ぶための船、並びに船員達だ」

「……え、それってまさか……」

「ああ、お前が乗ってきた船はボロボロになってるが、どうやら青八達、傷が浅かった者達が仲間の漁師に頼み込んでいたようだな。我が深水を訪れた頃には、既に船出の支度を整えていた。そこそこ大きな船であつたため、素材やお前を運ぶには事欠かぬだろ

うな」

「……良かった。青八さん達、生きていたんだ……」

「……奴らも漁師である前に海に関する妖だ。そう心配せずとも、海難事故で命を落とす事はそうそう無いだろう」

「それはそうですけど、青八さん達が生きていてくれた事、その事が本当に嬉しいんです。今回の件に青八さん達を関わらせなければ、嵐に巻き込まれる事も怪我をさせる事もありませんでしたから……」

青八さん達に怪我をさせてしまった事に対して申し訳なさを感じていた時、涼風丸さんは何かを懐かしむような目をしながらポツリと呟いた。

「……やはり、お前は龍三郎と似ているな」

「え……？」

「……なに、龍三郎も昔からそのような事ばかり言っていただけの事だ。たとえ自分が危険な目に遭おうとも常にその件に関わっている他者の心配ばかりをし、他者の喜びや哀しみはまるで自分の事のように受け取った上にそれを分かち合う」

「……」

「もちろん、決してそれが悪い事だとは思わん。しかし、中にはそういった輩を良いように利用しようとする者もいる。それは人間に限らず、妖などにもあてはまる事だ。他者

が腹の内でのどのような事を考えているのかなどは、覚ぐらいにしか分からぬのだからな」

「そう……ですな」

その話を聞きながら先日の深水の件を思い出し、少しだけ切ない気持ちになつていたその時、道の向こうから何台もの大八車とそれを引いてくる青八さん達の姿が見え、俺は再び青八さん達に会えた嬉しさから大きく手を振りながら声を掛けた。

「青八さん！ 皆さん！ こちらです！」

「おう！ 分かった！」

程なく、青八さん達と大きな麻袋を積んだ大八車が目の前で止まると、青八さんは大八車から手をパツと離し、とても嬉しそうな笑みを浮かべながら俺の肩をバンバンと叩いてきた。

「ははっ！ おめえにまた会えて嬉しいぜ、鈴蘭！」

「いてて……あ、ありがとうございます。私も青八さん達にまた会えて本当に嬉しいです。あの……怪我の方は大丈夫ですか？」

「へへ、こんなもん怪我の内に入んねえし、酒飲み話の一つにしちまえばどうって事ねえよ！ なつ、おめえら！」

『おう！』

青八さんの言葉に磯天狗の漁師達全員が大声で答えると、篝達はその音量の大きさに驚きながら一斉に毛を逆立てた後、小さな声でそれぞれ独り言ちた。

「うう……ビツクリしたあ……」

「海に向こうには本当に多くの驚きがあるな……」

「まったくだ……」

……まあ、そう思うのは不思議じゃないよな。

そんな事を考えながら火鼠達の様子に対してクスリと笑っていた時、後ろの方から「龍己殿」と俺の事を呼ぶ声が聞こえ、俺達は揃って後ろを振り返った。すると、そこにいたのは長老と若い火鼠達であり、その手には『燃えない着物』の素材になる火鼠の毛が握られていた。

「長老様、皆さん……わざわざここまで来て頂いて本当にありがとうございます」

「ほっほっほ、構いませんぞ。篝の命の恩人のためならば、この程度大した事ではありません。せぬ。のう、皆のもの」

『はいー』

長老の声に火鼠達が一斉に答えると、それを見ていた青八さんは「……へえ」と楽しそうに笑みを浮かべた後、俺の肩を抱きながらニヤリと笑った。

「おめえ、ずいぶんとコイツらから慕われてるみてえだな？ 流石は命の恩人様ってと

「ころか？」

「あはは……まあ、本当に偶然だったんですけどね」

「はっはっは！ たとえそれが偶然だったとしてもその運を引き寄せたのは、お前——龍己の日頃の行いが良かったからだよ！ だから、この事については存分に胸を張つてけ！」

「……はっ」

心の奥から湧き上がってくるほかほかとした物を感じながら返事をする、青八さんは仲間の漁師達へ向かって「よし……やるぞ、お前達！」と呼び掛け、それに対して漁師達が答えた後、火鼠達と協力して火鼠の毛を次々と麻袋へとしまい、それを大八車へと載せていった。そして、それから数分が経った頃、火鼠の毛で膨らんだ麻袋が載った大八車を船に乗せるため、青八さん達が次々と引いていき、それを見送りながら心からホツとしていた。

……ふう、これで任務は完了だし、後は無事に不忍へ帰るだけだな。

そんな事を思いながらふと篝へ視線を向けると、篝は何やら真剣な表情で考え事をしていた。

「篝……？」

「……龍己さん、一つお願いしても良いですか？」

「あ、うん……俺に出来る事なら」

「分かりました。けど、その前に——一度ボクの事を下ろして頂いても良いですか?」

「うん、分かった」

ゆつくりとしゃがみ込みながら箒を下ろすと、箒はとても真剣な表情で長老へと向き合い、一度深呼吸をしてから静かに口を開いた。

「長老、お願いがあります」

「……なんじゃ?」

「ボクに……旅に出る許可を出して下さい!」

「箒……」

「……理由を訊いても良いか?」

「理由は2つあります。1つは妹、朱夏を捜すためです。朱夏がこの島にいないのはもう分かっています。それなら、ここでは無い場所を捜す方が朱夏が見つかる可能性が高いと思うんです」

「……確かにそうかもしれないが、見つかるという確証は無いぞ?」

「はい、分かっています。けど、それでもボクは朱夏を捜したいし、もう一度朱夏と話したい、そして朱夏ともう一度笑い合いたいです……!」

「分かった……では、2つ目の理由を聞こうか」

「2つ目は、自分の見識を広げたいからです。ボクは今日一日で龍己さんの事や涼風丸さんの事など、本当に色々な事を学びました。けどそれは、この島の外の事をボクはまだまだ知らないという事と同じです」

「……まあ、そうじゃろうな」

「そしてボクは、今回の件を通じて自分がまだまだ未熟で力不足な事も知りました。だからこそ、この島の外にある様々な物や人との出会いで、ボクは成長をしたいんです」  
「成長を望むのは良い事じゃ。しかし……しまの外には、お前が考えているよりも大きな危険や苦難が待ち構えている。それでも行くというのか？」

「はいー」

長老の問い掛けに籌がまっすぐな目をしながら力強く答えると、「……そうか」と長老は呟いてから軽く俯いた。そして、程なくしてゆっくり顔を上げると、長老は俺の目を真正面から見ながら静かに口を開いた。

「龍己殿、もしよろしければウチの籌の事をお願い出来ませぬか？」

「え……長老、それってもしかして……！」

「……ああ。お前のその決意に免じて旅——いや、島の外へ見識を広げに行く事や朱夏を捜しに行く事を許す。しかし、お前はまだ幼い故、しばらく面倒を見て下さる方が必要じゃ。それに、お前が龍己殿に頼みたかったのは、自分を連れて行って欲しいという

事じやろう?」

「そうだけ——ううん、確かにそうですけど……」

「……やっぱりな。お前の龍己殿への懐き方を見れば一目瞭然じやわい」

「う……そういう風に言葉にされると、何だか恥ずかしいような……」

「まあ、お前も朱夏の姉である前に兄妹の中では幼い方じやからな。そのように少しでも頼る事が出来る存在が良かった方が良いという物じや」

長老は優しい表情を浮かべながら小さく頷いた後、表情を真剣な物へと変えながら箒から俺の方へと視線を移した。

「……さて、話を戻すとしましょう。龍己殿、誠に勝手な願いであるのは承知の上でお願い致します。どうかしばらくの間、箒の面倒を見て頂く事は出来ませぬか?」

「長老様……」

はい、とすぐに答えたいのはやまやまだけど、俺はあくまでも居候の身でありまだまだ未熟な半人半妖だ。つまり、俺は勝手にこれ以上居候を増やして良いような立場ではない。加えて、箒を預かるといふ事は、箒が傍にいる間は俺が保護者になるわけで、正直な事を言うなら俺には箒の保護者になれるほどの力があるわけでは無いと自分で思っている。

さて……どうしたもんかな。

長老からの頼みに対して悩んでいたその時、それを聞いていた涼風丸さんから「……悩む必要など無いだろう?」と問い掛けられ、俺が思わず「えっ……?」と驚きの声を上げると、涼風丸さんは真剣な眼差しを向けながら静かに口を開いた。

「……龍己、自分には火鼠——籌を預かるだけの実力や責任能力が無いと思っ  
ているの  
だろう?」

「え、ええ……それに俺は、あくまでも『狐雨福屋』の居候なので、龍三郎さんの許可も無しに決める事は出来ませんから」

「……勝手な想像かもしれないが、龍三郎の性格なら喜んで居候が増える事を承諾するだろうから、その点は問題ない。そして、お前の責任能力などについても我は問題ないと考えている」

「そう……ですか?」

「うむ、責任能力が欠けている者が、龍三郎を始めとした様々な者からあそこまで慕われるわけが無いからな。加えて、実力などはこれからつけていけばさして問題は無い。お前は妖としてはまだまだ未熟だが、精神面においては申し分ないようだからな」

「涼風丸さん……」

「まあ、人間自体を認める気はまだ無いが、お前という半人半妖の事くらいは認めても良いだろう。お前はあの離れに住む者だからな」

「あの離れって……」

もしかして、あの離れには何か秘密があるのか……？

そんな疑問が頭を過ぎったが、今考えるべき事はまた別の事だったため、その事は一度頭の中から追い払い、俺は再び籌との事について向き合う事にした。そして籌に注目すると、表情は緊張しているものの、その目はとてもまっすぐな物であり、そう簡単にその決心を変えるとはとても思えない程、強い思いが感じ取れた。

……なら、俺も出来る限り籌の事を支えよう。まだまだ不安な点は多いけど、実力については涼風丸さんが言ったように皆に協力して貰いながら徐々につけていけばいいからな。

皆がいる事の頼もしさを改めて感じながらそう決めた後、未だ緊張した面持ちで俺の事を見ている籌と真剣な表情を浮かべている長老に対してニコリと微笑みかけた。

「長老様、貴方からのそのご依頼、喜んでお引き受け致します」

「龍己殿……!」

「龍己さん、それじゃあ……!」

「ああ、改めてこれからよろしくな、籌」

「はい!、こちらこそよろしくお願います!」

とても嬉しそうな笑みを浮かべる籌の顔を見た瞬間、ここまでの安心感と疲れから俺

の体がグラリと揺れ、そのまま倒れ込みそうになった。しかし、「……やれやれ、やはり半人半妖というのは厄介だな」という呆れた声が聞こえると同時に、俺の体が涼風丸さんによってソツと支えられた。

「あ……ありがとうございます、涼風丸さん……」

「龍己、まさかとは思うが……ここまで飲まず食わずで来たのでは無いだろうな？」

「……そういえば、この島に漂着してから何も食べたり飲んだりしていなかったですね……」

「はあ……そんな事では先が思いやられるな。仕方ない……我々が出発するのはもう少し後にしよう」

「本当に……申し訳ない、です……」

「そう思うのならば、まずは元気をつけろ。元気の無い状態で不忍へ戻ろうものなら、龍三郎達が更に心配をするからな」

「そう……ですね。前に、火事の中から子供を助けた事があるんですけど……その時もだいぶ心配を掛けてしまいましたから、これ以上は心配なんて……掛けられないですね……」

「その通りだ。だから、今はゆっくりと休め。飲み水や食糧などについては、我々が手配をするのでな」

「ありがとうございます……涼風丸さん」

「礼など良い。ただ……今は眠っておけ」

「わかり……まし、た……」

涼風丸さんに対して途切れ途切れに答えた後、俺の視界はゆっくりと暗くなつていき、やがて意識が静かに失われていった。

「……さて、あの日以降体調に妙な異変などは無いか？」

「はい、バッチリです」

あの日——火鼠達が住む島に漂着した日から一週間が経った頃、俺は箆を膝に乗せながら自室である離れで涼風丸さんの問い掛けにニコリと笑いながら答えた。あの日、俺の疲れなどを取るために休息を取った後、長老や箆の家族達にしつかりと別れを告げてから涼風丸さんに抱えてもらう形で俺達は島を飛び立った。島から不忍へ向かう途中、箆は初めて見る空からの光景に『わあーっ……!』と嬉しそうな声を漏らしながら楽しそうにしていた。そして、そんな風に飛び続け、夕日が登り始めた頃に見覚えのある港——俺が今朝出発した『深水』の港と龍三郎さん達の姿が見え、俺はようやく帰つてこられた事に嬉しさを感じた。その後、皆の目の前に涼風丸さんが静かに降り立つと、皆

はとても嬉しそうな笑顔で俺達が無事に帰ってきた事について喜び、それぞれの言い方で労いの言葉を掛けてくれた。そして、それに答えながら火鼠の毛を載せた船も無事に港に着いた事や篝の事などについて話した後、『深水』に残る七之助さんや自分が住んでいる山へ戻る涼風丸さんと別れ、俺達は揃って不忍へと戻ったのだった。

……そういえば、篝が行方不明の妹を捜して戻って話した時に風之助が少しだけ暗い表情をしたのが気になるな……。もしかしたら、アイツにもいなくなつた友達か弟妹でもいるのかな……？

そんな事を考えながらその時の事を思い返していた時、篝が天井を見上げながら小さな声で独り言ちた。

「それにしても……ボク達の毛であんなに綺麗な着物や衣装が作れるなんて夢にも思わなかつたなあ……」

「あ、ああ……そうだな。貰った量が思ったよりも多かつたから、白無垢しろむくも正絹しょうけんじゃなくあれで織ろうって話になったのは結構驚いたけど、結果として良かったのかもしれないな」

「うむ、そうだな。そしてあの着物は、どうやら娘にとって一番の着物になつたようだな、毎日あの着物を楽しそうに手入れしているよ」

「そうですか……そこまで気に入ってもらえたのなら、頑張つた甲斐があつたかもしれ

ませんね」

小さく微笑みながら答えた時、俺はふとある事を思い出し、それについて涼風丸さんに問い掛けた。

「涼風丸さん、どうしてあそこまで人間の事を嫌っているんですか？ 妖が人間に対して良い印象を持つていないのはよくある事ですけれど、涼風丸さんの場合は……何と云うか憎んでいるみたいな印象を抱いているような気がして……」

「……その事か。まあ、今のお前にならば話しても良いだろう」

そして、涼風丸さんは緑茶を一口飲んでから人間を嫌うようになった理由について話を始めた。

「昔、まだ人間達の世界にいた頃、我はとある地方の山に住んでいた。そしてその近くには、小さな村が1つだけあったのだが、その村の住人達は私の事をあまり良く思っていないかった。しかし、その中でも1人だけそこそこ仲良くしていた人間の友人がいた。ソイツは山伏と呼ばれる者で、仲間内の中でも特に強い霊力を持つている奴だった。奴は同じ人間よりも我ら妖のようなモノが好きで、そういつた者達と触れあいたいと思いい、山伏を志したとある日酒を飲み交わしている時に言っていた。その時、我はその理由をくだらないと一蹴したのだが、奴はそれでもニコニコと笑っていた。恐らく奴にとつては、たとえどんな事を言われようとも我のようなモノと触れあう事が何よりも楽

しかつたのだろうか。

そんなある日、近くの村で童が一人いなくなるという事件が起きた。童自体はその日の内に山中ですぐに発見され、いなくなつた理由もただ単に探検をしていたからだつたのだが、とても愚かしい事に村人達は童は我が喰らうために攫つたと言ひ始めたのだ。もちろん、我がそのような事をするわけは無かつたのだが、我に對して悪印象を抱いていた村人達や他の山伏達は我を退治するために武器や札を持つて続々と山中へと入つてきたと奴が教えてくれた。その報告を聞いた後、我は村人達に對してほとほと愛想を尽かし、前々から話だけは聞いていたこの妖世界へと行く事にし、奴にも別の地方へ逃げるように言つた。だが、奴は静かに首を振ると、『俺が皆を説得してみるから少し待つててくれ』と言ひ残し、村がある方へと走つていつた」

「……本当に良いご友人だつたんですね」

「……そして、それから程なくして、奴の気配を感じてそちらへ視線を向けた。するとそこにあつたのは、身体中に切り傷や火傷を負つた奴の姿であり、我はすぐに駆け寄りながら何があつたのかを訊くと、奴は苦しそうな笑みを浮かべながら『ゴメン……無理だつたよ……』と答えた。その時、我は初めて人間を助けたと感じ、どうにか奴を助けるために住み処へと連れて行こうとした。しかし、奴は再び静かに首を振ると、『涼風丸、俺を置いていけ。お前だけでも生きてくれ』と言つた。その言葉に我が驚いている

と、奴は痛みを堪えながらいつものような笑みを浮かべながらこう言った。

『お前が助けてくれようとしてるのとはとても嬉しいよ。でも、俺がお前の住み処へ行けば、その血の跡を追ってアイツらがやって来てしまう。だから、俺の事を置いて行ってくれ。お前が争う姿なんて俺は見たくないから』とな。我はそれでも奴を助けようと思つたが、村人達が近付いてくる足音が徐々に聞こえだした事、そして奴の『さあ、早く！』という言葉を聞き、我は悔しさを感じながらも姿を隠しながら山を飛び去つただ……』

「……その後、そのご友人はどうなつたのですか？」

「……死んだ、それも仲間だつた山伏達や村人達から更に痛めつけられた上でな。妖世界へと渡つた後、我は奴の事を知るために一度人間達の世界に戻つた直後に山に住んでいた獣たちより聞いたのだが、それを聞いた瞬間に怒りが沸々と湧き出し、村人や山伏達を血祭りに上げてやろうと考えた。しかし、そんな事しても奴が戻る事は無い上、死んだ奴が喜ばないだろうと思ひ、人間達への憎しみを抱いたまま妖世界へと戻つただ」

「……そうだつたんですね」

涼風丸さんの話を聞いた後、人間達が元々持つている異種への恐れのを改めて感じていた時、膝の上にいる篝が「……同じ人間同士なのに、どうしてそんな酷い事

が出来るんでしよう……」と哀しそうな様子で呟くと、涼風丸さんは目を閉じながら首を横に振った。

「さてな……だが、奴らにとっては、我だけでなく我と深く関わっていた彼奴も人ではない何かに見えていたのかもしれんな」

「そんな……」

「まあ、今となつてはその真偽は分からぬ。もつとも、今更知る気も無いがな」

「え、でも……」

「それに、今必要なのはそれを知る事でも真偽を議論する事でも無い。その過去があつた事はしつかりと受け止めつつ、次へと進む事だ。過去をいつまでも引きずつていたところで、得られる物など何も——」

「それは……本心からの言葉ですか？」

「む……?」

「り、龍己……さん?」

俺の問い掛けに涼風丸さん達が疑問の声を上げた後、一度深呼吸をしてから言葉を続けた。

「先程、そのご友人が無くなったのを聞いた時に怒りが沸々と湧き出し、村人や山伏達を血祭りに上げてやろうと思つたと、涼風丸さんは言っていました。けれど、その時に同

時に自分に対しても怒りを覚えていたんじゃないですか？」

「ふん……くだらん。何故、我が自分に対して怒りを覚える必要があるのだ？」

「涼風丸さん自身が行動を起こしていれば、そのご友人を助けられる可能性があった事に気付いたからです。村人達が涼風丸さんを良く思っていなかったのは、人間達が本来持っている異種への恐れのせい、涼風丸さんはそれに気付いていながらも自分には関係ないと思つてそれを放置していた。けれど、涼風丸さんと村人達の間に少しでも信頼感があれば、そして村人達が抱いていた恐れを少しでも無くしておけば、涼風丸さんと村人達が心からわかり合えなくとも、そのご友人が村人達に殺される事は無かつたかも知れない。ご友人が殺されてしまったのは、涼風丸さんが言うように妖と仲良くしている人間を同じ人間として村人達が認めなかつたからだと思えますし」

「け、けど……涼風丸さんのご友人と村人達は今まで仲良くしていたんですよね？ それなのに、どうしてそれだけで自分達とは違うモノだなんて思えるんですか……？」

「それが集団的な心理だからだよ。これは人間に限らないけど、生き物というのは同じような考えや嗜好を持つ者同士で集まろうとする傾向がある上、そこから外れようとする者や外れている者を排除したがるものなんだ。もつとも、その外れ者が何かに秀でた者だったり自分達に益をもたらす者なら多少の恐れを感じながらも受け入れはする。けれど、それに当てはまらない者やあまりにも異質だと感じた者は進んで排除しよう」と

する。たとえ、その外れ者が自分達と敵対しようと思っていなくてもな」

「そんな……」

「今回の場合は、自分達のように妖に対して恐れを感じず、妖を守ろうとした涼風丸さんの友人の事を村人達や山伏達が異質な敵だと判断した事で起きた。けれどそれは、村人達や山伏達はその異質な敵の仲間である涼風丸さんの事を恐れたから、そして涼風丸さん自身が人間に興味を持つとうとしなかったから起きた事で、少しでもお互いが向き合い触れあつていればその友人が今でも生きていた可能性は上がっていた。その事は間違いないんだと思う」

「……そして、そうしてこなかった自分に対して我自身が怒りを覚えている、と？」

「ええ、俺はそう思っています。何故なら、涼風丸さんは本当は責任感が強いとても優しい人——いや、妖だから」

「……責任感が強く優しい妖だからと言って、必ずしもそう思うわけでも無いと思うが？」

「確かにその通りです。けれど、涼風丸さんはそうだった。そうじゃなければ、自分から深水に出向いて青八さん達に声を掛けに行かないですし、またいつ嵐が吹き荒れるかも分からない状態で俺達がいいた島まで飛んでこようなんて思いませんから」

涼風丸さんの目を真正面から見つめながら「どうですか？」と訊くと、涼風丸さんは

真剣な目でしばらく俺の目を見つめ返した後、諦めたように一度息をついてから静かに口を開いた。

「……半分正解だが、半分は不正解だ。確かに我は責任感が強い方だと自負はしているが、それはあくまでも自分が主体となった事柄などに対してだけであり、少ししか関わっていない事などであればそれ以上関わるつもりもない。今回も私の依頼によつて起きた出来事であつたが故に関わつたが、たとえ心が冷たいと言われようとも基本的にその姿勢を変えるつもりはない」

「………そうですか」

「………だが、お前達においては別だ」

「えっ？」

「………あの日も言つたように、人間を認める気は未だ無いが、お前という半人半妖の事は認めている。元々、我らのような妖に好意を持つていたとは言え、己に対して敵意を持つている者の依頼を引き受け、命すら落としそうになつたにも関わらずそれについて恨み言の1つすら言わない寛容さや自分とは違う種の者すら自然に友にしていくその求心力。そんな力を持つている者であれば、認めざるを得ない。そして、依頼を引き受けてもらった分の恩義もあるからな」

「涼風丸さん………ありがとうございます」

「礼には及ばん。むしろ、我の方が礼を言うべきなのだからな」

「と言うと……？」

小首を傾げながら訊くと、涼風丸さんは少しだけ気恥ずかしそうな様子でコホンと咳払いをしてからそれに答えた。

「……お前という人間との出会いで、少しずつは人間という物について興味を持つとうと思つた、ただそれだけの事だ」

「……ふふ、それでも俺は嬉しいですよ」

「……そうか」

「はい」

ニコリと笑いながら答えた後、俺が箸と顔を見合わせてクスクスと笑うと、涼風丸さんはまだ少しだけ気恥ずかしそうな様子を見せながら再び緑茶を一口だけ飲んだ。

どんなきつかけであつても、誰かと仲良くなれるのは決して悪い事じゃない。それは人間同士や妖同士に限らず、人間と妖のような異種族間でも同じ事だ。だからこそ、これからもこの妖世界の住人達との絆を紡いでいこう。いつか人間と妖の架け橋のような存在にもなれるように。

そして、涼風丸さんの方へ向き直つた後、俺と箸はニコリと笑いながら涼風丸さんに手を差し出した。

「改めて、これからもよろしくお願いします、涼風丸さん」

「よろしくお願いします、涼風丸さん！」

「……ああ、こちらこそな」

涼風丸さんがフツと笑いながら答え、俺達の手を静かに取った後、俺達はそのまま握手を交わした。その瞬間、涼風丸さんの名前と同じ涼風が離れの中へと吹き、それと同時に先程まで重かった空気はとても澄んだ気持ちの良い空気へと入れ替わり、俺達の心にもこれからの事を応援してくれているようなとても気持ちの良い追い風が吹いてきたような気がした。

## 第11話 世界を繋ぐ扉と新たな仲間

大天狗の涼風丸すずかぜまるさんや火鼠かその篝かがりと離れで話をした日から一週間が過ぎた頃の朝食後、俺は自室である離れで篝がのんびりと眠る横で人間の姿のまま読書をしていた。別に妖狐の姿で読書をしていても良いのだが、妖狐の姿はあくまでも事情を知らない妖達に元人間の半人半妖である事を隠すための物であり、人間の姿の方が楽と言えば楽なため、離れにいる時は結構人間の姿で過ごしている。

……まあ、主の龍三郎さんを始めとしたこの『狐雨福屋』の人達は、皆俺の事情を知っていてくれるから、店の中を人間の姿でうろうろしても本当は問題無いけど、龍三郎さんを訪ねてくるお客様的事もあるから、今の所はこの離れぐらしか人間の姿でいられる場所も無いな。

そんな事を考えながら本のページを捲っていたその時、突然廊下の方から足音が聞こえ、俺はその音に耳を欻そぼだてながら本をパタンと閉じた。

「……まだ足音だけじゃ誰かは分からないし、何があっても良いようにとりあえずいつもの姿になっておくか」

そう独り言ちた後、体の奥にある妖力を目覚めさせ、金色の耳と尻尾を生やした妖狐

の姿へと変化した。そして、程なくして足音の主は姿を現すと、いつものように穏やかな笑みを浮かべながら俺に話し掛けてきた。

「龍己君、1つお願い事をしてよろしいですか?」

「あ、はい。もちろん大丈夫ですけど……お仕事に関する事ですか? 龍三郎さん」

「ええ、まあ」

足音の主——妖狐の龍三郎さんは、笑みを崩さずに静かに頷くと、そのまま離れへと入りながらそのお願い事について話を始めた。

「実は、ある場所に私の昔からの友人であり反物を織る事を生業にしている方がいます。その方にくつか依頼をしていたので、それを貰ってきて欲しいのです。因みに代金は前払いしているので、貰ってくるだけで問題ありません」

「分かりました」

「そして、そのお店がある場所が少し特殊なので、今回は同行者が付く事になります」

「同行者……ですか?」

「はい。彼は幾度もそのお店まで行った事がありますので、彼の言う通りに着いて行けば大丈夫です。本来であれば、私と彼で行ってくるべきなのですが、先日から龍己君にはお店の事も手伝ってもらっていますし、少しお店の方も忙しくなってきたので、今回は龍己君にお願いしようと思ったのです」

「そうだったんですね……分かりました、それじゃあすぐに準備をします」

「ありがとうございます。彼にはお店の前で待つように言っているので、準備が出来たらそちらへ向かって下さい」

「はい。それじゃあその間、箒は離れて留守番をさせておきますね」

そして、留守番を頼むためにスヤスヤと眠っている箒を起こそうとした時、龍三郎さんはニコリと笑いながら手で制すると、そのまま笑みを浮かべながら再び話し始めた。

「箒さんは連れて行ってもらっても大丈夫ですよ。箒さんもお留守番をしているよりは、龍己君と一緒にの方が安心するでしょうし、何より箒さんのご家族の手掛かりも見つかるかもしれませんから」

「……そうですね」

返事をしながら大人しく眠っている箒の背中を静かに撫でた後、俺はここまでの調査の成果について思い出した。箒は行方不明になった妹——朱夏を捜すためにこうして俺に付いてきたが、瓦版屋である鎌鼬かまいたちの風之助や妖狐の草吉さん、更には別の街——深水に住んでいる化け蛇の七之助さんや少し離れた場所にある山に住む涼風丸さんの力を借りても未だその行方が分からずにいた。

俺も箒を連れてこの不忍の街を歩いて捜したり知り合いに訊いてみたりはしたけど、結局分からずじまいだったから……。本当ならもう少し範囲を広げて捜したいけど、

『火の外に在る時に水が掛かると死んでしまう』という火鼠の特性上、あまり遠くに行くのは危険だから、箒を連れて行くには結構な装備が必要になるしな。ただ、そういうのに適した妖術でもあれば、また話は別なんだけど……。

そんな事を考えながら箒を撫でていた時、「んう……」という声を上げながら箒が目を覚まし、まだ眠そうな目を俺達へと向けてきた。

「……あ、皆さん、おはようございます……」

「おはよう、箒。その様子だとよく眠れたみたいだな」

「えーと……はい、朱夏が中々見つからない事で、気持ちが悪く落ち込んでいたんですが……少し眠ってみたら少しだけ楽になりました」

「そっか、それなら良かったよ。無事に見つかるように俺達ももう少し努力してみるから、これからもお互いに頑張っていこうな」

「……はい、これからもよろしくお願いします」

ニコリと笑いながら言う箒の頭を撫でながらコクンと頷いた後、龍三郎さんから受けた依頼について話すために口を開いた。

「さて……今から龍三郎さんからの依頼で出掛けるところだったんだけど、お前も付いてくるか？」

「え……お仕事なのにボクも付いて行って良いんですか？」

「はい。確かにお仕事ではありませんが、お手伝いに近い内容ですし、この不忍とは別の場所へ行ってもらうので、もしかすれば篝さんのご家族の手掛かりも見つかるとも思われます。それに、篝さんには碧葉あおばとも仲良くして頂いてますが、やはり龍己君と一緒にの方が安心するでしょうかね」

「龍三郎さん……本当にありがとうございます」

「いえいえ。それでは……龍己君、篝さん、どうかよろしくお願いします」

「はい」

一緒に返事をする、龍三郎さんは安心した様子でコクンと頷き、そのまま仕事の方へ戻っていった。

今回の仕事の内容とか同行者が誰なのかとか気になる事は多いけど、こうして手伝いレベルでも仕事を頼まれるようになったのは、やっぱり嬉しい物があるよな。

「……これからももっと色々な仕事をさせてもらえるようにまずは今回の仕事を頑張っていかないな」

頼まれた仕事に向けてのやる気を高めながら独り言ちた後、再び篝の方へ顔を向けた。

「それじゃあ早速行こうぜ、篝」

「はいー」

そして、箒と一緒に荷物の準備を整え、筆や硯すずりなどが入った風呂敷を軽く背負った後、俺は箒を抱えながら縁側に置いていた草履に足を通し、同行者との待ち合わせ場所へと向かった。木戸を通り抜けて『狐雨福屋』の前に行くと、そこにいたのは『狐雨福屋』の手代であり龍三郎さん達と同じ妖狐の羅紗ろしゃさんだった。羅紗さんは濃い青色の着流しに身を包んだ俺と同じ金色の耳と尾を持ついつも落ち着いた雰囲気ふんいきを漂ただよわせている妖狐で、俺が半人半妖になる原因になった妖狐でもあるのだが、今日は俺と同じように小さな風呂敷包みを背負っていた。

それにしても……同行者が羅紗さんだったのは、ちよつと驚きかな。何というか、羅紗さんは番頭の伊織いおりさんと同じく中での仕事が多いイメージだったしな……。

羅紗さんの姿を見ながらそんな事を考えていた時、「……来たか」と羅紗さんは一言呟くと、ゆつくりと俺達の方へ視線を向けた。

「思っていたよりも早かったな、龍己」

「あ、はい……やはりお待たせするのは良くないと思って」

「……そうか。まあ、その姿勢は悪くない。仕事に限らず、待ち合わせ相手を必要以上に待たせるのは良くは無いからな」

静かに頷きながら言った後、羅紗さんは箒の方へ視線を向けると、そのままの様子で箒に話し掛けた。

「旦那様より話は聞いています。行方不明の妹の手掛かりを探すために付いてくるのだったな」

「はい、お邪魔にならないようにしますので、どうぞよろしくお願ひします」

「ああ、よろしく頼む。……では、そろそろ行くとしよう。あまり遅くなってしまうっては、旦那様や伊織殿が困る事になってしまうからな」

「はい」

そして、俺達は羅紗さんと並ぶようにして不忍の街を歩き出した。不忍の街は、相変わらず様々な妖達で賑わっており、その様子は見ているこつちまで楽しくなってくる程に明るく楽しい物だった。

「そういうえば、不忍っていう名前の由来は、静まり返る事が無い程に賑やかな街になって欲しいからって聞いた事があるな」

「え……そうなんですか?」

「ああ、この世界に来た日に龍三郎さんから。思えば、あの日が俺の新しい人生の始まりだったんだよな……」

そんな事を話していた時、「龍己」と小さな声で俺の事を呼びながら羅紗さんが不意に立ち止まると、申し訳なさそうな様子で俺に話し掛けてきた。

「……あの日、勘違いをした上にお前を殺めてしまった事、本当に申し訳なかった」

「羅紗さん……もう謝らないで下さい。あの日だって謝ってもらっていますから」

そう、あの日——俺が『人間としての死』を迎え、『半人半妖として生まれ変わった』日にも俺は羅紗さんからしつかりとした謝罪を受けている。そして、羅紗さんの言葉の通り、俺は羅紗さんの勘違い——その時に一緒にいた碧葉さんに取り入ろうとしていたように見えた事が原因で、俺は羅紗さんが放った矢で心臓を射貫かれ、そのまま息を引き取った。しかし、龍三郎さんが使ってくれた反魂の秘術によつて俺は人間から半人半妖へ変化した状態で生き返り、羅紗さんの事情を知った上で俺は羅紗さんの謝罪を受け入れ、そのまま羅紗さんを許す事にした。

確かにやり方は少し良くなかったのかもしれないけど、羅紗さんはあくまでも碧葉さんを助けようとしただけで、そういう風に見えるように接してしまっていた前の俺にも当然のように非はある。だから、あの時の俺は羅紗さんを許した。羅紗さんを憎み、その憎しみのために罰を与えるよりは、あの時の選択の方が良いと感じたからな。

「だから、もう謝らないで下さい。俺は羅紗さんの事を憎んだりや怒ったりはしていませんし、出来る事なら羅紗さんとも他の皆さんと同じように仲良くしたいと思っていますから」

「龍己……」

「綺麗事に聞こえるかもしれませんが、憎しみ合うよりもお互いに手と手を取り合っ

て助け合う方が、俺はずっと良いと思っています。それに……今の俺がやるべき事は、羅紗さんを憎む事じゃなく、お世話になつて『狐雨福屋』の皆さんのために出来る事をする事ですから」

ニコリと笑いながら自分の考えを口にすると、羅紗さんは真剣な表情を浮かべながら俺の顔をジツと見つめたが、やがて「……そうか」と言いながら小さく笑みを浮かべ、少し安心した様子で言葉を続けた。

「……恐らく、涼風丸殿も仰つた事だと思ふが、お前は旦那様に似ているな」  
「え……そうですか？」

「ああ。だが、それは顔などの身体的特徴では無く、その考え方や物腰などが旦那様に似ているという事だ。普段の旦那様は誰にでも優しく接しているが、あの日の私のような行動を取つた者に対しては、それへの反省を促しながら行つてしまつた事に対してしっかりと怒りを見せるお方だ」

「……そうですね。俺はまだ叱られた事はありませんが、あの日の龍三郎さん——旦那様の姿からは、店の主としての責任感などに満ち溢れていたと思つています」

「……時には優しく時には厳しく、これは店の主として基礎的な事だからな。私は旦那様に拾つて頂いた事で、今『狐雨福屋』の一員として過ごしているが、あの日の旦那様との出会いには心から感謝している。旦那様と出会つた事で、私はかつての私から変わ

る事が出来、その上で様々な事を学ぶ機会を得られたからな」

「……かつての自分から変わった……」

「その通りだ。そして私は、一生を掛けてこの恩に報いる決心をしている。もともと、妖の一生など本当に気の遠くなるような話だが、私の決心は絶対に揺らぐ事は無い。それが私の決意だからな」

「一生を掛けて、か……」

羅紗さんの真剣な目と言葉から、俺は羅紗さんの強い決意を感じ、羅紗さんと龍三郎さんとの間にある強い絆がとても羨ましく思えた。

羅紗さんと龍三郎さんとの間にどんな出来事があったのかは分からないけど、今の俺には誰かのために一生を掛けるなんて事は出来ないし、そう言われてもその思いを受け止められる自信は無い。だけど、羅紗さん達にはそれだけ強い絆がある。それって何だかスゴい事だし、羨ましい事だよな……。

羅紗さんを見ながらそんな事を考えていたその時、羅紗さんは静かに笑みを浮かべながらポツリと呟いた。

「……まあ、まだ齡が18程度の妖狐の決意など大した物では無いかもしれぬがな」

「いや、俺は本当にスゴい事だと思いま——あれ……?」

「龍己さん、どうかしましたか?」

「いや、ちよつと気になる事があつてな。あの……羅紗さん、一つ良いですか？」  
「……何だ？」

「羅紗さんの年齢つて18歳だったんですか？」

「そうだが……もう少し年上に見えていたのか？」

「えつと、それもあるんですけど……確か妖狐は『長い年月を掛けて修行をした狐が成るモノで、およそ100歳になってから成る地狐』が一般的な妖狐だったような気がするんですが……」

「そうだ、今日までこの『妖世界』になれるために精一杯だったり、色々な出来事に関わつたりで気づけていなかったけど、羅紗さん達が本当に妖狐だとすれば、確実に100歳は超えている上に様々な修行を積んだモノだつていう事になるよな。けど、前に聞いたところによると、龍三郎さんは今年で35歳、碧葉さんは今年で17歳になるつて言つてたよな……？」

「羅紗さん達の話と自分が持っている知識との齟齬そごに混乱していたその時、「……なるほど、そういう事か」と羅紗さんは納得顔で独り言ち、ふうと息をつきながら歩き出した後に俺に話し掛けてきた。」

「龍己、この『妖世界』にはある特異性が存在している」

「特異性……ですか？」

「そうだ。確かにお前が持っている知識は正しいが、それはあくまでも『人間世界』の常識であり、この『妖世界』が持つ特異性の前にはその常識も通用はしない。そして、その特異性というのが、『この世界に住む妖狐などの長い年月を経た上で成るモノから生まれた子は、生まれたその時からその種族としての力を持つ』という物だ」

「えつと……つまり、羅紗さんや旦那様はこの『妖世界』の出身であるが故に、生まれながらにして妖狐としての力を持っているという事ですか？」

「その通りだ。よって、この世界では100歳未満の妖狐や気狐などは珍しくは無い。もともと、天狐である番頭の伊織殿は『人間世界』からいらっしゃった方であるため、お歳は1000を超えてらっしゃるようだがな」

「あ、そうなんですね……。けど、どうして伊織さんは『狐雨福屋』で働いてらっしゃるんですか？」

「……そこまでは分からない。だが、先代の主——旦那様の御父上に関係があるらしいが、詳しい事は知らないな」

「そうですか……」

前に『狐雨福屋』の主達は、周囲で起きた事件に首を突っ込んでいた上、先代の主もその例に漏れなかったと聞いた事がある。という事は、伊織さんとの出会いもそういった事件や何かしらの出来事がきっかけだったのかもしれない。

……いつかは、その真相を伊織さんから聞く機会もあるのかな……？

伊織さんの顔を思い浮かべながらその事について考えていたその時、篝は「あ、そういえば……」と声を上げると、不思議そうに小首を傾げながら羅紗さんに話し掛けた。

「羅紗さん、これから私達はどちらへ行くんですか？」

「……そういえば、まだ話してはいなかったか。これから私達は、『人間世界』にある旦那様のご友人が営まれている店へと向かう」

その瞬間、俺と篝は同時に「……え？」と驚きの声を上げてしまった。『人間世界』は、俺がかつて住んでいた世界に当たるわけだが、俺は向こう側では行方不明という事になっっているため、俺がふらりと向こう側に行こうものなら騒ぎになるのは間違いない。

恐らく羅紗さんが持っている風呂敷包みの中には、その問題を払拭する物が入っているんだらうけど、それでも詳しく調べられたら流石にアウトなんじゃないのか……？

そんな不安そうに顔を見合わせる俺達の姿に対して、羅紗さんは落ち着いた様子を崩さずに話し掛けてきた。

「安心しろ。最初から私の妖術で人間達の認識を誤らせた上、この風呂敷包みの中にある物で龍己の正体を隠す手筈になっているからな」

「……それなら確かに安心ですね。けど、どうやって『人間世界』へ向かうんですか？」  
「それには、この『妖世界』と『人間世界』を繋ぐ扉のような穴——『時空穴』を使う」

「『時空穴』……ですか？」

「そうだ。『時空穴』は世界のあらゆる場所に存在しているのだが、大きく分けて2つの種類が存在する。1つは専用の術で開け放った後にその場に留まり続ける物、もう1つは時空の歪みという物の影響で偶然開き、一定期間内のみ開き続ける物だ。その内、今回使用する物と龍己をこちら側へ連れてきた時に使った物は前者に該当する」

「世界にはそんな物が……けど、そんな物があつたら間違つて向こう側から入つてきてしまう人もいるんじゃないですか？」

「いや、基本的にそれは無い。『時空穴』は妖力やそれに相応する力を持つ者、またはこれらの力を有する道具の所有者にのみ視認や通行が許される物だからな。そしてそれは、力や道具の所有者の生死を問わないため、お前も通る事が出来たというわけだ」

「なるほど……という事は、俺がそれを通る事が出来たのは、この水晶の勾玉のおかげという事ですね」

首から掛けている水晶の勾玉を手に載せながら言うと、羅紗さんの視線が水晶の勾玉へ一瞬注がれたが、羅紗さんはすぐに視線を元の方へと戻した。

「……そうだな。だが、たとえばそれが無くとも、手元には同じような道具があつたため、その時にはそれを持たせるなり首から掛けるなりしてそのまま連れて行つただろうかな」

「同じような道具……ですか?」

「ああ、そうだ。私も幾つか妖力を有した道具を持っているから、いざとなればその内の一つを使う事も出来たというだけだ。だが……お前の言う通り、あの急がなければならぬ時にその水晶の勾玉があったのは幸運だったと言えるな」

「はい。今の俺にとつてこの水晶の勾玉はお気に入りのも一つですけど、状態の良さから見るとどうやら前の俺にとつてもお気に入りのも一つだったみたいです」

「……そうか」

羅紗さんはこちらに顔を向けず答えたが、その声にはどことなく嬉しさのような物があるような気がした。そして、歩き続ける事約数分、近くにある廃寺の辺りまで来た時、羅紗さんがピタリと足を止めると同時に立ち止まると、羅紗さんの視線の先に妙な物があるのに気付いた。

「もしかして……あれが『時空穴』ですか?」

「その通りだ」

視線の先にあつたのは、およそバランスボールと同じくらいの大きさの藍色の渦のよな物で、それは宙に浮かびながら音も無くただそこで渦を巻いていた。

「何と言うか……穴と言うよりは渦巻きみたいですね」

「そうだな。だが、これに近付いたその瞬間、『穴』と名付けられた理由が分かる。では、

早速行くでしょう」

「はい」

そして、羅紗さんと一緒に『時空穴』へ近付いていったその時、渦の中心に突然小さな穴が開き始め、それは近付くにつれて徐々に大きくなると、最終的には渦の全体へと広がった。その事に俺達は驚いたが、立ち止まるわけにはいかなかったため、羅紗さんの後に続いてそのまま『時空穴』を潜った。すると、辿り着いたのは綺麗に掃除が為された一山の寺の境内であり、周囲を軽く見回しながら妖狐モードから人間モードへと切り替えていると、羅紗さんが風呂敷包みから何かを取り出し始めた。

そういえば、妖術と風呂敷包みの中にある物で正体を隠すって言うけど、一体何を使うつもりなんだ……？

そんな疑問を抱きながら羅紗さんの事を見ていたその時、風呂敷包みの中から出てきたのは一枚の狐のお面だった。

「それはお面……ですか？」

「ああ。この面にはある呪いまじなが掛けられていて、この面を被った者やその者が手にしている物などの姿を妖力などを有した者以外から隠すと言われている」

「つまり、これを被っている間は『力』が無い普通の人間からは俺や篝が見えなくなるという事ですよな？」

「そうだ。では、早速被ってもらおうぞ」

「あ、はい」

羅紗さんから狐のお面を受け取った後、俺は一度箒を足元に下ろしてから狐のお面を着けた。すると、視界は思ったよりも狭くならず、まるで狐のお面の目が自分の目になったかのようなため、足元に下ろしていた箒を持ち上げる時も苦労はしなかった。

「スゴいな、このお面……特定の存在から姿を隠せるだけじゃなく、まるで着けていない時と同じくらい視界がハッキリしてる……」

「高名なる術者だった職人が作り出した一品だからそれは当然だ。ところで、着け心地はどうだ？」

「あ、はい。息苦しさなども無いですし、大きさもピッタリなので、着け心地はとても良いです」

「そうか。まあ、旦那様とその職人に直々に依頼をして作ってもらった物らしいから、それは当然だろうな」

「え、そうだったんですか？」

「ああ。だから、その面はこれからお前が使える。今回は私が付いているが、この先お前一人での頼まれ事もあるだろうからな」

「分かりました。それでは、ありがたく頂きますね」

「ああ、そうしておけ。では、そろそろ目的地へと向かうぞ」

「はい」

俺達が返事をした瞬間、歩き出しながら羅紗さんがブツブツと何かを唱えだすと、羅紗さんの姿が徐々に変化し、境内を出た頃には落ち着いた雰囲気を漂わせた1人の人間へと姿を変えていた。

「これが妖術……」

「これも変化の術の1つだが、旦那様が使われる変化の術はこの遙か上に行く。お前も妖狐の力を持つ者ならば、これくらいは覚えておけ」

「そうですね。向こうに戻った後に色々な妖術の指南書を探したり読んだりしてみようと思います」

「ああ、それが良いだろう。妖術というのは、覚えておいて損は無いからな」

そんな会話をしながら久しぶりの『人間世界』の街中を歩いていた時、『妖世界』とは違うその風景や空気の感じに少しだけ懐かしさを覚えたが、不思議とこのままこっちにいたいという気持ちにはならなかった。

これはたぶん、もう俺自身が人間じゃなく半人半妖として生きる事を決めたからなんだろうな。人間だった頃の俺の両親や友達なんかには悪いけど、今の俺にとっては向こ

うでの生活こそが今の俺が為すべき事だと決めだし、そろそろ何かしらの手は打たないといけなそうだな。

そして、境内を出てから約十数分が過ぎた頃、俺達の目の前に一軒の和風な外装の店が見えてきた。

「羅紗さん、もしかしてあれが……」

「ああ。あれが私達の目的地である『福来和裁店』だ」

『福来和裁店』……ふふ、何だか縁起の良さそうな名前ですね」

「まあ、そうだな。ここでは旦那様のご友人である妖狐の店主との方がお世話をなさっている双子の妖狐の姉妹が働いていて、店主と旦那様は小さい頃からの仲だそう  
だ」

「つまり、幼なじみなんですね」

「ああ。その縁もあってか、数年前にこのお店を建てた時から旦那様は時々暇を見ては様子を見に来たり茶飲み話をしにこのお店を訪れている。そしてその際に仕事の相談や依頼もなさっているようで、今回もそういう経緯で依頼をなさったようだ」

「そうなんですね」

「ああ……さて、それではそろそろ行くぞ。あまり遅くなってしまうてもいけないから  
な」

「あ、はい」

そして、『福来和裁店』の入口へと近づき、引き戸をゆつくりと開けると、店内にいた緑色の着流しの人物が静かにこちらへ視線を向けた。

「あ、いらつしやいませ。何かお求めですか？」

「……以前、私共の主の依頼の件で参ったのですが、店主はおられますか？」

「店主……あ、はい。今、裏で作業をなさっていたので、すぐに呼んで参ります」

「ありがとうございます」

そして、着流しの人物——男性の店員が店の奥の方へ入っていった後、羅紗さんは不思議そうな表情を浮かべた。

「ふむ……見た事が無い顔だったな」

「新しい店員……なんでしようけど、恐らくあの人は普通の人間ですよね？」

「そうだろうな。だが、あの男から何か妖力のような物を感じた事を考えるに、お前と同じように妖力を有した道具の所有者なのかもしれないな」

「ですね」

話をしながら狐のお面を軽くずらしていたその時、店の奥の方から手に風呂敷包みを持った先程の店員と一緒に藍色の着流しの妖狐の男性が現れた。そして、妖狐の男性は羅紗さんの姿を見ると、ニコリと笑いながら話し掛けてきた。

「お久しぶりです、羅紗さん。お元気そうで何よりです」

「お久しぶりです、友禅殿。友禅殿もお元気そうなようで良かったです」

「ええ。いつも元気な若い人達に囲まれているせいか、私も病気に罹ること無く毎日を過ごさせてもらっていますよ」

店主——友禅さんは穏やかな笑みを浮かべながら答えた後、今度は俺達の方へと視線を向けた。

「そちらは……もしかや半人半妖の稲荷龍己さんと火鼠の篝さんですか？」

「え……そうですが、どうして名前を知ってらっしゃるんですか？」

「ふふ、先日龍三郎が依頼をしに来た際にお二人のお話をしていますね、それを聞いてどのような方なのか少し気になっていたのです」

「あ……そうだったんですね」

「まあ、心配しなくても大丈夫ですよ。龍三郎の話し方から察するに、彼は龍己さんの事を頼りにしているようですし、人柄や知識などをとても褒めていましたから」

「そ、そうですか……」

それは嬉しいけど、何だか照れくさいな……。

そんな事を思いながら一人照れ臭さ感じていた時、羅紗さんが不意に周囲を見回しながら友禅さんに話し掛けた。

「……友禅殿、本日はあの方々がいらっしやらないようですね」

「ああ、朱子しゆすと綸子りんすですね。あの子達には、ちよつとしたお使いを頼んでいるので、今は二人揃っていませんが、こうして彼がいてくれるので何かあつた時でも安心できます。そうだ……綾己君、せつかくなので自己紹介をお願いできますか？」

「あ、はい。えつと……4月から『福来和裁店』で働かせてもらっています、織部綾己おりべあやぎと言います。皆さん、これからよろしく願います」

「こちらこそよろしく願います。私は妖狐の羅紗という者で、こことは違う世界——『妖世界』にある『狐雨福屋』の手代を務めております」

「初めまして、友禅さん、綾己さん。俺は稲荷龍己という半人半妖で、『狐雨福屋』では客人という扱いですが、世間的には小僧見習いという形で通している者です。これからよろしく願います」

「そして、ボクは火鼠の篝と言います。友禅さん、綾己さん、これからよろしく願います」

「はい、こちらこそよろしく願います。私は妖狐の友禅と言いまして、この『福来和裁店』の店主を務めております。綾己君共々よろしく願いますね」

「よろしく願います」

一通り自己紹介を終えた後、綾己さんが興味深そうな様子で俺と篝の事を見始め、し

ばらく眺めた後に驚きを含んだ小さな声でポツリと呟いた。

「……今日まで色々な妖怪を見てきたつもりだったけど、半人半妖と火鼠を見るのは流石に初めてだな……」

「まあ、そうだと思います。そもそも半人半妖なんて中々いないですし、火鼠は中国に伝わる生き物ですから」

「なるほど……道理で見た事が無いわけですね。けど、『妖世界』というだけあつてそういうモノも普通にいるんですね」

「そうですね。俺も最初は様々な妖がいる事に驚きましたけど、元々妖が好きだった事もあつてか、今はよほどの事が無い限り驚かなくなりましたよ」

「あ、それは分かるかもしれませんが。最初はその見た目とか向こう側の常識に驚かされたり戸惑ったりしますけど、何かで話をしたり一緒に何かをやってみたりする内に段々そういう物なんだっていう気持ちになるんですね」

「ふふ、そうですね」

綾己さんと人間側から見た妖談議に花を咲かせていたその時、それを見ていた友禅さんが面白そうな様子で小さく笑った。

「ふふ……やはり、若い人同士はすぐに仲良くなれるところが本当に羨ましいですね。何だか私と龍三郎が初めて会った日を思い出すようです」

「友禅さんと旦那様が初めて会った日……ですか？」

「はい。桜の花弁がヒラヒラと舞い散る中、彼は木にもたれ掛かりながら本を読んでいますね。偶然それを見掛けた私が、その本について質問をした事で私と彼は仲良くなっただけですよ」

「桜の木にもたれ掛かりながら読書……何だかスゴく絵になる光景ですね」

「ええ。それに、彼は小さい頃から異性からの人気が高かったので、他の友人達からもかなり羨ましがられていましたよ」

とても懐かしそうな様子で友禅さんは龍三郎さんとの昔話を語っていたが、「……おっと、これ以上話しては龍三郎が困ってしまいますね」と穏やかな笑みを浮かべながら独り言ちると、綾己さんの方へと顔を向けた。

「では、そちらを羅紗さんへ渡して頂けますか？」

「あ、はい。それでは、ご依頼の品をどうぞ」

「ありがとうございます。それでは、そろそろ私達はこれで失礼させていただきます」

「はい、分かりました。またいつでもいらして下さいね」

「はい。それでは、失礼致します」

「失礼します」

そして、友禅さん達に一礼をしてから店を出た後、友禅さん達に見送られながら来た

道に戻っていた時、「龍己」と羅紗さんが落ち着いた声で話し掛けてきた。

「はい、どうかされましたか？」

「お前とあの綾己という人間は良い友人同士になれそうだな」

「……そうですね。話をしていても楽しかったので、これからも彼とは仲良くしていききたいと思っています」

「……そうか。まあ、これからは今回のような頼み事もお前に任せられる可能性は高い。そういうった時にでも親睦を深めると良いだろうな」

「はい、そのつもりです」

羅紗さんの言葉に微笑みながら答えていたその時、「あ、そういえば……」と篝は何かを思い出した様子で声を上げると、受け取った風呂敷包みを見ながら羅紗さんに話しかけた。

「羅紗さん、その中には何が入っているんですか？」

「これか？ これは先日龍己が持ち帰った火鼠の毛を使った反物だ。涼風丸殿のご依頼の時には必要な分しか反物にしていなかったからな」

「火鼠の毛の反物……という事は、それを使った着物を売り出すのですか？」

「……いや、そういうった話は旦那様からは聞いた事が無い。ただ、『福来和裁店』にも半分程度は分けたとは仰っていたな」

「となると……碧葉さんや龍己さんの着物を作るためかもしれないですね」

「はは、どうだろうな。けど、火鼠の毛で作った着物は、絶対に燃えて無くなる事が無い綺麗な着物になるのは間違いないだろうな」

「……それについては同意だ」

「ふふ、そうですね」

そんな事を話しながら俺達は『時空穴』がある境内へと戻り、来た時と同じように『時空穴』を潜って『妖世界』へと戻ってきた。その瞬間、不思議なほどの安心感を覚え、この『妖世界』が自分にとって『帰る場所』になっていると感じた。

本当なら向こう側が俺の帰る場所だけど、今の俺にとってはこっち側が帰る場所になってるのは、やっぱり人間だった時の自分に關しての記憶を失ってるからなのかな……？

自分が抱いた思いに対してそんな疑問を抱いていた時、いつもの妖狐としての姿に戻った羅紗さんが声を掛けてきた。

「……さて、そろそろ『狐雨福屋』へ戻るぞ。旦那様も私達の帰りを待ち侘びていらっしやるだろうからな」

「分かりました」

そして、俺達は頼まれた物を届けるために『狐雨福屋』へ向かって話をしながら歩い

ていった。

『狐雨福屋』に着いた後、俺達は龍三郎さんに頼まれた物を渡し、中での仕事へ向かう羅紗さんと龍三郎さんの部屋の前で別れた。そして、裏口で脱いだ草履を一度取りに戻った後、そのまま自室の離れへ向かって歩いていった。

「……ふう、結局篝の妹についての話は聞けなかったけど、『時空穴』の存在が分かったのは、結構な収穫だよな」

「そうですね……火鼠の里にいた頃は、それについての話は聞いた事が無いですけど、もしかしたら朱夏はそれを通っていったかもしれないからね」

「そうだな。ただ……そうだとすると、どうやって捜したら良いかな……」

「そうですね……『人間世界』も『妖世界』に負けず劣らず広いでしょうし、人間からするならば火鼠は珍しいモノですから、悪い人に捕まるなんて事もありませんからね……」

「……ああ。だから、次に向こうに行った時にでも、綾己さん達に火鼠について何か新しい情報が入っていないか訊かないとな」

「……はい」

そして離れへ着いた後、草履をいつものように縁側へ置き、そのままクルリと離れの

中へ視線を向けたその時、文机の上に何かが置いてあるのが見え、俺はそれを不思議に思いながらもその正体を知るために文机に近付いた。するとそこには、綺麗な字で書かれた一枚の手紙と麻紐が通された白い宝石の首飾りが一つ、そしてロイヤルブルーの宝石が詰め込まれた黄色の腕輪と菫色の宝石が詰め込まれた紅色の腕輪が一つずつ置いてあった。

「えつと……白い奴が確かゼオライトで、他のがアズライトとアイオライトだっけ……？」

「それがこの石の名前なんですか？」

「ああ。俺の水晶の勾玉もそうだけど、こういう石にはそれぞれ宝石言葉やパワーストーンとしての力なんかがあって、それを元にその石を使った装飾品を身に付ける人もいるんだよ」

「なるほど……それで、これらの宝石言葉はどういう物なんですか？」

「えーと……ゼオライトが『癒し』や『浄化』で、アズライトが『清浄』や『洞察』、そしてアイオライトが『平和』や『愛』だったかな。けど、それよりも気になるのは——一緒に置かれてるこの紙の方だな」

箒を文机の上に降ろしてから手紙を静かに持ち上げながら言うと、箒は不思議そうな様子で小首を傾げた。

「え、この紙がそんなに重要なんですか？」

「ああ。前に、俺と風之助が深水の事件を追ってた時にシトリンっていう黄色の水晶と一緒にある情報が書かれた紙が置かれてたから、今回もこの紙に何か重要な事が書いてある可能性は高いと思う」

「なるほど……」

「さて……それじゃあ見てみるか」

「は、はい……」

そして、軽い緊張感に襲われながらも俺達は手紙の内容に目を通した。

「えつと……『人と妖の架け橋となれる半人半妖、稲荷龍己殿。』

先日、そして此度の勝手なる離れへの二度の訪問、誠に申し訳ないと思っている。しかし、勘違いしないで頂きたいのだが、私は貴殿らの味方であり、二度の訪問は貴殿の助けになる物を置きに来ただけだという事は理解して頂きたい。

さて……それでは、そろそろ今回の本題へ入るとしよう。今回貴殿の文机に置かせて頂いた3つの宝石達は、私からの応援の意味を込めた贈り物だ。聡明なる貴殿ならば、宝石達が持つ力や言葉を理解し、その力を高めながら保持させてくれると思いい、先日に続いて宝石を贈らせてもらった。しかし、これらについて貴殿が申し訳なく思う必要は無い。私の故郷では、それらを含めた様々な宝石が産出され、それらの知識や加工法を

修得する事が必須だったため、職人に依頼をしたりや私の身銭を切ったわけではない。なので、宝石については遠慮無く受け取って欲しい。そして、これらは既に貴殿の所有物であるため、その宝石が持つ言葉に当て嵌まる者への贈り物にするなり、貴殿の水晶の勾玉と同様に身に着けるなり好きにして欲しい。

最後に重ねて言うが、私は貴殿らの味方であり、この先も何か困り事があれば、進んで助けたいと思っているため、それだけは信じてほしい。

……さて、それでは貴殿らのこれからの成功と日々の平和を願いながらそろそろ筆を置かせてもらう。稲荷龍己殿、これからも調和を求めその純粹なる精神を大切にしながら妖と人間の架け橋となれるよう頑張ってくれ。

黒幻<sup>こくげん</sup>』

……ふむ、どうやらこの黒幻という人は、俺達の味方らしいけど、相変わらず謎が多いな……」

「そうですね……とところで、その宝石はどうするんですか？」

「うーん……せつかくだから、この黒幻さんが書いてるのようにそれぞれの言葉に当て嵌まる人が見つかった時にその人にあげる事にするよ。それに、宝石——パワーストーンを俺だけが多く持っているよりもその力を必要としてる人にあげた方が黒幻さんも宝石達も喜ぶ気がするからな」

篝の問い掛けに対してニコリと笑いながら答えた後、俺は手紙と宝石を文机の引き出しへとしまった。すると、昼九ツを告げる鐘がちょうど良く不忍の街全体に鳴り響き、それと同時に「旦那方ー！一緒に昼飯を食いに行きやしようぜー！」という風之助の元気な声が外から聞こえたため、俺と篝は顔を見合わせて同時にクスリと笑った。

「さて……風之助からのお誘いも来た事だし、まずは昼食にするか。この手紙や宝石の件も風之助に話しておきたいからな」

「そうですね。では、早速行きましょうか」

「ああ」

文机の引き出しから愛用の財布を取り出した後、俺は篝を静かに抱き抱え、風之助が待っている向かって歩き始めた。

謎の人物——黒幻さんについては相変わらず何も分かっていないけど、悪い人ではないのは確かだ。だから、常に頼るわけにはいかないけど、これからはこの未だに姿を見ただ事が無い新しい仲間とも手を取り合いながらこれからの未来を明るい物にしていくために頑張っていこう。

草履を履きながら心の中でそう誓った後、俺は新たな仲間の登場で春の陽気のように心がポカポカとするのを感じ、快晴の青空へ向かって静かに微笑んだ。

## 第12話 自身との向き合いと式神の術書

5月半ばのある日の昼過ぎ、俺は友達である瓦版屋の鎌鼬かまいたち——風之助かざのすけと一緒にきつ  
けの書物屋である『虫本堂』ちゅうほんどうで新しい本を物色していた。

「さくて、今回はどんな本に出会えるかな〜?」

「……旦那は、本当に本が好きなんですねぇ……。気付いてるかは分かりやせんけど、旦那はこの『虫本堂』や貸本屋の『本角堂』にいる時は、心なしかいつもと話し方が変わっている上に声が明らかに弾んでやすよ?」

「……え、そうなのか?」

「……へい。何と言うか……いつもは語尾を伸ばしたり間延びした話し方をしたりしてやせんけど、その時だけはそのどちらもやってやすし、声もいつもの落ち着いた感じじゃなく、かなり明るい感じになってやすよ」

「へー……そうだったのか。けどそれは、もしかしたら前の俺がそうだった名残かもしれないよな。ほら、読書が好きなのも妖達の知識があるのもそうみたいだし」

「……なるほど、確かにその可能性はありやすね。となると、これからも知らず知らずの内に、前の旦那の特徴がヒョコツと顔を出すかもしれないやせんし、それはそれで楽しみな

気はしやすね」

「ふふ、そうだな。もうあの頃には戻れないし戻るつもりも無いけど、そういった特徴も俺の一部ではあるし、それはちゃんと受け入れていかないとな」

そんな会話を交わしながら以前から愛読しているシリーズの本やタイトルから興味を惹かれた本などを手に取っていたその時、俺はある事を思い出し、それと同時に俺の手がピタリと止まった。

……そういえば、人間時代の俺がいなくなった後の事について、まだ何もしてなかったよな……。

人間時代の俺は、羅紗さんの手によって命を落とした後、そのままこの『妖世界』へと来たため、『人間世界』から見れば俺は一人の行方不明者となっている。そして、『妖世界』に来た日にそれについての話し合いは、俺がお世話になっっている呉服問屋兼仕立屋の『狐雨福屋』の主——龍三郎さん達と一緒に一度しているのだが、結局は良い案が浮かばなかったため、とりあえず案が浮かぶまでは保留という事にしていたのだった。

俺がいなくなってから今日で約一ヶ月半、実の両親が搜索願を出していたとすれば、俺がいなくなつた現場の状況的に警察はすぐに動いている気がする。つまり、何か手を打つなら早めにかしにかしないといけない事になるけど、下手を打つたらこの『妖世界』の存在や俺が半人半妖だという事が『人間世界』で広まり、場合によっては『福来和裁店』

にも迷惑を掛ける事にもなり得るし、何より実の両親が必要以上に周囲から騒がれてしまう事になる。さて、本当にどうしたもんかな……。

実の両親達への申し訳なさから小さく溜息をついていたその時、ふと隅っこに置かれた本棚が目に入り、それに引き寄せられるように俺はその本棚へと近付いた。そして、ある一冊の本を見つけた瞬間、思わず首を傾げてしまった。

「……何だろう、これ？ 題名が掠れて見えなくなってるけど……」

「んー……見た所、ただの古そうな本みてえですけど、この本が気になるんですかい？」  
「うん、それもかなり気になる。古い本には、結構お宝が混じってる事があるし、ここま  
で興味を惹かれる本には中々出会えない気がするからさ」

「なるほど……そういう事なら、その本について親父に訊いてみるしかねえですね」  
「だな。とりあえず他の本と一緒にこれも持っていくか」

そして、件の本を手にとって持っていた本の上に置いた後、俺達は『虫本堂』の主である化狸の藤五郎とうごろうさんが座っている帳場へ本を持っていき、いつも本を入れるために持ち歩いている風呂敷と一緒に帳場に置いた。

「藤五郎さん、お願いします」

「……おう、決まったかい、龍己の兄ちゃん」

「はい、えーと……今日はここからここまでです」

「どれどれ……へえ、今日も結構な量があんじやねえか。こりやあ、普通の奴ならしばらくは楽しめるが、おめえなら2日と経たずに読んじまうんじやねえのかい？」

「……あ、そうかもしれませんね」

少し考えてから答えると、藤五郎さんは「……やつぱりな」と言いながらニヤリと笑い、持ってきた本を次々と確認し始めた。藤五郎さんは、この不忍の街に昔から住んでいる化け狸で、あまり話し好きでは無いのだが、『狐雨福屋』の先々代店主とは仲が良かったらしい。因みに先々代店主とは、主に日常の何気ない話をしていたようだが、特に共通の趣味だった読書についてはとても盛り上がったらしく、本の話肴に酒を飲み交わした事もあると前に話してくれた事があり、その時の藤五郎さんの表情はとても懐かしそうで嬉しそうな物だった。尚、俺が藤五郎さんから妖狐としての名前である鈴蘭ではなく、半人半妖としての名前である龍己で呼ばれているのには、ちよつとした理由がある。それはある日、今日のように本を選んでいたら時に藤五郎さんが不意に『おめえ……実は人間なんだろ?』と訊いてきたため、それに対して俺は平静を装いながらあくまでも妖狐の鈴蘭としてそれを否定した。しかし、藤五郎さんは面白そうに首を横に振ると、『隠してえ理由は分かる。だが、昔々からここに住んでて妖狐の奴と仲良しこよししていた俺——化け狸を化かすには、少々修行が足りねえぜ?』と言うと、不敵な笑みを浮かべながら俺の目を見てきた。その様子に、俺はこれ以上は隠しきれないと悟り、

帳場へ近付いてから俺の正体やここに来るまでの経緯などを正直に話した。すると、藤五郎さんは『そうかそうか……』と言いながら頷き、やがてニヤリと笑いながら『まあ、安心しな。俺は人間や半人半妖に対して偏見はねえし、せつかく出来た本好きの仲間をてめえ自ら失おうなんざ思つてねえ。だから、これからもよろしく頼むぜ、龍己』と言つて握手をするために手を差し出した。俺はその藤五郎さんの懐の深さやいつも通りの様子に安心感を覚え、微笑みを浮かべながら『はい』と答えてからその手を取り、そのまま藤五郎さんと握手を交わした。そしてその日から藤五郎さんは、他の客がいる時には、今まで通り『鈴蘭』と呼び、俺だけの時や風之助のように俺の正体を知っている仲間が一緒の時には『龍己』と呼んでくれるようになったのだつた。

藤五郎さんは、少し気難しそうにみられがちだけど、本当はとても心優しい上、俺と同じく読書が好きな化け狸だ。当然だけど、この関係性は他の皆との関係性と同じように絶対に大事にしていかないといけないな。

藤五郎さんの事を見ながらそう感じていたその時、藤五郎さんがあの本を見つけ「……おつ」ととても楽しそうに声を上げた。

「……コイツを見つけたあ、やつぱりおめえはただもんじゃねえな」  
「ただ者じゃないって……この本はそんなにスゴい物なんですか？」

「まあ……そんなところだな。こいつあ何年も前にちつと遠くに行つた時に見つけた代

物なんだが、この題名が掠れちまつてる感じと古びた感じからコイツには何かあると思つて手に入れてきたんだ」

「そういうや、龍己の旦那もこれを見つけた時に同じような事を言つてたような……けど、そんな珍品を売りもんにしちまつていいのかい？　どんな内容なのは知らねえが、そういう代物なら手元に置いといた方が良いんじゃないか？」

「へっ……分かつてねえな。確かにそういう考え方もあるだろうが、こういう代物こそ持つべき奴に渡るように俺達みてえな商人あきんどがどうにかするべきなんだよ」

「そういうもんかねえ……」

「そういうもんだ。まあ、ここ何年もコイツを見つけたって言いに来た奴はいなかったから、少し諦め気味だったんだが、まさか龍己が見つけたあ思つてもみなかつたぜ。流石は半人半妖様つてえところか？」

「あはは……どうでしょうね。けど、この本にスゴく興味を惹かれたのは事実ですし、もしかしたらこの本とは『縁』があつたのかもしれないね」

「……まあ、そうかもしれねえな。よし……せつかくだ、コイツはおまけつて事にしてやるよ」

「え、良いんですか？」

「ああ、おめえは俺が認めた本好きな上に数ある本の中でこれを見つけ出した。これは

そんな奴に持つていて欲しい物だからな。そして何より——」

そして、藤五郎さんは本を指差し、ニヤリと笑いながら言葉を続けた。

「おめえならこの本を上手く扱えるからな」

「上手く扱える……ですか？」

「ああ、コイツはただの本じゃねえ。何せコイツは、世にも珍しい式神について書かれてる本だからな」

「式神……」

式神とは、一般的に陰陽道を学びそれを操る術者——陰陽師が従えている鬼神として知られ、普段は『式札』と言われる和紙の状態だが、術者が術式を以て使用する際には、使用意図に適った能力を具えた鳥獣の姿や異形のモノの姿などへ変化すると言われているものだ。つまり、この本にはその式神を作る方法や使役するための方法が書いているかもしれないという事になる。

式神か……もし、式神を従えられるなら篝かがりの妹を捜すための手掛かりを見つかったり身近に起きた事件の謎を追ったりするのを手伝ってもらいたいけど、果たして式神なんてそう簡単に従えられるものなのか……？

本——術書に対して疑問を抱いていたその時、肩に乗っている風之助が不思議そうに小首を傾げた。

「旦那……そもそも式神ってえのは、一体何なんですか？」

「えっと……式神っていうのは——」

風之助に対して軽く式神の事について教えると、風之助は少し驚いた表情を浮かべながら術書に視線を向けた。

「つまり……この本に式神を作る方法が書いてあれば、その式神ってえ奴を従えられるかもしれないって事ですかい？」

「まあ、簡単に言えばそうなるな。式神がいれば、今まで数の問題で出来なかつた事も出来るようになるし、それ以外の事でも手伝ってもらう事が出来る。つまり、式神の存在1つで結構状況は変わるわけだな」

「なるほど……そう考えると、式神ってえのは結構便利なもんって事になりやすね」

「そうだな。ただ、元を辿れば陰陽道に関係する事ではあるから、その修行をした事が無い俺がそう簡単に出来る事でも無いけどな」

苦笑いを浮かべながら答えた後、俺は再び藤五郎さんの方へ顔を向け、1つの疑問をぶつけた。

「それにしても……この術書はどういった経緯でこの『妖世界』に流れてきたんでしょうね？ 『妖世界』が『人間世界』の裏側にあるとは言え、こういう本がそう簡単に外に出て来るとは思えませんし……」

「さてな……そこまでは俺も分からねえが、もしかしたらコイツ自身が望んだのかもしれないねえな。自分を上手く扱える奴を探すために、誰かが『人間世界』から仕入れてきた本の中に紛れてな」

「そして、こうして俺と巡り会った、と……」

「そうなるな。まあ、おめえはこの俺が見込んだ本好きで、俺達妖とは少し違え半人半妖だ。きつと、おめえならコイツの事を上手く扱えると信じてるよ」

「……ありがとうございます、藤五郎さん」

「……へっ、礼なんざいらねえよ。さて……んじゃあそろそろ他の分の会計と行くか」  
「はいー」

そして、他の本の会計を済ませて本を風呂敷の中に入れてもらった後、俺達は藤五郎さんに別れを告げてそのまま『虫本堂』を後にし、不忍の街の中を歩き始めた。

「それにしても……とんだ掘り出し物に出会っちゃいましたねえ……」

「そうだな。とりあえず、この本については龍三郎さんと話をしてみる事にして、どうか出来そうならこの本の通りに一度やってみる。難しそうなら涼風丸すずかぜまるさんに相談をしてみるか」

「あー……確かに涼風丸の旦那ならこういう事に詳しそうな感じがしやすねえ。涼風丸の旦那も龍己の旦那と同じで『人間世界』からこつちに来たみたいですし、もしかした

「何か知ってそうですかからね」

「そういう事。まあ……龍三郎さんとは、もう1つ話をしないといけない事があるんだけどさ」

「もう1つ……ですかい？」

「ああ、前の俺の事についてな」

「……あ、なるほど……。そういや、『人間世界』では旦那は行方不明という事になつてるかもしれないでしたね……」

「ああ。だから、実の両親に少しでも安心してもらうために何か行動を起こしたいんだけど、下手を打つたら最悪の場合向こうの警察にこの『妖世界』について話をしないといけないからな。もしそうなれば、『福来和裁店』の皆にも迷惑が掛かるし、向こう側からどうにかこっち側に来ようとする奴だつて出てきてしまう。だから、何かはしないといけないけど、結構慎重な行動が求められるんだ」

「ふむ……なるほど。確かに霊力や妖力を持つている善人が入ってくるなら問題はありやせんけど、悪人が入って来ようものならこの『妖世界』全体に関わる事になりやすからな」

「その通りだ。本当ならあの日の内にかすべきだったけど、どうにも方法が浮かばなかったからな。だけど、ここに来てからもう一ヶ月半になるし、そろそろ何かしら

の手は打つ必要はあると思う」

「そうですね……まあ、もし何か手伝える事があつたら、遠慮無く言つてくだせえ。旦那方と違つて考える事はあまり得意じゃねえですけど、俺でも何か助けられる事はあると思ひやすから」

「ああ、もちろんだよ、風之助。もし、何かあつたらその時はよろしくな」

「へいー」

ニコリと笑い合ひながら風之助と拳を軽くぶつけ合つた後、俺達は他の話をしながら賑わう不忍の街の中を歩き続けた。

その日の夜、俺は龍三郎さんと一緒に術書の事や『人間世界』の事について話をするために件の術書を持って龍三郎さんの部屋へ向かつて歩いていった。そして、部屋の前に着いた後に廊下に正座をしながら襖を軽く2回ノックすると、中から「どうぞ」という声が聞こえ、それに対して「失礼します」と答えてから静かに襖を開けた。龍三郎さんは、どうやら寝る前の読書をしていたようで、寝間着姿で座っているその手には一冊の本が握られていた。

「夜分にすみません、少しお話をしたい事がありました……」

「いえいえ、構いませんよ。それで、そのお話というのは？」

「夕食時にもお話しした式神について書かれた本の事、そして人間時代の俺の事についてです」

「……なるほど、分かりました。どうぞ、入って下さい」

「はい、失礼します」

そして、中に入って龍三郎さんが用意をしてくれた座布団に座った後、俺が龍三郎さんと向かい合うと、龍三郎さんは少し表情を曇らせながら静かに口を開いた。

「……さて、まずは以前の龍己君の事について話をした方が良いかもしれませんね」

「そうですね……俺がこの『妖世界』に来たあの日、羅紗さんも含めた3人で話をしましたけど、結局良案は浮かばなかったために一度この話は打ち切ったわけですが、ここに来てから約一ヶ月半になったからには、そろそろ何か行動を起こさないとイケないと思うんです」

「……そうですね。未だに良案は浮かんでいませんが、龍己君の实のご両親の心労を考えるならそれが一番だと思います。ですが、問題はどうかやっつてご両親にのみこの事を伝えるか、です」

「はい。実の両親は、たぶん搜索願を出していると思いますし、俺がいなくなつた現場には持っていた荷物や心臓を射貫かれた事で流れた血が残つていたと思うので、警察も事

件性を感じてすぐに捜査を行っているはず。本当ならこれとはとても心強い事です。今の俺が警察に見つかってしまった場合、この一ヶ月半の事を色々と言われ、場合によっては『妖世界』の事も話さないといけなくなりそうです。もともと、警察はその事と与太話や言い訳なんかかとも思いますが、最悪の場合は気が触れたと思われてそれ専用の病院に入れられる事で、この『妖世界』に戻ってこれなくなる恐れもありますし、それを聞きつけた悪意を持った何か、『妖世界』に来ようとする可能性もあると思っています」

「……確かにそうですね。龍己君も知っている通り、この『妖世界』と『人間世界』を繋ぐ『時空穴』がありますから、それを通して来ようとするモノがいる可能性は十分にありますね」

「は、……」

もしそうなれば、風之助が言っていたように『妖世界』全体に関わる事になる上、両親や友達にも迷惑が掛かってしまう。だからこそ、両親以外には会う事は出来ないし、会ってはいけない。けれど、そのためには警察に見つからないようにする手段を講じる必要があるのだ。

けど、本当にどうしたものかな……。

俺が黙り込みながら考え事を始めたその時、龍三郎さんは顎に手を当てながら少し考

え込んだ後、静かに口を開いた。

「龍己君、この件については涼風丸さんに助けてもらう必要があると思います」

「涼風丸さんにですか……?」

「はい。涼風丸さんは私よりも遙かに多くの妖術をご存じなので、周囲の目を誤魔化しながら龍己君をご両親の元へ連れて行く事が可能だと思います。もちろん、その時は私も龍己君と共に『人間世界』へと参りますし、龍己君には姿を隠すための狐のお面もあります。ですが、警察犬の存在や警察の方に姿を隠した私達の事を視認できる方がいないとも限りませんからね。とても心苦しいですが、涼風丸さんにも手伝ってもらう事が出来れば、今回の行動の結果を私達が求める物にする事が出来ると思います」

「……確かにそうですね。となると、明日か明後日にでも涼風丸さんのお宅に伺って、この件についてお話をした方が良さそうですね」

「そうですね。涼風丸さんのお宅がある山は、ここから少し離れたところにありますが、朝早くに出発をすれば、夕暮れ時には戻って来る事が出来ると思います」

「となると……明日はその準備に費やして、明後日に出発をする方が良さそうですね、とりあえずはその予定で行こうと思います」

「分かりました。では、この件については涼風丸さんのお宅を訪ねた後にまた話をする事にしましょう」

「はい。では、次はこの本についてですね」

傍らに置いていた術書を目の前に出しながら言うと、龍三郎さんは物珍しそうに術書を観察したり軽くパラパラッと捲ったりし始め、それを終わると少しだけ目を輝かせながら話し始めた。

「夕食時にもお話は聞きましたが、これは本当に珍しい物のようですね。私もかれこれ様々な書物に出会ってきましたが、式神について書かれている本に出会ったのは、今日が初めてですよ」

「やはり、そうですね。こういった書物はあまり外に出回る物では無いはずですし、そもそもこの『妖世界』に來そうな書物でも無いですから」

龍三郎さんの言葉に頷きながら答えた後、俺は術書に書かれていた内容を想起した。この術書は、どうやら『式打始祖書』しきうちそしよというタイトルらしく、式神がどういった存在なのかや式神の作り方、そして式神を使役した後の事などについて書かれていた。

たぶん、これは入門書みたいな物なんだろうけど、本当に何でこれがこつち側に流れてきたのかだけは本当に分からないよな……。

軽く腕を組みながらそんな事を考えていた時、龍三郎さんが「……そうだ」と何か思いついた様子で声を上げ、ニコリと笑いながら話し掛けてきた。

「龍己君、先程の涼風丸さんのお宅に何う件ですが、この『式打始祖書』の件も一緒に解

決してみませんか？」

「一緒にというと……式神を作ってみようという事ですか？」

「はい。幸い、この本は式神を作るための入門書のように、本当に特別な道具を必要とするわけでも無いようですから、これも良い機会だと思つてやつてみるのも良いのではないかと思ひます」

「確かにそうですが、この『靈力が籠もった和紙』というのは、流石に手に入らない気がしますけど……」

『式打始祖書』のあるページを開きながら言うと、龍三郎さんは横に首を振りながらそれに答えた。

「いえ、それは恐らく大丈夫だと思います。何故なら、涼風丸さんのお宅があるのは、霊山として知られている山なので、和紙に靈力を移す手段については涼風丸さんがご存じだと思ひますから」

「霊山……確かにそういう事なら大丈夫そうですね。それに、涼風丸さんには俺の事について助力を乞う予定でしたからね」

「その通りです。ただ、涼風丸さんには本当に申し訳ないですけどね」

「そうですね……俺の事について助力を乞うばかりか式神を作る件についても関わつてもらふ事になりますから、後日お礼とお詫びを兼ねて菓子折かお酒を持って行かないと

いけませんね」

「そうですね。ですが、それは私がかしますので、龍己君は明後日の出発に向けての準備に集中してもらって大丈夫ですよ。涼風丸さんのお宅がある山は、それ程険しい山では無かったと思いますが、先日の航海の時のような事もあり得ますからね」

「……それもそうですね。分かりました、それじゃあお言葉に甘えさせてもらいますね」  
「はい、そうして下さい」

微笑みを浮かべながら言う俺の言葉に、龍三郎さんはクスリと笑いながら答えた後、不意に小さな欠伸をしたかと思うと、まるでそれが移ったかのように俺の口からも小さな欠伸が出てきた。

「……どうやら、少しだけ安心したせいか眠くなってきたようですね」

「そうですね。それじゃあキリも良いので、今夜はここで終わりにしましょうか」

「はい。それでは龍己君、お休みなさい」

「はい、お休みなさい、龍三郎さん」

挨拶をし合った後、俺はゆっくりと立ち上がってから『式打始祖書』を小脇に抱え、そのまま龍三郎さんの部屋を出た。そして、「失礼しました」と言った後に襖を静かに閉め、自室である離れへ向かって歩き出した。

……半人半妖への生まれ変わりから始まった俺の第二の人生だけど、その人生をしつ

かりと生きていくためにも俺がやり残してしまった事は、絶対にやり遂げないといけない。それが今の俺に出来る事であり前の俺に対してしてやれる事だからな。

そう思いながらピタリと歩を止め、廊下から見える空に静かに佇む青白い月を見上げ、俺はその儂い光を浴びながら小さな声で独り言ちた。

「さて……今の俺にどこまでの事が出来るかは分からないけど、前の俺のためにも出来る限り頑張ってみるか」

その言葉は、たとえ近くに誰かがいても他の誰にも聞こえない程に小さな物だったが、『……そうだな』と答える声が聞こえたような気がして、俺は月を見上げたままで小さく微笑みながらコクンと一度だけ頷いた。

## 第13話 妖狐の決意と繋がり合う想い

「……よし、とりあえずこんな感じで良さそうだな」

『式打始祖書』しきうちしそのしょを手に入れた二日後の朝、昨日の内に文机の傍に準備し終えていた荷物を見ながら独り言ちた。昨日、俺は朝食後にいつも通り訪ねてきてくれた鎌鼬かまたちの風之助と俺と同じ呉服問屋兼仕立屋の『狐雨福屋』こいうふくやの居候である火鼠かその篝かがりの二人に龍三郎りゆうざぶろうさんと話し合った内容について話し、よければ一緒に来ないかと誘ってみた。すると、篝が二つ返事についてきてくれる事になったのに対し、風之助は一度相方の草吉そうきちさんや風之助達が所属する瓦版屋組織の親方に相談してからじゃないと返事が出来ないという事だったので、風之助の件は一度保留する事になった。そして、風之助がその件についての相談と記事のネタ探しを兼ねて離れから飛んでいった後、俺は篝を連れてこの『不忍』しのほすの街中を巡りながら今回の遠出の準備を始め、それなりに準備が出来たと思つた頃に風之助がとても嬉しそうな様子で飛んできたため、そのまま肩に乗せながら話を聞いた。すると、今回の遠出に同行できる事になったというので、俺達はそれに対して心から喜び、その後は風之助も交えて準備を再開したのだった。

今回は前回に比べれば少なめではあるけど、今日中に戻ってくる予定って考えるなら

このくらいが打倒かもしれないな。

目の前にある荷物を見ながらうんうんと頷いていると、同じように荷物を見ていた篝が少し珍しそうな様子で話し掛けてきた。

「昨日の準備中も思っただんですけど……遠くに出掛けるには、思っていたよりも荷物が必要なんですね」

「んー……まあ、これは旅の用心帳を参考にした俺なりの準備だから、何とも言えないかな。火鼠の里があつた島を訪れた時は、何があるか分からないからそれなりに用意はしたけど、今回は今日中には戻ってくる予定だから、あの日よりは荷物も少なめかな」

「あ、そうなんですな」

「ああ。旅をする時は、山道を歩く事が多いから、荷物は出来るだけ少ない方が良くんだよ。実際、あの日も森の中を歩いたり山道を歩いたりしたからな」

「そうでしたね。森の中でどうしようもなくなっていたボクを龍己さんが見つ付けてくれて……龍己さん、あの時は本当にありがとうございました」

「どういたしまして。でも、俺だつてあの時に篝と出会えてなかったら、火鼠の里の存在も知らなかったし、火鼠の毛も手に入らなかったかもしれないから、結局お相子かもしれないな」

「ふふ……それじゃあそういう事にしましょうか」

「ああ、そうだな」

そんな会話を交わしながら笑い合っていたその時、外の方から「旦那方ー！ お待たせしやしたー！」というとても元気な声が聞こえ、そちらの方へ視線を向けた。すると、風之助がスーツと飛んでくるのが見え、その元気の良さにクスリと笑っていると、風之助は小さな風呂敷包みを背負ったまま縁側に静かに着地し、ニツと笑いながら離れの中へと入ってきた。

「旦那方、お待たせしてすみやせん。荷物の準備にちよいと手間取っちゃいました」

「ううん、気にしなくて良いぜ、風之助。俺達も荷物の最終チェックをしたところだからさ」

「おや、そうだったんですかい。まあ、今回の遠出は今日中には戻るとはいえ、結構な道のりを歩く事になりそうですから、準備はしっかりとしておくのが一番つてえところですかねえ」

「そうだな。霊山でもそうだけど、その道中でも何があるかは分からないから、気を引き締めていかないとな」

「まあ、この辺りならあまり心配はいらねえが、目的地の周辺には何があるかわかりやせんからねえ。やり過ぎも良くはねえが、注意はしておいて損はねえかもしれやせんね」

「そうですね。目的の達成はもちろんしたいですけど、無事に帰ってくる事が一番です

「あらね」

「ああ、そうだな」

箒の言葉に深く頷きながら答えていたその時、廊下の方から小さな足音が聞こえ、俺達は話すのを止めてそちらに視線を向けた。そして、程なくして足音の主——碧葉あおばさんが姿を現した後、俺はその人物の格好——小さな青い風呂敷包みを持った淡い緑色の旅装束姿に少し驚きながらもスツと立ち上がり、ニコリと笑いながら声を掛けた。

「碧葉さん、これからどこかへお出かけですか？」

「え、えつと……はい、そうです。ちよつと遠くへ行くので、今日はこの格好に……」  
「なるほど、そうでしたか。とても良くお似合いですよ」

「あ……ありがとうございます」

碧葉さんが少し頬を赤く染めながら言うと、それを見ていた風之助と箒が揃ってクスクスと笑い出したため、俺はこっそりと話し掛けた。

「どうしたんだ、二人とも？」

「……いや、そういう台詞はやっぱり龍己の旦那しちのすけや七之助の旦那みてえな色男が言うに限んなあと思っただけで。なつ、箒」

「はい。さっきのような言葉を龍己さんが碧葉さんに言うと、スゴく絵になるというか……恋物語の一場面みたいな感じに見えるんですよね」

「そうか？ 俺はいたって普通に言つたつもりだけど……」

「ま、つまりは龍己の旦那も龍三郎の旦那や七之助の旦那みてえに恋物語に出て来るような色男つてえ事できあ」

「……まあ、一応褒められてるわけだから、悪い気はしないか。ありがとうな、二人とも」  
「へへ、どういたしまして」

「どういたしまして」

風之助達の返事に頷いた後、ゆっくりと碧葉さんの方へ向き直つてから再び話し掛けた。

「ところで、どちらへお出かけなさるんですか？ 先程、遠くへ行くとは仰っていましたけど……」

「あ、はい……えつと、それなんですけど……」

「……あ、もし話せない事なら無理には訊きませんけど」

「いえ、話せない事というよりは、少なくとも龍己さんには話さないといけない事なので……」

「俺には話さないといけない事……分かりました、そういう事ならしつかりと聞きますので、どうぞ話してみして下さい」

「……分かりました、それではお話ししますね」

碧葉さんは不安と心配が入り交じったような表情を浮かべながら答えた後、大きく深呼吸をしてから俺の目をジッと見ながら静かに口を開いた。

「……私も龍己さん達のご用事について行ってもよろしいですか？」

「……え？ 俺達の用事に……ですか？」

「はい、そうですけど……ダメですか？」

「いや、ダメでは無いですけど……俺達が行こうとしているのは——」

「分かっています。涼風丸さんのお住まいがある霊山で、山道はもちろんの事、そこへ行くまでも長い道のりがある事も分かっています」

「……でも、それならどうして……？」

小首を傾げながら問い掛けると、碧葉さんは真っ直ぐな目をしながらそれに答えた。

「私も……龍己さんのお力になりたいからです」

「俺の……力に……？」

「はい……人間時代の龍己さんに助けて頂いてから今日に至るまでの間、私だけがまだ龍己さんのお力になれていないのです。お父様や羅紗は何かしらの形で龍己さんのお力になれているのに、私だけはまだ……」

「そんな事は無いですよ、碧葉さん。あの日——龍三郎さんと碧葉さんで行ったお墓参りの日に俺は碧葉さんに助けてもらっています。あの日に碧葉さんから龍三郎さんら

しいやり方じゃなく、俺らしいやり方で良いと言ってもらった事で、これからの指針が固まりましたから」

「……そうだとしても、私はもつと龍己さんのお力になりたいんです。これは『狐雨福屋』の娘だからでも龍己さんに助けて頂いた恩返しだからでも無い私自身の思いなんです」

「碧葉さん……」

碧葉さんの目の奥には、決意と熱意の炎がメラメラと燃えており、碧葉さんの言葉と表情からその思いが本気なのがいっかりと感じ取れた。

……正直な事を言えば、この『妖世界』に来てから碧葉さんとしつかりと話す機会もあまり無かったし、碧葉さんには『人間』だった頃の俺もお世話になってるわけだし、碧葉さんが着いてきてくれるのはとても嬉しいし、本当なら碧葉さんの思いに応えたい。けれど、やっぱり涼風丸さんの所に行くのはそう簡単では無い気がする。それなのに、碧葉さんをこのまま連れて行って怪我でもさせてしまったら本当に龍三郎さん達に申し訳ないし……。

頭の中で碧葉さんを同行者として加える事について悩んでいたその時、風之助は腕を組みながらいつになく真剣な様子で俺に話し掛けてきた。

「旦那、こゝは碧葉のお嬢さんについてきてもらった方が良いかもしれやせんよ？」

「風之助……でも、もしも碧葉さんに何かあったら……」

「へへっ、そこは安心してもらって良いですけど、旦那。俺や篝だつて妖の端くれ、何かあった時には全力で旦那や碧葉のお嬢さんの事を支えやすし、危険な目に遭わねえように周囲への注意は払っていきやす。それに、旦那の力になりてえつていう碧葉のお嬢さんの思いを俺は放つてはおけねえんです」

「碧葉さんの思い……」

「へい、その通りで。それに……それは旦那だつてそうでしょう？ 碧葉のお嬢さんの目は明らかに本気で、言葉と表情からもそれは感じ取れる。だから、その思いにはどうにか応えてやりてえつていう気持ちは、旦那だつて同じのはずですぜ？」

「……まあな」

風之助からの問い掛けに小さく息をつきながら答えた後、俺は自分の中にある思いを確認した。そして、すぐに一つの結論を出した後、碧葉さんに対してニコリと笑いながら声を掛けた。

「分かりました。お言葉に甘えて今回の用事は碧葉さんのお力をお借りする事にします」

「龍己さん……！ 本当にありがとうございます……！」

「いえいえ、別にお礼を言われる程の事では無いですよ。ただ、辛くなったり疲れてきた

りしたら遠慮無く言つて下さいね？」

「はい、それはもちろんです。いつもお父様から『何かを頑張るのは良いけれど、一生懸命頑張るのと無理をし過ぎるのは違うから、そこは履き違えないようにね』と言われていきますから——そこは大丈夫です」

「分かりました。あ、ところで……この事は龍三郎さんにお話しになつていましたか？」  
「……いえ、話していません。お父様に話をしたらきつと反対されると思つたので、話すに話せなかつたんです……」

「……そうでしたか」

そつか……そうなると、先に龍三郎さんにこの事を話をしに行つた方が良いよな。話さずにそのまま言つた後、一人娘が旅装束で街を歩いていたなんて話を誰かから聞いたら、碧葉さんは絶対に叱られてしまうだろうしな。後は説得の手段だけど……まあ、これに関しては言つてからどうにかしてみろしかない。あくまでも大事なものは、碧葉さん自身の気持ちをしっかりと伝えられるかだからな。

この後の事について考えをまとめ終え、気持ちをそれ用に作りながら軽く頷いた後、俺は皆の事を見回しながら声を掛けた。

「さて……それじゃあ出発をする前に一度龍三郎さんに挨拶をしていきたいから、風之助と篝はひとまずここに残つててくれ」

「へいー」

「はい」

「そして碧葉さんは、一度荷物を置いて俺と一緒に龍三郎さんに話をしに行きましょう。流石に話をせずつて行くわけにはいきませんかからね」

「は、はい……けど、大丈夫でしょうか？」

碧葉さんはとても不安げな様子だったが、俺はそんな碧葉さんに対してニコリと笑いかけた。

「大丈夫かどうか、それは碧葉さん次第ですよ。碧葉さんがさつき話してくれた気持ちと同じように龍三郎さんに伝え、許しを得られるように頑張る事が大切ですからね」

「そう……ですよ」

「……安心して下さい。俺もついていきますし、さつき俺達に対しても出来たように、碧葉さんなら龍三郎さんにも気持ち伝えられる事が出来ると信じていますから」

「龍己さん……はい、ありがとうございます」

碧葉さんの安心した笑みに俺が笑みを返し、碧葉さんが風呂敷包みを文机の傍に置いた後、離れに風之助達を残したままで碧葉さんと一緒に龍三郎さんの部屋へ向かって歩き始めた。龍三郎さんの部屋へ着くまでの間、俺達は一言も話さずにただ歩き、足音の他には店の方から聞こえてくる活気溢れる声ぐらいいしか聞こえる音は無かった。別に

話す事が無かったわけでも無いし、碧葉さんの緊張を解すために何か話題を振るという手もあった。けれど、碧葉さんの緊張気味だがどこか決意を秘めたその表情見て俺は碧葉さんの事を見守る道を選ぶ事にしたのだった。言ってみれば、何かをするという『直接的』な手助けではなく、ただ近くにいるという『間接的』な手助けという道を選んだのだ。

正直、碧葉さんに何か話題を振れば答えてくれるだろうし、緊張だつてすぐに解れるんだらう。けど、今の碧葉さんに必要なのはそれでは無く、その緊張状態の中でも父親の龍三郎さんに自分の思いを伝える事だ。そうしなければ、碧葉さんだつて成長する事が出来ないからな。

そしてそれから数分後、龍三郎さんの部屋の前に着くと、碧葉さんが声を軽く震わせながら話し掛けてきた。

「……何故でしょうか。いつもならなんて事無く来る事が出来るお父様のお部屋なのに、今日に限ってはとても怖い場所のように思えます……」

「それはやはり、今まで碧葉さんが今回のように緊張をした状態で龍三郎さんとお話をする事が無かったからだと思います。緊張をしながら自分の親と話をする事なんてあまり無い事ですしね」

「そう……ですよね」

「大丈夫ですよ、碧葉さん。さつきも言った通り、俺も傍に付いていますから、碧葉さんは安心して自分の思いを龍三郎さんにしっかりと伝えてください」

碧葉さんの目を見ながらニコリと笑うと、碧葉さんは少しだけ緊張が解れた様子で静かに微笑んだ。

「……龍己さん、ありがとうございます。私、精一杯頑張ってみますね」

「はい」

碧葉さんの言葉に頷いた後、俺は一度大きく深呼吸をしてから部屋の中へ向かって声を掛けた。

「龍三郎さん、今大丈夫でしたか？」

「はい、大丈夫ですよ。どうぞお入り下さい」

「分かりました」

中から聞こえた龍三郎さんの穏やかな声に答えた後、俺は襖を静かに引き開けた。そして、碧葉さんと一緒に部屋の中に入ると、龍三郎さんは俺の隣に碧葉さんがいる事に驚いた様子を見せた。

「おや……龍己君だけかと思っただら碧葉まで一緒だったんだね」

「はい。お父様……実はお父様にお話ししたい事があるのです」

「碧葉が話したい事……か。その様子だといつものような話では無いようだね」

「……その通りです」

「……分かった。とりあえず二人揃ってそこに座ってくれ。そして自分が落ち着いたと思ったら話してごらん」

「……はい」

碧葉さんが緊張気味に答え、龍三郎さんが静かに頷いてから部屋の隅に積まれた座布団の方へゆつくりと体を向けた時、俺は先にスツと動いて自分達の分の座布団を手にとった。

「龍三郎さんはそのまま座っていて下さい。座布団は自分で準備をしますから」

「あ……すみません、龍己君」

「いえ、このくらいはして当たり前なので気にしないで下さい」

そんな事を言いながら自分達の分の座布団を龍三郎さんの目の前に丁寧に敷いた後、俺は碧葉さんの方へ顔を向けた。

「碧葉さん、どうぞ座って下さい」

「あ、はい……ありがとうございます」

碧葉さんは少し申し訳なさそうにペコリと頭を下げた後、片方の座布団の上に静かに座り、その後に俺ももう片方の座布団の上に正座をした。そして座った後、碧葉さんは緊張を解すために大きく深呼吸をした後、真っ直ぐな目をしながら龍三郎さんに話を始

めた。

「お父様、私に龍己さんのご用事に同行する許可を頂けませんか？」

「龍己君の用事……涼風丸さんのお宅に伺う件だね」

「はい、その通りです」

「やはりそうか……けど、どうして着いていこうなんて思ったんだい？ 龍己君の用事

は、碧葉に直接関係する事ではないし、涼風丸さんのお宅があるのは山の中なんだよ？」

「……それは分かっています。私自身の力なんてたかが知れていますし、涼風丸さんのお宅に着くまで龍己さんに色々ご迷惑を掛けるかもしれません。ですが、私は今までお世話になってきた分を少しでもお返ししたいんです。私は龍己さんのお力になりたいんです！」

「碧葉……」

龍三郎さんは碧葉さんの様子に少し驚いたような表情を浮かべたが、すぐに表情を真剣な物へと変えると、ピツと背筋を正しながらいつもとは違う少し冷たい声で話し掛けた。

「碧葉、お前の気持ちは分かる。けれど、お前に本当に龍己君の用事に最後まで弱音を吐かずに付き合えるだけの覚悟はあるのかい？」

「……あります」

「……本当に、かい？」

「……はい！」

龍三郎さんの研ぎ澄まされた真剣のような冷たくも鋭い雰囲気は碧葉さんが声を震わせながら大きな声で答えると、龍三郎さんは何かを見定めるようにジッと碧葉さんの顔を見つめた。そして、「……そうか」と雰囲気をつもものような柔らかく温かな物へしながらフツと笑うと、碧葉さんの頭にポンと右手を置き、それに対して碧葉さんが「あつ……」と驚きと安心が入り混じったような声を上げる中、碧葉さんの頭を静かに撫で始めた。

「お前の気持ちの中に少しでも迷いを見つけた時は、行く事を許可しないつもりでいたけれど、今のお前の言葉や目の中には一切の迷いは無かった。だったら、私はお前のやりたい事を応援するだけだよ。大切な一人娘が心からやりたいと思えた事なのだからね」

「お父様……本当にありがとうございます……！」

「どういたしまして。でも、ああ言った以上はしっかりと龍己君の助けになるんだよ？」

「はい！ もちろんです！」

満面の笑みを浮かべながら碧葉さんが答えると、龍三郎さんはそれに対して微笑みながら満足げに頷いた後、俺達二人の事を交互に見てから静かに口を開いた。

「碧葉、龍己君、式神の事や『人間世界』にいらつしやる龍己君のご両親の事について涼風丸さんにご助力を願えるのが理想ではありますが、何よりも大事なのは二人が無事に戻ってきてくれる事です。ですから、絶対に無茶などはせずに無理だと思つた時には引き返してきて下さい。方法などは幾らでも考えられますし、涼風丸さんにお話をする機会は幾らでもあります。命は一つしかありませんからね」

「はい！」

碧葉さんと一緒に声を揃えて答えた後、俺は離れて待たせている風之助達と合流するために龍三郎さんへ行つてきますと声を掛け、二人揃つて龍三郎さんの部屋を出た。そして、そのまま離れへ向けて歩いている途中、緊張が解れた事で思わず小さく息をついていたその時、隣を歩く碧葉さんからも同じように息をつく声が聞こえ、俺はそれに対してクスリと笑つた。

まあ、あんなに真剣な雰囲気、龍三郎さんとの話を終えた後だもんな。俺はここに来た日にあの雰囲気、龍三郎さんと話をしたから、まだ少しだけは落ち着いていられたけど、碧葉さんにとっては恐らく初めての経験だったのかもしれないし、あそこまで言つてもらつた分の労いと感謝はやっぱり必要だよな。

「碧葉さん、お疲れ様でした。そして、俺の用事の事なのに、あそこまで言つて頂いて本当にありがとうございます」

「え……いい、いえ……お礼なんて別に良いですよ。龍己さんのご用事に同行したいというのは、私の我が儘みたいな物なので、むしろ私の方がお礼を言うべきなのですから」  
「いえ、そんな事はありませんよ。離れで碧葉さんに用事に付いて行っても良いかと訊かれた時、実は少し嬉しかったんです」

「嬉しかった……ですか？」

「はい。俺が羅紗らしやさんに矢で射抜かれて絶命していた時、碧葉さんが急いで龍三郎さんのところまで俺を連れて行くように羅紗さんに言ってくれたからこそ、今の俺がいまです。だから、離れでお話を聞いた時に、今回のような小さな事でもそんな命の恩人とも言える碧葉さんの恩に報いる事が出来そうだと思つて、とても嬉しかったです。まあ……他にも碧葉さんとはこれまでしつかりと話す機会もあまり無かったので、その機会が出来たから嬉しかったのもあるんですけどね」

「龍己さん……」

「だから、今回の件に限らず何か頼み事などがあつたら、遠慮無く言つて下さい。俺に出来る事なんてたかが知れているかもしれないませんが、出来る限り碧葉さんのご期待には添えるように頑張りますから」

微笑みながら言つたその言葉に、碧葉さんは一瞬申し訳なさそうな表情を見せたものの、すぐに微笑みながらコクンと頷いた。

「……はい、分かりました。もしも困った事やお願いしたい事があつたら、龍己さんに相談をするようにしますね」

「はい。さて……それじゃあそろそろ——」

「……あつ、あの……」

「はい、どうしました？」

「えつと……そのお願いって、今しても大丈夫ですか？」

「はい、それは構いませんけど……なんですか？」

その問い掛けに碧葉さんは少しだけ迷つたような表情を浮かべたが、「……でも、この機会を逃したら……」と小さな声で独り言ちたかと思うと、覚悟を決めたような様子で問い掛けに答えた。

「……私と二人きりの時だけでも良いので、私の事を『碧葉』と呼んで頂けませんか？」

「えつと……つまり、さん付けは無しで呼んで欲しいという事ですか？」

「は、はい……それと、出来るなら敬語も無しにしてほしいんですけど……ダメ、ですか……？」

「いえ、ダメという事は無いですけど……本当に良いんですか？ 一応、俺の身分は奉公人兼客人という事になっているんですが……」

「……いえ、大丈夫です。さつきも言ったように、私と二人きりの時だけですし、もしも

お父様に聞かれたとしても、その時はさっきのように私がしつかりと説明をしますから。それに……」

「……それに？」

「……貴方とは、龍己さんとはもつと近い距離で接したいんです。お店の娘と奉公人という距離では無く、歳の近い友人同士——いえ、出来るならもつと近い関係性でこれからは接して行きたいんです。こんな気持ちを抱いた男性は、今まで龍己さん以外には一人もいなかったですし、私にとって龍己さんはとても大切な存在ですから……」

「碧葉さん……」

「ダメならそれでも良いです。けど……もしも良いというなら、私をお願いを聞いて頂けませんか……？」

そう不安げに俺を見ながら訊く碧葉さんの姿に、俺は一瞬ドキリとすると同時に今まで感じた事が無い感情が奥の方からわき上がってくるのを感じ、それに嬉しさと戸惑いを感じていた。

……恐らくだけど、この感情は碧葉さんが俺に対して感じているっていう物と同じ物だ。だけど、俺はいつかこの『狐雨福屋』の奉公人として働く事を考えてるのに、そんな感情をそのお店のお嬢さんに抱くのは果たして許される事なのか……？

恐らく生まれて初めて抱いたであろう感情とそれを碧葉さんに対して抱いていると

いう実状に、俺は戸惑いながらもどう答えを出したら良いか必死になって考え続けた。そして、考え続けた結果、俺はある一つの答えを出した後、不安そうな碧葉さんの手を取りながら微笑みを浮かべた。

「……お安い御用だよ、碧葉。と言つても、答えを出すまでに少し待たせてしまったけどな」

「り、龍己さん……本当に良いんですか……!」

「ああ、もちろん。……まあ、しばらくはさん付けとか敬語とかになっちゃう事もあると思うけど、いつかは自然に出来るようにしていくよ。せつかくこうしてお願いをしてくれたわけだしさ。それに……」

「……それに?」

「こう……面と向かって言うのはちよつと恥ずかしいんだけど、さつき碧葉が俺と歳の近い友人同士やそれよりも近い関係性で接していきたくて言ってくれた時、俺も碧葉とは出来るならそういう関係性で接していきたくて思つたんだ」

「そ、それって……」

「……ああ、俺と碧葉が感じている感情はたぶん同じ物なんだと思う。だけど、さつきも言つたように、俺はあくまでも今はこの『狐雨福屋』の奉公人兼客人であり、いつかはちゃんとした奉公人として働きたいと思つてる。だから、しばらくはこの感情を胸の内

に秘め続ける必要があるんだ。本来、奉公人がお店のお嬢さんに抱いていいような感情では無い気がするからさ」

「そ、そんな事……!」

「でも、いつかはこの気持ちにもこの件についてもしつかりと決着をつけたいと思ってる。それがこの感情を抱いた俺が果たすべき責任だからな」

「果たすべき……責任……」

「そう。そして、いつかはこの気持ちを包み隠さずに碧葉に、そして龍三郎さんを始めた『狐雨福屋』の人達全員に伝える。だから、ちよつと女々しい事を言うようだし、本当に勝手かもしれないけど、出来るなら碧葉にはそれまで待つて欲しいんだ。少なくとも、今はその時では無いから」

真剣な眼差しを向けながら碧葉にそう告げると、碧葉は俺の目を真っ直ぐに見つめ返し、優しい笑みを浮かべながら静かにコクリと頷いた。

「分かりました。それでは、その時を楽しみにしていますね」

「ああ、ありがとう。あ、でも……もしもその時までには良縁があったり、気持ちが離れるような事があつたりしたらキッチンと諦めるつもりだから、その時は遠慮無く言ってくれ。待つていて欲しいとは言つたけど、俺は碧葉の人生を縛り付けるような真似はしたくないからさ」

「ふふ、分かりました。けれど、龍己さん以上に好きになれる男性には、たぶんこれからも出会えるような気はしませんし、気持ちが離れるような事はまず無いと思います。気持ちも伝えた今だからこそハッキリと言いますが、それだけ私は龍己さんの事が恋い慕っていますから」

「碧葉……」

「それに、他所のお店から何かご縁を頂いても、お父様が全てお断りになると思うので、その心配もありませんよ」

「え、そうなのか……?」

「はい。以前、お父様から聞いた事があるのですが、お父様としては私には心から好きになった方と夫婦になって欲しいとの事で、そういったお話が舞い込んできては全て断るようになっているみたいなのです」

「なるほど……」

「なので、龍己さんは安心してご自身の気持ちと向き合ってください。たとえば、それまでに何年経ったとしても貴方を待ち続けるだけの覚悟が私にはありますから」

そう微笑みながら言う碧葉の姿に、愛おしさと嬉しさを感じた後、俺はスツと碧葉に近付き、静かに碧葉の体を抱きしめた。

「龍己さん……」

「……ありがとう、碧葉。君のような人に好きになってもらえて本当に良かったよ」

「……ふふつ、龍己さんにそう言ってもらえて本当に嬉しいです」

「ふふ……そつか。まあ、さつきも言つたようにこの事はまだ龍三郎さんや羅紗さん、それに風之助や箒にも言えないし、言つた後も奉公人とお店のお嬢さんという関係から世間からあまり良い目で見られない可能性もある。だけど、たとえそんな事になつても俺はこの想いを貫き通してみせる」

「龍己さん……」

碧葉は俺の名前を呟くと、俺の体を静かに抱きしめ返した。

「……私もたとえどんな事になろうともこの想いは絶対に貫き通してみせます。貴方を、龍己さんを好きだと気持ちに嘘はありませんから」

「……うん、ありがとう」

碧葉の言葉から伝わってくる温かさと更に強くなる愛おしさに気持ちが満たされていくのを感じ、俺はずつとこうしていたいと思つたが、離れに風之助達を待たせている事やらなければならぬ事がある事を思い出し、俺は碧葉に声を掛けた。

「……さて、そろそろ行くか」

「……はい」

名残惜しそうに答える碧葉の声が合図となり、俺達はどちらともなく体を離した。そ

して、碧葉が俺に少し寂しげな視線を向ける中、俺はふわりと笑いながら碧葉の頭を優しく撫でた。

「……あ」

「……今みたいに二人きりになれた時には、また抱きしめてあげられるから、今は我慢してくれ。もつとも、そうじゃなくても出来るようになるのが目標だけだな」

「……ふふ、そうですね。お父様や羅紗を始めとしたお店の皆さんやこの『不忍』の皆さんから認められ、祝福されるまでになれるように、お互いこれから頑張っていけないといけませんよね」

「ああ。そこに行き着くまではスゴく険しく長い道のりかもしれないけど、お互いに頑張っていこうな、碧葉」

「……はい」

軽く頬を赤らめて俯く碧葉を可愛らしいと思いながら頭を優しく撫で終えた後、俺はスツと頭から手を離し、ニツと笑いながら碧葉に声を掛けた。

「それじゃあ行くうか、碧葉。これ以上、風之助達を待たせるわけにもいかないしさ」

「……はい」

ニコリと笑いながら答える碧葉に対してコクリと頷いて答えた後、俺達は風之助達が待つ離れへ向かって歩き始めた。

歩き始めてから数分後、離れに着いた俺は「お待たせ、お前達」と言いながら碧葉と一緒に離れへと入った。すると、目に入ってきたのは、離れの中心で小首を傾げながら不思議そうに文机を見つめる風之助と篝の姿だったため、俺は碧葉と一度顔を見合わせた後、その理由を訊くために風之助達に話し掛けた。

「風之助、篝、何かあったのか？」

「……………ん、龍己の旦那に碧葉のお嬢さん。実は、龍己の旦那達の帰りを待つてる間、俺と篝で他愛のねえ話をしてたんですが、その時にその庭から何やら物音のような物がしやしてね。それで、いってえ何の音だと思つてちよいと篝と一緒に縁側まで見に行つたんですが、特に何も無かつたんで不思議だなあと思つて戻つてきたら、まるで手妻のようにその文机にさつきまで無かつた物が置かれていたんでさあ」

「えつと……………因みに、その物というのは何なんですか？」

「えつと……………私には文机の上の様子はよく見えませんが、風之助さんが言うには例の黒幻さんからのお手紙と緑色の水晶のような物が置かれているみたいです」

「黒幻さんから……………」

そう言いながら文机に近付いてみると、そこには篝の言う通り、俺の水晶の勾玉や少

し前に貰ったスギライトなどと同じように麻紐が通された緑水晶の勾玉と綺麗な字で書かれた一枚の手紙が置かれていた。

「……ほんとだ。なあ、風之助。その物音の正体を見に行つてから、これらを見つけるまでのかなりの時間があつたか覚えてるか？」

「んー……正確には覚えてやせんが、でも本当にすぐだつたはずですよ？ だから、誰かが入つてきてそれを置こうとしたら簡単に気づけるはずなんですけどねえ……」

「そつか……」

篝の歩く速さに風之助が合わせていたと考えると、風之助達が音で誘き寄せられてから文机の上に物が置かれているのを見つめるまでは恐らく二分程度の間がある。でも、仮に庭に何か音を出す仕掛けを施していたとしても、そんな短時間で風之助達に気付かれずに緑水晶の勾玉と手紙を置ける物なのか？

「黒幻さん……相変わらず謎が多い人だな……」

そんな事を独り言ちた後、俺は黒幻さんからの手紙を手に取り、それをゆつくりと読み始めた。

「えつと……」

『人間と妖の架け橋となれる半人半妖、稲荷龍己殿。』

事後報告になつてしまふが、先日同様、此度も龍己殿に宝石の贈り物をするべく、貴

殿の部屋であるこの離れへとおじやまさせてもらった。此度の贈り物も以前の贈り物同様、貴殿ならばこの宝石に込められた言葉を理解でき、この宝石に宿る力を保持できるだろうという信頼、そして貴殿を応援したいという気持ちを込めて贈らせてもらった。なので、この宝石も貴殿の好きなようにしてもらって構わない。貴殿が持つと聞く青き水晶と併せて力を高めるも、これを持つに相応しいと思う者に贈るも貴殿の自由だ。

さて……それでは貴殿らの考えの成功と直面している問題の解決を願いながらそろそろ筆を置こうと思う。稲荷龍己殿、これからもその強き心と数多の者への思いやりを大切にしながら人間と妖の架け橋となれるように頑張ってくれ。

黒幻』

……か。つまり、今回も贈り物をするためだけにこの離れまで来てくれたわけだけど、手紙に書かれている『貴殿らの考え』と『直面している問題』の部分を考えるに、黒幻さんは俺達が今から何をしに行くかや俺が実の両親に会いに行こうとしている事を知っているわけだよな……」

「そうですね……でも、黒幻さんはどうやってそれを知っているんでしょうか？ それに、前はちよつと気づけませんでしたが、龍己さんが半人半妖である事まで知っているみたいですし……」

「さてな。ただ、黒幻さんは前の手紙で自分は俺達の味方であると書いていたわけだし、その情報を悪用する気は無いと思うけど……風之助、黒幻さんについて何か調べてくれるか？」

「へい、一応は調べてみやしたけど……この黒幻という御仁は本当に謎が多いみたいで、色々飛び回ってみてもあまり情報は集まりやせんでした……」

「……そつか。まあ、それに關しては涼風丸さんの所へ行くまでに聞くとして、次はこの緑水晶だな……」

手紙を文机の上に置き、一緒に置かれていた緑水晶を手にとると、碧葉は緑水晶を見ながら不思議そうに小首を傾げた。

「そういえば、そのお手紙には宝石に込められた言葉や宿る力といった事が書いていましたが、その緑色の水晶には一体どのような言葉や力があるのですか？」

「たしか……傷ついた心を癒したり、気持ちを落ちつけたりする効果、それと愛情運を高める効果もあつたはずですね」

「愛情運……」

「はい。何でも好きな相手と強く結ばれたい時に使われるらしく、運命の相手と巡り合わせる力も含まれていると聞いた事があります。そして、別名を『愛の守護石』と言うそうです」

「へえ……この緑水晶にはそんな別名があるんですかい？」

「ああ。それと……この緑水晶の石言葉は『誠実』や『心の平和』だったかな。だから、宝石の中ではそういう癒しや恋愛関連に特化した物と言えるのかもしれない」

「なるほど……」

俺の説明に篤が納得顔で頷く中、俺は緑水晶の勾玉を持ちながら縁側にいる碧葉へと近づき、それを碧葉に差し込んだ。すると、碧葉は「え……？」と一瞬驚いた顔をした後、困惑した様子で俺と緑水晶の勾玉を交互に見始め、俺はその様子にクスリと笑ってから静かに口を開いた。

「碧葉さん、これを受け取って頂けますか？」

「え、でも……良いんですか？」

「はい。碧葉さんはお店のお嬢さんとして、色々大変な事があると思います。だから、この緑水晶の癒しの効果で少しでもそれを癒してもらえればと思っただけです」

「なるほど……」

「それに、字やその色合いこそ違いますけど、緑水晶の『緑』と碧葉さんの『碧』は同じ『みどり』ですから、碧葉さんが持つのに相応しいと思います。それと——」

そこで言葉を切った後、俺は碧葉の耳元に顔を近づけ、こそつと碧葉に耳打ちをした。

「……俺達の関係も好きな相手と強く結ばれたい時に使われる宝石の力に肖れば良い

などと思うし、せっかくだから水晶と緑水晶で碧葉とお揃いにしたいからさ」

「龍己さん……」

俺の耳打ちに碧葉は嬉しそうな声で呟いた後、少し頬を染めながら静かにコクンと頷いた。

「……はい、喜んでお受け取りします」

「……うん、ありがとう」

そして、碧葉から顔を離れた後、俺は緑水晶の勾玉の麻紐を両手で掴み、静かに碧葉の首に掛けた。その瞬間、陽の光に照らされた緑水晶がキラリと光り、その煌めきに碧葉は嬉しそうな笑みを浮かべると、やや上目づかに俺の顔を見つめながら小さい声で問い掛けてきた。

「龍己さん……私に似合っていますか……?」

「……はい、もちろん似合っていますよ」

「そう……ですか。ふふ……それなら良かったです」

俺の答えに碧葉は少し照れたような笑みを浮かべる中、それを見ていた風之助が不思議そうな声で話し掛けてきた。

「龍己の旦那……何やら碧葉のお嬢さんと前よりも仲良くなったみたいですけど、さつき行つて帰ってくるまでの間に、もしかして碧葉のお嬢さんと何かありやしたかい?」

「……まあな。けど、今はちよつと話せないから、話せる時まで待つていてくれるか？」  
「……へへ、もちろんでさあ。俺は色々な事を調べたり探ったりする瓦版屋ですが、龍己の旦那のダチでもありやすからねえ。龍己の旦那が話してくれるその時まで待たせてもらいやすよ」

「うん、ありがとう。篝もそれで良いかな？」

「はい、もちろんです」

「ありがとうな、篝」

篝に対してニツと笑いながらお礼を言った後、俺は碧葉にアイコンタクトを送り、碧葉と一緒にそれぞれの荷物を手に取った。そして荷物を肩に掛け、全員の準備が出来た事を確認した後、やる気が奥の方から湧き上がってくるのを感じながら皆に声を掛けた。

「よし……それじゃあ行くか、皆！」

「へいー！」

「はいー！」

風之助達が元気よく返事をした後、俺達は涼風丸さんの所へ行くべく、揃って離れを出発した。